
罅獄 (BLUCK DOMAIN)

砂上 巳水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋獄（BLUCK DOMAIN）

【Nコード】

N5307F

【作者名】

砂上 巳水

【あらすじ】

ホラー、グロ要素少なめ。基本はモンスターとの頭脳や身近な武器、罠などを使った戦闘。

オリジナルサバイバルホラー**「尋獄」しんごくシリーズ第一弾。**曲まな直悟は学校の行事で富山県にある樹海隣接宿泊地、浮世荘に来ていた。最初は何事も無く普通の森だと思っていたのだが、宿泊二日目、突如見たことの無い化け物が現れ始める。十秒以上触れること（十秒感染）で奴らは仲間を増やし、いつの間にか樹海は地獄のような状態になっていた。暗躍するテログループ、国家部隊、謎の組織…

∴ 果たして悟たちは生き残ることが出来るのか？ 是非ご覧下さい。

<第一章>地獄が尋ねる（前書き）

初めての小説なので文章力がぜんぜん無いです。
どうか暖かい目で見てください。

<第一章>地獄が尋ねる

尋 獄 しんごく

(BLACK DOMEIN)

プロローグ

そいつは喜んでいた。

ここが自分たちの全てだと思っていた世界が急に広がったのだ。

一立方メートルのその空間は地震によって大きな揺れが奔った後、小さな、ほんの小さな亀裂を作り出していた。

それはねずみ一匹取れるかどうかの大きさしかないものだったが、そいつにとっては十分極まりないものだった。

もしも人間だったのなら満面の笑顔を作るのだが、体どころか顔すらない単細胞生物のそいつにはそんなことはできない。

そいつは自分を待ち受ける新しい世界へ向けて上へ上へと目指し地上という名の楽園へと足を踏み入れた。

<第一章> ”地獄が尋ねる”

煩わしいくらいに暖かい風が吹いている。

曲直悟まなせさとはその風をバスの窓から顔面一杯に受け止めていた。

普通なら真夏の昼ごろにこんなことをする人間はほとんどいない。悟だつてできるものなら窓を閉め、クーラーでガンガンに冷えた車内でゆっくり寝ていたかった。

だが近年の少子化により大ダメージを受けた悟が在籍する大学、連門大学の財政ではマイナーな会社のオンボロバスしか借りること

が出来なかつたのだ。外觀はまだ整っているものの、内部はかなり荒れている。冷暖房が使用できないことはもちろん、車内のあちこちに傷や汚れ、さらには落書きまである。よくこんなバスで商売をしていると誰もが思うほどだ。悟だって今回のような大学の合宿でもない限り絶対にこんなバス会社は利用しないだろう。

「早く帰りたいな……」

まだ目的地に着いてもいないのに悟は口癖のようにその言葉ばかり呟いた。

今このバスが向かっている行き先は連門大学の合宿キャンプ場だ。キャンプ場と言ってもテントなどではなく、ちゃんとした四階建ての古いホテルみたいな姿をしている。

この建物、浮世荘は二十年以上前に連門大学が樹海の物研究のために買い取ったもので、ほとんど安いホテルと変わらず設備もすっかりしていた。ただ一つの問題点と言えば、樹海に近すぎることであった。ここを訪れる学生の多くは先輩から度々野生の鹿や猪が誤って敷地内に入ってくるという話を事前に聞いている。しかし誰かが襲われたなんていう事件例はまったくないため、問題点と言ってもそれほど大したことではないのが実際の状況だった。

時計の針が二時を指すころ、とうとうオンボロバスはこの浮世荘に到着した。休む間もなく生物学科の学生達は次々に荷物を運び始める。

まだ昼間だという事もあり、日の光が燦々と輝き青空が広がっていた。

悟は眩しそうにその光を見た。熱を押し付けるように、自分の全身を黄色い陽光が取り巻いてゆく。光は他の者たちと同様、悟の姿をはっきりと地面の上に照らし出した。

眉まである緩やかなカーブを描いた癖毛の黒髪、男にしては大きな目と長い睫。このままでは少し女の子っぽいのだが、人よりも僅かだけ太めの眉のおかげで精悍さ、凛々しさを保っている。服装は

黒と白のジャージ姿と今回の合宿に対するやる気の無さがありありと伺えた。

しばらくその光を物思い気に見つめると、悟は静かに歩き出した。バスから浮世荘までは五百メートルほどの距離がある。その間の道を通りで荷物を運んでいく間に悟は何か妙な寒気を感じた。

その冷たい獲物を狙うような感覚はどうやら樹海の方からするようだ。

「何だこの感じ……肉食動物でも居るのか？」

悟には特殊な特技というか、才能というか、一種の霊能力のようなものが昔からある。簡単に言えばSIXSENCE（第六感）というやつだ。と言っても別に幽霊が見える訳ではなく、命の危機や自分に対する殺気などを感じる事ができるというものだった。

悟はこの才能のおかげで小さい頃よくいじめこや不良などの待ち伏せからのがれていたのだが、その感覚が今も何かを感じている。もっとよく調べようと樹海の方に一歩踏み込もうとすると、後ろを歩いていた他の学生に止められた。「何やってんだよ悟、後ろがつつかえてんだ早く進めよ」

悟と同じく連門大学一年の大井田庄平だった。おおいだしょうへい

「ああ、悪い」

悟は慌てて歩き出した。ちらつと樹海の方を見てみたがもう何も感じない。やはり猪かなんだったのだらうと考え、悟は速度を速めた。

特に特別な行事をすることもなく時間は過ぎ、学生達は夕食のために食堂に集まっていた。

食堂は意外と大きく高校の体育館ほどの大きさがある。入り口から入って左側では食事当番が一生懸命に料理をお皿に盛っており、右側に設置された長方形のテーブルでは学生達が談笑している。

食料を乗せたお盆をテーブルに乗せた後はしばらくの間誰もが暇

になる。教師が代表の学生が挨拶をするまで何も食べることができないのだ。

暇そうに食堂の窓から樹海の方を見ていた悟は誰かが向かいの席に座ったことに気がついた。

「やあ、ここいいか？」

爽やかな声でこちらに話しかけてくる。

悟がその人物に目を向けると、大学内最高成績優秀者と名高い国鳥友先輩がこつちを見ていた。

ミドルヘアーとロングヘアーの中間のような長さを持つ黒に近い茶色の今風の髪型に、一般的な男性としては細長い目と眉。服装は青と白のチェックのポロシャツに黒いズボンを履いている。

周りの席はどこも埋まっており他に先輩が座れそうな場所は無い。悟はあまり初対面の人間と話したい気分ではなかったのだが、仕方がなく承諾した。

「いいですよ」

「俺は国鳥友、君は？」

友は明るく聞いてくる。

「曲直悟です。よろしく国鳥先輩」

「ああ、よろしく」

女の子が見たら一発で惚れてしまうような爽やかな笑顔を見せながら友は答えた。

「君は友達はどうしたんだ、合宿に一人で居るなんて珍しいな」

「ここには知り合いがあまり居ないんですよ。今、仲いい奴らは食事当番だし」

「知り合いが居ないって？」

「あ……、実は僕は最近学校に着始めたばかりで……」

「え？ 何でだ？」

友は心底驚いたと言った様子で聞いてきた。

正直悟はあまりこのことには触れなくなかったが言い出したのは自分だ。今更話題を変えるわけにもいかなないので話を続けた。

「入学してすぐの頃に両親が離婚したんです。それで学費のことや住む家のことでいろいろと忙しくて」

「そうか、悪いことを聞いたな。ごめん、俺が不注意だった」

意外にも友はそれ以上聞いてこなかったので、悟はほっとした。話を変えるように友は別の話題をきりだした。

「そういえば、悟くん。君はもう聞いたか？あの話」

「何のことですか？」

「高橋 志郎って知ってるか？」

「ええ、確か国際的に有名な生物学者ですよ。人口細胞を作り出したとか言う……」

悟が言い終わる前に友は口を挟んだ。

「そう、その人だよ。実はさ、その有名な高橋さんが今日この連門大学のキャンパスに呼ばれてるんだ」

「え、本当ですか？ でも何でこんな所に？」

「それは俺も不思議なんだ。もっと高い給料払ってくれる大学はいくらでもあるはずなんだが、何だってこんな二流大学に来てくれる気になったんだろうな」

高橋志郎といえば生物研究、特に細胞研究をしている科学者や学生の憧れの的だった。彼は学生の頃から既に天才として報道され、多くの研究を発表していた。二年前にはES細胞（人口細胞）の開発にも成功し、ノーベル賞を取ったことはまだ誰の記憶にも新しい。そんな有名人がこの大学に来るなんて普通ならばありえないことだった。

悟はもつと詳しく話を聞こうと思ったが、全員の食事の準備が終わったのか、院生の一人が食事の挨拶を始めた。中学、高校ならともかく、大学でこういうことは珍しい。悟は苦笑いしながらも院生の話を聞くことにした。

「ええ、それでは最後になりますが、ここで皆さんに残念なお知らせがあります。ご存知の方も居るかもしれませんが、実は本日特別講師としてこの浮世荘に高橋志郎博士をお招きしております」

「ええ、マジかよ！」

ここで一部の学生が歓声を上げた。

「——ですが、予定時刻を過ぎてもお越しに成らず電話も繋がらないといった状態のため、高橋博士の講義は取り合えず延期に成りました」

さきほど盛り上がった学生達は皆一様にがっかりしている。

「俺もいろいろと話を聞きたかったんだけどな」

「まあ、明日があるじゃないですか」

友も同様に落胆していたが、悟はあまり関心が無いと言った感じで聞き流していた。

これは今に始まったことではなく、昔から悟はどこか冷めたような性格の持ち主だった。流行の歌、流行のアイドル、女優に噂話……多くの学生が喜ぶようなものにも特に興味を持たず、いつも一歩引いて傍観していることが多い。

本人にも何故自分がそうしてしまうのかはわからなかった。いや、もしかしたらわからない振りをしているのかもしれない。

悟の両親は昔からケンカをすることが多かった。

二人の間に悟が巻き込まれるのも日常茶飯事だ。時にはケンカの原因にされ攻められることもあった。その時からかもしれない。悟が人の輪を一步引いて見るようになったのは……。

樹海の真っ只中。そこに灰色の作業服に身を包み、同色の日避けの帽子を被っている小太りの男が居た。目の周りには深い皺が無数に走り、口は上下とも細長く横へ膨れた頬まで伸びている。

山田五郎、44歳独身。

彼はいつもの様に樹海の見回りをするはずだった。不法投棄物を処理したり、自殺願望者を見つけては説得したりするのが彼の主な仕事だ。

しかし今日に限ってはそんな仕事をしてる場合ではなかった。

まるでこちらを押し潰そうとするかのように並んでいる樹木に囲まれた闇の中、今五郎は走っている。

メタボリックシンドロームによって膨れあつがたお腹が重りとなり、四十歳を過ぎた体からは脂汗が滝のようににじみ出ている。

走っている途中に木の枝が足を傷つけたが、彼は一向に構わず走り続けた。何故ならば五郎は逃げていたからだ。自分を追う存在から。

すぐ後ろに迫り来る何かの気配を感じた五郎は振り向きざま猟銃を発砲する。しかしその弾丸が相手に当たることはなかった。どう言うわけか追手の姿は消えていたのだ。

「ど、どこだ!？」

五郎は慎重に辺りを見渡した。彼の息使いは荒く、まるで大怪我を追った怪我人のようにも見える。今この森の中で、その呼吸音だけが辺りに響いていた。

「はあ、はあ、はあ……!」

そのとき、何者かが五郎の肩を掴んだ。

いきなりのことにぎよつとした五郎は相手を見ず銃を発砲しようとしたが、その前に銃口は相手の手で反らされてしまった。これでは撃つても当たらない。

「畜生っ!」

五郎は覚悟して目をつぶった。自分の人生はもうこれまでだと。だがいつになっても相手は襲ってこなかった。

不思議に思った五郎はゆっくりと目を開けた。

そこには緊張し、険しい表情を浮かべた男が立っていた。

歳は五郎よりも上だろうか。少し凹んだ頬と太い下唇を囲んでいる

る薄い髭が目につく。長く横に広がるような中髪には白いものがい
くらか混ざっているのだが、力強く凛々しい太い目だけは真っ直ぐ
にこちらを見つめている。

「どうやら五郎を追っていたモノではないようだ。」

「ここは危険です。着いて来てください」

男は切羽詰まった様子で五郎に言った。

「あ、あんたは？」

五郎がさっきの自分の醜態を隠すように強い口調で尋ねると、男
は静かに答えた。

「高橋 志郎です」

生物学科の八代洋子と鈴木卓真の二人が二人で外に出て行つたとい
うことを聞いても、とくに悟は何も感じなかった。最近通学しだ
した悟にとつてはまったく知らない人間だからだ。だが、前から二
人を知っている庄平はそんな悟の態度にも構わず一人勝手に盛り上
がっている。「やっぱりの二人できてやがった」とか何とかいつ
までも言い続けていた。悟が二人のことをよく知らないことはよく
分かっているはずなのに。

今この二人、いや性格には五人がいるのは浮世壮の宿泊用の部屋
だ。—LDKほどの大きさの中に五人も居るものだから狭くて仕方
がない。ただでさえ常夏で暑いのに、五人が籠っているおかげで恐
らく室内温度は40度近いんじゃないかと悟は思った。

もう時刻は十一時を過ぎていたのだが、部屋が暑いせいと慣れな
い環境のため、寝ることが出来ている者は一人も居ない。

悟は昼間バスの中でも寝れなかったため少しイライラしていた。
体は寝たいのにどうしても寝れない。これは結構、精神的に疲れる
ことだった。

苦しんでいると同じ部屋の仲間である鈴野が悟に話しかけてきた。
彼は赤と黒のかなり悪趣味なパジャマを見事に着こなし、生まれつ

きであろう常に笑ったような顔を崩さず保っている。

「曲直、お前も寝れないのか？」

「ああ、こう暑くぢやな。逆に寝れる方が珍しいだろ」

「はは、確かにそうだな」

鈴野はかなり軽い男だ。人見知りと言うものを知らない。遅れて通学してきた悟はこの鈴野の軽さに救われていた。

殆どの人間がグループを作っている中、悟は一人で居ることが多かった。両親の離婚のショックもあり話しかけずらい雰囲気をもつとっていたのだろう。誰もが悟を避けていた。

だが、鈴野は違った。

ある日悟が大学のラウンジでジュースを飲んでいると、何の前触れもなく鈴野は突然話しかけてきた。

「よう、お前だろ？　ずっと休学してた奴って」

悟は最初絡まれてるのかと思いきや無視しようとしたが、相手が調子に乗ると考えたので不機嫌そうに返事をした。

「だったら何だよ？　何か用か？」

「両親離婚したんだってな」

「ああそつだよ。だからなんだ？　お前には関係ないだろ」

後で聞いた話だがこのときの悟の顔はものすごく怖かったらしい。今思つとよく鈴野は逃げずに話を続けたものだ。

「俺もさ、両親が離婚してるんだ」

「は？」

悟はすつとんきょな声を上げた。

よく話してみれば何のことはない。鈴野は自分と同じ境遇を持つ悟と話したっかただけらしい。自分の態度を思い直して悟は急に恥ずかしくなった。

それからだった。鈴野と悟がよく話すようになったのは。

鈴野のおかげでいつの間にか悟の周りにも人が増えていた。庄平と仲良くなったのもその頃だ。

だから悟は鈴野に感謝していた。

いつまでも一緒に馬鹿をやっていたかった。
だが、このときはまだ知らなかった。
その望みが決してかなわなくなるなんて。

「いったいこの樹海で何が起きているんだ!？」

五郎は気が動転しそうな無理やり抑えて志郎に聞いた。

「今はまだ何とも言えない。ちゃんと確認しないと……」

「確認? いったいあんたは何を言ってるんだ。さっきのあいつは何なんだ!？」

あからさまな怒りの表情を浮かべながら、五郎は怒鳴った。しかしいくら質問しても志郎は言葉を濁すだけで、決して口を開こうとはしない。

今、二人は洞窟のような所に隠れていた。この洞窟は滝の下にあるため、中々見つけにくい。ここならばかなりの時間をやり過ごせると志郎が提案したのだ。

もうここに隠れてから大分立つが、五郎はまだ不安が消えないらしく、ずっと外の様子を見ていた。

それほどの恐怖を自分を追っていたものから植えつけられていたのだろ。この恐怖はそう感嘆には消えるものではない。

「くそっ」

いい加減しびれを切らした五郎は単身で人が居るところまで逃げることを考えた。

「このままこの得体の知れない男とここに居るなんてごめんだ。確か近くに大学のキャンプ場があったはず」

だが五郎が洞窟から出る前に志郎がその腕をつかんだ。
「待つんだ」

「離せ、俺は一人で逃げる。こんなところであんたと心中なんてごめんだ!!」

自分を追っていた存在に聞こえるのを恐れた五郎は小声で叫んだ。だが、そのおかげで自分が命拾いしたと言うことにすぐ気づかされることとなった。

「見る」

志郎は無言で外を指差した。洞窟の外は半径二十メートルほどの円形状に開けた場所となっており、草木が生い茂っていた。その周囲は無数の樹木に囲まれている。

五郎が視線をそこに向けると、洞窟から十メートルも離れてない位置に自分を「追っていたもの」が立っていた。

「うつ!?!」

不意打ちの出現に息を呑む。

志郎は自分たちが見つかったことを確認すると、じつくりとそいつの観察を始めた。

一見すると鹿のように見えるが、よく見ると血管が浮き出た皮膚や体毛はどす黒く変色し、全身の毛が逆立っている。頭部に目を向けると、通常は考えられないくらいに血走った眼球が今にも飛び出しそうなほど大きくなり赤い涙をながしていた。

「何なんだあいつは——……」

五郎は初めて追っ手をじっくり見たのだろう全身を震わせそう情けない声を漏らした。

「やはりこういうことだったのか」

何かを確信するように志郎が呟く。

志郎はそのまま鹿の怪物に気づかれる前に洞窟の奥へと戻ろうとしたが、何かを目で捕らえた。

一組の男女だ。

まだ若い外見から考えると、恐らくは志郎が講義をするはずだった連門大学の生徒だろう。二人とも怪物鹿にまったく気がつかない様子で川に沿ってこちらに近づいて来ていた。

八代洋子と鈴木卓真は最近やっと結ばれたばかりのカップルだった。

洋子の家は父親がかなり厳しく、娘の恋人は学力優秀な人間でないと絶対に交際を認めないと決めていた。

卓真はどちらかと言えば成績は悪い方だ。見た目も金髪に腰パンと軽そうな感じが窺^{うかが}える。

洋子の父がそんな卓真を認めるはずも無く、二人は引き裂かれた。だが、卓真は洋子を諦めることなんてできなかった。洋子に会うために必死に勉強した。

そしてとうとう特別奨学金を貰えるほどまで成績をあげ、服装もちゃんとした社会人の物を着始めた。

卓真の誠意が伝わったのだろう。洋子の父もとうとう二人の交際を認めた。

それからしばらく二人は幸せの絶頂のいた。お互いに相手以外何も見えなくなっていた。

だからかもしれない。

二人は目の前にいくまでその怪物には気がつかなかった。

怪物鹿は獲物を見つけると歓喜の声をあげた。勢い良く、洋子に向かつて突撃していく。

それは一瞬だった。

洋子は何が起きたかわからない間に既に死んでいた。怪物鹿の角が心臓を貫いたのだ。

卓真は啞然としてそれを見ていた。

つい今の今まで自分と手をつないでいた人が、永遠の愛を誓った人が一瞬のうちに動かない肉の塊となっているのだ。正常な思考を

保つ方が無理と言うものだろう。

怪物は洋子の亡骸を振り捨てると一目散に卓真へと向かっていった。

卓真はまだ放心状態だったものの、怪物鹿が自分の方に向かって来るの見て恐怖した。

「うわああああ、来るな!!」

自分の体を貫こうとする灰色い角を両手で必死に押さえる。だが怪物鹿の力は強く、卓真は近くの木に押し付けられた。卓真の背中に激痛が走るが、それでも角を掴んだ手は離せなかった。離れた末端に体を貫かれるのは目に見えている。

洞窟からその様子を見ていた志郎が叫んだ。

「まずい、あのままじゃ——」

「俺が助ける!!」

急に使命感のようなものを感じた五郎は卓真の元へ駆け寄ろうとするが、またしても志郎に止められた。

「っ離せ!?! 見殺しにする気か!」

「十秒経った……もう手遅れだ」

「何言ってるんだ!?!」

尚も駆け寄ろうとする五郎を志郎は必死に止めた。

「見ろ!」

志郎のその声共に五郎が卓真の方を見ると、向こうではある変化が起きていた。卓真の体が徐々に手から腕へ、腕から全身へと灰色に染まり出している。まるで怪物鹿の様に。

二人が見守る中、卓真は怪物鹿とほとんど変わらない姿へと変化していた。すると怪物鹿は、不思議なことに襲うのを止めた。

「何がどうなっているんだ?」

五郎はわけがわからないといった様子で呟いた。

二人が顔を見合わせているうちに、いつの間にか怪物と卓真だったモノが消えていた。

「連門大学キャンプへ向かったんだ……あそこは獲物が大勢いるか

ら」

志郎は絶望的な気持ちになった。

「おい、いい加減答えろ、一体どうなってるのんだ!？」

五郎は今答えなければ殴り殺すかのごとく物凄い勢いで志郎の襟を捻りあげる。

志郎は首を絞められて咳き込みながらゆっくり答えた。

「地獄だよ、地獄がやってくる……!」

悟は夜中の一時まで起きていたもののその後結局は熟睡し、起きたのは昼一步手前の十一時近くだった。

「やばい、寝すぎた」

部屋には既に当たり前だが誰も折らず、悟たった一人だった。

「酷いな。誰か起こしてくれよ」

顔を覆いつくすのではないかと思うほどの大きな欠伸をしながら、悟はゆっくりと着替える。黒いジーパンに白シャツ、そしてその上に茶色いワイシャツ型の長袖を着た。

暑い暑いと言っているのに何故長袖を着るのかと思われることが多いが、これは悟の癖みたいなものだった。シャツだけで十分なのだが長袖を着ないと妙に落ちつかない。

着替え終わると取り合えず自分が今出ているはずだった講義の部屋へと向かう。だが一階に降りた後、部屋へ行く廊下の途中にあるロビーで人溜まりが目についた。

「——何かあったのか？」

しばらく眺めていると、何度か会話をしたことがある人物がいた。連門大学のマドンナと名高い佐々木舞だ。

「佐々木さん、何かあったの？」

悟は彼女に人溜まりの理由を聞くことにした。

「あ、曲直くん、それがさあ、大変なの！」

佐々木は事件が起きた事に驚いているというよりは、面白がっているといった様子で話し出した。

中々本題に入らないので悟は少しくんざりしたが、最後まで聞くとどうやら次のような内容だった。

教師達は昨日の夜に洋子と卓真が山中デートに行ったという話を誰かから聞いたようで、2人が帰ってきたら取っちめてやろうと計画していたそうだ。

今朝の三時を過ぎた頃に卓真がふらふらと戻ってくるのを見た教師の一人が早速卓真を詰問しようとした。だが、その教師は卓真を取っちめる前になんといきなり卓真にのどを食いちぎられそのまま絶命してしまったのだ。すぐに他の教師が卓真を取り押さえようとしたが、卓真は信じられない力で教師達を振りほどきそのまま他の人間を襲おうとした。

慌てた教師達は急いで浮世壮内へ逃げ戻り、扉を閉め鍵をかけた。この事件のせいで講義は全て中止になったらしい。行き場のない学生達が自然とこのロビーに集まるのは当然だろう。部屋にじっとしているより他人と噂話したり情報交換しているほうがずっと気が楽だ。

「でね、教授達の話だと卓真君は狂犬病にかかったみたいなんだって。山に行っている間に野犬に咬まれたって」

「狂犬病……」

悟はその言葉を聴いたとき何故か先日の樹海での殺気を思い出していた。

——あれは野犬だったのか？ それにしては妙に寒気がしたけど……

「ん？ じゃあ卓真はまだ外に居るの？」

悟は急に卓真のことが気になって聞いた。

佐々木はまだ話足りないといった様子だったが、質問されたので仕方が無く答える。

「それがさあ、実は誰もわかんないの。入り口を閉めてから誰一人怖がつて窓に近づかないし。教授たちは地元の警察に来てもらおうとしたんだけど、何でか電波が繋がらないんだよね。あゝあゝ、私も美香に電話したかったのにさ」

美香というのは佐々木の妹だ。

「電波が繋がらない？」

樹海内とはいえ、この浮世壮には十分外部と連絡が取れる設計が施されている。電波が途切れることなどありえないことだった。

悟は急いで自分の計帯電話を見てみたが、佐々木の話の通りアンテナは一本も立ってはいなかった。

「どうなってるんだ。こんなときに都合よく電波が繋がらないなんて……？」

嫌な予感がしてくるのを感じながら悟は周囲を見渡した。すると偶然他の学生とソファアーの上で噂話をしていたある男と目が合った。

かなり短めの短髪に短い眉毛、真丸とした優しそうな目。緩々の短いズボンとロングティーマッスを着たその男は大井田庄平だった。悟に気づいた庄平はすぐにこちらにやって来る。その小走りがハイヒールを履いたOLのダッシュみたいで少し笑えた。

「おうーい、悟も起きたか！ もう事件のことは聞いたのか？」

「ああ、今聞いたところ。でも本当なのか？」

「疑いたい気持ちは俺もわかるよ。でも嘘じゃないらしい。さっき矢崎教授の遺体を確認してきたからな」

この言葉に悟は驚いた。

「まさか、庄平お前外に出てきたのか？」

「ばか、そんな訳ねえだろ。お前が寝ている間に三階の窓から見たんだよ。あそこはちょうど事件現場の見える位置だからな」

「ああ、そういうことか」

悟は一瞬焦ったことを後悔した。少し考えれば外に出なくてもいくらでも遺体が見れることは明白だ。

「で、卓真はまだ居たのか？」

悟はさつきから気になっていたことを聞いた。

「俺が見たときはいなかったぜ。そんなに気になるなら今から三階に行くか？」

庄平は断ると思っていただろう。だが悟はその考えに乗った。何か妙な胸騒ぎがずっと悟の心に警告している。これから大変なことが起こると。

「ああ、行こう」

二つ返事で答えた悟に少し驚いたものの、庄平は特に深く考えず三階へと向かった。このおかげで九死に一生を得たとも知らずに……。

二人が三階に来ると、先ほど出たままの状態で部屋は散らかっていた。それに見向きもせず悟は窓から外を覗く。すると確かに矢崎教授の遺体が見えた。鮮やかな黄緑色の雑草の上で横たわっている。首から流れた血が小さな池を形成していた。

映画や海外ドラマで目にする事のある光景だが、やはり実際に目にするとはショックは隠せない。悟も思わず目をそらした。

「ひどいな」

ここまで血の臭いが届きそうだった。実際には臭ってはいないのだが悟は無意識のうちに鼻をつまんでいた。

「卓真はやっぱ見えないか？」

矢崎の死体を忘れようとするかのように庄平へ話しかける。だが、庄平は一点を見つめて固まっていた。悟もつられてその視線を追う。その先には悪魔のように灰色の肌を纏った卓真が、今まさに二階の階段の窓ガラスにヒビを入れているところだった。

窓を殴りつけた衝撃で卓真……いや、卓真だったもの——灰色の悪魔は一階のエントランスの前にある花畑に落下した。普通の人間なら激痛に苦しんでもおかしくない落ち方だったが、悪魔はすぐに

立ち上がると身をかがめ、一気に二階の窓へと再び飛んだ。最初に作られたヒビのおかげでほとんど抵抗はなく、すんなりと卓真は中に入っていた。

「たっ、卓真!？」

「な、何だよあれ!？ 本当に卓真なのか!」

庄平は今見たものが信じられないといった顔で呟いた。

「どう見てもまともじゃなかったな」

口調は冷静そのものだった。悟の足は震えていた。卓真の姿はとも狂犬病患者のようには見えない。まるで化け物だ。

「一体卓真に何があったんだ?」

次々といろんな疑問が頭をよぎり、心臓が早鐘を打つ。悟は答えを考えようとしたが、すぐに重大なことに気がついた。

「一階の連中が危ない!」

「え、おいっ、いきなりどうした!？」

慌てて下に戻るうとする悟を庄平が引きとめた。

悟の顔には汗が伝っている。別に暑いからではない。冷や汗だ。

「あの悪魔みたいな奴が飛び込んだ窓を見る、一階への階段の目の前だ。この浮世荘に階段は二つしかないし、正面玄関は教授達が封鎖した。逃げられなくなった大勢の人間があいつに襲われる!」

庄平も事態の深刻さにすぐに気がついた。

「そんな!」

「あああああああああ!!!!!」

二人がロビーに戻ると、そこはもはや学生達の穏やかな安らぎの場などではなく、まさに地獄と化していた。あちこちで悲鳴が聞こえる。悪魔は次々に獲物に襲い掛かり、その臓物や血液を周囲に撒

き散らしていく。この地獄のような有様に、教授も院生も学生も男も女も醜く顔を歪ませ我先にと逃げ惑うしかなかった。

悟と庄平は逃げてきた人々に突き飛ばされ、ロビーの茶色い床に腰を打ちつける。

「……嘘だろ……！」

だがその腰の痛みなど一切構わず悟は目の前の光景に釘付けになった。庄平も顔面蒼白になっている。

ロビーにいた悪魔は3体になっていた。そのどれもが二人も何度か見たことのある顔だった。

生物学科の卓真、染木、環境学科の前田。話したことは無いが大学内ですれ違ったことぐらいはある。

今、その三人が嬉々として人間の腸をしゃぶっている。

悟はここが本当に現実なのか信じられなかった。

「酷い……酷すぎる」

庄平共々思わずその場に胃の中身を吐き出す。

「庄平——……逃げようここにいたら殺される」

いつの間にか、ロビー内で生きている人間は二人を含めて数えるほどこしか居なくなっていた。ほとんどの人間は死んだか逃げたかここから消えている。

「ああ、行こう……」

庄平は青白い顔で立ち上がった。

悪魔達が他の人間を食っている隙に二人は食堂の方へと走った。

すぐ後ろの階段を上ってもよかったのだが、二階からも悲鳴が聞こえてきたためそれはやめた。すでに二匹増えているのだ。もう一匹悪魔が居ることは十分ありえる。

食堂に着くと、二人はそのまま左の奥にある調理場へ駆け込み扉を閉め鍵を掛けた。悪魔達の異常な力ならこんな鍵などあつてないようなものだが、掛けないよりはいくらかマシのはずだ。

「はあ、はあはあ……悟、どうする？ こそもすぐに見つかるぞ」

庄平が息を切らしながら聞いてきた。悟は高まる動悸を必死に抑

えながら周囲を見回す。するとあるものが目についた。

包丁だ。さすが総人数50人以上もいる今回の合宿参加者の料理を作っている調理場だ。包丁の品揃えも多い。

悟はそのうちの2本を布のカバーごとベルトに挟み、一本を右手に構えた。

「庄平も持つとけよ。あの化け物に効くかどうかは怪しいけど、気休めにはなるだろ」

「ああ、そうだな」

庄平も悟と同じように三本ほど包丁を身につける。

するといきなり調理場の扉に大きな音があった。一瞬びくつ、となる二人。

「ギュアアアア!!」

野生の獣のような声が食堂から響いてくる。

「悪魔だ! もう着やがった」

庄平が怯えた声で叫ぶ。

悟も恐怖に押しつぶされそうになったが、こういうときこそ冷静にならなくてはいけないと必死に気持ちを抑えた。

「調理台をこっちに押せ! バリケードを作るんだ!」

悟と庄平は無我夢中で調理台を動かす。

ガンッ、ガンッ!

扉の音が激しくなっていく。

調理台が扉の前に置かれた瞬間に扉の鍵が壊れ、隙間から悪魔の赤く血走った大きな目が覗いた。どう見ても調理台だけでは押さえきれないだろう。扉の隙間はだんだんと大きくなっていく。

「くそ、どうすればいいんだ!？」

悟は焦った。

そのとき、どこからか庄平が調理用のガスバーナーを持ってきた。すぐにそれは隙間から覗く灰色の顔へ放射される。

「グギアアアアア!？」

高温の火炎をもろに顔で受け止めたその悪魔は一目散に逃げてい

く。

「うひょーやったぜ！ 火に弱いらしいな」

悪魔の後ろ姿を見ながら庄平は勝ち誇った顔でそう言った。安心すると隣にいたはずの悟がいらないことに気づく。後ろを見ると、悟はありったけの形態食料やマツチなどをリュックにつめこんでいた。「ここから出るなら今しかない。必要なものをさっさと集めよう」

「お、おう」

急いで庄平も非常用リュックを部屋の隅から取り出した。用意をしつつ悟を盗み見る。

——いつも冷めた奴だと思ってたけど、こんな状態でも冷静でいられるなんてすごいな……。

そんな風に思われているとは露知らず、悟は黙々と作業を続けていく。今、悟の頭にあるのはどうやって生き延びるか、ただそれだけだった。

<第二章> 10秒感染

<第二章>

” 10秒感染 ”

二人は上手く悪魔達の目を逃れ、無事に浮世荘の建物から出ていた。これは悟の感覚が大いに役立ったおかげだということを、庄平は知らない。

扉は教授たちが卓真を浮世荘に入れないように封鎖していたため、脱出口となったのは一階の男子トイレの窓だ。

外に出た二人はまず車を探しに浮世荘の裏にある駐車場に向かった。駐車場と言ってもただの土だらけの空き地みたいなもので、ほとんど整備がされておらず雑草が無数に生い茂っている。

バスは送り向かいだけだから今ここには無い。教授や院生が搭乗して来た車が数台あったはずだが、どうやら先に脱出できた者たちに持っていかれてしまったようだ。これでは歩いて樹海を抜けるしかない。悟と庄平はあからさまに落胆した。

「マジかよ、歩いて行くななんて……一体何時間かかるんだ？」

庄平はさっそく愚痴をたれる。

「行くしか無いだろ。もうこうなったら」

実は悟は一番近い村まで30km以上あること事前に教授から聞いて知っていたが、それを言えば庄平がやる気を無くすと考え、敢えて言わないことにした。事実を告げたときの庄平の顔を想像し、悟は場違いだと思いながらも小さく笑う。

「何笑ってんだよ」

庄平は不思議そうに聞いた。

「何でもないよ」

悟はすぐにまじめな表情をつくる。庄平はなんだか納得がいかないといった顔で悟を見ていた。

その時ふと、悟の背筋に悪寒が走った。

危険が迫っているらしい。どんどん冷たい感覚が大きくなっていく。

「庄平、悪魔が追っかけてきたみたいだ。早く行こう」

何故か分からないが悟の感は当たる。庄平は黙って従った。

樹海の木々を流れ抜けるようにして、一台の車が細い道路を走っていた。

その車内には連門大学三年の国鳥友と、他に三人の人間が座っている。一年のマドンナ、佐々木舞と中年警備員の加納誠也、二年の小宮楓だ。三人は浮世壮から脱出することが出来た数少ない人間だった。

悪魔の進入にいち早く気づいた友は、殺戮が行われる前に既にロビーを飛び出してため、無事に生き延びていた。悪魔の姿を見て直感的に生命の危機を感じたのだ。

佐々木とは近かった女子トイレの窓から逃げようとしたときに合流した。

ロビーで付近にいた佐々木は友が走り出したのに釣られて一緒に逃げてきたのか、僅かだけ離れて後ろを走っていたようだ。

元々トイレで手を洗っていた小宮は当初男である友の突然のトイレ侵入に驚いていた。どうやら悪魔達の侵入を知らなかったらしい。だから小宮は唯一悪魔の姿を見ていない。ただおぞましい叫び声と悲鳴を耳にし、二人に従っただけだ。正直まだ悪魔の存在も半信半疑である。

対して、ロビーにいなかった加納が悪魔を見たのは今三人が乗っている車内からだった。ちょうど悟らが始めて卓真を見たのと同じ

ころだ。加納は電話が使えなかったため教授たちの依頼で裏口から直接警察を呼びに行こうとしていた。そして悪魔を目撃し、今見たものは幻だろうかと考えていると友らが走って着たため今にいたる。「もつとスピード出ないの!？」

「これが精一杯だよ。お姉さん、山道は高速道路じゃないんだ。速度を出しすぎれば簡単にあの世行きだぞ！」

先ほどからパニックを起こしている佐々木は加納の言葉がまったく聞こえていないらしく、栗色の長いウェーブの掛かった髪を振り回し、二重の目を見開いてもう何度もこのようなやり取りを繰り返していた。

小宮は佐々木の動揺ぶりを見て呆れている。

「ちよつと、佐々木さん！これ以上スピードは出せないって言うてでしょ。駄々捏ねないで」

悪魔の醜惡な姿を見ていない小宮は、普段と変わらない調子で言った。勢い良く振り向いた為左の長いアシンメトリーの前髪が揺れ、下睫の長い目が僅かに見える。

「早く逃げないとあいつらが追いついてくるのよ！ 落ち着けるわけ無いじゃん!!」

「車に追いつける訳ないでしょ。大丈夫だからほら、少し深呼吸して」

佐々木は心配そうに車の後ろを振り返った後、ゆっくり息を吸った。

一方、友は窓の外を通り過ぎる風景をじっと見ており、車内の騒動にもまったく口を出さなかった。恐らく悪魔のことでも考えているのだろう。その顔からは恐怖の感情が見て取れる。

友の雰囲気が伝染したのか、いつの間にか車内は先ほどとは打って変わって静まり返っていた。ただ重いエンジン音だけが耳を通り抜ける。

そのまましばらく車を走らせていると、運転していた加納は数十メートル先に火煙が上がっている光景を発見した。後部座席の友も

それに気づいたらしい。車内に入って初めての言葉を吐く。

「事故か。確か俺達より先に別の車で逃げた奴らがいたな、あいつ等かも知れない」

近づくとも友の予想通り火煙は一台の車から上がっていた。だが、どう見ても事故とは思えない壊れ方をしている。

ボンネットにはまるで巨大な鋭爪で切り裂いたかのような深く大きい穴が開いており、車体も元の三分の一ほどの大きさに押しつぶされていた。それだけでも十分異常な光景だったが、極めつけは車の周囲に飛散している大量の肉片と血だった。

「おいおい、勘弁してくれ。悪魔の次は恐竜でもいるってつか」

加納はその壮絶な状況を見て苦笑いした。

佐々木と小宮の女の子二人は、さっきまでのような口喧嘩の気力はどこへやら、無言で火煙を見つめている。

「あれは何だ？」

友は道路の右の方に何かの動物の足跡を発見した。全長一メートル以上はありそうなその足跡は、樹海の方へと続いている。

前の車とはそれ程離れてはいなかった。恐らくこの生き物が何であれまだそれ程離れてはいないはずだ。友はこのままここに居ることを危険だと感じた。

すぐに離れた方がいいと。

「警備員さん。早く行きましょう」

——あの炎上している車の乗組員のようになる間に逃げるべきだ。友と同じことを考えていたのか、加納は無言でうなずくとすぐに車を発進させようとした。だが、突然道路の先に巨大な黒い物体が立ちふさがった。

それは犬だった。

いや、正確には二歩足で立っているし、尾は無数の棘が突き出ており、両の手も四足歩行動物の手というよりは人間の手に近い形をしているので犬とは呼べないだろう。敢えて呼び名を付けるとしたら狼人間だろうか。ハメートルはあろうかという巨体を考慮すれば、

巨狼と言ったほうがしつくりくるかもしれない。

「な、何よあれ!!」

「きゃあああああああああ!」

「早く引き返せ! 殺される」

巨狼は町へ行く道をふさいでいる。もはや先へ進むのは不可能だ。友が敬語を使わず叫んだことを気にする余裕もなく、加納は必死に車を反転させると、アクセルを力いっぱい踏みつけた。

食後で満腹だったのか、巨狼は追ってこない。再び地獄の浮世壮がある方向へと戻るはめになり、四人は絶望した。

時刻は午後3時になっている。

朝から何も食べていない悟は、先ほどから自分のお腹が悲鳴を上げている音を聞き、一端休憩をとることにした。歩き続けて疲れたのだろう。庄平も反対はしなかった。

メニューはカンパンにミネラルウォーターといった質素極まりなものだ。まだ二十歳前の二人には物足りなかったが、食料温存のためには仕方が無い。二人は悪魔や肉食動物などに襲われないように道路からそれほど離れていない位置にある樹海内の木の上で食事をとった。

「後どれくらいあるんだろうな」

庄平は本日三度目となるセリフを繰り返す。

—— 3時間以上歩き続けたおかげでだいぶ進んだから、恐らくあと十六キロといったところか。十分な成果だけど、庄平に言えばマインナスに働くだらうな。

悟は誤魔化すことにした。

「だいぶ歩いたから、もうかなり近いはずだよ。後少し位じゃない？」

「後少しか、このまま悪魔に会わないで行けたらいいんだけどな」

「浮世荘からは大分離れたし大丈夫だろ。もうあんな目にあうことなんてないよ」

「そうだな」

庄平は安心したようだ。

「鈴野や他の奴ら、大丈夫かな。あの時よく見ていなかったけどロビーにはいないみたいだったし」

悟は歩いている間に何度も考えていた疑問を口に出した。ずっとそのことが気になっていたのだ。

「鈴野は飯島の部屋に遊びに行つてたみたいだったから、上手く逃げれたと思うぜ。ほら、飯島の部屋つてロビーから遠いじゃん」

飯島と言うのは鈴野の彼女だ。高校二年のころに鈴野が告白してからずっと交際を続けているらしい。悟はよく知らないが、聞いた話だと今時珍しいドラマのような大恋愛の結果に結ばれたそうだ。

「あいつが死んでたら、俺本気で耐えられないよ」

悟は悲しそうに言う。

「ああ、俺もだ」

二人は鈴野の無事を祈った。
生きてて欲しい。

また三人でふざけあいたい。

ここから逃げれたら彼女の飯島さんを紹介してくれるだろうか。
きつと嬉しそうに自慢するんだろう。

そのときの様子が目に浮かぶ。

悟が感慨げにふけっていると、遠くの方から車の音が聞こえてきた。

「車だ！ やった、助かるじゃん」

庄平は天の助けを見たかのような表情で木から降りると、道路の

方へと飛び出した。

「庄平、ちよつ、待てつて」

やや遅れて悟も続く。

車の搭乗者は二人を目視すると、数メートル前で車を停止させた。

「あれ、悟くんか！ よかった。君も無事だったみたいだな」

「友先輩……！」

車に乗っていたのは友たちだった。

友たち四人はあれからしばらくの間、事故現場の付近にある道路を何度も行き来していた。脇道がないか探していたのだ。しかし、結果としては無駄にガソリンを使用するだけで終わってしまった。

四人はこのままでは巨狼に襲われると思ったので、残りわずかなガソリンを使い引き返したところだった。

「あ、佐々木さん！ よかった。大丈夫だった？」

庄平は目ざとく後部座席の佐々木を見つける。

「大井田くん。ありがと、大丈夫だよ」

佐々木は知り合いに会えて少し安心したようで、いつもの調子を取り戻した。

「ねえ、あんた達ここまで歩いて来たの？」

小宮は呆れた調子で言う。

「ええまあ、車がなかったもんですから」

悟は溜息混じりに疲れた声で答えた。

「それより、先輩達は何で引き返して来たんですか？ せつかく車に乗ってたのに」

悟の疑問がもっともだと思った友はすぐにそれに答えた。

「それがな、この先に尋常じゃない大きさの犬が居たんだ。ハメートルくらいはあったな、あれは。そいつが道路を塞いでいて通れなかった」

「犬？」

「そ、それも超ヤバイのがね。私達の先に逃げた人達はみんな食べられちゃったみたい。そこら中に血が飛んでたんだから……」

小宮が友の言葉を補足する。それを聞いて興味を持った庄平も会話に加わった。

「浮世荘の悪魔みたいな奴とはまた違うんすか？」

「ああ、また別の存在みたいだったな。特徴が微妙に違う。浮世荘の奴が黒っぽい灰色の皮膚に血走った赤い目なのに対し、あの巨狼は真っ黒な皮と毛に黄色の目だった」

まるで今見たばかりであるかのようにスラスラと特徴を言う友に、その場の全員が感心した。あの切羽詰った状況でそこまで相手を冷静に観察できる人間はそうは居ないだろう。当然の感心だった。

友や悟のように常に冷静な態度は一般生活ではあまり好まれないが、こういった状況では大いに役に立つらしい。

「なあ、学生の諸君。どうでもいいが、車から降りないか。もうガソリンもほとんど残っていないことだし」

さつきから黙っていた加納は進展しない状態にうんざりしてそう言った。

「そうね、私もこんな狭いとこ早く出たかったんだ」

佐々木がさつきと車から降りる。加納がせかすように車から追いつ出すので、友も小宮もすぐに佐々木に続いた。

「さて、これからどうする？」

加納は困ったように言った。ガソリンが無いので車はこれ以上走ることができず、歩いて道路のどちらの方角にも化け物がいる。まさにお手上げと言った状態だ。

友と悟は車のトランクの中を調べ始めた。何か使える物があるかもしれないと思ったからだ。だが期待に反して出てきたのはライター二個にガムテープが一つだけだった。

「はあ、一体何の役に立つんだか」

悟はがっかりしたが、友はそれをよそにそれらの物を携帯すると

トランクを閉じた。取り合えず取っておくつもりらしい。

「確かこの近くに川がなかったっけ？ あたし去年息抜きに一部の教授達とそこに行ったんだと……川に沿って下れば道路を通らなくても人里にいけるかもよ」

小宮は思い出したように言った。

「川か、いい案かもな。確かに前に地図でその先に銀野町と言う名の町を見た記憶がある。隣の町よりは少し遠いが、俺は賛成だ」

普通、用もない場所の地図なんて見ないだろう。悟は友の用意周到さに苦笑いしながらも、その案に乗った。

「僕もそれでいいですよ。他にどうしようも無いみたいだし」

悟は普段は「俺」の一人称を使っているのだが、このように目上の人間に対する時は例え親しい仲になっても「僕」と言うようにしている。幼いころに父にそう仕付けられたのだ。今では特に意識せずとも自然にその二つを使い分けている。

「ええ、マジかよ」どんだけ歩くんだ！？」

庄平の虚しい叫びがしばらく樹海に囲まれた道路に木霊した。

その数時間前。

浮世荘では最後の人間がその短い命の灯火を消し去っていた。

死者の数は軽く三十人はゆうに超えているだろう。浮世荘の壁や床は想像を絶つする量の赤い液体で覆い尽くされている。

いつの間にか十数体にも増殖した悪魔たち、はもはや生きている者がこの建物の中にいないと悟ると、新たな獲物を求めて樹海中に広がっていった。

自らの尽きることの無い欲望と飢えを満たすために。

生きている者の体に自分の牙を突き立てるために。
そして自身の体内を蠢く存在のその本能が命ずるままに。

悟、友、庄平、小宮、佐々木、加納の六人は、道路からしばらく進んだ所ですぐに川を見つけた。

川と言ってもそれほど幅が広いわけでも底が深い訳でもなく、歩いて渡れそうな大きさだ。ちょうど子供用プールぐらいだろうか。周囲は川の真横からすぐに樹木が生い茂っているため、見渡しは悪い。樹海の森中とほとんど変わらない状態だ。川の中を見ると小魚が泳いでいるのが分かった。

同じ樹海という地獄の中にいるはずなのに、自分たちとは打って変って元気に泳ぎまわっている。悟はその様子が少し羨ましく感じた。

ただ黙々と進むのに飽きたのか、庄平は堪えきれずに口を開いた。「なあ悟、俺思ったんだけどさ。浮世壮で悪魔が増えてただろ。あれってみんな知った顔だったじゃん。もしかしたら、吸血鬼みたいに噛まれるとあいつ等の仲間入りしちゃうんじゃないか？」

「その可能性はあるかもな」

「ねえ、増えてたってどういうこと？」

卓真の悪魔しか見ていなかった佐々木が、不思議そうに尋ねた。

「あ、実は……」

「そっか、佐々木さんは見て無いんだったか。俺達がロビーに行ったとき、悪魔が三匹になってたんだよ。それも卓真のように学生の間人間がなったみたいだった」

悟が答えようとするのを遮り、庄平は笑顔で説明した。どうやら

佐々木のことが好きらしい。栗色の長いウェーブの掛かった髪に、あのくりつとした二重の目だ。一般的な男子学生ならば好きにならない方がおかしいだろう。何かと佐々木と会話を取り付けようとしているのがあからさまに窺がえた。

「えゝ何それ、超怖いんだけど」

ワザとらしく佐々木が反応する。

悟は庄平のために足を遅らせて二人から離れた。自然に友の隣に付く形となる。佐々木はチラッとこつちを見て何か言いたげにしていたが、庄平に話を振られたので会話に戻った。

悟が視線を感じ横を向くと、友がこつちを見ていた。

「なあ、悟。今の話本当か？」

あ、もう「君」は付けないのか、などどうでもいいことを考えながら悟は答える。

「聞いてたんですか。本当ですよ。俺も見ましたから」

「そうか……」

悪魔増殖の原因でも思いついたのだろうか、友は何かを考え込むような素振りをした。

悟が思案を邪魔しないように黙っていると、友は突然こつちが意図していなかった提案をしてきた。

「悟、こんな状態なんだ。敬語は使わなくていい。俺のことも友か、国鳥って呼んでくれ」

「え、何ですか？」

「敬語を使うときより使わない方が親近感がわくし、何より言葉を発する時間を短縮できる。いつ化け物に襲われるかわからないんだ。言葉はできるだけ短い方がいい」

——そんな細かいことまで気にするのか。

悟は半分呆れながらも、友の言う通りにすることにした。

「分かった。や、これからは友って呼ぶよ」

敬語の癖が染み付いている悟は、多少の抵抗感を我慢しながらもなんとかそう言った。友は満足そうにこつちを見る。

ゾクッ！

その時、いきなり悟の感覚が危険を知らせた。ぞっとするような寒気が背中を駆け上る。

「まさか！」

悟はすぐに周囲に目を走らせた。案の定、予知したとおり後方三十メートル後ろの木の前に灰色の人間が見えた。向こうはすでにこっちに気づいているらしい。すざましい形相で迫ってくる。

「――っ逃げろおおお！！」

悟は全力で叫んだ。

「え、何だ！？」

「うわっあ！」

事態を察した他の人間は慌てて駆け出す。

「くそ、向こうからやってくるとは！」

加納は警備員とはいえ五十を過ぎた中年だ。他の若い学生達に比べると足の速さも体力もだいぶ劣る。最初は先頭近くを走っていたのに、すぐに最後尾となってしまった。

悪魔は加納が一番遅いことを理解したらしく、彼に狙いを定めた。二人の距離はもうほとんど無い。

「加納さん！」

比較的加納に近い距離にいた小宮が叫んだ。

悪魔は加納にのしかかると、その汚い歯を彼の首元へすばやく移動させる。だが加納も負けておらず、支給されている警備員用の警棒で必死に抵抗した。

悪魔にはほとんどダメージがないようだが、噛み付くのを遠ざけるくらいの効果はあったようだ。加納はまだ奇跡的にその命を守っていた。

悟と庄平は加納を助けるために浮世社の調理室で手に入れた包丁を構えると、悪魔に向かって死ぬ気で駆け出した。

襲われてから十秒ほどたった頃だろうか、二人に気づいた悪魔は加納から飛び跳ねるように離れ、茶色い土の上に着地する。悟は悪

魔の血走った大きな目を睨み付けた。まるで本当の悪魔のようにしか見えないその冷酷な瞳を見ていると、悟の全身は自然に震えてくる。

恐怖で腕に力が入らない。足がすくむ。

怖い、怖い、怖い……！

ただその言葉だけが心を支配する。

だが、頭だけは変わらず冷静だった。

自分の体の状態をよそに、無意識のうちに悪魔を分析する。悪魔はその外見こそ化け物だが、基本的な身体構造は人間と変わらない。攻撃は爪か歯でしかできないようだ。

——落ち着け、冷静になるんだ。まだ恋人すらいらないのにこんなところで死んでたまるか！

はやる気持ちを必死に抑え、悪魔の瞳を見続ける。

悟はタイミングを待った。悪魔が自分めがけて飛び出すタイミングを。

「クギヤアアアアア！」

悪魔は雄たけびを上げると、爪を振り下ろしてきた。しかしその爪が相手に当たるとは無かった。

悟は普通の人とは違う。シックスセンスというアイデンティティが生まれつき備わっているのだ。いつ悪魔が飛び出し、どこに爪を振りし、どのように自分を殺そうとするのか、その全てを事前に感覚で知ることができる。まさに圧倒的な反応速度の優位性を持っている。

くたばれえええええ！

転がるように悪魔の後ろに回ると、悟は右手に持った包丁を思いっきりその背中に振り下ろした。

「ガアアアアアアアアアア！？」

悪魔はそんな姿になっても痛みを感じるのか、叫び声を上げた。フォークで肉を刺すときの数倍の嫌な感職が悟の手に伝わる。

包丁を抜いて離れると、人間では考えられないほどの赤黒い色の

血が悪魔の背から噴き出す。悪魔は痛みにもだえながらも、その視線を今度は近くの庄平に向けた。

庄平は加納を助けようと駆け寄ったものの、恐怖で腰を抜かし動けなくなっていた。悪魔が自分を狙っていることに気がつく、その恐怖を倍増させさらに動きを鈍くする。彼の頭は今や頭の中は何も考えられなくなっていた。「殺される！」「死にたく無い！」その感情すらもはや消えている。完全に思考停止状態だ。

悟は庄平を助けようとしたが、どう考えても間に合いそうにはない。

「庄平、逃げろ！」

悟の悲痛な叫び声も庄平には聞こえていないようだ。ただ目を見開いて不自然に固まった表情のまま悪魔を見ている。

悪魔は庄平を土の上に組み敷くと、いつきに歯を立てた。

その時、悪魔の灰色の醜い頭に突然何かが強打した。悪魔は転がるように庄平の体から落ちる。

「早く離れろ！」

我を取り戻した庄平が前を見ると、友が大きな石を抱えて立っていた。どうやらそれで悪魔を叩いたらしい。

「ハンマー代わりだ。拳で殴るよりは効果があるだろう」

相変わらず爽やかな笑顔でニツと微笑む友。庄平は自分の不甲斐なさを感じながらも立ち上がった。

人間ならば絶対に即死しているはずの攻撃を受け、いくら頑丈な悪魔でもその動きを鈍めた。心なしかさつきよりも立ち上がるのが遅い。悟はそのすきを逃さなかった。

庄平を助けるためにダッシュした勢いそのまま、起き上がるようにしている悪魔に再び包丁を突き刺す。両手に一本ずつという念の入りで。

頭蓋骨に風穴を開けられた悪魔はさすがにその場に崩れ落ちた。

「はあ、はあ、やった……倒した」

さすがにもう死んだだろう。悟は両手に包丁をもったまま座り込

むと、まだピクピクと痙攣しているその死体を見つめた。友と庄平もためていた息を吐き出し、安心した表情を作る。

だが、悪夢はまだ続いていた。

「いやあああああ！」

三人から少し離れた所から佐々木の悲鳴が聞こえてきた。

悟がすぐにそちらを向くと、灰色の皮膚に血走った大きな赤い目、悪魔と化した加納が佐々木と小宮に襲いかかっている所だった。

「加納さん！？ 何で！？」

悟は訳が分からなかった。

別に加納は噛み付かれたわけでも、悪魔の血が傷口から進入したわけでもない。ただ、地面に押し付けられていただけだ。一体なぜ加納が悪魔になっているのかさっぱり理解できない。

だが考えている時間はなかった。

今はとにかく佐々木と小宮先輩を助ける必要がある。悟はまだ動悸が激しい体を無理やり動かし、二人の元へ向かった。一番先にたどり着いたのは友だ。友は持っていた大きな石を加納に投げつけた。「ドボツ！」と鈍い音と共に、石は加納の腕に直撃する。その隙に佐々木と小宮は加納から遠ざかった。

「庄平、包丁を一本よこせ！」

友は後ろに居た庄平から包丁を受け取ると、躊躇無く加納に斬りつけた。しかし、加納はそれを素早くかわすと友に体当たりを食らわした。

「うわっ！」

思いつき後ろに吹き飛ばされた友を悟が受け止める。別に勢いを殺そうとしたわけではない。直線上に後ろに居たため巻き込まれたのだ。

縛れるように倒れる二人。

たった一人動ける庄平は腰に挟んでいた包丁を抜くと、加納と向かい合った。もう不甲斐無い真似をする訳にはいかない、自分が皆を助けると決意して。

体はまだ震えているものの、庄平は先ほどのように頭が真っ白になることはなかった。

「うっ、うおおおおん！」

恐怖を振り切るかのように叫びながら加納に突っ込むが、今の加納は人間ではない。庄平の単調な突きなど攻撃されている内に入っ
てはいなかった。友の時と同様あっさりかわされてしまう。庄平は
勢い余って近くの長草のなかに倒れこんだ。

ほんの短い間だが、武器を持っている三人が動けなくなったこと
で、加納を止める人間はいなくなった。

「いやああ、来ないでえ！」

加納が自分の方に走ってきたので佐々木は死に物狂いで逃げる。し
かし悪魔の強化された身体能力を持つ加納からは、逃げ切ることな
ど不可能だった。

小宮は目の前で佐々木が死ぬのを見た。

加納の鋭い歯が首筋を切り裂き赤い血を噴出させる。その血のし
ぶきが小宮の頬につく。

「きやあああああああああ！」

小宮は我を忘れて森の奥深くへと走っていった。

後悔の念だけが頭を支配する。長草からその瞬間を見ていた庄
平は自分の好きな人、大切な人間である佐々木舞が死ぬのを目撃し、
その余りの突然の最後に涙を流した。涙は抑えようとしても次から
次へとどんどん勝手に出てくる。

——俺のせいだ！俺さえしつかりしていればこんなことにはな
らなかった。あのときテンパって転んでさえいなかったら……！

まだ告白もなにもしてなかった。これからデートをして、一緒に
映画を見て、夜景が綺麗なホテルに泊まっちゃ足りもするはずだっ
た。また、あの笑顔をみるはずだった。

「何でだよ、何で死んじゃうんだよ。ふざけんな、ふざけんなよお
お……！」

佐々木の死体を食そうとする加納に向かって、庄平はめっちゃくち

やに包丁を振り回す。

ブンブン、ブンブンと、空気を切り裂く音だけが耳に流れる。

「庄平よせ！」

佐々木に続いて庄平まで死んでは堪らない。悟は奥歯を噛み締めるようにして加納目掛けて走った。

庄平の懇親の一撃も難なくかわすと、加納はその腕を掴んだ。手首が折れるんじゃないかと感じるほどの痛みが庄平の腕に走る。

普段ならびびって動けなかっただろう。だが、今の庄平は佐々木を失った怒りに満ちていた。加納が噛み付くよりも早くその首に包丁を突き刺す。

思わぬ反撃に加納は驚き、甲高い悲鳴を上げた。

「ギョウオオオオオ！」

悟が目の前まで来ると、庄平はさらに刃を突き刺そうとしていた。包丁に恐怖した加納は、庄平の手を離し距離を取ろうとしたが、今度は逆に庄平に掴まれた。

「逃がすかあ！ 糞野郎っ！」

一人と一体は揉み合うように転げまわる。

その時、悟の感覚は何かを感じ取った。

何故かは分からない。だが悟はこのまま庄平が加納に触れていると、何か嫌なことが起こる気がした。

一瞬ためらった後に、悟は庄平目がけ体当たりをした。引き剥がされるかのように加納の上から庄平が飛び落ちる。

「がつ！……っ何すんだよ！？」

庄平は怒りに満ちた目で悟を睨んだ。

悟が説明する間も無く背後に加納が迫ってくる。

「——っく！」

悟は両手に包丁を構えると、寝転んだ体勢のまま加納の足を斬り付けた。加納はそのまま二人の上に倒れる。すると再び嫌な感覚が悟の体に甦った。

——やっぱりこいつに触れているのは危険なんだ！ もしかした

ら接触感染するのかもしれない。一刻も早くはなれないと！

悟は加納を蹴飛ばして無理やり体から離すが、体勢を整える間もなく悪魔はすぐにも噛み付こうとしてきた。悟の目に醜い歯が映る。

「友ー！」

悟が叫ぶと同時に、いつの間にか近くに来ていた友が包丁を加納の心臓に突き刺す。

加納と友の顔の距離は数センチしか離れていない。友はもろに加納の顔を見る羽目になった。

悪魔の血走った瞳が生氣を失っていく。

加納は友の目を見つめたまま仰向けに倒れると、二度と動くことは無かった。

<第三章>悪魔の正体

<第三章> ” 悪魔の正体 ”

佐々木と加納の死体は川横の土に埋められた。

そのまま放っておけば悪魔どもに汚されてしまう。佐々木をそんな目に合わせたくない、庄平が提案したことだった。

墓を作る作業は終始無言で行われた。誰一人として口を開かない短い間だったが、いっしょに行動した人間が二人も死んだのだ。三人は改めてこの樹海の恐ろしさを思い知った。

自分たちは生きてこの地獄から帰れるのだろうか。心にその思いが蜘蛛の糸のようにくっついて離れない。

墓を作りながら悟は庄平を見た。庄平がこのショックから立ち直れるかどうか不安になったからだ。

例え付き合っていた訳じゃなくても、好きな人の死は辛すぎる。

小宮があの後どうなったかといった心配もあったが、悟にとっては今は庄平の精神の方が気になっていた。

墓の製作が終わった後、悟たちは最後に礼をし、そのまま振り返らずにその場を後にした。

先ほど自分たちを襲った奴のように、樹海中に悪魔が拡散しているみたいだ。同じところに留まるのは危険でしかない。庄平は辛いだろが、ここはすぐに離れるべきだった。

急造の墓場から歩き続け、時刻は7時になるうとしていた。夏とはいえ、日もだいぶ落ちている。

悟は自分の視界が暗くなってきたのを感じた。

「今日はこれ以上進むのは無理だな。完全に暗くなる前に寢床を見つけないと」

「おい、あそこいい場所じゃないか？」

友が何かを指している。悟が目をそっちに動かすと、少し先、川の右手に崖があった。アーチー状の形のおかげで雨風を凌げそうだ。真横には川と立地条件も良い。一日だけ泊まるには最適な場所に見えた。

「いい場所ですね。今夜はあそこで寝ましょう」

「おい悟、敬語に戻ってるぞ」

「あ、すいま……ごめん。何かやっぱりまだなれないな」

「嫌でも慣れてくれ。今はまだ実感がないと思うが、いずれ敬語を使わなくてよかったと感じるはずだ」

——そんなときが来るとは思えないけど。

と思ったものの、悟は口には出さなかった。

崖が近づいてくると、明かりが目についた。どうやら誰かが焚き火をしているらしい。紅い光がゆらゆらと揺れている。

「人がいるみたいだぜ」

庄平が用心して小さな声でそう言った。

「悪魔どもに焚き火なんて複雑な作業ができるとは思えられない。他にも逃げれた人間が居たってことか」

相変わらず理論的な話し方をする友。

三人が近づいていくと、崖の下でも焚き火を作った主がこちらに気づいたようだ。その人物はすくつと立ち上がると、心配そうにこちらを見た。悪魔かどうか疑っているのかもしれない。

三人が人間だとわかったのだろう。男は笑顔を見せた。

悟は初めは小宮かと思ったが、違う人間だとわかるとがっかりした。別に小宮が好きというわけではなく、ひとり樹海の奥深くへと消えた彼女が心配だったただけだ。

そんな悟とは反対に、友と庄平は男を見ると急に興奮しだした。

庄平が叫ぶ。

「ああつ、高橋博士！」

男は高橋志郎だった。

「お茶の味はどうか？」

「はい、旨いっす！」

「美味しいです」

「こんな材料でもちゃんとお茶になるんですね」

志郎が付近の食用草と川の水、焚き火で作ったお茶を三人は堪能していた。

「君たち、よく生き延びれたね。大変だったろ」

「ええ、色々ありましたよ。俺なんか初恋の人が目の前で殺されましたからね。博士は知ってるんすか、あの悪魔達が急に現れた原因を……」

志郎はちよつと考える素振りをしたが、三人がかなり聞きたそうな顔をしていたため話すことにした。

——どうせこの子らはもう普通の生活には戻れない。例え無事に生き延びたとしても、イミューニティーが接触してくるだろう。ならば事件の詳細を知っていた方がいいかも知れない。

「……君たちは連門大学の学生だろ。僕が昨日行くはずだった」

「はい。そうです」

悟が答える。

「君たちにとつては意外だろうけど、僕は最初から浮世荘には行くつもりが無かったんだ」

「どういうことですか？」

「僕は自分で言うのも何だが有名な科学者だ。何の理由も無く樹海に来れば、政府の人間や他の科学者に怪しまれる。高橋が樹海で何かを研究するらしいってね」

志郎はここで一呼吸置く。

「だから連門大学のキャンプを隠れ蓑にさせてもらった。講義をしにいくとなれば堂々とこの樹海に入れる」

「その話と悪魔に何の関係があるんすつか？」

庄平は予想がついているはずなのにあえて質問する。

「僕がそうまでして樹海に入りたかつたのは、悪魔の存在を調べるためだった。国家の生物関係の研究所にいる知人から情報を得てねこの樹海の下にブラックドメインがあるらしいって」

——ブラックドメイン？ 聞いたこと無い言葉だな。ブラックは黒だろ、ドメインって何だ？

悟は言葉の意味が分からなかった。

「ブラックドメイン、つまりは黒い領域……人間が踏み入れてはいけない死の領域のことだよ」

「一体何を言っているんですか？」

友はその言葉の意味がわからず聞き返す。

「樹海の地下六千五百メートルの位置にとある空洞がある。そこは現在の地上の生態系とは完全に独立した存在であり、まったく別の新しい生物を生み出しているんだ。空洞の大きさは一立方キロメートルにも満たないから、その生物達も空気や水をほとんど必要とせず、わずかな微生物を食料に生きていた」

——そう、そのときまでは……

「ある日、君たちの記憶にも新しい、三ヶ月前の富山大震災のときに、その空間つまりブラックドメインに地上へと通じるほんの僅かな亀裂が生じた。そのせいで中に居たと新種の微生物たちが上へ上へと上がり、この樹海へとやってきてしまったんだ」

「そいつが悪魔ってことですか？」

「いや、違う。こいつらは悪魔じゃない。この生物——正式名称、同化式原生有機体、通称 ”イグマ” は、生物の体内に入るとその主の細胞に自分自身を組み込ませ、養分を得るんだ。突然異分子が加わったことで寄生された生物は細胞構造が変化し、不安定なものとなり安定した細胞を求めて他の生物を襲うようになる。それが

同化式原生有機媒体、つまり悪魔だ」

悟、友、庄平はこれまで体験した事件の核心を聞き驚いた。

「そんな生き物が自分達の足の下に存在していたのか」

友が感心するように呟く。

「今言ったのが第一次感染。そしてもっとも恐ろしいのが次の二次感染、”十秒感染”だ」

「十秒感染？　もしかして、十秒以上悪魔に触れるとイグマがこっちに移ってくるってことですか？」

悟は加納に触れた時の嫌な感覚を思い出してそう言った。

「察しが良いね。そう、悪魔に十秒以上触れるとその接点から、その細胞に寄生しているイグマがこちら側の細胞にまで組み込んで来るんだ。そうなればもう助からない。イグマはすぐに体内で増殖しあつという間に全身の細胞に寄生する。あ、血液になら触れていても大丈夫だよ。なぜか分からないけど血液中のイグマに感染能力は無いから。君たちの大学でも多くの学生がこれで悪魔になったんじゃないかな？」

「はい！　そうです。一匹が建物の中に入ったと思ったら急に三体になっていて驚きましたよお！」

庄平が大げさに答える。

「そうか、本当によくそこから逃げてこれたね。君達は運がよかった。僕の時なんて……」

志郎は何かを思い出しているらしく、下を向くと黙り込んだ。しばらく間を置いて友が質問する。

「博士は……前にもこういう目にあつたことがあるんですか？」

「んっ？　あっ——ああ、そうだよ。十二年前に北海道の沖田山荘というところだね」

「12年前？　イグマが地上に出たのは三ヶ月前なんでは無いんですか。それに北海道って……」

「そっか、まだ言っていなかったね。実はブラックドメインはこの樹海の地下を入れて、全国に三箇所あるんだよ。僕が沖田山荘事件で

遭遇したイグマは樹海産じゃなくて静岡県の海中産だ。政府の対非確認生物対策機関 ”イミュニティー（免疫）” の研究員が持ち込んだものが、アウトブレイク（感染爆発）して悪魔を生み出したらしい」

「イミュニティー……」

「何だ、あと二つもこんな場所があつたんだ。じゃあ、政府の人間は前から悪魔の存在を知つてたてことか」

—— だったらこんなに犠牲者が出る前に、対策でも打ってくれば良かったのに。

悟は佐々木と加納の最後を思い出して悔しがった。

「僕がここに来たのも実はイミュニティーに関係しているんだ。二年前に僕はイミュニティーの所為で大切な妹を失った。あいつらは絶対に許せない。デットゾーン化したこの樹海になら奴らの調査員が着ているはずだから、僕はそいつらに接触してイミュニティーの本部に行こうと考えている」

「本部に行つて何をする気なんです？」

友が静かに聞いた。

「……それは君達には関係の無いことだよ」

志郎は意味深に言葉を濁し、友の問いから逃げた。

—— この男はいつたい何をする気なんだ？ まさかイミュニティーの本部でイグマをばら撒いたりする気じゃないだろうな……。

友は志郎が実際にそれをやりそうなので少し怖くなった。

「さあ、今日はもう遅い。明日に備えて夕飯にしようか」

話はこれまでと、志郎は全員に食事の用意をするように急かした。食事は悟と庄平が持つてきていたカンパンに、志郎作のスープ、川で取った魚の丸焼きという昼よりも豪華なものだった。

食後すぐに寝ることになったが、睡眠中に火を絶やさないように交代で見張りを立てることにした。悪魔はやはり火が苦手らしい。焚き火をし続けていれば近づいてこないようだ。悟は悪魔達の夜襲が心配だったものの、疲れが溜まっていたのか意外とあっさり寝て

しまった。

目が覚めると気持ちの良い朝日が顔を照らしていた。どうやら樹海に来て丸二日目の朝を迎えられたようだ。悟は深夜に一度見張りをしたからまだ寝たりないかと思っただが、意外と気分がスッキリしているのを感じた。

悟が起きた事に気づいたのか、見張りをしていた庄平が振り向いた。

「おーっす、おはよう」

まるで昨日の朝のように軽く挨拶する庄平。だが、その違和感を悟は見逃さなかった。

庄平の目元には涙の痕がくつきりと見える。やはり佐々木のことを引きずっているのだろう。見張りのとき以外も起きていたことを知らせるように、大きな限が出来ている。

悟は庄平の様子に気がつかない振りをしてそのまま返事をした。

——今はあまり佐々木のことには触れないでそっとしておくべきだ。思い出させれば本人にも、自分にも辛いだけになる。

「おはよう。何かこうして挨拶していると、合宿の続きをしているみたいだな」

「あはははっ、確かにな。でもお前がこんな早く起きてるってことは、これが合宿じゃないってことだ。合宿ならおまえがこの時間で起きる訳がねーよ」

「はあ、何だよそれ？」

「あははははっ！」

庄平は悟の怒った顔を見て笑った。

「なあ、ところで国鳥せんぱ……友と博士は？」

周囲のどこを見渡しても二人の姿が見えない。緑の木々だけが視界を埋める。

「ああ、あの二人ならさっき出かけたぜ。何か博士が集めたい物があるんだとよ」

「集めるって何を？」

「何かよくわかんねえけど、俺達に悪魔との戦い方を教えるのに必要なものらしい」

「戦い方？　そうか、あの人一度こと同じようなところで生き延びたんだもんな。弱点とかいろいろと知ってるのかも」

「案外、服を脱いだらめちゃくちやマツチヨだったりして」

「あの細身で？　ないだろ」

「いやあ、分かんないぜ。人は見かけによらないからな」

どうやら庄平は本気で博士が筋骨隆々だと疑っているらしい。まじめそうな顔つきでそう言った。

「マツチヨかあ……なつて見たいけどねえ。僕には無理だな、体力無いし」

「あ、博士。もう用事は済んだんですか。早かったですね」

いつの間にか背後に立っていた志郎と友に悟は驚いた。

「まあ、大したもん集めてた訳じゃないからね。詳しい話は後だ。まずは朝飯を食おう」

宮元歳三、松本敦、大森陽一、福田幸助の四人は、連門大学の中でも有名な不良だった。

朝っぱらから酒を飲んでの受講は日常茶飯事で、特定のサークルやアルバイトにも属さず、いつも深夜までクラブで踊っては、ンパやかつ上げを繰り返していた。

学生同士の噂では薬の類も使用しているらしく、大学内でも呂律が回らない姿を度々目撃されている。

そんな人間たちが単位を十分に取れる訳がない。彼ら四人は退学の危機に立たされていた。

この樹海キャンプは彼らにとってはいわば最終チャンスだった。

このキャンプで成果をださなければ退学はもはや免れようが無い。

しかし誰かの指示を素直に聞けない彼らは、ラストチャンスだというのに講義も受けず、四人で樹海の探索をしていた。その頭には迷うとか、電波が通じないとか、方位磁石が効果を持たないとか一切の考えも無い。楽しいからそうしている。只それだけだ。

普段の樹海ならば命にかかわる大馬鹿な行動なのだが、その日に限っては常識に反して彼らの命を救う結果になった。

そう、なぜならば浮世荘は彼らが樹海をさ迷っている間に血の海になっていたのである。

四人が悪魔の存在を知ったのは、それからしばらくたってからのことだった。

運がいいのか、悪いのか。今、この場所に来るまでに彼らは三度も悪魔に遭遇したが、そのどれに対しても奇跡的に逃げ切ることができていた。

樹海の中でも起伏が激しく、高さが二メートル近い岩や土の塊があちらこちらに盛り上がっている場所がある。そこに彼らは隠れていた。

「はあ、はあ。くそっ！　くそっ！　くそっ！　何だよあいつら！　？　ラリリ過ぎだろ！」

真っ赤なだぶだぶの赤いトレーナと、赤いニット帽をかぶった男。宮元は隠れているはずなのに大声で文句を垂れる。その所為でボールペンで書いたような細い眉毛が八の字に歪んだ。

「やべーよな、何の薬やったらああなるんだよ」

「超日焼け薬じゃねえ、なんかあいつら黒ばっかったし」

恐怖で震える大森に対し、松本は場違いにも冗談を言った。大森

は短い金髪にピアス、松本はチリチリのロン毛を後ろで結んでいる男だ。

「うぜーよ松本！ マジおまえ馬鹿だから！」

大森が緊張感の無い松本に怒鳴りつける。

「はぁ、お前の方が馬鹿だから！」

「はぁ、ざけんな！」

小学生のように言い合うふたりの声が辺りに大きく響く。もはや隠れているとはとても言えない。相乗効果で怒りを高め、さらに言い合いを続けようとする二人を福田が制した。

福田は長い髪をワックス漬けにして立たせているため、一昔前の筈のような髪型をしている。眉毛は剃りすぎて霞みほどしか見えなかった。

「お前らちよつと黙れよ、超うるせえんだけど」

彼はこの集団のリーダーのようなものだ。大森も、松本も福田には逆らえない。二人が静かになったのを見ると、福田は一点を指した。

「あそこ見ろよ。誰かいるみたいだぜ」

大森、松本、宮元がそこを見ると、メタボリックシンドロームのお腹が目立つ中年と思わしき作業服姿の男がこちらの様子を見ていた。声を聞きつけてやって来たのだろうか。

「なんだ？ あのオヤジ？ キモ！」

「おい、あいつ背中に銃背負ってないか？」

「え、マジ？ 本物？」

四人と目が合った男、五郎はゆっくりと彼らに近づいてきた。

「良かった。お前らも生き残りか。あれだろ、連門大学の学生さんだよな」

嬉しそうに話しかける五郎。

だが、四人は視線を銃に固定して離さない。福田は厭らしい笑みを浮かべると、五郎に気づかれないうちにそつと背後へと回った。

「チームワーク？」

庄平は志郎の発した言葉の意味が分からず、聞き返した。

「そう、チームワークだ」

志郎は再び繰り返す。

今、四人は朝食を終え、崖前の小さな草むらで悪魔への対抗策を話し合っていた。

「一対一で正面から悪魔と戦えば、超能力でも無い限りほとんどの確立で殺される。悪魔の身体能力は僕らの数倍はあるからね」

「だから大勢でかかれてことですか？ それなら自然にそうしますよ」

悟は志郎の言いたいことが違うことだとわかっていながらも、確認の意味で聞いた。

「大勢でかかることには変わらないけど、それだけじゃ駄目なんだ。昨日、実際に悪魔一匹相手に何人も殺されただろ？」

悟も庄平も友も黙っている。そんなに軽く言えるような内容ではない。

返事が無かったが、大して気にせず志郎は話を続けた。

「悪魔との戦いでもっとも大切なことは、”気づかれないこと”、つまり、いかに旨く隠れることができるかってことだね」

「——って、え？ 隠れてどうするんすっか？」

庄平は不満げに聞く。悟と友も黙ってはいたが、庄平と同じ疑問を感じていた。

「庄平君、話は最後まできてくれ。僕が、正確には十二年前のブラッドメイン事件の当事者達が生き残るために考え付いた方法なんだ。信頼して損はないよ」

「では具体的に言ってください。つまりどういうことですか？」

友が無駄話は聞きたくないといった雰囲気で質問した。

「分かった。いきなり隠れるっていうのは分かりずかったかな。じゃ、実際に悪魔に会ったつもりで説明するよ」

「お願いします」

「こつちが悪魔を先に見つけたとしよう。そうしたら、まず仲間の一人が罠になつて悪魔を引き付けて貰う。そのとき他のメンバーは罠が走りぬける場所の左右に隠れておく。木の裏や草の中なんかがセオリーだね」

悟は志郎の言わんとすることが分かってきた。

「何か、先が読めてきた。もしかしてそれって……」

「そうして罠が二人の間を駆け抜け、悪魔が目の前にきたら——後はもうわかるだろ」

「不意打ちで仕留めるんですか」

悟はあまりに単純な戦い方に落胆した。悪魔との戦いつていうからもつと裏技的なものを想像してたのだが、これでは拍子抜けだ。別にわざわざ教えてもらう事では無いと思った。

「それだけ？」

庄平はあからさまに期待はずれだという表情をしている。

「単純な戦法に聞こえるかもしれないけど、すごく大事なことだ。この戦い方を意識しているのとしていないのでは、生存率がまるつきり違う。僕は身をもって経験したんだぞ」

二人が微妙な反応をしたことで、若干不機嫌そうに志郎は説明を続ける。

「慣れてくれば、応用として枝や蔓や石で作った罠にはめるといった方法もあるし、全員が悪魔の周囲を囲むようにして、居場所を隠しながら石やら包丁やらを投げて攻撃することもできる。基本的にあいつ等知能は猿並みだから、それだけで十分な効果が得られるんだ」

言いたいことは理解しやすく、確かに今までよりも生存率は上がる可能性がある。しかしやはり悟らは何か物足りなさを感じていた。

勝手に楽勝法を教えてもらえろと思ひ込んでた自分達が悪いといえ
ばそこまでだが。

悟と庄平は相変わらず微妙な表情を続けたが、友だけは二人と違
う反応を見せた。

「博士、お話ありがとうございます。確かにこの戦法を知っていると知
っていないとはまるっきり違いますね。おかげでいい情報を
得れました」

「おお、分かってくれるかい？ 友君！ さすが頭の良い子は違う
ねえ」

自分の意見に賛同してくれる人間がいたことがよほど嬉しいのか、
志郎は満面の笑みを浮かべた。

「あ、一つ大切なことを言い忘れた。分かっていると思うけど、こ
れらの戦法は最低三人はいないと出来ないからね。間違っても一人
で悪魔と戦わないこと。もし、仕方が無く一人になってしまったと
きはすぐに隠れるように。最初に隠れることが重要って言ったのに
は、そういう意味もふくまれているんだ」

「分かりました」

「友、ちよつと大げさじゃねえ？」

庄平は完全に同学年の友人と話すような口ぶりで聞いた。

友は庄平を見てため息をつく、何で分からないんだ？ といっ
た表情をした。

「お前ら……本当にこの話の重要性がわかっていないのか？」

「だから大げさだって」

庄平は先ほどと変わらない調子で答える。

「まあいい。後でよく考えるんだな」

友は二度目の溜息をつく、視線を庄平からずらした。

——友があそこまで言うなんて……俺、何か気づいて無いこと
もあるのか……？

悟は一瞬疑問に感じつつも、深くは考えなかった。

「あ、そういえばさっき何を持ってきたんですか？」

確か悟が起きたとき友と志郎は何かを集めていたはずだ。一体何だったのだろうか。その問いには志郎ではなく友が答えた。

「ただの枝や鋭い石とかだ。それで武器を作るらしい」

悟が疑問を感じているのを察したらしく、志郎は説明を始めた。

「有名な話だから知っていると思うが、日本刀は三人以上斬ることができない。刃に脂肪がついて斬れなくなるからだ。」

「俺知らなっかたけど？」

庄平が小声で言ったが、志郎はそれを聞こえない振りやり過ぎる。

「包丁も同じだ。使い続けられずに切れ味を失う」

「でも、洗えば大丈夫じゃないですか？ 俺の包丁は昨日洗淨したから切れ味抜群ですよ」

「いつでも洗えるとは限らないだろ。洗淨には大量の水がいるし、そう都合よく川があるわけでもない。攻撃力が高い物はあるだけ温存しておくべきだよ」

——なるほど、そのために枝や石の武器を作るのか。

悟はやつと納得した。

「分かったかい？ じゃあ、さっそく作ってみようか」

頑強な木の枝は先を削るか鋭い石を付けて槍にしたり、太い石を付けてハンマーにした。思ったよりも丈夫で心強い出来だ。蔓からはロープや太い石と組み合わせた投げハンマーを作った。砲丸投げのように使うのか、それとも鎖鎌みたいに使うのか、何にしても庄平に適していそうな武器だ。

庄平は高校時代野球部のピッチャーだった。

甲子園に行った有名校というわけでは無いが、それなりに強豪な高校には違いない。だから今この場にいるメンバーの仲では一番体力もあるし、力も強い。刃物よりはこうした打撃系の凶器が合っているのだ。

ある程度時間が経ったころだろうか。三人が武器を作ったり、志郎から罾の仕掛け方を聞いていると、突然銃声が川を挟んだ森の向こう側に響いた。

「銃声!？」

いち早く友が反応する。

「向こうに俺達の他に誰がいるのか？」

「恐らく五郎さんだな、樹海の観察公務員だよ。熊に襲われた時などのために猟銃を所持しているんだ」

「知り合いなんですか？」

志郎が五郎を知っているように言っただけ、不思議に思っただけは聞いてみた。

「昨日の早朝、鹿の悪魔に追われているところを僕が助けたんだ。その後すぐに別れたんだけど、良かった。まだ無事に生き延びてたみたいだね」

「昨日博士が言ってたイミューニティーの人間ってことは無いんですか？」

友が森の反対側を見ながら言った。

「イミューニティーじゃない。あいつらは銃を持たないからね。日本国内でそう簡単に持ち歩けるもんじゃないし、所持できたとしても使えば人目を引く。そんな危険はしないさ」

「樹海内という限定された場所でも銃を使わないんですか？」

「そうだよ。彼ら是对悪魔訓練を受けている。銃無しで戦える用だね。それに、銃は確かに強いけど色々と不便な面も多い。弾がなくなればもう役に立たないし、銃があればそれに頼ってしまう。何匹も悪魔がいるような場所ではすぐに弾を使い切るから、かえって邪魔なもんだよ。いくら政府の人間だからって、そうたくさん銃弾を国から隠して持ち込むことなんて出来ないんだからね」

「そうなんですか。ということは、川の向こうの森にいるのはイミユニティーでは無いってことになりますね」

友は博士の説明をあつさりと理解した。

「で、どうするんすか？ 銃声がしたってことは悪魔に襲われているってことすよね。助けにいく？」

行くか行かないかを聞いているというより、庄平は助けに行きたそうに見えた。佐々木のことで一匹でも多くの悪魔を殺したいのかもしれない。

「五郎さんは銃を持っているんだろ、ならば別に行かなくてもいいんじゃないか。弾切れになるとはいえ、威力的には文句ないものだし」

友は川から離れることに反対らしく、あまり乗り気で無い。

「いや、行こう。悪魔は出来るだけ今のうちに倒せるなら倒した方がいい」

「これ以上増やさないようにする為ですか？」

志郎の言葉に、悟が聞き返す。

「そうか、これは言ってなかったな。実はね、悪魔は進化するんだよ」

「進化？」

「そう。やつらはイグマを他人の細胞に組み込むことで増殖し、身体を乗っ取るって昨日教えたよね。でもそれで終わりじゃなくて、体内のイグマ細胞の比率が元々の寄生媒体の細胞数を超えると、さらに構造変化を起こして、より強力な化け物になるんだ。これは寄生されてから時間が経てば経つほど起こり易くなる。いくつか段階を得て、最終的にはこちらがいかにも多数でも刃が立たないほどになる。そうなる前に倒しておくのがいいんだ」

「あれ以上やばくなるって……！」

悟は息をのんだ。

初期段階の悪魔一体にあれほどでござったのに、最終状態の悪魔はいったいどんな怪物だというのだろうか。

「さあ、時間が無い。悟くん、友君、庄平くん。悪魔が進化する前にさっさと倒そう。心配ないよ。さっき教えた戦法を使えばうまくいく」

志郎の妙に自身ありげな態度を見ても、悟は元気が出なかった。

それからあまり時間も経たない間に、悟、友、庄平、志郎の四人は自作の武器を構え、銃声がした所へとやってきた。

そこは高低が激しく他の場所よりも一段と周囲の木が密集した、まさに隠れるのに適した場所だった。大きな岩や土の壁が歩行を邪魔するため、まるで蛇のように左右に動きながら進まざる負えず、四人の進行を遅らせる。

この場所に入って十分ほど歩いたころだろうか。庄平が前方に何かを見つけた。初めは動物の死体か悪魔の死体かと思ったが、近づいていくとそれが自分達が探していた五郎であることが分かった。

「五郎さん!？」

志郎は五郎の意外な姿に驚いた。銃を持っていたはずの五郎が何故か死んだように倒れていたからだ。

悟がしゃがんで様子をみる。

「これは——……」

すると五郎の右肩には撃たれたような銃創があった。肩を取り囲むように血が広がっている。

「あの銃声は五郎さんが撃たれた音だったのか。でも一体誰に?」

「まだ脈はある」

いつの間にか横にかがんでいた友が言った。

「悟、お前のリュックの中に包帯が入ってたよな。出してくれ」
自分のリュックから消毒液を出しながら、庄平が指示を出す。

「ん？ あ、ああ」

悟は慌てて包帯を引つ張りだした。庄平に渡そうとしたが、後ろから誰かに奪い取られる。志郎だ。

「僕が手当てしよう。この中では多分一番生物の身体に詳しいからね」

そういつと、志郎はすぐに五郎の手当てを始めた。

五郎は治療の間も意識が戻らず四人をヒヤヒヤさせたが、20分くらい経った頃に突然目を覚ました。

「……うう……？」

「五郎さん。良かった気がついた見たいですね」

「あんたは……昨日の……何とか博士？」

「志郎です。ところで一体どうしたんです？ 銃で撃たれていたみたいですが」

五郎はまだ視線が定まらず寝ぼけ眼だったが、銃という単語を聞いて意識をはつきりさせた。

「くそ！ やられた！ あのガキども俺の銃を持って行きやがった」

「ガキども？」

庄平がすかさず聞き返す。

「ん——誰だお前ら？」

ついさきほど若者に襲われたばかりの五郎は庄平、悟、友に思わず冷たい目を向けた。

「僕達は連門大学の学生です。樹海キャンプに来ていたんですが、化け物に追われて逃げているうちに博士と一緒に行動するようになりました」

「連門大学……お前ら、さっきのガキどもの仲間か？」

「だからガキって何のことですか？」

庄平が同じ言葉を繰り返す。

「俺を撃って、銃を持ち逃げした奴らのことだ！」

庄平に憎しみを込めて当たり付ける五郎を冷やかに見つめながら、悟は考えた。

——ということ、肩の銃創は連門大学の学生にやられたらしいな。俺たち以外にもまだ生きている人間がいたのか。

「ちよっ——五郎さん、落ち着いてください。彼らは昨夜からずっと僕と一緒にいました。そんな人間知るわけがありませんよ」

志郎は五郎の気を落ち着かせようと必死に説得する。しかし、なおも睨みつけてくる視線に悟ら三人は少したじろいだ。

その様子を見て、さすがに五郎も冷静になってきたのだろう。ふいつと、急に目を逸らすと謝罪をした。

「……悪い、少し過敏になっていた。気を悪くしたら謝る」

「いえ、お気持ちは分かります。逆の立場だったら僕も似たような態度を取りますよ」

友は当たり外れの無い受け答えをしつつ、これ以上揉めなくなつたので上手く話題を逸らしにかかった。

「ところで、あなたを襲った人間達がどっちの方向に逃げたか分かりますか？」

「撃たれてすぐに気を失ったから、確かだとはいえないが……向このほうに向かったと思う」

五郎の指は一キロメートルほど後方にある川と、平行な向きで銀野町の方角を指していた。

「まずいな。そいつらも銀野町の方に進んでいる。鉢合わせして撃たれるなんてご免だ」

悟は五郎の傷を見ながら呟いた。

それを聞いた庄平が尋ねてくる。

「悟、どうする？ 川に戻って進むか？ それともこのままイカれた同校生と同じ道を進む？」

「庄平はどっちがいいと思う？」

「俺は川に戻るほうだな。森の中じゃ真っ直ぐに進めなくて迷い易いし、時間もかかる。川から行けばクソ学生らよりも早く町に着けるんじゃない？」

「やっぱりそうだな」

悟は何かを悩んでいるように押し黙った。腕を組んでボーっと突っ立っている。

「何だよ。なんかあまり乗る気じゃなさそうだな」

「いやさ、実はさつきから川の方に悪魔がいるような気がするんだ。何となくだけど……」

「もしかして、また例の勘か？」

「うん。そんなとこ」

「何だ、その勘って？」

悟の感覚を知らない友が訝しげに聞いてきた。

「信じてくれないかもしれないけど、俺昔から危険が近づくのが分かるんだ。第六感とでも言うのかな」

庄平が悟の言葉を補足する。

「悟の言っていることは本当だぜ。そのおかげで俺達悪魔だらけの浮世壮から脱出できたんだからな」

「で、その感覚が今川に悪魔がいると感じているのか？ 悪いが冗談にしか聞こえないぞ」

友は細い目をさらに狭めた。どう見ても信じていない。

「川から行くべきだよ。エスパー君には悪いがな」

友はこんな時に夢見がちな学生の妄想なんかにつき合いたく無いという気持ちがあった。自然に皮肉を言ってしまう。

「そんな言い方は無いだろ」

悟は友の態度に少しイラつときた。一瞬その場の雰囲気が悪くなる。だが、第三者の言葉がその雰囲気壊した。

「へえー、驚いたな！ 悟君、君は超感覚者だったのか」

志郎の突然の聞きなれない言葉に誰もが耳を向けた。

「超感覚者？ 何のことですか」

いきなり知らない言葉で自分を表現された悟は戸惑う。

「通常の人の数十倍の感覚器官を持っている人間のことだよ。ほら、聞いたこと無いかな、時計を見なくても寸分の狂いもなく時間がわかる人とか、音を比べなくても理解できる絶対音感を持つ人とか……」

…」

「俺もその仲間ってことですか？」

「そうだろうね。君の場合はさしずめ絶対危機回避感とでもいうのかな。確か、蜘蛛の一部にも同じような能力をもっている種がいるよ」

「博士、悟の妄想を信じるんですか！？」

友が信じられないといった顔で志郎に食ってかかる。

「妄想なんかじゃないよ。不思議に思っていたんだ。どうやって悪魔からここまで生き延びれたのかね。超感覚者なら納得がいく」

志郎があまりにはつきりと悟の能力を認めたので、友は何も言い返せなくなった。

五郎は冷めた目で志郎らを見ている。

「そんなに信じられないなら、友君が一人で川の方まで行って見るといい。嘘かどうか分かるはずだ」

「……」もういいですよ、分かりました。まだ半信半疑ですけど、川から行くのはやめましょう」

何か諦めたように言う友。

「おい、俺はどうなるんだ？」

ぶしつけに五郎が聞いてきた。

「どうって、一緒に行かないんっすか？」

庄平は先ほどの五郎の態度を根に持っているのか、やや面倒くさそうに聞いた。

「血を流しすぎたみたいだ。足に力が入らなくて立てやしねえ」

——めんどいオッサンだな。

庄平は心の中で舌打ちした。

「おぶって行ける距離でもないしな。博士どうします？」

悟の問いに志郎は手を口に当てて考え込んだ。

「……仕様がなないね。五郎さんは体力が回復するまで僕が付いていよ。君たちは先に行ってくれ」

「ええ〜！？ 博士がいねーと心細いつすよ！」

思わず庄平が叫ぶ。

「このまま一人にすることは出来ないだろ。僕も心配だけど、二手に分かれるしかない」

「俺達も一緒に行動しますよ」

「いや悟くん、駄目だ。君たちは出来るだけ早くこの樹海から出るんだ。ここに留まればいずれ悪魔がやって来る」

「でも博士だつて——」

「僕はこういうことには慣れているから平気だよ。それに本音を言えばあまり大人数で歩きたくないんだ。多ければ多いほど悪魔に見つかりやすくなる」

ここで庄平が珍しく泣き言を言った。

「でも俺達だけって、怖いな」

「そうだろうね。本来ならばそんな危険な真似はさせたくないが……こんな事態だ。僕だつていつどこで死んでもおかしくない以上、君たちは僕を頼ってはいけない。自分の力で生き延びるんだ」

——例えまだ学生でも同じ大人の男として自力で生きろってことか。

確かに五郎の状態を見るとともに歩けそうじゃない。ほうつておけばすぐに悪魔に殺されてしまうだろう。悪魔に詳しい志郎と別れるのは三人にとっては痛い損失だったが、五郎を見殺しにもできないため、悟は仕方が無くその案に乗った。

どこから悪魔が飛び出すかも分からない樹海内において、軽快に歩き続ける男たちがいた。

福田、松本、宮元、大森の三人だ。

彼らは五郎から奪った銃を所持していることで、怖いもの無しになった気でいた。

「さっきの女の子惜しかったな。結構可愛かったのに。何か前に名前聞いた気がすんな――……小宮ちゃんだっけ？」

「大森のヘマだよ。あの女……大学でおまえにナンパされたことがあったのか、顔を見た瞬間逃げ出しやがった」

福田が心底残念そうに言う。

「それにしても、あいつよくここまで一人で生きてたよな。俺達だけかと思ってたのに。案外もつと生き残ってる奴らいるんじゃない？」

「よし、じゃ先に女見つけたら見つけた奴の物な」

宮元と松本が下品な会話を楽しむ。

「あ、さっきの女だけは駄目だぜ、あれ俺のお気に入りだから」

「うわー大森キメー！」

四人は声が響くのに構わず、さつきからずっとこの調子で歩いている。獲物を求める怪物が彼らに気がつかない訳が無かった。

今、彼らの後方数十メートル後ろから数匹の生物が静かに近づいているのだが、馬鹿笑いを続ける四人にはその気配が分からない。かなり距離を縮められたころになって、やっと宮元が後ろに枝を踏むパッキツという音を聞いた。

「！？」

急いで振り返ると、目の前には三匹の猪が姿を現していた。森の中なのだ。猪がいるのは別におかしくない。だが、その猪は普通の猪ではなかった。

「なあ、こいつら何か変じゃねえか？」

血走りギョロリと飛び出した紅い目。血管が全身に浮き出た灰色の皮膚。その外見を見て大森が異常に気づく。

雑食の猪が食料目的で人間を襲うことなど殆どないのだが、この三匹はどう見ても自分たちを獲物と見ているようだ。

「おい、やべーよ！ この豚ども、もしかして……」

福田の言葉を待つことなく、猪悪魔たちは四人に突撃した。

比較的猪悪魔に近い距離に居た大森、松本、宮元は、ほぼ一対一で追われる羽目になるも、福田だけはうまく猪悪魔のターゲットから外れ、一人違う方向に逃げた。それを見た松本が叫ぶ。

「ふくうだああー、テメエー一人で逃げる気か！」

さつきまで余裕たつぷりで歩いていたのが嘘であるかの様に、顔を青くして三人は必死に走った。肝心の銃は福田が持って逃げたため、誰一人猪悪魔に対抗できない。

「うわああああ、来るなああ！ 来るんじゃないー！」

いくら叫んでも悪魔には無意味だ。舌なめずりするように口を動かしながら三人を追いかける。

「っ勘弁しろよっ！」

宮元が正面を見ると、さらに間の悪いことに鹿の悪魔が二匹、声を聞きつけたのだろうか真つ直ぐこちらに向かっていた。自然と悪魔に囲まれる形になり、三人の足も止まる。もはや絶体絶命だった。一本の細い木を背に、小さな子供のように震えくっつく宮元、大森、松本。

悪魔達はどんどん間を詰めてくる。

ジリッ、ジリッ、ジリッ……ジリッ……

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

宮元が叫ぶと同時に、猪悪魔の牙が彼の胸目掛けて突き出された。宮元は顔を隠すように腕を前に交差させたが、殆ど何の意味も無くその心臓を貫かれた。途端に口からは夥しい量の命の水が吐き出され、見る見る中に猪悪魔と宮元の全身は赤く染まっていく。

猪悪魔の頭に体に乗つけたまま後ろへ運ばれていく悪友を横目に、松本は鹿悪魔二匹の間を何とか抜けようと駆ける。

しかし、灰色の角が松本の両腕を左右から挟みこんだ。

「くそお、離せ！ ざけんじゃねえー！！」

松本がいくら暴れても角は離れない。何故ならばその角は松本の腕に刺さっていたからだ。もがけばもがくほど腕に深く食い込んでいく。

興奮している所為か松本は痛みを感じていないらしく、なおも激しく体を振るわせた。

一方、大森は宮元が襲われた際に空いた隙間から見事に包囲を抜けたのだが、そう上手くはいかず、二匹の猪悪魔に背後から突き飛ばされた。

「ぐあつつ、いつてえ！」

正面の大木に頭を強く打ちつけ倒れる大森。その額からは血が流れ出していた。三万円はしただろう高そうな服は泥だらけで見るも無残な状態になっている。

獲物が動きを止めたのを確認すると、ゆっくりと猪悪魔達は接近し始めた。

「……うう……う……」

意識が朦朧とし、僅かに動くだけの大森を一匹の猪悪魔が牙で突つつく。まるで獲物が弱っているのを確認しているようだ。

霞む視界の中で大森は松本のもものと思わしき悲鳴をきいた。

バキバキ、ブチブチツと何かか引き裂かれる音と共に視界の隅が赤一色で多い尽くされる。

——ああ、俺ももうすぐあなるのか。何だよ、これまで好き勝手やってきたけど、どうせ勉強してもこんな最後なら遊び呆けて正解だったじゃん。

大森は涙を流しながら不気味に笑った。

横たわる大森に向かって猪悪魔は牙をむき出しにし、突撃の用意をする。右の前足を何度も地面に擦り付け、今にも飛び掛つてきそうだ。

「グウウギイイイイアア！！」

その時、突然それほど遠くない所からこの世の物とは思えない鳴き声が聞こえた。

地獄の底から響いて来るかのようなその恐ろしい声に周囲一体が支配される。

大森は死を覚悟していたにも関わらず、全身の血が引くのを感じ

た。

「何だよっ、この声！？ 体が寒くなる。ヤバすぎんだろ！」

その声を聞いた瞬間、周囲の悪魔たちは一斉にその場から逃げ出した。もちろん大森を襲つていや猪もだ。

瞬く間に大森の周りからあらゆる生き物が姿を消す。一瞬にして辺りは別世界のように静かになった。

悟らも離れた場所でその声を聞いていた。

「何だ、この声……！」

「怖えー……」

「悪魔じゃないみたいだ」

悟と庄平が怯えるのに対し、冷静に分析する友。だが、さすがにその表情は暗い。

「友、もしかしてお前が見た大きな狼じゃないのか？」

悟は昨日の友らの発言を思い出した。

「そうあつては欲しくないな。俺達がああ狼を避けるために銀野町へ向かつている意味が無くなる」

「そうだな。それに巨狼が俺達の先にいるなら、一度俺たちを抜いたつて事になる。それ程大きな化け物なら例え離れたところを通つても振動で気づかない訳は無いし、そんな気配は無かった。また別の怪物がいるのかな？」

「可能性は高いが、あまり考えたくない」

二人はそこで会話を止め、黙つて歩く。今はとにかく前に進むしか行き先が無いからだ。

大して歩かない中に悟は前方から悪魔の気配を感じ取った。

「つ 悪魔か！？ 1……2、3、4……5匹もっ！？ 庄平、友、隠れる！ 悪魔が来る」

「五匹だって！？ くそ、ふざけんなよ！」

「信用していいんだよな。リーダー人間！」

庄平と友はそれぞれ反応し、すぐに近くの木の上に乗った。悟もそれに続く。大量の緑の葉が上手く姿を隠してくれた。

「博士は出来るだけ殺せって言ってたけど、さすがに五匹相手はきついだろ」

「でも庄平。ここで殺さないとあいつら博士と五郎さんの所に行っちゃうぞ。博士一人で五郎さんを守りながら五匹の悪魔と戦う何て無理だろ。俺達で倒さないと……」

「悟は戦う気なのか」

友が確認するかのように問う。

「ああ、やるよ。こんなところで逃げてたらこれから先、生きていけないと思う」

「……分かった。怖いが俺も協力するよ」

「ありがとう友」

悟と友は頷き合った。

「おい、俺だけ仲間外れにするな。俺も戦うよ。佐々木の敵を討って討って討ちまくってやる」

「言いたくないが、大丈夫か？」

これまで庄平はいいとこがほとんど無い。心配になった友は思わず聞いてしまった。

「今度はもう二人の足を引っ張らない。約束する」

「信じていいんだな」

「ああ」

「分かった。絶対に全員で生きてこの地獄から抜け出そう」

「つし、来たぞ！」

結束を固める庄平と友を他所に、悟が一匹の猪悪魔を見つけて言った。

その猪悪魔はまるで何かから逃げて来たかのように、酷く息切れしているように見える。元々猪は息が荒いといえはそれまでだが。「ぶとうあ？ 豚も悪魔になるのか？」

庄平は意外そうに、まじまじと遠くの悪魔を見ている。

「猪だ。で、どうする？ 博士の戦法だと誰かが劣りになる必要があるが」

「俺が行くよ。俺は超感覚がある。この中では一番、囀をしても生き残れる可能性が高いはずだ」

友のセリフにすぐに悟が応じた。

「気をつけるよ」

「ああ」

言い終わる前に、悟は木の上から地面に降り立った。ドスンという音が土に鳴る。

しかし猪悪魔はまだこちらに気づいていない。悟は体勢を整えると、朝に作った石と枝製の槍を背中に括り付けてある蔓の入れ物から取り出した。上を見ると、庄平と友が同じようにそれぞれ自作の武器を構えている。

「あまり時間をかければすぐに他の四匹もここに集まってくる。一瞬でけりをつけないと駄目だな」

悟は覚悟を決め、大きく息を吸い込んだ。

「おーい！ こっちだー！！」

木々の間をすり抜けるように悟の声が広く拡散する。

「グビユツ？」

猪悪魔は悟に気がつくのと、右足を何度も地面に擦りつけ始めた。ドクン、ドクンと大きく波打つ心臓の音を感じながら、悟は包丁を構えた。

猪悪魔は勢い良く地面を蹴ると、悟めがけて突撃してきた。

「あと五、四、三、二メートル……——今だ！」

悟はタイミングを見計らって横に避けた。

猪悪魔は急に獲物の姿を見失い、その場に止まる。だが直ぐに横

に転がった悟を見つけ、再び突撃しようとした。その瞬間、上から二本の槍に頭を貫かれる――筈だった。

「速い！」

誤算だったのは猪悪魔のその速度だ。猪悪魔は悟が避けた後、木の下で止まることなくそのまま十メートルほど先まで進んだ。どうやら勢いを止め切れなかったらしい。

庄平と友は槍を突き出す間も無く、何も出来なかった。

「まずい、予定外だ。悟がやられる！」

友は計算とは違う結果に苦汗を掻いた。

唯一の幸運はまだ二人が見つかったていないことだろう。隠れていることがバレていなければまだチャンスはある。

しかし、問題は悟だった。

今からどこかに隠れることは不可能に近く、肝心の作戦にも失敗した以上逃げるしかない。どう考えても大ピンチだ。最悪悟はパニックを起こして自滅する可能性もある。

友と庄平は絶望したが、悟は冷静だった。

――まだチャンスはある……！

悟は起き上がると、ちょうど二人が隠れている木の正面に猪悪魔と向かい合う形で立った。

「何する気だよ！」

庄平が小声で聞く。

「気づかれる、黙って見てろ！」

悟は普段あまり人が聞くことの無い鋭い声で怒鳴った。

前を向くと、既に猪悪魔は二度目の突撃に入っていた。悟は構えた槍をまっすぐに投げつける。槍は相手のこめかみを貫いたが、猪悪魔は変わらず突っ込んでくる。槍の一撃に怒ったのか、さっきよりも勢いは強い。

「グウボオオオ！」

牙が自分の身体に進入しようとした瞬間、悟は飛び上がった。猪悪魔の額を踏みつけ、その背後に抜ける。猪悪魔はものの見事に自

ら大木へ頭を打ちつけた。

激しい音が鳴る。まるで大地震の際中であるかのように大きく揺れる大木。庄平と友は木から落ちないように必死にしがみついた。そのせいで二人とも持っていた槍を下に落としてしまう。

「はあ、はあ、はあ——……」

だがその槍は地面に突き刺さる前に悟に掴み取られると、一目散に猪悪魔の背に食い込まれた。

「グギャアアアア!？」

「うああああ!」

力の限り悪魔の体内に槍を押し込む悟。槍はゆっくりだが確実に奥へ入っていく。

悟はさらに体重をかけようとしたが、急に猪悪魔が振り返ったためなぎ倒されてしまった。

「うわっ!？」

掴んでいた槍に引つ張られ尻もちをつく。手に持っていた槍も深く猪悪魔の肉に食い込んでいたため、抜けずに猪ごと離れていった。

悟が土の上に手を付きながら前を向くと、黒い影が見えた。猪悪魔が憎悪溢れる目つきでこちらを睨んでいたのだ。

「くそ……!」

猪悪魔は身を屈めると、牙を悟の下に潜り込ませて上に投げ上げた。六十二キロ、百七十六センチの体が空高く持ち上がる。

身動きできないその獲物の中心目掛けて、二本の鋭い牙が追撃させられた。

悟は視界の隅にその映像を捕らえると、空中で体を反転させながら足で牙を押し、攻撃をギリギリでかわした。

猪悪魔の牙が空を斬る。

蹴った勢いで滑るように悪魔から離れると、悟は包丁を一本引き抜き猪悪魔と対峙した。出来れば包丁は使いたく無かったが、仕方が無い。

すぐに荒い息使いと共に迫ってくる灰色の塊。

「待て、豚野郎！」

猪悪魔が完全に自分に背を向けた瞬間、庄平は石とロープで作った例の遠距離様ハンマーを、あらん限りの力でその後頭部に叩き付けた。「グシャッ」という耳障りな音が庄平の耳に侵入する。

「グビヤアアアア！」

あまりの激痛に猪悪魔は一瞬動きを止めた。

悟はそれを見逃さなかった。右手を真っ直ぐに悪魔の眉間目掛け突き出す。昨夜研いだばかりの包丁は綺麗にその体内に吸い込まれていった。

もう一体の猪悪魔はそれ程苦勞せずすんだ。勝負はすぐに終わったからだ。

先ほどと同様に悟が囷となり、悪魔を引き付け木に体当たりさせる。その隙に木の左右の長草に潜んでいた友と庄平が止めを刺した。猪悪魔の最後を看取ると、友は一息つくかのように息を吐き出す。「ふう、今度は楽に終わったな」

「ああ、攻略法が分かると結構楽だな。まあ、悟だけは変わらず大変だろうけど」

庄平は軽く笑ったが、悟はそれには構わず気になっていたことを思い出した。

「友、あんたが朝に言ってたことって、このことだったんだな」

「何のことだ？」

「博士が戦い方を教えてくれたとき、言ってただろ。重要な情報だった」

「そうだな」

「あの時は気づかなかったけど、あれって本当に重要な情報だったよ」

友は黙って悟を見ている。

「戦い方を知っているだけで『逃げる気』が無くなる。どうすれば

倒せるか分かっているんだからな。もし戦い方を知らなかったら、何もできずにただ逃げるだけだった」

真剣そうに悟は言った。

「この情報、戦法を知っているか知らないかで、こっちの心構えがまるつきり違う。ホント、博士に会ってよかったよ」

「後で博士に何か恩返ししないとな」

この樹海に入ってから珍しく友は笑った。

お互いの結束を強くした三人だったが、百メートルも進まない中に二匹の鹿悪魔に遭遇した。

すぐに木の影に隠れて様子を見る。

「どうする？ 猪悪魔と同じ方法で倒せっかな」

庄平が気楽そうに言った。

それに友が答える。

「猪よりは勢いも力も弱いと思うが……あの角は厄介そうだな。牙と違って正面を向いているから、命中率はかなり高そうだ」

「木にぶつけさせても動きを止められそうにないしな」

悟が先ほどの戦いを思い出して呟く。

「そうだ、転ばすっていうのはどうだ？ 木と木の間に蔓かロープを引いて罠を作るんだ」

「だけど友、そんなのに引つかかるのか？」

友の案に悟は多少の不安を感じた。

「昔の中国の戦争では、実際に相手の軍馬をそうして転ばしたことがあるんだ。上手くいくさ」

「前例があれば上手くいくもんでも無いと思うけど」

だが、そんな悟の不安とは反対に、その作戦は見事に成功した。

ロープを張った所に悟が鹿悪魔をおびき寄せると、あっさり二匹同時に頭から転倒した。角を立てて攻撃されれば確かに脅威だが、転んでしまえばただの鹿と変わらない。猪悪魔ほどの頑丈さもない二体の悪魔は、あっという間に庄平と友に止めを刺され、その生命を失った。

「どうだ。もう近くに悪魔はいないか？」

庄平は注意深く森を見渡しながら悟に聞く。

「ああ、居ないみたいだ」

「よし、やっとこれで一息つけるぜ。飯でも食うか？」

食い意地が張っている庄平を呆れた調子で見る友。

「おい、まだ十時くらいだろ。早すぎる」

「硬いことゆうなよ」友。誰か見てる訳でも無いし」

「そういう問題じゃないだろ。少ない食料をお前のわがままで無駄にする気か？」

今食料を食べると、昼ごろには再び食欲が復活している可能性が高い。それを計算して友はこう言った。

「わかったよ。まったく友は真面目だぜ」

庄平はまだ不満だったものの、一応友に従った。

< 第四章 > ” 三本腕の怪物 ”

< 第四章 > ” 三本腕の怪物 ”
デモ「トロン」

ザッ、ザッ、ザッ、土を踏み仕切る音が聞こえる。男が歩くたびにその音は実に単調に、機械的に響く。

樹海の真っ只中だと言いつのに、何の迷いも恐怖も感じさせないその歩行は、まるで男の存在そのものを示しているかのようだ。

綺麗で緩やかな長い癖毛。鷹のように鋭い双眼。警察の特殊部隊服とカジュアルなジャケットを足して二で割ったような服。それがこの男の姿だった。深夜の空のように真っ黒なこの色は、その中身を覗かれることを拒否しているようにも見える。

無理に言えば私服で通るかもしれないが、この樹海内では誰もそんなこと信じないだろう。今この場所でこんな格好をしていれば、どう考えても一般人には見えない。

「バシャッ」男の足が水に触れた。どうやら川に出たらしい。

急に現れた男に驚いたのか、川の反対側にいる人間は啞然とした目つきでこっちを見ている。

男はその人間を確認すると、足が水浸しになるのも構わずに川を渡った。

対岸で待っていた人間、高橋志郎は男が川から上がったのを確認すると、すぐに声をかけた。

「黒服……まさか君たちまで来ていたとはね」

黒服の男は博士の言葉に笑顔で答える。

「イグマが発生したところに僕たちが現れるのは、当たり前ではないですか博士」

「……そうだな。で、今回はどちらの仕事で来てるんだい？ イミ

ユニティー？ それとも他の方かな？」

「どちらだと思えますか？」

男の顔は相変わらず笑顔だが、見た者に冷たい印象を与える雰囲気を持つている。

「あのデイエス・イレが新たに出来たばかりのブラック・ドメインをこんなに早く確認できるとは思えない。イミユニティーだね」

「さすが博士。聡明だ、正解ですよ。僕はイミユニティーの依頼でここに來ています」

「僕に何の用だ」

志郎は警戒した様子で男に質問した。

「イミユニティーから博士をどうしろとは特に何も言われていません。僕の仕事は別にありますし。ただ、僕が個人的に博士にしてもraithたいことがあるんです」

「君が僕に？ 何をしろって言うんだ？」

「イミユニティーはこの樹海ブラックドメインを独り占めする気なんです、そうすると僕ら黒服はこのイグマや派生生物を手に入れにくくなってしまふんです」

志郎は黙って聞いている。

「もちろん仕事の報酬としていくらかのサンプルは貰えますが、あくまで一部に過ぎません。黒服の仕事上デイエス・イレにもそのデータが渡る可能性もありますしね」

志郎は男が何を言いたいのかわかった。

「僕にイミユニティーからデータや研究体を盗めと？」

「そうです。イミユニティーの依頼で來ている僕には信頼関係上できないことでも、博士なら可能です。イミユニティーも博士にして欲しいことがあるようですし」

「して欲しいこと……？」

「まあ、それについては彼らから直接聞いてください。僕の話はこれで終わりです」

「君たち黒服に協力したとして、そっちは僕に何をしてくれるんだ

？」

志郎の問いに待つてましたとばかりに男は唇を歪ませた。初めてこれを見た人間ならほくそえんでいるように見えるかも知れないが、男を良く知っている人間ならそうは思わないだろう。何故ならば男には表情が無いからだ。普段この男の顔に張り付いている笑顔や感情を表す動きはすべて作り物だ。男は自分を偽るうちに表情をも偽れるようになった。今笑みを浮かばせているのも聞きたい言葉を聞いたからなどではなく、ここはこの表情が適当だろうと考えてのとだ。

本心では馬鹿にしているのかもしれないし、哀れんでいるのかもしれない。その本当の内容は誰にもわからない。男の心情を第三者が知ることは不可能に近いだろう。男はクスクスと笑うと返事をした。

「手伝いですよ。あなたの復讐のね。妹さんの敵を討ちたいんですよ？」

「なっ……！」

——何故それを知っている！？

「返事は後でも構いません。まだ時間はありますし。ゆっくり考えておいて下さい」

そういうと、黒服の男は樹海の中へと歩を進めた。

男の後ろ姿を見つめながら志郎はさっきの言葉を何度も反芻する。

『妹さんの敵を討ちたいんでしょう？』

頭には悪魔に食い殺された妹の無残な姿が浮かんた。必死に自分に助けを求めながら息絶えた姿が。

——絶対に敵を取ると誓ったんだ。協力してくれって言うのなら何だつて……

「あ、そうだ。忘れていました。そこで寝ている男は誰ですか？」

男は思い出したように振り向くと、志郎の背後で荒い息をつきながら岩に寄りかかっている五郎を指した。

「……この樹海の監視官だよ。銃で撃たれて怪我をしている」

「そうですか」

ビュウッ！

男が言葉を発すると同時に五郎の胸に何かが突き刺さった。

「はっ！？」

志郎が急いで振り向くと、五郎の心臓にはナイフが刺さっていた。

「な、何をするんだ！？」

驚愕の目で黒服の男を睨む志郎。だが男は変わらない笑顔で答えた。

「この男性が居たら、博士は銀野町に着くまでに一体何日かかると思っんです？ 時間はあまり無いんですよ。博士の性格だと見殺しにも出来なさそうだったので、僕が処理して差し上げました」

「処理だつて？」

「では、また後でお会いしましょう博士」

男はクスクスと笑いながらその場から消える。黒い服が森に同化し完全に姿が見えなくなるまで、志郎はその場を動かなかった。

「……本当の悪魔め」

思わず言葉が漏れる。

志郎は痙攣を繰り返している五郎にゆっくり目を向けた。まだ生きてはいるのだが、助ける方法が無い。そつと右手をナイフにかけると、それを引き抜いた。同時にブシャーッと血が噴出す。

——これで楽になるはずだ。分かっただけだが、こんなにあつさり人を殺せるなんて……僕は本当に協力していいのか？ 鬼を殺すために悪魔に心を売るのは正しいことなのか？ 誰か僕に教えてくれ。僕を導いてくれ……。

志郎は天に向かって問いかけた。

だが、誰もそれに答えない。再び妹の顔が頭に浮かぶ。

「アヤメ——……僕はどうすればいいんだ」

「誰か倒れてる！」

悟は叫んだ。数十メートル先に若者と思わしき人間が土に伏しているを見つけたのだ。距離が近づいてくると、その人間の顔がはっきり見えた。金髪で色黒の肌、鼻にはピアスといたいたいかにもヤンキーですと言わんばかりの姿をした青年だ。気のせいか粘り気のある液体が服のあちらこちらに付着している。

「大丈夫か？」

悟がいくら声をかけてもゆすつても青年は目を覚まさなかった。もしかして死んでるのかとも思われたが、脈はあったため気絶しているのだろう。

「俺に任せろ」

そう言うつと、庄平はいきなり青年の頬を引っぱったいた。

バシン、バシンと心地よいほどこいい響きがする。さすがに刺激が強かったのか、青年はすぐに目を覚ました。

「う……ん？」

「こんなところで寝てると風邪引くぜ」

「誰だ！ テメー……？」

「お前と同じ学生だよ。キャンプに来てた人間だろ？」

倒れていた青年は何も答えない。急に何かを思い出したのか、震え始めたからだ。

「どうした。何があった？」

友は八割方この青年が五郎から銃を奪った一味の仲間だと確信していたが、そのことには触れずにこの質問をした。

「あいつは、あの怪物は来てないか——？」

「怪物？」

「ここにはいないのか！？ どうなんだ！」

「いないよ。近くには何の生き物もない」

悟が答えた。青年はまだ安心できないのか、視線を定めず震え続

けている。

「怪物って何のことなんだ？」

再び友が聞く。

「でっかい化けもんのことだ。俺が悪魔に襲われていたら、急に現れて悪魔どもを大声でおい払いやがった」

——大声？ あのときの泣き声か？

友は前に聞いた鳴き声を思い出す。

「最初は声だけで見えなかったんだけどよ、段々こっちに近づいてきたと思ったらはつきり姿が見えたんだ」

「で、え〜と……ヤンキー君。それで何で無事だったんだ？ 襲われなかったのか？」

庄平の「ヤンキー」発言に青年は気分を悪くしたのか、眉間にしわを寄せながら答えた。

「大森だ。今度俺をヤンキーって言いやがったらぶつ殺すぞ！」

「びびって気絶してた奴に言われてもな」

「何だと、テメー!？」

青年改め大森が庄平に掴みかかろうとしたので、悟と友は止めるのに必死になった。

「落ち着け、今はケンカしてる場合じゃないだろ。それで化け物はどうなったんだ？」

友が話の続きを促す。

「——帰ったよ。俺の連れの死体をお持ち帰りしてな」

「帰ったってどっちに？」

悟は大森の言い回しを不思議に思いそう聞いた。

「知りてえならテメーで見えて来い。あの化けモンはそのすぐ先にある洞窟にいる」

大森は友と庄平の間を指で指した。

「何だ？ 気絶してたんじゃ無いのか。何でそいつの住処を知っている？」

後ろをチラッと見てから友が言った。

「気絶したのはここに戻ってきてからだ。俺は連れが生きてるの
気になって付いていったんだ」

「なるほど、そして仲間が食われる光景を見て逃げ出してきたっ
わけか」

それっきり大森は黙ってしまった。よほどショッキングな光景だ
ったのだろう。大量の冷たい汗をかき、何かを思い出さないように
両手で自分の体を抱きながら俯いている。

その状態を観察するように見ながら、友は考えを巡らせた。

——話から察すると、こいつの仲間は全滅したのか。ということ
は銃は今どこにあるんだ？ イミユニティーには不要なもので俺
達には強力な武器になる。できれば手に入れたかったんだが。

友は最初から五郎に銃を返す気は無かった。五郎に渡してもあの
傷では有効に活用できるとは思えない。今後のことも踏まえて自分
で使用するつもりだった。

——この付近を見ても銃らしき物は落ちていない。ということは、
話に出てきた怪物が死体ごと運んでいったのか。もしそうなら手に
入れるのは難しいな。巨狼のような怪物に再び会ったときに備えて
所持しておきたかったのに、手に入れるには同じような怪物のここ
ろへ行かなくてはならない。仕方が無い。銃は諦めるか……。

「どうする悟、銀野町に行くには別に関係無い方向だけど」

大森と友が黙り込んで急に静かになった場が嫌だったのか、庄平
が悟に話を振ってきた。

「どうするって、無視して行くに決まってるだろ。博士はできるだ
け倒せて言ってたけど、悪魔が逃げ出すほどの化け物なら俺達で
どうにかできるわけが無い」

「やっぱり？ だったらこんなとこさっさと離れようぜ。その化け
物がいつまたやってくるとも分からないんだ」

「ああ、そうだな。俺もここには長く居たくない」

悟、庄平、友、大森の四人は銀野町に向かって歩き出した。朝か
ら歩き続けたおかげで町まで大分近くに来ている。このまま行けば、

もう1時間もしない中に到着できるだろう。
だが、運命の女神はそれ程甘くなかった。

「んっ！？ 伏せろ！」

いきなり悟が叫んだ。同時に木の影から悪魔が飛び出し、四人の頭上を通過する。

庄平と友はすぐに悟の声に身を屈めたが、大森は反応し切れなかった。悪魔の体当たりをもらに受け、倒れる。

「ぐあああ！？」

そのまま悪魔は大森のど仏に食いつこうとしたものの、庄平の石斧に邪魔され一端飛びのいた。

悟はすぐに木の槍を背中から引つ張り出す。

——こんなに接近されるまで悪魔に気がつかなかったなんて！
やっぱりあいつが気になってたからか？

先ほど大森に近くには何の生物もないと言ったが、実は悟はずっと悪魔とは違う何かの気配を感じていた。大森を落ち着かせるために嘘をついたのだ。

「また学生の悪魔か。まいったな——女だ」

友が気分が悪そうに言った。

「いくら女の子でも、この場合は手を上げても平気だよな？」

庄平が友に合わせる。

「仕方ないだろ。もう死んでるのと変わらないんだし。こつちも命がかかってるんだ。不可抗力さ」

軽口を叩いてはいたものの、内心友は焦っていた。

悪魔との戦いでは罠にかけるというのが重要になる。そしてそのためにはこちらが見つかっていないことが最低条件だ。事実、真正面から戦った所為で佐々木と加納という二人の犠牲を出している。その記憶が友を一層不安にさせた。

「お、おい。ちょっとやばいかも」

「——っち」

悟と友も唇を噛み締めながら穴に入っていく。
陸上選手は別として、悪魔は普通の人間よりも早い。こまま逃げてもすぐに捕まるのは目に見えていた。

洞窟に隠れれば悪魔をやり過ごせるかもしれないのだが、問題はその中に何かがいることだった。

三人が洞窟に入っていったのを見て、大森は一瞬足を止める。だが後ろから甲高い泣き声が聞こえてきたため、目に涙を浮かべながら中に入った。

「ちくしょー！！」

夏だと言うのに洞窟の中はひたすら寒かった。実際に気温が低いということもあるが、周囲一体に覆いかぶさるように広がる何かの気配がそう感じさせるのだ。

「ここに居たくない」悟は先ほどから何度もそう思っていた。しかし友と庄平はどんどん先に進んでいく。いくら悪魔が追ってくるからとはいえ、怖くは無いのだろうか。悟は二人の背を見てそう思わざる負えなかった。

大森もそんな二人を驚愕の目で見ている。

「……仕方が無い。行こう」

「……ああ」

苦笑いしながら悟と大森は二人の後を急ぎ足で付いていく。前に進むほど視界が暗くなっていった。

洞窟の壁にはところどころに何かの生物の血が媚り付いており、まだ新しそうなものもある。きっと大森の仲間のものだろう。

「ギョウオオオオオオ！」

その時、いきなり後ろの方で悪魔の雄たけびが聞こえた。

「まさか、洞窟に入ってきたのか！？」

友が珍しく素っ頓狂な声をだした。

「どうすんだよ友、もし他に出入り口が無かったら俺達お終いじゃん！」

「とにかく逃げるしかない。走れ！」

庄平の頼るような言葉に冷たく答えると、友は再び全力疾走を開始した。

「くそお、ここに着てから走ってばつかじゃねえか！」

庄平が息も絶え絶えに文句を言った。

「見る、光だ！」

友の声に前を向くと、黄色の光が一瞬庄平の視界を奪った。前方からライトのようなものがこちらを照らしている。

二人はその先に何があるかも確認せずに光の下に身を投げ出した。
「何だ、ここは？」

目の前にある光景を見て思わず友の口から言葉が漏れる。

先ほどまでの暗く細長い道とは違い、開けた場所に二人はいた。遅れて到着した悟と大森もその光景を見る。大森は一度この場所を見ていたためそれ程驚かなかったが、悟は大いに驚いた。

「こんなに一杯……何でこんなところに？」

目の前にはこの広い空間を埋め尽くさんばかりの大量のゴミが無造作に置かれていた。シャベルにテレビ、車のタイヤまである。

「不法投棄か。恐らくどこぞの悪どい企業が無断で捨てていたんだろっ」

友が落ち着いて分析する。ただし、ゴミの中に混ざっていた肉片や骨についてはあえて何も口を出さなかった。

「そんなことよりどうすんだよ！俺達挟み撃ちに会ってるんだぜ！？」

大森が泣きそうな声で訴えた。

「落ち着けよヤンキー。挟み撃ちつて、今のところさっきの話に出てきた怪物はどこにもいねーじゃんか」

庄平は大森を落ち着かせようとそういったのだが、逆効果だったようだ。すぐに大森の反撃を受けた。

「誰がヤンキーだ！ それ以上ふざけたこと言いやがったらマジでぶつ殺すぞ！」

恐怖でテンパっている大森は完全に冷静さを失っていた。これ以上何かをいったら本気で人殺しをしそうだ。

大森が庄平に殴りかかる前に悟はこの場を収めようとしたが、急に異常な悪寒が全身を襲った。

「みんな黙れ、下に何かいるぞ！」

悟の声で目が覚めたのか、ゴミの山の下にいたモノは体を起こした。ゴゴゴゴゴゴという音とともに、ゴミが盛り上がっていく。

「うあつ！？ な、なんだあ？」

丁度そいつの真上に居た庄平が転がり落ちた。綺麗な回転を描きながら悟の横を通りすぎる。

大地震が起きたかのような揺れの後、ゴミがあつた位置には見たことも無い全長六メートルほどの生物が立っていた。

「何だ……こいつ？」

そのあまりの奇妙な姿に、悟は目を瞠った。

円形に並んだ鯨の様な歯を中心に木の根っこにも見える無数の触手と、同じ形だが触手よりも数倍大きい太い三本の腕が生えている。そのうちの二本は足のように大地を支えており、残りの一本は蠍の尻尾のごとく頭上に掲げられていた。

そして体の後ろ半分はワニのような大型の口がその大部分を占領している。

目が付いていないところから推測すれば、全身の触手と腕から生えている大量の根のような毛がアンテナのような役割を担っているようだ。

「キモい姿しやがって！」

庄平は石斧をすばやく構えた。悟は両手に包丁を、友は石槍を同時に構える。こんな状況じゃ武器の温存などとは言っていられない。これはそれぞれがそれぞれのもっとも使いやすい武器を手にしただけだ。

「ひついいいいい！！」

いきなり聞こえた悲鳴に悟が後ろを向くと、一人で逃げようとしていたらしい大森の前に自分たちを追っかけていた三体の悪魔がいた。

——…っ勘弁してくれ。この状況でさらに三対の悪魔を相手にしろっていうのか？ 神様はよほど俺たちに試練をあげたいらしいな。

この絶望的な状況に悟は自分たちの命がこれまでだと感じていたが、心とは裏腹にその口は冷静に指示を出していた。

「大森、こっちに来い。悪魔たちはこの三本腕が苦手なはずだ。こっちにいれば近寄れない」

悪魔を警戒しながら、引きずるような形で大森をこちらに連れてくる悟。

「どうすんだよ悟！ このままだと全員死んじゃうぜ！？」

庄平が何かいい案は無いのかといった雰囲気聞いてきたが、悟は何も答えることが出来ない。

——どうすればいい！？

来た道しか外に出る方法はないし、そのためには悪魔を殺す必要がある。だが三体の悪魔を正面から倒すなんて不可能に近いし、何より背を向ければこの三本腕が何をすることも分らない。

——本当に、一体どうすればいいんだ？

「悟」

苦悩する悟を友が呼んだ。

「覚悟を決めるぞ。悪魔への対抗策がこいつに効くかどうかは分からないが、やってみるしかない」

「でもどうやって戦う？ 隠れられる所もないんだぞ！？」

「隠れられる所ならあるさ」

友は見ると言わんばかりに顎で前を指した。だが前には三本腕がこちらを見て攻撃態勢を整ええいるだけだ。

「良く見ろ」

友が一点を指す。

その場所、三本腕の足元に目がいくと、悟はあることに気がついた。

「あれ、隠れられる？」

ついさつき三本腕が出て来た勢いで、このゴミ置き場のあちこちに三本腕の上に乗っかっていたゴミが散乱していた。振動で崩れたせいもあるのだろう。ちょっと前までは見えなかった冷蔵庫や何かの大型機械、壊れた車などが姿を見せていた。これならばちよくちよく隠れながら攻撃を繰り返せるかもしれない。

「友、これなら……いけるかもしれないな」

「だろ？」

二人が生き残れる可能性を見つけ喜んでいると、三本腕は甲高い雄たけびを上げて巨大な足、もとい拳を繰り返してきた。

「グウギアアアアアア！」

「うえああああっ！？」

その拳は見事に二人が居た場所を粉碎した。中高くはじき飛ぶゴミの数々。破壊力は悪魔の比ではない。直撃すれば即死するのは考えなくてもわかる。

「あ、あぶねええ！」

ぎりぎりで察知した悟のおかげで、二人は何とかその攻撃を避けることができた。三本腕を挟んで悟は庄平と一緒に左に、友は右にそれぞれ隠れる。トラックの残骸らしき物の後ろから顔だけを出し、友は悟にアイコンタクトを送った。

——そっちは二人だし、今度は俺が囷になる。

友が何を言いたいのか推測した悟は、同じくアイコンタクトでそれを止せと意思を伝達した。

しかし、友は制止を聞かず、目を逸らすと、行動に入ってしまった。三本腕に見つからないようにゴミの影に隠れながらその背後へと回ろうとしたのだ。

しかし三本腕は目で獲物を確認しているわけでは無い。全身の触

覚から空気の動きや臭い、音などを読み取って獲物を見つけるのだ。未知の怪物は友の動きに気づくと、すぐに頭上に掲げた第三の腕を振り下ろし、潰そうとした。

攻撃が来ることに全く気がつかなかった友は、丁度かくれていた大型の機械が盾になったおかげで生きながらえた。

機械と触手塗れの拳が激突した影響で、盛大な音が鳴り響く。金属の塊を殴ったのにも関わらず、三本腕の拳には何の損傷もないようだ。かわりに大型の機械は激しく凹み、友の横を数メートル飛んでいった。

「な、何て力だよ!？」

三本腕が休む間も無く再び拳を振り上げたため、友は走り続けるしかなくなった。隠れる暇もなく何度も強襲してくる巨大な拳。まるでモグラ叩きのようだ。

——くそつ、予定外だ! 隠れられない。いや、でも囧としては成功しているのか?

友が悟と庄平の方を向くと、なぜか彼らも走り回っていた。その様子を見て友が三本腕の全体を思い出す。

——そういえば、この怪物は背中に巨大な口があったな。

案の定、見ていると三本腕の背面口が執拗に二人を食い殺そうとしていた。お尻で悟と庄平を追いながら、頭上の長い腕では友を襲うという器用な動きだ。

「ごめん! 庄平、ミスった。この口のことを考えてなかった!」
背後から聞こえる歯が噛み合う”ガチンツ”という音を見無視し、悟が謝る。

「はあ、はあ、歯あ……ああ?」

庄平はそれどころじゃ無いらしく、まったく話を聞いていない。野球部のエースだった男が体力で帰宅部に敗北するという、不思議な現象が起きていた。

今の状態を考えて悟は焦る。

——これじゃ、すぐに疲れて怪物に殺される。どこかに安全な所

はないのか？

洞窟中に鋭く目を走らせていると、再び三本腕の足元に視線が止まった。

——あそこだ！ あそこなら頭上の腕も、背中の口も手を出せない。あそこに隠れよう！

庄平の方に顔を向け、目で考えを訴えた。庄平も目の合図なら理解出来たのか、頷いた。

次の背面口の攻撃が背中を掠め終わったと同時に、二人は三本腕の真下に滑り込む。攻撃直後だったため、すんなりと入れた。

「はあ、はあ、やつぱりここは安全地帯みたいだな」

「ぜえ、ぜえ——ふう……やつとまともに呼吸ができるぜ」

友を追っているため微妙に動き続ける三本腕の下からはみ出ないように、こそこそと歩きながら二人は話す。

「友は大丈夫か？」

悟が探しているといつの間にか友の姿は無かった。洞窟のどこにも見えない。

——まさか、食われたのか！？ 友にかぎってそんな……

「庄平、友が消えた！ 探してくれ」

三本腕に攻撃もせずに悟はそう言った。

しかし、なぜか庄平の返事はない。悟が横を向くと、三本腕の腹から生えた無数の根っこのような触手が庄平の首を絞めていた。

「うおっ！？」

慌てて包丁で根っこを斬るが、それは次から次へと庄平に絡み付いていく。

「くそ、離せ！」

悟がいくら斬りつけても触手は増えていくばかりだ。そればかりか今度は悟の腕にまでまとわり付いてきた。

触手を斬っていてもきりがないので、悟は全力で三本腕の腹に包丁を突き立ててみる。しかし傷が出来たものの、大したダメージは与えられていないらしい。三本腕は少しも身じろぎせずに、触手をい

っそう二人に巻きつけてきた。

——やばい、俺も動けなくなる！ 何とかしないと……

悟は暴れながら何度も包丁を腹に刺し続ける。だがやはりダメー
ジは無いようだ。次第に庄平の動きが鈍くなってきた。

「庄平——くそっ……！」

その時、悟の背負っている非常用リュックから何かが落ちた。

「ライター………？」

——確か、悪魔は火が苦手だったはず、こいつも同じだろうか？
悟はゴミの上に寝ているライターに手を伸ばすが、触手に絡みつかれているため届かない。距離にして三十センチといったところだ。
「んぐぐ………つくそ」

——あれが手に入れば助かるかも知れないのに、後少しだけの距離なのに……— 誰か、誰かいらないのか。友………！

「グオオオ！」

急に悪魔の声が聞こえた。

悟はライターに手を伸ばし続けながら、三本腕の腹と地面の隙間からわずかに周囲の様子を見た。

「あれは、大森？」

一人これまで壁際のどこかに隠れていたらしい大森が、苦しそうにゴミの上を転げ回っている。そしてその姿をみて入り口にいた三体の悪魔が退いていた。

—— 何で悪魔が大森にびびっているんだ？

一瞬ライターを取ること忘れ見ていると、大森はいきなり絶叫を上げながら入り口に駆け出した。

「お、おい。大森……？」

突然友の驚く声が聞こえた。気のせいか真上の方から発せられた気がする。

—— 真上？ 三本腕に乗っかっているのか？ まさかな……。

大森が接近すると、悪魔達の中に三本腕がいるのにも関わらず、入り口から離れた。誰もいなくなつた洞窟の入り口を大声を出しな

がら気が狂ったようにかけていく大森。

「おい、どこに行く！　おい！」

再び上方から友の声が聞こえる。その声に安心し、悟は再びライターに手を伸ばした。気にはなっているが、今は大森にかまっている場合じゃない。隣で庄平が死に掛けているのだ。

「友、何とかしてこいつをしゃがませてくれ！　庄平が死にそうなんだー！」

「何！？　分かった！」

悟と庄平が三本腕の真下に潜り込んだと同時に、友も三本腕の上に飛び乗っていた。第三の腕が振り下ろされた直後にそれに捕まり、三本腕の頭上に移動したのだ。

友は十秒感染予防のために、ハンカチを巻いた手で三本腕を掴みながら、左手に持った長い石槍を怪物の頭に突き刺した。

しかし石槍はそれほど深くまで刺さらなかった。腹のときもそうだが、この怪物は非常に頑丈らしい。

「友、急げ！」

下からは悟のせつば詰まった声が聞こえる。三本腕は友を振り落とそうと大きく頭を揺らした。

友はハンカチ越しに掴んだ触手と、左手に持った刺したままの槍のおかげで何とか振り落とされずにしがみついている。だがこれでは庄平を助けることなど無理だ。

「もう一刻の猶予も無いっていうのに——」

もはや庄平を助けることは出来ないと思われたその時、危機回生のチャンスがやってきた。大きく揺らされた三本腕の頭が、自身の腕兼足に近づいたのだ。

友はそのたつた一度の機会を逃さなかった。

「当たれえええええー！」

右手を離し、庄平から貰った包丁を持つと、三本腕の足が近づいた瞬間左手の力を抜き、自ら振り落とされた。その勢いのまま、友は包丁を三本腕の足にえぐり入れる。包丁は見事に深く、その茶色

い足を貫いた。

「うぐっ！」

三本腕がいきなり体制を崩ししゃがんだため、悟は伸ばしていた手を思いっきり地面に打ち付けた。激痛が襲ったものの、今は痛がっている暇も無い。歯を噛み締めながらその手でライターをつかみ取る。

庄平はもはや意識を失っており、顔も赤くなっている。もし、このライターが効かなかつたら全てが終わってしまうだろう。

カチ、カチツ。

悟はライターを直接三本腕の腹に押し付けると、火を出した。

<第五章> 新たな参加者達（前書き）

この小説はこんなゲームがあれば面白そうだ、と考えたことがきっかけで書いたものです。なので小説中には登場しませんが、サポーターキャラなども設定のみ存在します。

その人物は通称「田中さん」です。

このおじさんは波平（サザエさんの父）と笑うセールスマンを足して二で割った顔をしており、樹海内のどこにでも出没し、食料と引き換えに武器や道具を売ってくれます。

実はとある企業のトラック運転手であり、洞窟にあったゴミの山は彼が運んだものでした。

<第五章> 新たな参加者達

<第五章> ” 新たな参加者達 ”

水に石を投げると波紋が広がることは誰でも知っていることだ。今の状況は丁度その状態に似ていた。

悟が火をつけると同時に、紅い地獄の舌のような炎が瞬く間に三本腕の怪物を包み込んだ。それは悟が庄平を救出するよりも早かったほどだ。

自分で点けた炎で自滅する前に、何とか庄平を根っこ型触手から離すと、悟は三本腕の下から這い出た。

——庄平に変化は見られない。どうやらあの三本腕の怪物は、十秒感染能力が無いようだ。やはり悪魔とは別の種だったのか。

庄平の充血した顔を見ながら、悟はそう安堵した。

一方、一足先に三本腕から離れていた友は、炎の檻の中で暴れ狂う怪物を目撃した。

「驚いたな、まさかライター一本でここまで火が広がるとは。悪魔でもこれほどの効果はないぞ」

その光景に思わず感嘆の声をあげる。全身に油でも通っていたのだろうか。見事に三本腕は激しい光を放ちながら燃えていた。

「庄平、大丈夫か!？」

悟は庄平がぐったりして動かないため、何度もその体を揺すった。それほど長い間首を絞められていたわけではない。まだ十分に生存の可能性はある筈だ。

「起きろ庄平! 起きろよ!」

悟は庄平が死んではいないと思っただけでも自然に叫ばずには入れなかった。

「悟、どいてくれ」

友は悟を無理やり庄平から遠ざけると、呼吸と脈を確かめた。

「大丈夫だ。気を失っているだけだよ。心配はない」

悟 は友と庄平の顔を交互に見ると息を吐き出した。

「そうか……よかった」

胸を撫で下ろす悟を見ると、友は爽やかスマイルで話しかけてきた。

「ふふ、お前でも取り乱すことがあるんだな。俺はてっきり冷酷人間かと思っていたんだが」

「誰が冷酷人間だよ。どっちかというとき友の方がそう見えるぞ」

「俺が冷酷？ 何でだ。俺ほど心の温かい人間はいないぞ？」

友はワザとらしく手を横に広げた。

「さっきだって……」

ドンッ！

悟が何かを言う前に鈍い音が洞窟に響いた。すぐに二人が視線を向けると、悪魔三体が近くのゴミの上に飛び乗っていた。

二人とも、この三体が三本腕との戦闘前から自分達を狙っていたことをすっかり忘れていた。

悟は顔を青ざめながら包丁を構えようとしたが、手にあるはずの刃はどこかに消えている。どうやら三本腕の腹部に刺し込んだままだったらしい。

浮世荘から三本の包丁を持ち歩いていた悟には、まだ一本だけ腰に残っていたものの、あくまで予備用のものとしてしか考えていなかった。よって当然包丁は革の鞘や硬い紐で結ばれてしまっており、すぐに使用できる状態ではない。

悟はあたふたしながら友の方を見たが、友も同様に何の武器も持っていないかった。

三体の悪魔は慎重にじりじりと近づいてくる。

悟と友はそれに合わせるかのように、庄平を肩に担ぎつつ後退した。

まだ三本腕は後方で暴れているのだが、弱ったことが分かったの

か、悪魔達はもう三本腕を恐れることなく距離を縮めてくる。

——何か武器になりそうな物は無いか！？

悟は足元のゴミにすばやく目を馳せた。しかし、武器になりそうな物は何一つ無い。

こちらの戦闘力が低いことを感じ取ったのか、悪魔はとうとう三人に襲いかかってきた。

丸腰に加え、意識を失っている庄平を抱えているのだ。戦うどころか逃げることも出来ない。悪魔がその腕を振るえば悟らに避ける術はなかった。

「人間の最大の武器は頭脳である」という言葉は良く聞くことがあるだろう。だが、「武器」そのものこそまた最大の武器なのだ。身体的に劣る人間が銃を持つだけで百獣の王を殺すことができる。ナイフを持つ人間と持たない人間の争いの勝敗は明らかだ。人は頭脳に加え、武器があるからこそここまで数多の生物を淘汰してこれた。

そして今、数倍の筋力を持つ悪魔の前にその人間には何の武器も無い。どう考えても生き残ることは不可能だった。

三体の悪魔はあっさりと悟、友、庄平を押し倒した。

運命と言うのか、奇跡というのか——とにかくこれはこういった言葉でしか表現出来ないことだった。

火達磨と化した三本腕はしばらく洞窟の端で暴れていたのだが、何を思ったのかいきなり悟らに向かって突撃してきた。

さながら米軍の戦艦に攻撃を繰り返す特攻隊のごとく、三本腕はものすごい勢いで迫ってくる。

悟らが恐怖したのはいうまでもない。だがそれ以上に悪魔達は恐れを抱いていた。

自分たちの苦手な火、しかも大量の物に加え、三本腕までがものすごい形相で走ってくるのだ。本能的に彼らは洞窟の入口へと逃げた。

死ぬ気になった三本腕の速度は悪魔たちを凌駕していた。皮肉にも三本腕に目は無い。動かないものよりは動くものに反応するのだ。「グギユアアアアアアアア！」

三本腕はゴミの上に倒れている悟らを見せず、悪魔達を追って入り口へと突っ込んだ。爆弾が爆発したような轟音が鳴る。

「だああああ！？」

あまりの激しい音響に、悟は思わず耳をふさいだ。入り口が粉砕したのだ。

瞬く間に崩れ落ちる洞窟の天井。

一瞬にして辺りは土煙に覆われた。

「生きてるか？」

振動が収まった後、友は隣でゴミと土まみれになって寝ている悟と庄平にこう言った。返事はないものの、悟が首を上げたので友は勝手に無事だと判断した。

洞窟内の形は大きく変わっていた。

入り口付近の天井はほとんど崩れ落ち、そこに入り口があったことを全く感じさせない。青い空が上から覗いている。

入り口の隙間からわずかに紅い炎が見えるが、微動だにしないので三本腕は死んだらしい。これでは悪魔達も生きてはいないだろう。「俺たち、よく死ななかつたな」

悟は体を起こしながらそう言った。

樹海内、某道路。ここは地元の人ですらめったに寄り付かない道だった。

別に幽霊が出る訳でも、事故が多発する訳でもない。ただこの先に何もないからだ。

散々税金を使って建設していた道路だったのだが、どういう理由か途中で開発中止をされたため、樹海の真っ只中でいきなり道が切れるという現象を起こしていた。

たまに間違って入り込んでしまう旅行者もいるが、基本的にここを通る車はない。にも関わらず、今一台のバンがここを走っていた。車内には男が三人に女が二人いる。

彼らは俗に言う集団自殺を計画している者たちだった。

ネットで知り合い一緒にこの樹海へと来たのだ。

最前列に運転主である鈴木天也すずきてんやと川上龍之介。そしてその後ろに左から順に安形雄三あがたゆうぞう、井出優子、吉田亜紀の三人が座っている。

物静かだが、ただそこに居るだけで周囲に幻想的な雰囲気を感じさせる美少女。それが亜紀だった。

今時珍しい黒髪のみドルヘアに、薄化粧の顔がその雰囲気を一層引き立てている。

鈴木や龍之介、雄三の男三人らは亜紀に会った当初、こんな美人が何でこんなことを？ と疑問に思っていたのだが、亜紀はこの会合に参加した理由を言おうとはしない。鈴木らもしつこくは聞かなかった。

「……はあ」

亜紀は小さく溜息をついた。

他の人間はどうだか分からないが、亜紀はここに来たことを後悔していた。

——私何でこんなことしてんだろう。

亜紀の両親は浮気の問題で争った末、他界している。父の浮気に怒りを覚えた母が、勢いで父を殴ってしまったのだ。こういえば誤解を呼ぶかも知れないが、母のパンチがヘビー級ボクサーの威力を持っていたわけではない。ただ殴った場所が悪かった。

二人が争っていた場所は階段だった。父は母に殴られると同時にそのまま一回へと転げ落ち、頭を強打して死んだ。

勝手に浮気をしてすぐに死んでしまった父はある意味幸せだっただろう。一番不幸だったのは亜紀の母だ。

浮気をされた被害者だったのに、ケンカをした場所が悪かっただけで人殺しにされてしまった。

元々気のやさしい亜紀の母は事故後すぐに自首し、冷たい牢獄へ入ることとなった。

だが、お嬢様育ちの母がそんな生活に長く耐えられるわけもない牢獄内の収容者同士の苛めや力関係、さらには不潔な収容所の環境により、入所してからあまり月日を経ず病気になるってしまった。

入所した収容所が悪かったのは言うまでもないことだが、亜紀の母は他の収容所へ移ることは無かった。亜紀はそのことについて何度も聞いたことがある。

「お母さん。何でここに居たいの？ もっとしつかりした収容所に移れるのに」

この質問に母が答えることは無かった。いつも無言で力無く微笑むだけだ。その笑顔は今でも亜紀の瞼の裏に焼きついている。

亜紀がその理由を知ったのは母の死後何日か経ってからだ。

「え……？」

母と同房だった向井さんの話に思わず聞き返す亜紀。

「だからね、亜紀ちゃん。あんたの母さんはあんたのために死んだんだよ」

「私のため？ 何言ってるんですか！ 何で私のためにお母さんが！？」

「小百合はここに居る間いつもあんたのことばかり話していた。私たち夫婦のせいで辛い過去を背負わせてしまったってね」

向井さんは悲しそうな表情をしながら上を向いた。

「あんたの馬鹿オヤジは小百合に莫大な保険金をかけてたのさ。それを知っていたから、小百合はあんたのために死を選んだ」

「そんな……」

「両親がいなくなってあんたは一人ぼっちだろ？ 小百合は孤児だったらしいし、馬鹿オヤジの両親が自分の一人息子を殺した女の子供を養うわけもない」

確かに今の亜紀に行くところは無かった。父の両親は母が牢獄に入ったと同時に亜紀たちと縁を切った。

頼れる人間もおらず、亜紀は高校三年で優秀な大学に推薦合格が決まっていたものの、それを辞退しざる負えなかった。

それから現在まで、亜紀はフリーターとして自分の生活を何とか維持していた。母が命と引き換えに残したお金には一切手をつけてはいない。使う気も起きなかった。使えば母とは本当にお別れになってしまうから。

「ふう——」

溜息をつきながら亜紀はバンの外を眺める。流れ行く景色に視線を合わせ、この集団自殺に参加することを決めた時のことを思い出す。

亜紀が勤めているフード店では自由に使用できるパソコンが有った。自分の労働時間を終了させた後、亜紀はそのパソコンで自殺サイトを見つけた。

別に死にたくなかったわけではない。ただの偶然リンク先がそこだけだった。亜紀は確かにに生きることに苦労しているが、自殺を考えるほど弱い人間じゃない。

最初は何となくそのサイトを眺めていた亜紀だったが、自分と同じように悩みを抱える人たちの話を聞けてそのサイトをちよくちよく見るようになった。

自殺サイトといっても、別に「みんなで死んでやろう」と高らかに意思表示しているものではない。悩みを持つ人の書き込みを見て、他の人がその解決策をアドバイスしたり、慰めたりするだけのものだ。

だがある日、亜紀がそこにアクセスすると、これまで他人を慰めることが多かった花子さんが自殺をすると言い出したのだ。

花子さんがこんなことを言うなんて考えられなかった。

なぜならば花子さんは、亜紀と同じくフード店で働いている井出優子だったのから。

亜紀がこのサイトを見始めると同時期に、つられて優子も見ることになっていた。

サイトに参加させる原因を作った亜紀は、責任を感じて必死に優子を引きとめようとしたが、彼女は全く聞く耳を持たなかった。

そしてとうとうこの樹海まで来てしまった。

亜紀は優子を止めるためにやって来たのだが、何を勘違いしたのか集合した人間達からは自分もこの会合に参加した人間だと思われるている。

だから現在彼女は悩んでいた。今更違うとも言えないし、このまま黙っていたら自分まで殺されてしまう。

「ど、どうしよう……！」

あまり気の強い方でもない亜紀は、この現状に非常に困惑していた。

連門大学二年で一番の才色兼備。そう言われていたのが懐かしい。今の姿を見れば決して誰もその言葉を口に出さないだろう。

小宮は木の影に怯えながら隠れ、自分の姿を見ていた。

走り回ったおかげか泥や草で汚れた服、涙で崩れきった化粧。例

え彼氏や友人でも自分が誰か判らないと思う。

「もう、行ったかな？」

恐る恐る木から顔を出し、反対側を覗く。

その向こうに何もいないことが確認できると、小宮は音を立てないように抜き足差し足で木の影から出た。

「さっきのは何だったの？ 普通の悪魔とは少し違っていただけ……」

これまで何度も悪魔をやり過ごしてきた小宮だったが、つい先ほどやり過ごした相手は見たことが無かった。

「人間の形が残っていたから悪魔の一種だと思うけど、あれじゃまるで……」

『ブルルルルルル！』

小宮がその先を考える前に、近くに車のエンジン音が聞こえた。

「車！？」

小宮は一瞬、何故車がこんな富山の果てまできたのか不思議に思ったものの、すぐに考えるのを止め音の方へ走った。

「あぶねえええ！？」

急に前方に女性が飛び出してきたため、バンの運転手、鈴木はハンドルを強く切った。キキーツと高い音を鳴り響かせながら、回転する車体。

亜紀はその勢いで前のシートに頭をぶつけた。

「い、痛いっ！？ な、何！？」

土煙を上げながらようやく停車したバンの窓から外を見ると、ぼろぼろのカッコをした女性が道路の真ん中に仁王立ちしているのが見えた。

「何あの人……ま、まさか……幽霊とかじゃないよね？ 私はまだ迎えなんか要らないんだけど……！？」

亜紀が一人で意味不明なことを考えていると、運転手の鈴木と助手席に居た川上が車から降り、その女性に近づいていく。

「あの、大丈夫ですか！？」

鈴木が女性の格好を見てそう言った。

「助けてください！」

「はい？」

女性の第一声を鈴木は理解できなかった。

「私、怪しい男に追われているんです。お願いします！ 乗せてください」

小宮は本当のことを言っても信じてもらえないと思いこんな言い方をした。

その言葉に鈴木は困った。自分たちはこれから死のうとしている集団なのだ。この女性を助ければ一度町まで引き返す必要がある。助けを求める若い女性を放っておくことなんて出来るわけがないのだが、近い町からここまで車で二時間もかけて来たのに、今更引き返すなんて言ったら他の乗組員は納得しないだろう。

「ちよ、ちよつと待ってください。皆に聞いてきます」

鈴木が黙っているのが川上が代わりに答えた。

微妙な表情をしながらこちらに戻ってくる鈴木と川上を亜紀が怪訝な顔で見ていると、隣に座っていた優子が話しかけてきた。

「亜紀、何か会ったみたいじゃん？ 鈴木さん変な顔してんだけど」

「うん、何だろうね。あの女の子に何か言われたのかな？」

鈴木が車に近づくと、すぐに亜紀と優子の間に座っていた安形が二人に事情を聞いた。いかにも肉体派といった短髪の髪を風になびかせ、そちらを向く。

「鈴木、どうしたんだ。あの子は何なんだよ？」

「なんか、追われてんだと」

「は？」

「だから、怪しい男に追われてんだって！ あの格好を見れば分かるだろ！」

安形が視線を小宮に戻すと、確かに何者かに襲われたような姿をしている。服装からいかに悲惨な目にあったのが理解できた。

「かわいそうに……」

優子は何か共感できるものがあるのか、目に涙を溜めて呟いた。

「鈴木さん。困っているみたいだし、助けてあげようよ！」

亜紀は本当に優子を助けたいという気持ちも有ったが、町に戻りたくてそう言った。

「でもな……」

自分達は半端な気持ちでここに来たわけじゃない。今日この時に死を迎えるという覚悟をしてここまで来たのだ。

家には遺書まで残してしまっている以上、今計画を実行しなければ次はない。

だが、亜紀の願いも虚しく、鈴木たちは予想外のことを言い出した。

「じゃあさ、俺たちと一緒に行動してもらってさ。俺たちが死んだ後にこの車で帰ってもらえばいいんじゃない？」

「え？」

川上の提案に亜紀は驚いた。

いくらなんでも、その行動はあの女性に悪いのではないか、大体それでは自分も死んでしまうことになる。

亜紀は心の中で必死に叫んだものの、それが川上らに聞こえるわけも無く、鈴木はいい案じゃないか！と言わんばかりの顔で頷いた。安形は渋い顔をしながら黙っている。快くは思っていないのだろうが、反対はしないらしい。

このままでは死んでしまう！ 土壇場になって「私死にたくありません！」何て言葉を聞いてもらえるわけがない。

亜紀が生き残るチャンスは今を逃して他に無かった。

「す、鈴木君。それはちょっとあの子に悪いんじゃない？ ただで

さえ酷い目に会ったみたいなのに、これ以上心に傷を残すような真似はしない方がいいよ」

亜紀は必死に訴えた。

人生上類にない美人に上目使いで頼まれた鈴木は、一瞬迷ったもののすぐに気を取り戻した。

「駄目だよ、吉田さん。俺たちは遊びでこの計画をしているわけじゃないんだ。予定は絶対に変えるわけにはいかないさ」

——くそこの馬鹿ロン毛野郎——！

亜紀は心の中で泣いた。

「そうだよ、亜紀。わがまま言わないの！」

まるで亜紀が一人だけ空気の読めない子供であるかのように叱り付ける優子。この言葉に亜紀は怒りを覚えた。

そもそも亜紀がここにいるのは優子の無事を思つてのことだ。それなのに、優子はまるで亜紀と一緒に死を迎えるのが当たり前であるかのように振舞っている。

バンに乗ったときも、たった今も、優子は亜紀を助けようとはしなかった。

亜紀は優子を睨んでみたものの、気づいているのか、気づかない振りをしているのか、優子は終始無反応を通している。

いつまで経つても返事をしてくれない集団に痺れを切らしたのか、小宮はバンに歩みよった。

「あの、すいません。出来れば急いで欲しいんですけど。私追われているんで」

「あ、すいません。こっちで話し合ってたんですけど、いいですよ。乗ってください」

鈴木は作ったと人目で分かる笑顔を見せ、そう言った。

こんなか弱い女の子が助けを求めているのに、一体何を話し合っていたの？　と言わんばかりの視線で鈴木を見ながら、小宮はバンに乗った。

亜紀の丁度向かい側に座った小宮は、彼女が何故か必死な形相で

自分を見ていることに気づき、不思議がった。

自分が誰なのか、ここがどこなのか、今何をしているのか、彼にはわからなかった。

彼は昨日の昼間まではその内容を覚えていたのだが、人間で無くなった現在、その記憶は完全に消えている。

今の彼の頭を支配しているのはほんのわずかな思いだけだった。

苦しい。

苦しい。

苦しい。

痛い。

痛い。

痛い。

憎い。

憎い。

憎い。

考えを生み出す現況は、彼の体内にある。

彼の体内では小さな魔物が暴れ周り、その身体の半分以上を支配下に置いていた。

もはや彼の体は自分のものというよりは、その魔物のものといった方が適切のように思える。

「ギユアアアアア！」

木の影に顔を近づけると、彼は突然喜びの声を上げた。どうやら先ほど逃したばかりの獲物の臭いを感知したらしい。すぐに彼はその臭いの主めかけ、一目散に駆け出した。

獲物を食している間だけは体内の苦しみから解放される。

彼は例え相手がどこまで逃げようとも、この獲物を逃がす気は無かった。

奇妙なプレッシャーに耐えられなくなったのか、小宮はいつまでも自分を凝視しつづける相手に挨拶した。

「……はじめまして、小宮楓です」

「あ、吉田亜紀……です」

亜紀は顔を紅くしながら答えた。

どうやら生き残るためにはこの女性に助けてもらうしかないと考えるあまり、無意識のうちに見つめてしまっていたらしい。

「亜紀さん達はどこに向かってるんです？」

「え？ え」と……」

亜紀はこの質問に返事をする事が出来なかった。

死に行くなどと言えるわけも無く、また丁度いい嘘も見つからない。自然と見つめ続けながら無言を貫く形になってしまう。傍からみれば結構不気味な姿だ。

「あの、亜紀さん？」

奇妙な行動をし続ける亜紀に小宮は怪訝な表情で聞いた。

「は、はい。何ですか？」

「……大丈夫ですか？」

「ま、まだ大丈夫です」

言った後で、これではこの先大丈夫じゃなくなるみたいだと亜紀は苦笑いした。

<第六章> 巨狼、再び

<第六章> 巨狼、再び

途切れた道路を前にし、バンが止まった。唸るように鳴っていたエンジン音も今はまったく聞こえない。とうとう彼らは目的地に着いたのだった。

——ここは何？ 道が無いじゃん。こいつら……何をする気なの？
小宮は急に怖くなり、体を固めた。怪しい集団に捕まってしまったとしても思っただろう。あながちその考えは間違ってもいないのだが。

「着いたぞ」

鈴木は神妙な顔でそう言った。

その声に鈴木、川上、安形、優子の四人は無言のまま車から降りる。

——やばいよ、着いちゃったじゃん！

亜紀は車から降りる気になれず、小宮と二人で車内に残っていた。
「ここはどこですか？」

小宮は唯一車に残った亜紀に、状況を知ろうと質問した。恐怖からか、その顔は若干青ざめている。だが、顔色の悪さでは亜紀も負けてはいなかった。

「えーとですね……ここはその……」

血の気の引いた表情で、亜紀は現状を打破する方法を必死に模索する。

こうなったら優子をおいて逃げてしまおうかと考えてはみたものの、どうしても行動に移すことは出来ない。それをしてしまったのは、わざわざ東京からここまで一体何をしに来たのか分からなくなっ

しまうからだ。

「亜紀さん、どうしたんです？」

小宮は亜紀が異常に動揺しているのを見て、心配そうに聞いてきた。

「あの人たち……危ない集団なんですネ」

亜紀が何も答えないので、小宮は勝手にそう解釈した。何かを決心したように亜紀の横に席を移ると、小声で話しかけ始める。

「一緒に逃げましょう。幸い今なら車内に居るのは私達だけだし」「え！？」

「私、免許を持ってるし、運転できるの。大丈夫！任せて」

車体後部のトランクから何やらいろいろと怪しい道具を出している集団を気にしながら、小宮はゆっくり前の座席へと身を乗り出す。

——大丈夫、見られていない。

運転席に座ると、フロントガラスに写っている亜紀に視線を合わせた。

「いい？行くわよ！」

「行くつて——……小宮さん！」

——今ここから逃げたら優子が……！

亜紀が思いを伝える間もなく、小宮はエンジンを入れた。「ブルルルルルルン！」と鈍い音が木霊する。

「んっ、何だ！？ お前ら何してんだよ！」

いきなりエンジン音が聞こえたので川上はすぐにドアを開けようとしたのだが、ロックが掛っているため開かない。

「くそ、この——！」

川上がさらに力を入れようとすると、車は急発進した。

「お、おい！ 待てお前ら——！」

自分の車が盗まれたのを見て鈴木が叫んだ。急いで車に掴みかかる。だが、男達の剛力も虚しく、亜紀と小宮を乗せたバンは軽々と彼らを振り切った。瞬く間に距離を開いていく。

遠目に窓から手を振っている小宮が見える。

「くそお、あいつらあ！」

あの車には計画に必要なものがまだ入ってるんだぞ！？
遠ざかる愛車を見て鈴木は地団太を踏んだ。

「ふう、上手くいったわね！」

樹海を滑走する車の中、小宮はしてやったりと言わんばかりの笑顔で振り向いた。自分の機転の良さに酔っているのか、鼻歌まで歌いだす始末だ。

だが、後ろに居る人間は小宮とは正反対の心境だった。

助かったことは助かったのだが、樹海にきた目的である優子を見捨てて来てしまったのだ。亜紀は半場強制的に小宮につれてこられたものの、優子のことを思い後悔の念に駆られていた。

「ちよつと、亜紀ちゃん。暗い、暗い！ 折角あいつらから逃げれたんだからもつと喜びなよ」

「はあ、すいません」

きつと小宮は亜紀が鈴木らに誘拐されたとも思っているのだろう。

亜紀はこのまま誤解をされたままでも別にいいかと考えたが、一応本当のことを話しておくことにした。もしかしたら、小宮が優子の救出の手伝いをしてくれると思ったからだ。

「あの、小宮さん」

「何？タバコは持ってないわよ」

「いや、タバコは吸いません」

「もう、何よ。真剣な顔しちゃって」

ダダ……ダダ……

その時亜紀は一瞬遠くの方で何かの走る音を聞いたような気がしたが、気のせいだと思い会話を続けた。

「小宮さんは私たちのことをどう思っているんですか？」

「私たちって——ナンパされてここに連れ込まれたんじゃないの？」

——やっぱり勘違いしてたか。まあ、そう思うよね。

「違います。私は優子……友達の自殺を止めるために来たんです」

「へ？ 自殺って何のこと？」

「実は——さっきの人たちは集団自殺をするために樹海に入ったんですよ」

「えっ、そうなの？」

「じゃあ……亜紀ちゃんも？」

「いえ、私はそれに参加した友達を助けようと思って……」

「ふうん。亜紀ちゃんは優しいんだね」

「いえ。とんでもないです」

「あ、ってことはさ、もしかして私余計なことしちゃった？」

カンニングがばれた学生のような顔をして、小宮は亜紀を覗き見た。

「そんなことはないです！ おかげで私は助かりました。あのままだときつと巻き込まれて殺されてたから」

「そっか、よかった。もし亜紀ちゃんが危険じゃなかったら、私はただの車泥棒になるところだったよ」

あはははと笑う小宮。

亜紀は何故かそのとき小宮が無理に笑っているように見えた。そう、まるで何かを頭から忘れさそうとしているかのように。

「実は、それで小宮さんに友達を助けるのを手伝って欲しいんです。かなり自分勝手なお願いなんです」

……ダダダ……ダダダ……

「んー困ったわね。一応、私今逃げてる途中なんだけどな。町に戻って警察を呼んでくるとかじゃだめ？」

「それじゃ、きっと優子はもう生きてません！ 助けるなら今しかないんです」

亜紀は小宮に悪いと思いつつも、自分一人で男三人を相手に優

子を取り戻すことは不可能だと思い、必死に懇願した。

「お願いします！ 小宮さんは車を運転してくれるだけでいいんです。優子の目の前に止めてくれれば、私が彼女を車内に引っ張り込みますから！」

—— まいっ たわね……。

小宮は無意識の中に頭を掻く。

亜紀の境遇を考えると、確かに可哀想だし同情をそそられる。出来れば友達を助けてあげたいのだが、折角車という貴重品を手に入れた逃げられる手段を得たのに、また化け物だらけの樹海の真っ只中にいくなんて馬鹿げている。今日という日ではなかったのならきっと協力しただろう。だが、今の樹海は普通の世界ではないのだ。亜紀が優子を死なせたくないのと同様に、小宮も自分の命が惜しいし、この死の臭いが溢れる樹海には一秒も居たくはなかった。

—— 今回は運が悪かったと思って諦めるのね。

小宮はアクセルを強く踏むと、車の速度を上げた。

…… ダダダダダダ…… ダダダダダダ……

「ん？」

地踏みのような騒音が聞こえた気がしたが、小宮はエンジン音だろうと高をくくるを括り、無視した。

「小宮さん！ 何でスピードを上げるんですか！？ 引き返して！」

「亜紀ちゃん。私が貴方たちを誤解してたのと同じように、貴方達も私のことを誤解してるの」

「へ！？」

「私はね、別に樹海に連れ込まれて男に襲われたわけでも、迷い込んだわけでもない。元々大学のキャンプでここにきていたの」

ダダダダダダダ…… ダダダダダダ…… ダダダダダダダダダダダダ……

「何を言ってるの！？」

「信じられないかも知れないけど、この森には——」

ダダダダダダダダダダダダダダダダアアアア！！

地響きのような足跡が聞こえたと思った瞬間、亜紀はものすごい衝撃を感じた。体が一瞬中に浮かんだのが分かる。

「きゃあああああ！？」

この衝撃は鹿を轢いてしまったとか、車に衝突されたとか、そういうレベルのものではない。とてつもなく大きく、なおかつ力強いものが当たらなければこれほどのショックは起きないだろう。激しい揺れが収まらないバンの中、亜紀は急いで後ろを振り返った。

そして、すぐにそれを後悔した。

黄色い目に純黒の体毛、まるで恐竜かと一瞬疑うほどの巨体。

亜紀の視界一杯を、漆黒の魔獣、巨狼の姿が多い尽くした。

テレットテレットテン、ピューポロロ〜ン。

樹海中を見渡せる高地の上で、場違いなほど明るいう着メロが鳴り響いた。

「はい、こちらキツネです」

黒服の男——キツネは、胸ポケットにしまっていた携帯電話をとりだすと、面倒くさそうに耳に当てた。

「どうした！？ 中々連絡が無いのか心配したぞ。一体何をしていたんだ、こんな大事な時に？」

電話の相手はあからさまに不機嫌そうな声で怒鳴ってきた。

「何って、あなた方イミユニティーから請け負った仕事をしていただけですか？」

「嘘をつけ、こっちは樹海中に監視カメラを設置していたんだぞ！？」 お前がきちんと仕事をしていたのなら、何でどこにも姿が見えなかったんだ！」

キツネと名乗った男の明らかな嘘に男は怒った。

「お前、いくら黒服だからって調子にのるなよ？　こっちは雇い主なんだぞ。今度こんなことをしてみる。二度と仕事の出来ない体にしてやる」

力を誇示するかのように怒鳴りつける相手の言葉に、キツネは溜息をついた。

キツネは黒服内でも一、二をあらそうほどの凄腕のやり手だ。まだ歳は若い、高い仕事の成功率、高難易度任務の攻略など、数々の名誉ある戦歴を持っている。

そのキツネを知らないということは、イミューニティー内において格下であることを自ら教えているようなものであると広野は気づいていない。

——はあ、只の使いっ走りが……僕の何を何も知らないのか。そんなことをすれば、痛い目に遭うのはお前のほうだぞ？　まあいい。まだ目的を果たしていないし、今のところはご機嫌を取っておいてやる。

「すみません、今後は気をつけます」

「ふん、信用できない奴め！　あだ名がキツネというのも頷ける」
このままではいつまでも愚痴を聞く羽目になりそうなので、キツネは無理やり話題を変えることにした。

「そんなことよりも、また巨狼が出ましたよ。丁度さっき、車が一台やられました」

「巨狼？　なんで銀野町付近にいるんだ。あいつは堪銘道路をうるついていたはずだろ？」

「まだ調査中の段階ですが、餌を求めてこちらに來たみたいです。詳しい事情が判明しだい、連絡しますよ。そちらは何か進展がありましたか？　広野さん」

「部下が悪魔LV・2に遭遇した。最初の悪魔が発生してから既に二日目だ、これからどんどんLV・2が増えて来るだろう。これで生存者が生き残る可能性はより低くなるな」

「計画通りじゃないですか。それで殆どの生存者は死ぬでしょうね」

まあ、一部の人間は生き残るかも知れませんが」

「今回の計画ではその一部の者が重要な存在なんだ。この過酷な状況下で生き残れる人材は貴重だから。出来るだけ多く生き残って欲しいものだ」

「そうですね。僕も気になっている三人組がいますよ。彼らが今後どうなるか、非常に楽しみです」

キツネはクスクスと笑った。

「お前が目をつける人間がいるなんて珍しいな。やはり今回は当たり年だったようだ」

「当たり年ですか、確かにそうかもしれません。では、僕は仕事に戻りますよ。貴方たちからは高橋志郎の抹殺も命令されていますからね」

「高橋博士の始末はあくまでついでの仕事だ。お前には率先してやら無くてはならないことがあるだろ」

「ええ、もちろん分かっていますよ。きっとやり遂げて見せます。黒服の面子もかかっていますし」

「期待している」

その言葉を最後に、イミューニティーの調査員、広野大地は電話を切った。

キツネはあざ笑うかのように電話の画面を見つめると、それを再び胸ポケットに収めた。

「高橋志郎の抹殺か。生憎だけど、それは無理だな。彼は別件で必要な人材だ。こんなところで殺すなんて勿体無い。でも、他の仕事はしっかりこなしておくさ。黒服の建前場やらないわけにはいかなから」

「きゃあああああ！」

キツネはそのまま高地から降りようとしたが、女性の悲鳴が聞こえてきたため立ち止まった。

「おっと、忘れるところだった。逃がさないように襲わせたけど、殺してしまうのはつまらないな」

何かの機器ををシヨルダーバックから取り出すと、キツネはそれを下に広がる樹海へ向けながら、反対側の部位をを自分の口へつける。

「—————」

人間には決して聞き取ることの出来ない音が放射されたのを確認すると、キツネは高地を後にした。

亜紀と小宮の乗ったバンは巨狼の一撃で横転し、付近の太木にぶつかったところで停止していた。

車体からは濛々と白い煙があがり、いつ爆発するかも分からない状態だ。

亜紀は前の座席に頭を強く打ち付けていたものの、何とか意識を保っていた。体は痛みと潰れた車体、さらにシートベルトの所為で全く動かない。

——逃げられない……私こんなことで死ぬの？

薄いビニールの幕が掛かったかのように霞む景色の中、自分たちの命を奪いつつある巨大な黒い犬が見える。その黒犬、巨狼は車の前で歩みを止めると、車体の窓から亜紀と小宮を満足そうに見つめた。

「グルルルルルル！」

低い唸り声が耳を突き抜ける。

耳元でその音を聞いたからか、気を失っていた小宮が目を覚ました。

巨狼が覗いていた窓は車体前部右側、つまり運転席にいる小宮の丁度真ん前となる。目を開けたと同時に、巨狼の大きな黄色い目と牙を目の当たりにした小宮は瞬間的に叫んだ。

「きゃあああああああ！」

パニックになる小宮。何とかしてこの場から離れようと死に物狂いでもがき出すが、焦りの所為か、何度もシートベルトを開けるとに失敗している。

獲物の泣き叫ぶ声を聞いて興奮したのか、巨狼は激しくバンを揺すりだした。右に、左に、何度も何度も二人は体を強く打ち付ける。シートベルトをしていなかったら窓から飛び出していたかもしれない。

「な、何でこの化け物犬がここにいるのよ!? 最悪——やっぱり銀野町に向かわないであのままあそこで待ってればよかった!」

小宮は自分の運の無さに自然と涙をこぼした。

ガン!

揺さぶる力が強かったのか、車は再び横転し、上下が正常な状態に戻った。衝撃で再び頭をあちらこちらにぶつける二人。

普通に購入すれば数百万はするバンは、今や見るも無残なほどボロボコの形になっていた。もはや、巨狼の一咬みで簡単にその中身をさらけ出してしまうだろう。亜紀と小宮がその黄色い牙の餌食になるまで、そう時間は残されていない。

完全に自分の死を悟った亜紀は、悲壮感に駆られながらその最後を待った。

助けられなかった優子への謝罪の言葉から、死後母に会えるかどうかまで様々な思いが走馬灯のように頭を駆け巡る。

巨狼はその瞬間を味わうかのように、ゆっくりと地獄の入り口を亜紀の前へと運んでいく。

眼前にせまる邪悪な死の使いを瞳の窓に留め、亜紀は一滴の涙を灯したまま、目を瞑った。

「ガルアアアアア!」

巨狼の喜んだ声が、亜紀の全身を包み込んだ。

「……え？」

五秒、十秒経っても巨狼の牙が体を貫くことは無かった。亜紀は恐る恐る目を開く。

見えるのは樹海の静かな大自然だけだ。巨狼の姿は影も形も無い。

「あれ……？ あの犬はどこに行ったの？」

散々弄られた車のドアは、軽く蹴っただけで下に落ちた。

ちらつと、小宮を見ると、呆然として外を見つめている。彼女も訳が分からないのだろう。

震える全身を両手で守りながら、亜紀はバンの外に出る。

——もしかしたら、どこかに隠れて獲物が車から出てくるのを待っているのかも知れない。

亜紀は周囲を慎重に見渡した。しかし、やはりどこにも巨狼の姿は見えなかった。

「何がどうなってるの？」

その疑問だけが、亜紀の頭に残った。

<第七章> 3人のヒーロー

<第七章> ” 三人のヒーロー ”

鈴木たちは一台の破壊された車を見つめた。

巨人が鼻をかんだティッシュのようにグシャグシャの車は、もはやどう見ても動きそうにない。

「何だよこれ……何をどうしたらこんな状態にできるんだ？」

自分の愛車の無様な姿を見て、鈴木は言葉を失っている。

「ひでーな。化け物にでも襲われたように見えるぜ」

川上はそれが真実であることも知らずに、冗談のつもりでそう言った。

車の状態を真っ先に心配している二人を他所に、安形は車内に居る筈の二人の行方を考えた。

「一体何に襲われたんだ？ 熊がこんなことできるわけも無いし」

——まさか、あの二人死んで無いよな。車内に血の跡はないから大丈夫だとは思うが……。

自分の命を取り消そうとしてきたはずの人間ならば、普通は車の心配や、同じく自殺志願者の心配はしない。にも関わらず、鈴木、川本、安形はそれぞれがそれぞれの理由で現状に心を痛めていた。何故ならば、彼らは自殺志願者では無いのだから。

この場で、純粹に予定通りの目的を達するために来たのは、恐らく優子ただ一人だろう。到着次第すぐに目的を達成するはずだった優子は、中々皆が行動に移らないので、ひとり退屈そうにしている。安形は優子のそんな様子を見てある決心をした。車を失ってしまった以上、鈴木と川上がどんな行動を取るかも分からない。大事になる前に優子は真実を知っておく必要がある。そう判断したのだ。

鈴木らがまだ車を調べているのを視界の隅に入れると、安形は不自然に見えないように気を使いながら優子の隣に立つ。そして、前を見ている優子の耳元に口を近づけると、小声で話した。

「優子さん。これから俺が話すことを黙って聞いてください。決してあの二人に動揺がばれない様に」

「何です？」

いきなり安形が顔を近づけて来たので、思わず優子は一步下がった。

安形はそれに構わず距離をつめ、会話を続ける。

「君は俺たちが自分と同様、自殺するためにこの樹海に来ていると思ってるだろ？」

「ええ、当たり前でしょ？」

「実は、それは違うんだ。あの二人も俺もそんな気は最初から無い」「はい？」

「これを見てくれ」

安形は自分のジーンパンの腰に付けている長い金属製の筒を、一瞬だけ優子に見せた。それが何かわかった優子は自分の目を疑う。

「じゅ、銃！？」

「俺は刑事なんだ。最近自殺の集いに見せかけて金品を奪ったり、その参加者の体を甚振^{いたぶ}ったりする事件が頻発していたから、それを調べるために潜入捜査でここに来た」

「け、警察の人？　じゃあ、鈴木君達は……」

「ああ、あの二人は連続殺人鬼だ。樹海に入るのをこれまで何度も目撃されている」

「何ですぐに捕まえないんですか？」

鈴木らが連続樹海殺人鬼だと知った優子は、急に彼らが怖くなった。無意識のうちに安形の袖を掴む。

「残念だけど、確実な証拠が無いんだ。すぐに捕まえられるなら、俺がわざわざこんな潜入捜査なんかしているわけが無いだろ？」

「じゃあ、私が死ぬまで待つって言うんですか！？」

「いや、もちろん直前で止めるつもりだったさ。殺す意思を確認できればいいだけだったんだから」

安形はここでより一層声を小さくする。

「でも、今は事情が変わった。さつき亜紀ちゃんの引き返すというセリフに彼らは反対しただろ？」

「そういえば――……でもそれが何だつて言うんです？」

「あのまま引き返すことが出来なかったんだ。これは俺の想像ではないけど、多分あの二人は遺書か何かを自宅に置いてきてるんだろ。本当の自殺に見せかけるために」

チラッ、と横目で鈴木らがまだ車を調べていることを確認しながら、安形は離し続ける。

「さつき亜紀ちゃん達が逃げていく前に、皆でトランクを開けて縄やら何やら色々と出そうとしただろ？ あの時にカッラやサングラス、私服まで合ったのは変だとは思わなかったか？」

「た、確かに奇妙だと思った。自分の最後は身を綺麗にしたかったのかと無理やりなつくしといたけど……あれってまさか……！」

優子は安形の言いたいことが分かった。

「自分たちを死んだことにして、警察から逃げる気だった？」

「ああ、そうに違いない。そうでもなければ、態々（わざわざ）あんなガラクタ持ち運ぶ連中なんていないからな」

元々死ぬ気でここに来ていた筈の優子だったのだが、鈴木らの恐ろしい計画を知ったことで、急に死ぬことが怖くなった。口だけでは簡単に死ぬなんて何度でも言える。しかし、本当の死なんてものは、実際にその命の危険が近づかなければ理解できない。そして、そのときはいくら死にたいと願っていた者でも、死の恐怖に怯えるのだ。

本当は死にたく無いのだから。

死にたいということは、逆にいえば、もつと幸せに生きたいということだ。だが、現状を自分の力で乗り越えることが出来ないからこそ、その本心を隠して非行に走る。

優子もそうだった。

「でも向こうにとつても、こっちにとつてもまずいことに、今あの二人は逃走用の車を失った。ここから歩いて町に戻る頃には警察に捕まるだろう。彼らもそれが分かっている」

優子の心境の変化に気づくことなく独自の推理を続ける安形。

「だからこそ、俺は君に真実を話したんだ。追い詰められた彼らが何をするかわから無いからな」

「……そんな……！」

優子は自分の本心に初めて気がついた。

——……たくない、死にたくない！ やだ……怖いよ。何で？ 私ここに死にに來たはずだったのに……。

思わず、安形の袖を掴む力を強くする。

安形も優子が怖がっていることに気がついたのか、何とか恐怖心を落ち着けさせようと、彼女の肩を強く抱きしめた。

「ドカン！」 鈍い音が前方から聞こえる。半場抱き合ったままの二人が視線を前に向けると、不機嫌顔の鈴木と川本と目が合った。

「安形、駄目だわ。このボンコツ、もう動きそうにねえ」

鈴木は自分の愛車に蹴りを食らわせたらしく、ボロボロの車にまた一つ凹みが増えている。

「ま、まあ、俺達これから死ぬんだし、別にいいじゃんか」

安形は自分が真実を知っていることを悟られないように、鈴木らの力モの振りをした。

「そうだけどさ……」

鈴木はまだ怒りが収まらないのか、再び車に蹴りを入れる。

自分の車では無いことで、若干鈴木よりも興奮度が低かった川本は二人が抱き合っていることに気がついた。

「あれ、お前らいつのまにそんな関係になったん？」

「あ、ああ、何かさつきから気が合ってたさ。短い間だけど、付き合いことにしたんだよ」

「は、ははは！ 何それ？ マジでメチャクチャ短い関係だな」

安形の苦肉の言い訳に気づくことなく、川本は馬鹿笑いした。

「川本。このままここにいてもしょうがないし、さっさとここに来た目的を果たそうぜ」

逃げられないことで何かの箍たがが外れたらしい鈴木は、優子をイヤらしい目つきで見ながらそう言った。

裏を知らない人間ならば、ここで言う目的とは自殺だと思っだろう。だが、真実を知っている安形と優子はその言葉の意味を理解した。鈴木と川本の醜い欲望を。

恐らく、この狂人二人はもう自分達が牢獄に入れられることを覚悟しているのだろう。そしてその前の人生最後の獲物として、安形と優子で遊ぶ気なのだ。

——人間の屑め！

こんな連中の慰め物になつては堪らないと、安形は腰の膨らみに手を当てる。

そしてそこにある銃の重みを確かめると、優子をより一層強く抱きしめた。

「悪魔！？ ほ、本当なの？」

亜紀は今耳にした言葉が信じられず、反射的に聞き返した。

「信じられなくても事実だから。車で逃げられなくなった以上、私の言うことを聞かないと亜紀ちゃん死んじゃうわよ」

「……う、うん」

亜紀はほんの三十分ほど前に、黒犬の怪物に襲われたばかりだ。

小宮の話す内容はまだ半信半疑だったが、あの黒犬を見てしまった以上、否定することが出来ない。

——…悪魔か。さっきの怪物を見ちゃったからなあ。私は優子を助けたかっただけだったのに、何でこんなことになるのよ。

当初の目的とはどんなにか離れていく自分の境遇に、亜紀は目頭が熱くなるのを感じた。

「あの、小宮さん。こんなに森の奥深くを歩いて大丈夫なの？ 悪魔っていうのがうつっているんだよね？」

二人は巨狼に襲われた後、すぐに樹海の内部へと入った。小宮が「道路を歩いていると良いことが無い」と無理やりに亜紀を連れ込んだからだ。

「大丈夫だって、私は昨日からずっとこの森で過ごしていたのよ？ 信頼しなさい。それに、いざとなれば隠れればいいんだから」

再び地獄の樹海に入ることになり、最初は嫌悪感を抱いていた小宮だったが、これまでとは違って亜紀という連れがいるため、あまり暗くなることは無かった。

「大丈夫って——大体今どこに向かっているんですか？ 助かる当てでもあるの？」

「あるわよ。このすぐ近くに銀野町っていう小さな町があるの。そこに行けばきっと保護してくれると思う」

「このすぐ近くって、本当に大丈夫なの？ 悪魔がこちら辺をうろついているなら、その町の人達だって死んでいるかもしれないじゃん！」

小宮の浅い考えに反論する亜紀。

「……そうかもね。でも、今はそこに行くしかないでしょ」

小宮だって亜紀の言うとおり、銀野町の住民の生存に疑問を感じていた。だが、他に行くところも無い以上、そこに向かうしかない。例え銀野町がどうなっているとしても、そこに向かうという目標があることで小宮は生きる気力を保っているのだ。

「はあ、しょうがないな」

亜紀は小宮の心情を理解したのか、それ以上文句は言わなかった。今は泣いていても何も変わらないし、白馬に乗った王子様が助けて

くれるわけでもない。自分の力でこの地獄を乗り越えるしか無いのだ。このまま最初から死ぬ気でいたら、助かる命も助からなくなる。気合を入れるように前髪をピンセットで固定すると、亜紀は強い眼差しで前を見据えた。

その様子を見ていた小宮は感心したようにうなずく。

「亜紀ちゃんは強いね。よくこんなことに巻き込まれたのに冷静でいられるよ」

「強くなってるよ、天邪鬼なだけ。なんか悔しいじゃん。ただ泣き叫んで殺されるの待つなんて。何が樹海をこんな状態にしたのか知らないけど、そいつの思い通りになんて絶対になつてやらない。私は維持でも生きてここから出てやるんだから！」

——それを強いつて言うんだけどな……。

小宮は亜紀の凜とした顔を見て、不覚にもカッコイイと思つてしまった。

「やつぱり亜紀ちゃんは強いよ。私なんて初めて悪魔に遭つた時、怖くて一緒に逃げていた仲間を見捨ててきちゃったんだから。きつと亜紀ちゃんだったのなら、逃げずにあの人たちを助けようとしたんだろうな」

「そんな、私はまだ悪魔を見てないからこんなことが言えるだけだよ。実際に目にすれば怖くてずっと丸まってるって」

「またまたあ、謙遜しちゃってえ」

小宮は笑いながら亜紀の肩を軽く押した。

近い！ もうすぐそこだ。

欲しい。

欲しい。

欲しい。

憎い。

憎い。

憎い……！

小宮が亜紀たちと出会う前にやり過ごした悪魔らしき者は、とうとう彼女を探し当てた。

臭いを頼りに真っ直ぐ小宮の元へと走り続ける。

彼は陸上の世界代表選手顔負けの速度で距離を潰し、あっという間に小宮の後ろ姿を視界に捉えた。

「——っ危ないっ！」

小宮はいきなり亜紀に突き飛ばされた。

コンマ数秒の差で、彼女が立っていた位置に悪魔の爪が振り下ろされる。

耳元の空気が切り裂かれる音を聞きながら、亜紀は襲撃者の姿をはつきりと間近で見た。

血管だらけの灰色の肌に、ほとんど眼球の全てが飛び出した血走った目、唇がなくなり、歯茎と歯が直に見えるようになった口、逆立った全身の毛は言うまでもなく、通常の人間の物とは全く逆に曲がった腕と足の関節。さらには額から突き出るように盛り上がった頭蓋骨の一部。

本当にこれが人間だったのか疑ってしまっほどの悪趣味な形態に、亜紀は手を口に当てて叫びそうになるのを必死に抑えた。

一方、亜紀の咄嗟の行動で命を取り留めていた小宮は、三十分ほど前に見たばかりの化け物との再開に息を呑んだ。

何で、何でこいつがここに！？ まさか、私を追ってきたの？

動揺する二人を尻目に、体内のイグマ増殖によって進化した悪魔LV、2は、その逆間接の腕と足を四足動物のごとく地面につけると、追撃に入った。

パツと見、前に伸ばしたように見える両腕は肘から先がそのまま下に折れ曲がり、大地を踏みつけている。

また、足も同様に膝から先が太ももの正面部向けて鋭角を作り、両腕と対象のアーチを形成していた。

エクソシストという映画では、悪魔に取り付かれた少女が上を向いたまま四足で階段を下りてくるシーンがある。この悪魔の姿は胴体を下を向いているものの、それに酷似していた。

四足歩行になったことで、悪魔LV、2は進化前よりも飛躍的に上昇したジャンプ力と速度を活かし、小宮が起き上がる間もなく飛び掛る。

「——くっ！」

小宮はゴロゴロと転がる様にして、その攻撃を紙一重でかわした。

「っ亜紀ちゃん！逃げて！」

こいつはヤバイ！ と直感で感じた小宮は、悟らを見捨てた負目のため、亜紀に先に逃げるように促した。しかし、亜紀はもちろん逃げようとはせず、近くにあった石を抱えると、悪魔LV、2に向かって投げつけた。

「この化けもんめ！！」

しかし、亜紀の攻撃が非力だったことに加え、元々身体能力が以上に高い悪魔LV、2に、そんな抵抗は何の意味もない。悪魔LV、2は避けようとせず、亜紀が放った石を片腕で弾いた。

「ギユアアアアア！」

攻撃されたことに腹を立てたのか、出目金のような目で亜紀を睨みつける。

「うつ……！」

生気を吸い取られるかの様に冷たい視線に、亜紀はビクついた。

「何してんの、早く逃げて！」

亜紀が全く逃げようとしないので、小宮は大声で叫んだ。

——こままじゃ、二人とも死んじゃう！

「小宮さん！ 私が劣りになってこいつを引き付けるから、その間に逃げて！」

「な、何だって！？」

亜紀の言葉に小宮は耳を疑った。

「私、高校時代陸上部だったから大丈夫だよ、任せて！」

「無理よ、逃げ切れる訳無いでしょ！」

——あの悪魔の速さは人間の比じゃない。いくら亜紀ちゃんが走るのが速くても、あれから逃げ切るなんて不可能よ！

だが、小宮の心配も裏腹に、亜紀は既に走り出す用意をしだした。

——助けなきゃ……！

小宮の頭に浮かんだのは、只それだけの単純な思いだった。

悟らを見捨てた償いだとか、自分の命の危険も省みず、優子や小宮のために危険な行動に走る亜紀に感化されたとか、そんな深いことを理由に持ったわけではない。

ただ亜紀を助きたい。あの子に死んで欲しくない。

その純粋な気持ちが無条件に小宮を動かしたのだ。

亜紀は今まさに走り出そうというときに、それを見た。

自分に襲い掛かるうとしていた悪魔Lv.2に、小宮が抱きついた姿を。

「小宮さんっ！？」

自分が何を言っていたのかは殆ど覚えていない。

ただ、そのときの小宮の優しそうな表情だけは鮮明に記憶に残っている。

何故ならば、その悲しそうな微笑は亜紀の母がしていたものだから。

小宮の最後と母の最期が重なった。

亜紀は走っていた。

悲しみから逃れるために。

恐怖から逃れるために。

母と小宮、二人の人間を自分の所為で殺してしまった罪悪感から逃げるために。

悪魔LV、2に抱きついた小宮は、そのまま相手を地面に押し付けると、所持していた尖った石で紅い両目を奪い取った。

そして、それを最後に悪魔の反撃に遭い、若干二十歳の短い人生を終えた。

両目を失った所為で、悪魔LV、2は亜紀の動きに反応しきれなくなったらしく、亜紀は上手く悪魔から逃げる事ができた。

——ごめんなさい……ごめんなさい……御免なさい。——小宮さん……！

心の中で何度謝っても亜紀の心は晴れない。ますます闇に沈み込むばかりだ。目からは大粒の涙が留め止めも無く溢れてくる。

「こんなの、嫌だよ……嫌だ」

亜紀は泣き崩れるように樹海の土に伏した。

「もう優子なんてどうだっていい！　お願い神様……私を家に帰して、帰してよ！」

白い上着が土で汚れるのにも構わず、亜紀は地面と抱き合い続けた。

どれくらいそうしていただろうか。

かなり近い所から突然耳障りな声が聞こえた。

「ギユアアアア！」

——嘘でしょ……何でここに居るって分かったの？ 目が見えないのに……！？

先ほど目の前で小宮を殺されたばかりの亜紀に、悪魔と戦う気はもう無かった。

まだ姿の見えない悪魔から恐怖に引きつった顔で逃げ出す。

この広い樹海にたった一人だけで見たこともない化け物から逃げているのだ。亜紀の恐怖は計り知れない。腰を抜かさずに走れていることすら奇跡に近かった。

「誰か、助けて！ お願ひ——……」

短い間に連続して恐怖を味わった亜紀の精神は、限界に近い。

腰を抜かすまではいかないものの、その足取りはおぼつかなかった。

土の下に石でも埋まっていたのか、それまでのなだらかな地面とは違う硬い土壌に突然足を踏み外してしまう。当然、亜紀は転んでしまった。

——しまった！ 殺される！

そう思ったときは既に遅かった。悪魔のものと思わしき影が亜紀の全身に覆いかぶさる。

「い、いやっ……！」

脳内で小宮の死の映像がリプレイされた。

「あの、大丈夫？」

突然、亜紀の耳に悪魔の醜い鳴き声……ではなく、若い男の声が

聞こえた。

「……………え、人間!？」

亜紀は相手の存在を確かめるべく伏せていた顔を上に上げた。眉に少しかかるくらいの緩やかな癖毛の黒髪、男にしては長い瞳と大きな目、一見美少年にも見えるが、少し太めの眉毛のおかげで男らしさを保っている。

どこか闇のあるその顔は、何か過去に辛い経験を持っていることを感じさせる。

目の前に、見たこともない精悍な青年が立っていた。

亜紀は一瞬男の姿に気を取られていたものの、相手が不思議そうに自分を見ていることに気がつき、慌てて立ち上がった。

「だ、大丈夫。ありがとう」

「よかった。死んでるのかと思ってヒヤヒヤしたよ」

男は優しい笑みを浮かべた。

「君も連門大学の学生？」

「連門? いや、私は……旅行者だよ。車が壊れちゃって……」

「そうか。災難だったな」

この異常な樹海内においてごく普通に振舞う青年に、亜紀は疑問を持った。

「貴方は？」

「君の名は？」

亜紀の問いに青年は問いで返してきた。

——この人……ちよつと変わってる?

「私は吉田亜紀」

「吉田さんか、よろしく」

青年は先ほどとは打って変って真面目そうな顔で挨拶した。そのまま謎の青年は歩き出そうとする。

亜紀は咄嗟に彼を引き止めた。

「ねえ、まだ貴方の名前を教えてもらって無いんだけど」

その言葉に青年は立ち止まると、亜紀の方を振り返った。

「あ、曲直悟だよ」

その時、木の合間から二人の立っている所に向かって、何の前触れもなく悪魔LV、2が飛び出してきた。

「きゃあ!？」

いきなりだったので亜紀は驚いたが、悟は彼女とは違って冷静に悪魔LV、2を見つめる。

「さがって、大丈夫だから!」

無表情でそういうと、悟は背中から木の杭を取り出した。

「大丈夫って!」

これまで悪魔から逃げてばかりいた亜紀は、悟の言葉を信じられなかった。

「君が追われているのは見てて分かったから。罠を張らせて貰った。俺たちに任せろ」

「俺たち……?」

既に悪魔LV、2との距離は殆ど無い。四足の化け物は二人に飛びかかるうとした。

が、その行動が成功することは無かった。

悪魔LV、2は身を屈めた瞬間、設置されていたらしい紐のようなものを足にひっつけた。

足に引っ張られた紐は悪魔に向かう形で左右の端を飛ばす。そのどちらにも燃えた松明がくくり付けられていた。

「ギヤアアア!？」

何かが足に引っかかったと感じた瞬間、自分の両側から燃え盛る枝が飛んできたため、悪魔は避ける間も無く炎に包まれた。

それと同時に左右から庄平と友が、正面から悟が、それぞれ槍や杭を持って悪魔に突っ込んだ。

小宮を殺した悪魔、亜紀に異常なほどの恐怖を植え付けた化け物は、一瞬の間にたった三人のヒーローに倒された。

<第七章> 3人のヒーロー（後書き）

作中で一応書いていますが、忘れやすいのでここに書いておきます。

曲直 悟 19歳

大井田 庄平 19歳

国鳥 友 21歳

キツネ 24歳

吉田 亜紀 18歳

<第八章> 銀野町（前書き）

女性の言葉使いがちょっと変だったので修正しました。

読みにくかったり、違和感を感じていた方、申し訳ありませんでした。

まだ完全に修正は終わっていませんが、前よりはましになったかと思えます。

< 第八章 > 銀野町

< 第八章 > 銀野町

悟、庄平、友の三人は、銀野町までもはや目と鼻の先といった距離まで来ていた。

僅かではあるものの、土の上にゴミなどが目に付くようになってきている。

「生存者だ……！」

あと少しで助かると思ったその時、悟は遠くの方にふらふらとした足取りで走る女性を発見した。

かなりの美人だったが、大量の涙で顔を歪めているため、その綺麗な容姿を台無しにしている。

——結構若いな。俺と同じ連門大学の学生か？

悟はすぐにでも声をかけようと思ったが、悪魔の気配を感じて踏み留まった。

「悟、どうした？」

急に立ち止まった悟を不審に思ったのか、友が聞いて来る。

「……悪魔か？」

「もうかなり近くに居る。多分あの子を追ってるんだ！」

悟は女性を見失わないように目を固定しつつ答えた。

「じゃあ、さっさと倒そうぜ！ 大抵の悪魔の攻略法はもう、大体分かってんだ。今の俺たちなら苦労せずに殺れる」

数時間前に死にかけていた姿はどこへやら、庄平は気楽そうに言った。

「待て庄平。何かこの悪魔、変だ」

「へ？ 変って何が？」

「上手く説明できないけど、何かヤバイ気がする」

——何だろう、この感じ……悪魔の冷たさをさらに大きくしたよう
な、まるで悪魔が成長したような感覚は……

「悟？」

「あ、ああ悪い。とにかく、用心しとこう。三本腕みたいな化け物
がいたんだ、今更何が出てても可笑しくない」

「お前がそういうのなら、本当にヤバいんだろうな。運よくにこっ
ちに向かってきているんだ、罨を張って置こうぜ」

三本腕の触手の感触がまだ体にありありと残っている庄平は身震
いしながらそう言った。

友の案で女性が逃げてくる直線上の左右の木の枝に、蔓に木片を
巻きつけた物を掛けた。木片には洞窟のゴミから手に入れ、ペット
ボトルに入れていた油をかけ、紐が引つ張られると同時にそれが悪
魔に巻きつくようにセツトした。

罨をセツトして間もなく悪魔の雄たけびが聞こえてくる。

三人が木の影に隠れると、同時に女性もこちらに駆けてきた。

女性は見事に罨を通り過ぎたところで転倒した。友がそうなるよ
うに土の中に仕掛けをしたのだ。

動きを止めてしまったことで、女性はかなり怯えているように見
える。

悟は女性が誤って罨に掛からないようにするためと、悪魔が女性
を見つけやすくするためにその女性に声をかけた。

「あの、大丈夫……？」

女性はいきなり現れた見知らぬ男にびっくりしたのか、じつと涙
目で悟を見つめる。

あまり女性に見つめられたことの無い悟は相手の行動に戸惑った。
亜紀の容姿もあってか、少し照れてしまう。

「だ、大丈夫。ありがとう」

やっと現状を理解したらしい女性が立ち上がる。

「よかった。死んでるのかと思ってヒヤヒヤしたよ」

悟は怖がらせないように精一杯の笑顔を作った。

「君も連門大学の学生？」

「連門？ いや、私は……旅行者だよ。車が壊れちゃって……」

「そうか、災難だったな」

こんなところに秘境の温泉でもあるのだろうか、といった疑問が頭をよぎりつつも、敢えて深くは聞かなかった。

「貴方は？」

女性が何か聞いているようだったが、悟は悪魔の気配が強くなったのを感じていたため、それに気づかなかった。

——……もうすぐだな。

つい今名前を聞かれたばかりだとも知らず、このまま黙っていることは相手を怖がらせてしまうと思った悟は質問に質問で返してしまった。

「君の名前は？」

「……私は吉田亜紀」

何故か不満そうに答える女性。

「吉田さんか、よろしく」

頭の中に高い耳鳴りが響く。第六感が敏感に警告を発したのだ。

——来たか。

悟は悪魔に備えて畏に近づいた。

「ねえ、まだあなたの名前を教えてもらって無いんだけど」

「あ、曲直悟だよ」

悟が答えると同時に、数メートル先に悪魔が飛び出す。亜紀が驚いて悲鳴を上げた。

「きゃあ!？」

「さがって、大丈夫だか!」

「大丈夫って……!」

悟の言葉が信じられないのか、亜紀は心配そうに言った。

「君が追われているのは見てて分かったから。畏を張らせて貰った。俺たちに任せろ」

「俺たち？」

悟は手に持ったばかりの木の杭を握り締めると、左右の木の影に潜んでいる二人に目で合図を送った。合図を受けた庄平と友は同時に手に持った蔓を引き、地面からそれを浮かばせる。そして、悪魔が突っ込んでくる寸前にライターで火をつけた。

悪魔は急に現れた蔓に足を取られ、見事に燃え盛る木片を引つ張った。

当たり前のように、木片は悪魔に巻きつく。

「ギャアアアア!?」

悪魔は避ける間もなく炎に包まれた。

—— 今だ!

悟、庄平、友の三人は悪魔が逃げ出すまえに倒そうと、それぞれの杭や槍で悪魔を貫いた。

灰色の胸に木の杭を刺しながら、悟は相手を見た。

眼球の周りの皮膚が全て無くなったのかと勘違いされそうな目、遠くからでもはつきり視認できる浮き出た血管、獣のように四肢で歩く姿。その全ての要素が悟に嫌悪感を抱かせる。

—— 化け物め!

悟はまだ息のある悪魔LV、2に止めを刺そうと、杭に力を込めかけた。

だが、その瞬間、悟は予期しなかったものを目にした。

それは、悪魔のボロボロのズボンについている十字架のキーホルダーだった。

「ま、まさか……! 嘘だろ!？」

全身の力が抜け、目の前が真っ白になる悟。

「お、おい!？」

「うわっ!」

急に悟が力を抜いたため、友と庄平はバランスを崩してしまった。勿論、悪魔LV、2はそのチャンス逃さない。体勢を崩した二人を突き飛ばすと、一目散に森の中へと逃げて行く。

その光景を悔しそうに眺めると、友は今だに放心状態の悟に掴み

かった。

「何しているんだ！ あそこで力を抜くなんて…… あいつは間違はなく博士が言っていた悪魔の進化版だ。今逃がせばさらに強力にしてみうんだぞ！？」

友の怒りの表情にも悟は無反応で下を見つめ続ける。

「さ、悟……どうした？」

普段とあまりにも違う悟りの様子に、庄平は遠慮がちに聞いた。

「……— だった」

ボソッと呟く悟。

「え？ 何？」

庄平は悟の声があまりに小さかったので聞き返す。悟はその問いに顔を上げると、絶望的な表情で口を開いた。

「あの悪魔…… 鈴野だった」

銀野町。

富山県内で比較的樹海に近いところにあるこの町は、町と言っには随分チャチな集落だった。

町の中にある建物は殆どが一階か二階建てであり、それも年季を積んでいる物ばかりだ。

総人口五百人。明らかに村と読んだ方が正しい数字だったが、住民達が田舎くさいと反対したため、二年ほど前に銀野村から銀野町へと改名し、こうなっている。

悟、亜紀、庄平、友は、町に踏み入れた瞬間、そのあまりの状態

に落胆した。

人の気配など一切なく、ところどころに血の跡がある。悪魔の襲撃を受けたのは明らかだった。

「何だよ。結局はここも襲われてたのか。一体何のためにここまで来たんだか……」

庄平は頭に手を当てながら座り込んだ。

——もう、御終いだ。この町が最後の希望だったのに……これじゃ、俺たちは死ぬしかないじゃんか。

先ほど悟から鈴野の悪魔化を知らされたショックもあってか、庄平の落ち込みは半端ない。

だが、それは他の人間も同様だった。

全員がここに来れば助かると信じていた。きっと誰かが助けられると、自分たちを地獄から救い出してくれると。

しかし、その思いは無残にも崩れ去ってしまった。

最悪の形で。

「とにかく、もう六時過ぎだ。どこか休める所を探そう」

皆が一言も発しないので、友が暗い雰囲気から逃れるように言った。

四人は町の中でも一際破損が薄い家を寢床に選んだ。

二階建てで部屋数は四つ、うち二つはリビングと和室といった一軒家だ。

冷蔵庫に残っていた食料で軽い食事を終えると、疲れが溜まっていたのか、ほとんどの人間が睡魔に襲われた。

離れ離れで寝ると何かあったとき困るので、全員が和室で睡眠を取ることにし、まだ九時前だというのに布団に潜った。

友はすぐに寝てしまったが、鈴野が悪魔になってしまった悲しみと憤りの所為で、悟と庄平は中々寝付けなかった。

庄平は夕方に散々気持ちを発散した所為である程度は落ち着いていたが、横になっていると鈴野のことばかり思い出してしまつらしく、天井をじつと見つめている。

一方、自分の感情を押し隠す癖のある悟は、布団を顔まで被り、悲しみに耐えていた。

「……鈴野」

誰にも聞こえないように、悟は小さな声で親友の名を呼んだ。

『俺もさ、両親が離婚してるんだ。』

『色々大変だと思うけど、きつと乗り切れるよ。俺もそうだったから』

「畜生……！」

布団の中にいることをいいことに、大粒の涙を流し号泣する悟。無理やり声を押し隠している所為で、不自然に布団が震える。

亜紀は三人に助けられた後にこの樹海で起きていることを聞き、それでも負けずに生きようとする三人を強いと思つていいた。

だが、こうして悟が悲しんでいる姿を見ると、彼らも辛いのだと実感させられた。

自分や友、庄平の前では強がってはいたが、やっぱり悟も苦しんでいるだろう。

みんなが感情的になっているときは、必死にその怒りや悲しみを抑えて冷静に行動する。

自分も泣きたいのに、苦しいのに、叫びたいのに……みんなのためにそれに耐える。

そんなことを続けていれば、いつか我慢できなくなって壊れてしまつたろう。

亜紀は自分も悟と同じタイプの人間だから、その感情を押し潰す

辛さも、痛みも、苦しみも、全て自分の気持ちのように分かった。
嗚咽を漏らす悟。

暗い部屋の中、同じく小宮の死のショックで眠れなかった亜紀は、その様子をじっと見ていた。

樹海内銀野町、某建物の地下。ここは元々は食料庫として建設されたものののだが、地震の時や火災のときなどの非常用避難場所としても活用されていた。

三ヶ月前の富山大震災の時、多くの住民がここで夜を過ごしたという事実もあるほどだ。

小学校の体育館ほどの大きさのその地下室に、現在似つかわしくないほどのモニターが置かれていた。元々在ったものではなく、一ヶ月前に持ち込まれたものだ。

モニターの前にはカッコイイつもりなのか、顎鬚を生やした四十代の男が足を前に突き出して座っている。男は懷からタバコを取り出すと、楽しむかのようにゆっくりとそれを口に含んだ。

男の薄ひげだらけの口から白い煙が逃げ出すと時を同じくして、背後に数人の人間が現れた。

「広野さん。高橋志郎と猟銃を持っていた人間、それと新種の生物を捕まえました。いかがいたしますか？」

イミュニティーの調査員であり、今回の樹海保管計画を任された男、広野大地はその声に振り向く。

「高橋博士はまだ殺すな、聞きたいことがある。後の人間は好きに

しろ」

「あの、新種の生物の方は？」

「……どんな生き物なんだ？」

恐る恐る尋ねるイミユニティーの新米。

その問いに、広野はあまり興味がなさそうに応じた。

「媒体となった人間の名前は大森陽一。連門大学の二年生ですね。

悪魔からの逃走中に三本腕の体内に取り込まれたらしく、細胞内に三本腕の因子を植えつけられています。数時間前にその因子が発症し、偶然遭遇した高橋博士と戦闘していた所を我々で捕獲しました」

「三本腕というと、この樹海ブラックドメインから見つかったばかりの新種の生物か。相手を自分の体内に入れることで、まるで調整槽のように遺伝子を改造するとは、また随分悪趣味な感染法だな」

「このまま時間が経過すれば三本腕の因子が成長し、ほとんど母体と変わらないモノになると予想されます。我々としては、そうなる前に研究所に持ち運びたいのですが……」

「分かった、ヘリを用意する。この銀野町には止められそうにないから、予定通り電波塔の方に向かえ。あそこなら十分な広さがある」

「了解しました」

「……——ちよつと待て」

新米はすぐに命令に取り掛かろうとしたが、広野に呼び止められた。

「あの男は——キツネは今どうしている？」

「黒服ですか？ 彼なら任務のために『割り出し』に掛かっていますか」

「……ならいい」

それっきり広野が黙ったので、新米はもう行けということだろうと受け取り、さっさとその場を後にした。

広野はモニターのチャンネルを変えると、そこに映し出されたばかりの任務中のキツネを凝視する。

「キツネ……あの男、絶対何かを企んでいる」

ブラックドメイン発見時に必ず黒服のメンバーを一人連れることは、イミユニティーと黒服の初期契約で決まっている。それはもはや固定規約のようなものであり、今更変えることは出来ない。イミユニティーも随分黒服にはお世話になっている以上、それに異を唱えることは不可能なのだ。

「よりによって、何であの男なんだ？」

黒服は数千人のメンバーを抱える大集団というわけではないが、それなりの人員は居る。

広野から見れば、今回の仕事だって新しいブラックドメインの発見という、本来ならばキツネなんて若造よりも、もっと経験をつんだ熟練の人間が来るのが妥当だった。

「あんなまだ三十にも満たない若者を寄こすなんて……黒服の奴らも、上の人間も何を考えているんだ？」

——あの男には経験の無さを凌駕する何かがあるのか？

広野はいくら考えてもその答えを導き出せなかった。

深夜二時、友は誰かが話をしているような音を聞き、目を覚ました。

その声は二人組みのようで、丁度自分達が止まっているこの家の前を歩いているようだ。

声からすると、恐らく男一人、女一人のペアだろう。

——住民の生存者か？

友は声の主を確かめようと、暗い部屋の中を音を立てずに歩き窓の外に目を向けた。しかし、足元が良く見えなかったため窓際に寝ていた庄平の太ももを思いっきり踏みつけてしまった。

「あうぐあん!？」

庄平は産卵中の亀のような悲痛な表情で悲鳴を上げた。

「——っち、庄平、静かにしろ!」

友は踏みつけたことを謝りもせず、庄平を怒鳴りつけた。

「ゆ、友……何してんだよ……!」

目に涙を湛え友を睨む庄平。

「外に誰か居る。町民かもしれない」

「まさかあー、悪魔じゃないか？」

「いや、あれは確かに人間の話し声だった。——くそ、もう居ない」
そう言つと、友はすぐにでも外に出て行こうとした。家で手に入れた武器入りのリュックを背負う。

「お、おい、どこ行くんだよ!」

「生存者の可能性があるだろ？確かめて来る」

「確かめて来るって……」

「心配するな。相手は人間なんだ。命の危険はない」

庄平がいくら止めようとするのも無視し、友は家を出て行こうとする。悪魔が居るかも知れない町の中を、しかもこんな夜中に一人で行かせる訳にもいかず、しかたがなく庄平も体を起こす。

「——っ畜生、俺も行くよ。ちよつと待っててくれ」

もし悪魔がいれば、友一人だけでは危険すぎる。まして今はLV2までいるのだ。

夕方は不意打ちで追い払えたからいいものの、次もそう上手くいくとは思えない。

悟らを残すことも心配だったが、少し周囲をみて戻ればいいと考え、二人は置いていくことにした。

庄平は素早く身支度をする、友に向き直った。

「よし、いいぜ。行こう!」

「曲直君、起きて！ねえ、起きてっ！」

悟は聞きなれない音で意識を呼び戻された。

——こんな目覚まし買ったけ？

そのまま寝ぼけたままの状態で気だるそうに瞼を開ける。

どうやら布団の中に丸まって寝ている悟を誰かが揺らしていたようだ。眩しさに目を細めながらゆっくりと上を向くと、すぐ前に亜紀の顔があつた。

「う、うわあああ！？」

「きゃあ！？」

悟がいきなり布団から飛び出したので、亜紀は驚いて悲鳴を上げた。

「う、ごめん。吉田さん」

まだドキドキする心臓を必死に押さえながら、悟は立ち上がった。悟は女性に対してほとんど免疫がない。手を繋いだことだって小学校の運動会以来一回も無いほどだ。勿論、誰かと親しい仲間になった事も無い。

別に女性嫌いとか、モテなかったとかそういう訳ではなく、これまで女つ気の全く無い生活を送っていたからだ。

中高生の間はずっと男子校、部活は帰宅部で、家に帰るとすぐに生活のためのアルバイトに行く。

そのアルバイトもビルの警備員という、男だらけの環境だったため、悟は大学に入るまで女性との接点は薄かった。

だから目をあけてすぐに亜紀の綺麗な顔を目にした悟の反応は、

当然といえば当然のものだ。

「もう、ビックリした」

亜紀は悟の行動に怒ることはせずに笑顔で答えた。

「えーと、吉田さん。どうしたの？」

悟は動揺を隠すように言葉を発した。

今だ治まらない心臓の音を感じながら、大学に入って四ヶ月経ったくらいではまだまだ女性に慣れてはいないのでと再認識する。

——会話だけなら普通に出来るんだけど、今みたいに接近するとやっぱ刺激が強いな……。

亜紀は悟のそんな心情にはまったく気がつかずに会話を続ける。今さっき笑っていた笑顔はどこえやら、その表情はどこか暗い。

「——あのね、友さんと大井田君がいなくなってるの」

「え!？」

悟は事実を確かめるべく部屋の中を見渡したが、確かにどこにも二人の姿は無い。

——あいつら、どこにいったんだよ!？」

「二階にも居なかった？」

「うん、二階もこの近くも一通りみたけど、どこにも居なかった。どこに居ちゃったんだろうね」

「え、外を見てきたの？」

悟は亜紀が一人で出歩いてきたことを知り、心底意外そうに聞いた。た。

「だって、散歩とか周囲の探索とかしにいったかもしれないじゃん?」

——……すごいな。

悟は亜紀が御しとやかな顔に似合わず根性があることを知り、驚いた。恐らく庄平だったのならば、泣きそうな顔をしながら、一緒に行動するように頼んでくるだろうだろう。

「曲直君、どうする?」

悟が和室のと真ん中に立ったままボーとしていたので、亜紀が怪

訝な顔をしながら聞いてきた。

「ここに戻ってくるかもしれないし、下手に動くのはよそう。森のほうに武器の材料を取りに行ってる可能性もあるから」

「分かった、そうだね。まだ何とも言えない状況だし。あ、お腹すいてない？ 私朝ごはん作るよ」

「本当？ ありがとう。じゃあ、お願いするよ」

悟は今までに感じたことの無い感覚に戸惑いつつも、笑顔で答えた。

亜紀が作ったフレンチトーストとコーヒーを平らげ、その後二時間ほど悠々と和室で時間を潰していても、庄平と友が帰ってくることは無かった。

いくら何でも遅すぎる。さすがにこれはおかしいと思った悟と亜紀は、家の中から使えそうなものをかき集めると、すぐに二人を探しに出かけた。

「やつぱりどこにもいないね……」

「ああ、本当にどこに行っちゃったんだよ」

町の中の殆どの家の中を見ても、二人の姿は無い。

「あの家で最後だな」

悟は町の中心部にある目立たない小さな一階建ての家に体を向けた。町の中心にある広い空間を、円形に囲むように広がっている他の家とは違い、その家は良く目を凝らさなければ気づかれないかのように、他の家の影に建てられている。

二人は無言で家の敷地に浸入すると、窓を割って家の内部に入った。もう幾つかの家でも繰り返してきた動作だ。悟は慣れた手つきで探索をする。

部屋数もすくなく、一つ一つの部屋の大きさも小さいため、数分で調べ終わると思った。

搜索作業を半分ほど終わらせても、予想通り人の気配は無い。

——ここもだめか。町に居ないとなると、森の方にいったのか？
でも何で？ 町中を歩いたけど悪魔の一匹も見なかったから、逃

げて遠くにいったってことは無いだろうし……

ガタン！

何の前置きも無く、大きな音が家の中に反響した。

「っ！？」

亜紀は思わず悟に飛びついてしまう。悟は物音の驚きと、亜紀に抱きつかれた驚きで一瞬息が出来なくなった。

「と、トイレの中に何かいる……！」

亜紀が悟にしか聞こえない声で呟く。

「み、見てみよう」

悟は恐怖とは別の意味で高ぶる心臓を押さえながら、ゆつくりとトイレに歩み寄った。その際も亜紀がずっと腕にしがみ付いていた為、少し動きにくかったのだが、動揺している悟には彼女を離す言葉が見つからない。

悟は慎重に、茶色い木製のトイレの扉に耳を押し付けた。

「……スウ……スウ……」

微かだが、生き物にしか出せない独特の息遣いが聞こえる。

——確かに何か居るな。人間か、それとも悪魔か……。

悟は亜紀を背に隠すように立つと、力の限り扉を蹴りつけた。鈍い音と共に、扉の蝶番が吹き飛ぶ。

と、同時に男の悲鳴が聞こえた。

「うやああああん！？」

トイレの中には、便座の上に体育座りのカッパで三十代らしき男が座っていた。

< 第九章 > 乱戦（前書き）

ご承知かと思いますが、この作品内の樹海は作者のオリジナルであり、富士山の麓の青木ヶ原とは別物です。

<第九章> 乱戦

<第九話> ” 乱戦 ”

「……すいませんでした」

野性味溢れる臭いが詰まっている家畜小屋の中で、友と庄平が最初に聞いた言葉は謝罪だった。

まだ痛みと熱が収まらない額を押さえながら、友はその言葉の主を見る。

優しそうな見た目に似合わない屈強な体格、高い背、力強い目。服装こそ今時の若者が着る様なラフな物だったが、明らかに何かの格闘技をやっている事が見て取れる。潰れた耳から推測すると、柔道だろうか。

心底申し訳なさそうに誤るその男の隣には、こちらの様子を不安げに見ている女性がいた。

庄平と同年齢かそれ以下と思わしきその人物は、美人でもそれ以下でもなく、まさしく一般的な女性だ。

深夜に怪しい声を聞き外に出た友と庄平は、すぐにこの二人、安形と優子を見つけ後をつけた。

さつさと声をかけても良かったのだが、一応安全な人間かどうか確かめようとしたのが災いした。

警察内でもエリートに属する安形は自分たちが尾行されていることに気がつくと、道を曲がったように見せかけて友と庄平に不意打ちを食らわした。

「ぐふあうん!?」

「うっ——!?!」

小型携帯銃、デリンジャーのグリップで頭を強打された二人は、

反撃する間もなく夢の世界へと旅立って行く。

「あれ、誰だこいつら？」

気絶させた後で、安形は二人が鈴木らではないことに気がついた。夕方に鈴木らの目の前から全力疾走して逃げたばかりの安形は、尾行の相手を買っ先に彼らだと思ってしまうたのだ。

このまま二人を放置すれば悪魔に殺されてしまう危険があるし、かといって町の中の家隠れたのではすぐに鈴木らに見つかってしまう。

安形は仕方なく優子と協力して、二人をこの町から少しだけ離れた家畜小屋まで連れて来た。

この小屋は長方形に木製の柵で囲まれており、それをさらに取り巻く形で樹海の森が広がっている。本来ならばここに住んでいたはずの牛や豚は、悪魔に食われてもしたのだろうか、どこにも姿がなかった。

そして現在。

「そんなに気にしないでください。黙って後をつけた僕たちも悪いのですから」

丁寧な謝り続ける安形を友が止める。

「そうっすよ、安形さん。そんなことよりも今は悟らに俺たちが無事だっことを知らせないと」

「悟？ 他にも誰かいるのか。いや、そもそも君たちはこんな誰もいない町で何をしているんだ？」

住民が存在しない町、場違いな学生、血まみれの壁や地面……安形と優子にとっては分からないことだらけだった。

「詳しく話すと長くなりますから、簡単に説明します」

友の簡潔かつ要点を的確についた説明を聞いた後の二人の反応は、意外にも好感触だった。

いくら説得力のある友が説明したとはいえ、普通なら悪魔が徘徊しているなどと簡単に信じることはできる訳がない。だが、先日明

らかに何かの巨大生物らしきものに襲われた車と町の現状を目の当たりにした二人は、完全とはいえないまでも、ある程度理解してくれたようだった。

「まだ完全に信じた訳じゃないけど、一応危険そうだということはわかった。だったらすぐにでも君たちの友人の所に向かおう」

「ありがとうございます。正直、ここまで理解を持ってくれるとは思いませんでした」

二人の反応を意外に思いつつも、友はそれに感謝した。

「よし、そうと決まればさっさと行こうぜ」

悟らが心配だった庄平は率先して家畜小屋から出る。

同年代よりもすこしサイズの大きめの足が朝日を浴びて緑色に輝く夏草を踏んだとき、庄平は何か動くものを森の方に見た。

「っあ！」

それが何かわかった庄平は、慌てて入口に立てかけてあった桑くわを手取る。

「友、悪魔だ！」

「……まったく、また随分いきなりだな。安形さん、さっそく来ましたよ。その桑を使ってください」

安形に桑を取るように指示しつつ、友は先日泊まった家出作った槍を構える。これは今までの物とは違い、先端は尖った石でも削った木でも無く、包丁をそのまま鉄パイプにくくり付けた物だ。友はこの武器はまだ温存しようかと思ったものの、町に戻ればいくらでも包丁が手に入ると考え使用に踏み切った。

臭いを感知したのか、声を聞きつけたのか、悪魔は徐々に小屋に向かって歩いてくる。庄平は半開きにした小屋の入り口からその様子を盗み見た。

「よ、よりによってLV、2かよ！」

先ほどは気がつかなかったが、良く見ると悪魔は四足で歩いていた。

庄平のセリフと、悪魔LV、2の異様な姿から安形は冷や汗を流

す。

「な、何だLV、2つて？」

「あいつらは時間が経つごとに進化してしまうようなんです。今あそこにいるのは普通の悪魔ではなくて、その進化形態みたいですね」友が冷静に解説する。

「進化だつて？」

「あ、安形さん。私はどうしたら？」

戦闘の準備をしていた三人を他所に、優子はひとり小屋の中で戸惑っていた。

「優子ちゃん。君はその藁の中に隠れているんだ」

安形は上ずりそうになる自分の声を何とか制御してそう言った。

「分かりました。死なないでくださいね……！」

「ああ、心配しなくても大丈夫だよ。それでも幾つもの修羅場を経験しているんだ」

——とは言つても、相手は普通の人間だったけど。

「庄平、俺が囃役をやる。後ろは任せたぞ」

「ああ！」

藁の山に隠れる優子とそれを見守る安形を片隅に、友と庄平は対悪魔戦法に入った。

悟が抜けたため、今回はいつもよりも慎重に行う必要がある。心なしか二人とも緊張していた。

入り口の扉の前にいる友を挟んで左に安形、右に庄平と陣取り、悪魔LV、2に備える。

心の用意を済ませると、友は悪魔を挑発した。

「こつちだ、化け物め！」

柵と小屋の間を歩いていた悪魔LV、2は、声に反応してすかさずこちらに迫って来る。

「ギユアアアアア！」

友は相手の姿が眼前に見えた瞬間に思いっきりしゃがんだ。勢い良く飛び掛った悪魔LV、2は友の頭を越えようと、小屋の中に着地

した。その隙を狙って左右から庄平と安形がそれぞれ桑を突き出す。しかし、進化した悪魔LV、2は前まではかわし切れなかったはずのその攻撃を、さらりと避けてしまった。

鈍い金属音が鳴る。悪魔がコンマ数秒前まで存在した位置で高い音を響かせながら、二人の桑はその身を打ち付けた。

「うつ！」

安形は手に伝わる衝撃で咄嗟に片腕を桑から離してしまった。悪魔LV、2はそれを見逃さない。桑を避けた勢いのまま後ろの地面を蹴ると、安形に向かって体当たりを食らわした。

「ぐつああつ！？」

強靱な四足の力で小屋の壁に激突させられた安形は、口から唾液を吐き出しながら痛み顔に顔を歪める。

「止める！」

尚も執拗に安形を狙おうとする悪魔LV、2を友の槍が遮った。

横からなぎ払うかのように振られた槍を悪魔LV、2がかわずと同時に、その背後に庄平の桑が迫る。

「つえいしやらー！」

「ギユアア！」

だが、普通の悪魔ならしとめられていただろうこの攻撃も、LV2は難なく身をしゃがませ避けてしまった。

「な、マジかよ！？」

あまりにも俊敏な動きに庄平は目を丸くする。

しゃがんだ勢いで力いっぱい庄平の腹に自身の爪を繰り出す悪魔LV、2。

庄平はその攻撃をかわすことが出来ず、ギリギリで桑で防いだが、悪魔の力に押され倒れてしまった。それをみた悪魔LV、2は待つてましたとばかりに庄平の上に飛び乗る。

首元に接近を試みる邪悪な牙を必死に止めようとする庄平。だが、悪魔LV、2と庄平では筋力の差がありすぎた。

「ぎゃああああー！」

ガブリと庄平の肩に悪魔の歯が食い込む。自分の肉が裂かれ、異物が侵入する苦痛に悲痛な悲鳴が上がる。

「庄平！」

友はすぐに悪魔LV、2を退かそうとしたが、突き出した槍はあっさりと驚掴みにされてしまった。

「く、この！」

友がどんなに力を込めようと槍は全く動かない。この状態が続けば、すぐにでも庄平は死んでしまうだろう。いや、例え死ななくても十秒感染によって悪魔化してしまう危険もある。むしろそっちの方が可能性は高い。

掴み続けることに飽きたのか、悪魔LV、2は槍を引っ張ると、その延長線上にある友の首に手を伸ばした。

「……………あがが、が……………」

凄まじい力で首を締め付けられる友。

——く、ここまでか……………！　どうやら庄平だけでなく自分も悪魔の仲間入りをしそうだ。

遠のきかけた意識の中、庄平と友の耳に小屋を多い尽くすほどのものすごい音が聞こえた。その音の木霊が消えると同時に悪魔の体から力が抜ける。

「げほ、げほつ、……………はあ、はあ？」

悪魔LV、2を蹴飛ばすように離れた友は、白煙を上げる銃を構えた安形を視界に捕らえた。

「け、拳銃か……………はあ……………　そういえば刑事なんだつたな」

——助かった。銃がなかったら完全に死んでいた。

「二人とも大丈夫か？」

壁に打ち付けた痛みからか、安形は片手で自分の肩を抱きながら尋ねた。

「何とか大丈夫だ」

余裕が無いのか、嫌いなのかは分からないが、友は既に敬語を止めている。

即座に返事をした友とは異なり、庄平から返事は無かった。地面にうずくまったまま黙っている。

——ま、まさか……悪魔化してはいないだろうな。

友は気を揉みながら庄平の顔を覗く。刹那、ガバツ、と起きた庄平に掴みかかれた。

「うおおお!？」

友は思わず腰にくくりつけてある包丁に手を伸ばしかけたが、庄平の顔を見て辛うじて踏みとどまった。

「……何をするんだ。離してくれ」

友が呆れた目で見るにも関わらず、庄平は抱きついた手を離さない。

「友! 俺マジで今度こそ死ぬかと思ったぜ。ああ、すげー怖かった!」

「悪いが、男に涙目で抱きつかれる趣味なんて無いんだが」

死に掛けた恐怖で抱きついてきた庄平を強引に遠ざけると、友は安形に向き直った。

「安形さん、ありがとう。間一髪だった」

「ああ、本当に危なかった。あれが悪魔か。まったくなんて生き物が存在るんだよ」

「安形さんの話だと昨日はいなかったのに……何故今更この町に戻って来たんだろうな」

「何か怖い奴からでも逃げてじた来たんじゃないかね?」

さっきまでの泣き顔は何処へやら、庄平が冗談っぽく答える。

「はは、正平君じゃないんだから」

安形は面白そうに笑った。

「ど、どという意味っすか!」

「そういう意味だよ。あ、優子ちゃん! もう安全だ。出てきてもいいぞ」

庄平の反抗を軽くないなすと、安形は藁山に隠れている優子を呼んだ。

——怖い奴……？

友の頭には庄平の言葉が何故かひっかっていたが、何が気に掛かるのかは自分でも分からなかった。

「あ、安形さん——」

藁から出て来た優子は悪魔を倒せたばかりだというのに、妙に青白い顔で安形を見た。髪や自分の洋服の所々に藁がくっ付いていることなど気にも留めず、怯えた表情で三人を見る。その異常さに安形は何か不安なものを感じ取った。

「どうしたんだ？ 優子ちゃん」

「わ、私みんなが戦っている間怖くてアッチコッチを見てたの。それでこっつて見たとおりボロボロの小屋でしょ、だから隙間から外の風景とか簡単に見えるんだけど——……」

これから何か不吉なことを言われると、誰もが優子の雰囲気から感じ取った。

「な、何を見たんだよ？」

庄平が不安感から声を裏返らせて聞く。

「優子ちゃん。教えてくれ外が何なんだ？」

優子が言いよんでいるので、安形は少し強い調子で聞いた。その声に覚悟を決めたのか、優子が震える声で口を開ける。

「……今この小屋、何匹もの悪魔に囲まれているの」

「あの、何方どなたですか？」

我ながら場違いな質問だと思いつつも、悟はトイレに籠っていた男に質問した。

「あ、私、白井直人しろいなおとといひます。一応、この家の主です」

「はあ、そうなんですか」

「ええ、そうなんですよ」

——何だこの会話は？ と自分で不思議がりながらも悟は話を続ける。

「ここで何をしてるんです？」

「隠れてました。外は悪魔みたいな奴らが居るので」

「え、でも私達ここに着てから十時間以上は経ってますけど、悪魔なんて居ませんでしたよ」

謎の男の言葉に亜紀が当たり前の疑問を持つ。

「ああ、それは今だけです。今はブラックドックが町の周囲をうろついているから、奴ら怖がって入って来れないんです」

「ブラックドック？ それってもしかして大きな黒い犬の怪物のことですか？」

昨日の夕方の恐怖が記憶に新しい亜紀は、すぐに男の言っているモノが巨狼だと分かった。

「そうです、そうです！ 悪魔の奴ら、昨日の夕方にあの犬っ子ろが姿を見せてから、てんでこの町で姿を見かけなくなっただんです。いつあの犬が離れるかも分からなかった私はずっとここに隠れていたんです。悪魔が外にいないってことはまだあの犬、町の外にいるみたいですね」

「え」と、白井さん。悪魔の襲撃を受けてからずっとこのトイレに隠れていたんですか？」

ふと気になった悟は思ったことを聞いてみた。

「ええ、そうですけど、それが何か？」

——根性が無いというか、何というか……。

悟は白井の行動に苦笑いした。

町の様子を見てきた悟はこの銀野町が襲撃されたのは少なくとも一週間以上前だと確信していた。食料の日付け、賞味期限、家の荒れ具合……根拠は言っても限が無い。それ程長い間、この男は助け

を探しにも行かずにずっと一人でトイレにこもっていたというのだろうか。疑問に思う。

悟の隣に居る亜紀、も何を言ったらいいのか分からない顔をしている。

「ところで、貴方達は何なんですか？ 村……この町で見たことは無い顔ですが」

「旅行者みたいなものです」

悟が何かを言う前に亜紀が即答した。

「旅行者ですか、あなたたちも運が悪かったですね。こんな時に来さえしなければきっと楽しい夏休みを満喫できていたでしょうに」

白井はワザとらしいくらい残念そうに言った。

「もう過ぎてしまったことです。今はここから生きて帰ることが第一ですよ。俺たち二人は離れ離れになってしまった仲間を探しに行きますけど、白井さんはどうしますか？」

「このままここにいるのも助かりそうに無いですし……同行しましょう。と言っても、本音をいえばもうトイレには隠れられそうにありませんからね」

白井は床に転がっている破壊されたドアを見る。

「あ、すいませんでした」

「いいですよ、どうせ食料も尽きたところでどうしようか迷っていましたから」

白井は何かを吹っ切ったように言った。

「じゃあ、さつさといきましょう。友達も心配ですから」

亜紀は軽く微笑むと、先行して家を出ようとした。トイレの前の狭い廊下からすぐ左側にある入り口の扉に手をかける。

「んっ！？ 待て、吉田さん！」

「え？」

悟が叫んだ時にはもう遅かった。

「ギョアアアア！」

扉を開けた亜紀の目の前に、悪魔ＬＶ１が立っていた。

「きゃあっ!？」

悪魔の爪は瞬時に亜紀の頭に振り下ろされたが、悟が腕を引っ張ったことで亜紀は服の一部を切り裂かれただけですんだ。

「ひ、ひひいいい!？」

真後ろで悲鳴を上げている白井を無視し、悟は亜紀を背に隠すと腰の包丁を抜く。悪魔と一対一で戦うのは初めてだったが、不思議と悟に恐怖は無かった。

玄関の地面を蹴り、悪魔に走りよりながら包丁を間一門に斬り付ける。そして予想した通り、悪魔がそれを後ろに下がりかわした瞬間を見計らって、その灰色の胸を矢のごとく蹴りつけた。

「グギユエエ!？」

包丁に注意を集中させていた悪魔はそのけりに対応出来ず、見事に家の外に吹き飛ばされた。

「鈴野の仇撃ちだ……!」

悪魔が起き上がる前に止めを刺そうと、追撃を繰り出す悟。だが、悪魔は寝たままの姿勢から飛び上がるように立ち上がると目の前に渾身のナックルを振り下ろした。

もし、相手が普通の人間だったのなら、友だったのなら、庄平だったのなら、この攻撃は綺麗に彼らの顔面を強打していただろう。しかし、今悪魔が相手にしている男は普通の人間では無かった。

悪魔が拳をふる前に、悟は次の悪魔の攻撃が分かっていた。

どのタイミングで、どの角度で、どのくらいの力で、速度で……

攻撃が起こる事前に全ての相手の動作を感覚が教えてくれる。

悟は紙一重ながらも、何とか悪魔の攻撃をかわし続けた。

「す、すごい……!」

亜紀は悟の動きに目を奪われた。

決して悟の動きが速いわけでも、悪魔が遅いわけでもないのだが、傍からは悟の動きに悪魔が置いてかれているように見える。

「ほっ……」

その横では白井が値踏みするような目で悟を見ていたが、戦いに

集中している二人は気づくことが無かった。

悪魔になれた所為か、冷静になったおかげか、理由は不明だが、自分の第六感がこれまでの人生で感じた何倍も機能しているのが分かる。悟は面白いくらいに悪魔の動きが読めることで、自分に対する恐怖と、悪魔と渡り合っている喜びとの間で揺れていた。

「ギイイイ！」

悔しさからか、怒りからか、そういった感情があるのかは分からないが、悪魔はしゃがむに爪を振り回す。しかしいくら振り回してもそれが相手を捕らえることは無い。

「ウオオオオオオ！」

ドスツ。

悪魔の大振りな拳が風を斬った瞬間、その胸に包丁が突き刺さった。どす黒い血が口と心臓に空いた穴から並々と吐き出される。

悪魔はそれ以上、動く事は無く、あっさりと倒れた。

「や、やった……！」

全身を汗だくにしながら悟はその場にしゃがみ込んだ。

——倒した……悪魔を。

「曲直君」

亜紀は心配と喜びが入り混じった声で呼びかけると、悟に近づいた。

「はあ、はあ、吉田さん、大丈夫だった？」

「私は大丈夫。それよりも曲直君も怪我はない？」

「俺も平気だよ。かすり傷なら幾らかあるけど、こいつの攻撃は一撃も貰ってないから」

「しかし、曲直君ってすごいね。ビックリしたよ」

「はは、自分でも信じられないよ」

悟は心底そう思っているらしく、何度も悪魔の死体に視線を走らせていた。

「汗すごいけど、拭いてあげよっか？」

亜紀は過度の集中による精神的疲労から来た悟の汗を見てそう言

った。

「え？」

悟がその言葉の意味を理解するよりも早く、亜紀はハンカチを悟の顔に当て汗を拭いだした。

慣れない女性に、しかもかなりの美人である亜紀に顔を拭いてもらい、悟の顔は急激に赤くなってくる。

「本当に大丈夫？」

亜紀は悟のその反応が息切れから来たものだと思い、心配そうに顔を覗く。その動作で悟の顔はますます熱を帯びた。

「だ、大丈夫だって、ありがとう。もう汗は出てないから！」

照れ隠しだとバレバレの態度で立ち上がる悟。亜紀はその背中を不思議そうに見た。

「あゝあ、お二人さん。カップルの邪魔をしたくは無いんですが、どうやらそういう訳にもいなくなっただけですよ」

悟と亜紀が恋仲だと勘違いしたらしい白井は、町の中心広場を挟んで向かいにある家々の方を見ながらそう言った。

「か、カップルって――」

亜紀は頬を染めながら反論しようと顔を上げた瞬間、絶句した。
「嘘でしょ……」

向かいの家々からは、五匹の悪魔がこちら目掛けゆっくりと近づいていた。しかもその内2匹はLV.2のようだ。

この光景を目にし、さすがの悟も先ほどまでの興奮はどこへやら、思わず息を呑む。

「……何だよ」

――悪魔がこんなに……今はもうこれ以上戦えないぞ！

先ほどの戦闘の疲れと相手が多数ということもあり、悟に戦う意識は毛ほども起きなかった。

「ギユアアアア！」

五匹の悪魔らが吼えると同時に、三人はきびずを返して全力で逃げ出した。

疲労している悟に加え、相手にはLV 2まで居るのだ。三人が悪魔から逃げ切ることは至難の業だった。

着実に距離を詰めてくる悪魔の一団。このままでは数秒もしないうちに間違いなく全員とも食い殺されてしまうだろう。

——くそ、追いつかれる！

悟がそう思った瞬間、誰かの声が横から聞こえてきた。

「こっちだ！」

振り向くと、自分よりも少しだけ年上らしき青年が、他よりも一際大きな家の門の前で手を伸ばしていた。見る限りその扉は金属製のようだ。あれなら幾らか持ちこたえられるかもしれない。

三人は迷わず少年の手を取り、家の中へ飛び込んだ。

ズキーン！

鋭い音が鳴る。

同時に灰色の生き物が一体崩れ落ちた。

「はあ、はあ、はあっ！ 安形さん、弾は後何発残ってるんすか？」
家畜小屋から町の方角へと牧場内を走りながら、庄平が安形に聞いた。

「携帯拳銃だからな。元々使用する気もなかったし、もう四発使っちゃったから、あと二発だけだぞ」

「二発か、厳しいな」

友は残り少ない弾丸にがっかりした。

悪魔の包囲が完全に狭まる前に安形の持っている銃を利用し、強

行突破したはいいものの、計画通りとはいかず、悪魔達は執拗に彼らを追いかけていた。

走りながら罫を張ったり、今更隠れたりも出来ないため、友、庄平、安形、優子らは自然と銃に命を預ける形になってしまっていた。「二発ってことは、あと二体の悪魔しか倒せないの!？」

優子は泣きそうな顔でそう言った。自分たちを追いまわしている悪魔の数は軽く十匹を超えている。二対倒したくらいでは何も状況は変わらないだろう。銃を失った事を知れば、もう遠慮無しに全力で襲い掛かって来るかもしれない。

「万事休すってやつか!」

安形は震える声で呟いた。

「ギョオオオオオオ!」

真後ろに悪魔が迫った声を聞き、振り向きもしないで銃を撃つ安形。後ろでは悪魔の断末魔と共に、ドサツという音が聞こえた。

これで、全員の命を繋ぎとめる蜘蛛の糸は残り一発となる。

「あっ!」

悪魔LV2が優子の肩に飛び乗りそのまま押し倒した。

「優子ちゃん!」

安形は迷うことなく引き金を引いた。

ズキューン!

吹き飛ぶ悪魔の代わりに切れた蜘蛛の糸。背後に迫る悪魔の集団を止めるすべはもう無かった。

<第十章> イミューニティーの計画

<第十章> ” イミューニティーの計画 ”

自分たちの巢に餌を放り込まれた蟻のように、悪魔は一斉に襲い掛かった。

銃という最強の武器を使い果たした今、友たちに押し寄せる魔物の集団を止める手段は無い。飛び掛り、押し倒し、噛み付き、その儚い命を食い殺す。悪魔はその一連の動作を躊躇無く行おうとする。
「うあああああつ!？」

瞬く間に群がってくる悪魔たちに、優子は頭が真っ白になるのを感じた。上下が反転し、緑色に彩られた地面が飛び込んでくる。安形が悪魔に押し掛かれ、必死に抵抗している姿が視界の隅に映る。そして、それを最後に優子の意識は途切れた。

銀野町の全体から見て、左の先に牧場、右に入り口がある。中心には縦横二十五メートルほどの空間が存在し、それを中心にして家々が円を描くように並んでいる。金属製の大きな扉に加え、町の中でも一際広い敷地を持つこの家もその中の一つだった。

「……あんだ、何処に居た？」

入り口前の廊下を左に曲がった所にある大きな和室。そこに身を置くと共に、悟は目の前の青年に疑問をぶつけた。この家を含む町

の家屋は一応全て調べていたが、今前に座っているこの男の姿など何処にも見なかった。そのことが気になったのだ。

「何処に居たって、どういう意味だよ？」

悟と同じような綺麗なカーブのかかった癖毛を片手で掻きながら、青年は不思議そうに聞き返す。耳から少しだけ飛び出すくらい長の、西洋の俳優的髪型に、何を考えているのか全く相手に感じさせない両端が鋭く尖った目。服装はダークグレーのズボンに白いYシャツと、いたって普通のいで立ちで可笑しな所はない。悟は浮世荘でも、樹海内でも、銀野町内でもこの青年の姿は見たことが無かった。

「俺たち少し前に一度この家に入ったけど、あんたには会わなかったよ」

一応命の恩人なのだが、突然現れたこの男に悟は警戒心を抱き、確認するように聞いた。

「会うわけ無いさ。僕がこの家に帰ってきたのはお前らが来る直前だったんだから」

自分はこの家の住民なんだと、補足を入れながら青年は答えた。

「直前？　じゃあ、それまでは何処に居たの？」

亜紀がキョトンとした様子で聞いた。

「森の方から助けを求めている二人組みの声を聞いててね。彼らを探してここまで誘導してた。ほら、この襖ふすまの向こうに居るよ」

そう言つと、青年は白井の前を横切り襖を開けた。

「おつす、桜川さんお帰り！　叫んで逃げてた人達、ちゃんと助けられた？」

するとすぐに胡坐あぐらをかいて我が物顔に座っていた鈴木が明るく声をかけてきた。鈴木の横からは笑顔の川本がこつちを見ている。

「ああ、ギリギリだったけどね。何とか上手くいったよ」

「あ……！」

二人の顔を見て、亜紀は固まってしまった。

「ん……！？」

亜紀の存在を確認した鈴木らも動きを止める。一瞬、緊迫した空気が流れた。

「何だ、もしかしてお二人とも亜紀さんや悟さんが探していたお友達ですか？」

その間を再開の感動とでも勘違いしたのか、白井は嬉しそうにそう言った。

「吉田さん、知り合い？」

僅かだが亜紀が怯えたような素振りを見せたので、悟は怪しんだ目つきで二人を見た。

「え、えーと、実は……」

「そうですよ！ 俺たちは大学の友人なんです。よかった、亜紀ちゃんも生きてたか！」

亜紀が二人について何か話す前に、鈴木が先に言葉を発した。

「な、何言つて——」

驚いて文句を言おうとする亜紀を川上の鋭い視線が封じ込める。

「余計なことを言ったら殺す」そういう類の殺気を感じ、亜紀は吐き出しかけた言葉を飲み込んでしまった。

——な、何か……雰囲気は昨日と違う？

川上のその視線は鈴木の話に集中している白井や桜川には見えなかったが、亜紀の背後に立っていた悟だけは見逃さなかった。

「いやあ、しかしマジでビックリしましたよ。森の中を歩いていたらいきなりでつけえ狼に追いかけられたんですから」

「ええ！？ ブラックドックがまだ外にいるんですか？ おかしいな、だったら悪魔どもが町に入ってきたのは一体何なんですかね？」

鈴木の話に驚く白井。それを聞いていた桜川は説明を始めた。

「悪魔達なら、どうやらあの巨狼が町に追い立てたみたいだ。俺たちを町から出たく無いらしい」

「それってどういうことです？ えーと、桜方さん」

川上を見ていた悟だったが、桜川のこの言葉に注意を引かれた。

「桜川春也だ。それと、さっきまでタメ口だったんだから、今更敬

語にしないでいいよ。悟君」

——あれ？ 俺名前教えたっけ？

悟は自己紹介した覚えは無い。桜川が自分の名前を知っていることに違和感を感じた。

「僕はすでに何度もこの町から出ようとしたんだけど、町から離れるとどうしてもあの巨狼がやってきて、町の方に追い立てるんだ。入る分には自由だけど出るのは難しい状況ってことだな」

桜川は溜息をつく、言葉を続ける。

「人が町に集まるのを待っていたのか何なのか分からないけど、さつき鈴木君と川上君をここに追い込んだ後、あいつはこれまで遠ざけていたはずの悪魔をこの町に押し込んできた。まったく何がしたいのかさっぱりだよ」

——巨狼が悪魔を引き入れた？ 町から出さないようにしている？ どういうことなんだ？

悟は知能の低い生物であるはずの巨狼の怪しい行動に疑問を持った。

「曲直君、話があるんだけど」

その時、急に亜紀が声をかけてきた。

「ん、何？」

「ここじゃ、言えないから向こうに行こう」

亜紀は殆ど聞き取れないような小さな声で耳打ちした。

——この二人のことか？

先ほど川上が亜紀に放った鋭い視線を見ていた悟は素直に従うことにした。

「分かった。——桜川さん、俺たちちよつと家の外に居る悪魔の様子を見てくるよ」

「ん、そうだな。鉄の門だけど、何が起こるか分からないんだ。定期的に確認はした方がいい」

桜川は快く頷くと、鈴木らとの会話に戻った。

悟と亜紀は一応本当に玄関まで行き、悪魔が扉を破っていないか

確認してから本題に入った。

「吉田さん。あの二人のこと？」

「うん、実はね……」

亜紀は自分がここに来た目的、小宮のこと、鈴木らの態度の変化について話出す。小宮が死んだということを知り、悟は一瞬だけ悲しそうな表情をしたものの、静かに話を聞き続けた。

「……そうか、じゃあやっぱり態度がおかしいんだな。さっきの視線は間違いなく脅しだよ。明らかに吉田さんだけに対したね」

「曲直君、どうすればいいのかな」
不安そうに悟を見る亜紀。

「とにかく、まずはあの二人のことを桜川さんと白井さんに知らせよう。いざという時にそなえてさ」

「うん……そうだね」

「吉田さんはここで待ってて。俺が桜川さん達をうまく呼んでくるから」

「分かった」

悟は和室の前に戻ると、なるべく明るい雰囲気ですぐに桜川さん達を呼んだ。桜川さん。ちょっと来てくれない？ 扉の前にバリケードを作りたいんだ。あ、一応人手は多い方がいいから白井さんもお願ひします」

「バリケードか、まあ、備えは多い方がいいな。すぐ行くよ」

二人は大して文句も言わず付いて来る。

「お、だったら俺らも行こうか？」

鈴木が笑顔で言ってきたが、悟はそれを断った。

「いや、もう十分だよ。あまり人が多いと玄関では動きづらいし」
「あっそ、頑張ってる」

軽い感じで三人を送り出す鈴木。気の所為か、その撫で上げた髪の下が目が一瞬光ったように見えた。

玄関に戻ると、早速悟は二人に事情を説明した。

「……そうだったのか。でも勘違いしてただけなんだろう？」

僕には事情を説明すれば何の問題もないと思うけど」

桜川はあまり二人に警戒心を感じていないようだ。

「私もそう思いますよ。すこし心配しすぎではないですか？」

白井も同じ気持ちらしい。

「過敏になってしまっているのは自分でも分かっています。ただ、

一応二人に知ってて欲しかったんです」

「そこまで言うのなら、分かった。取りあえず頭に入れておくよ」

悟の説得に桜川は渋々応じた。

「ありがとうございます」

亜紀は丁寧にお礼を言った。

「では、もう戻りましょう。本当にバリケードを作るつもりは無いんですよね。私たちが作る必要はないと判断したことにしましょうか」

白井のその言葉を最後に四人は和室に戻った。

「あれ、鈴木さん達どこに行った？」

少し前まで居たはずの二人の姿が無いことに不信感を持つ桜川。

「きゃあ!？」

突然、一番後ろに居た亜紀が悲鳴を上げた。

「何すんだ!」

振り返った悟は鈴木と川上が亜紀の喉下に包丁を当てているのを目にし、叫んだ。

「何って、テメーらの方こそそこそこ何の相談してたんだよ。俺たちを出し抜く算段か、ああ？」

あからさまに別人のような態度を取る鈴木に、驚く面々。

「何を考えてるんですか、包丁を下ろしなさい!」

白井が一步下がりがりながら説得する。

「やだねオッサン、もうこなったら隠す必要が無いから教えてやるよ。俺達は連続殺人鬼だ。これまで何度も力モを樹海に引き込んでこうやって殺してきた」

「何だと——!？」

——危ない人間だとは思っていたけど、連続殺人鬼だったなんて！
悟は亜紀の身を案じ、冷や汗を流す。

「吉田さんを放してくれ、俺たちはお前らに何もしない。こんな状況だ。警察を呼ぶことも出来ないし……分かるだろ？」

「ふふふ、駄目だな。俺はこういうことを趣味にしているんだ。折角手に入れたこの極上の獲物を手放すなんて出来なねえよ！」

「この野郎……！」

悟は拳を握り締める。

「動くな彼氏気取り君。亜紀ちゃんがどうなってもいいのか？」

川上は包丁を亜紀の喉下に強く押し付けた。

「……っ……！」

「まあ、どうしても離してやらないってことは無いぜ、お前が俺たちの言うことを聞いてくれたらな」

ニヤニヤしながら鈴木が言う。

「私たちに何をさせる気ですか！」

白井はビクつきながら聞いた。

「俺らはまだ死にたくないんだよ、テメーらと同じく。でも町から出ようとするとあの馬鹿犬が襲い掛かってくる。邪魔なんだよ、あいつ」

「僕たちに囮になれって言いたいのか？」

桜川は鈴木を睨みつけた。

「はは、良く分かってんじゃない。そうだよ。お前らが上手く俺たちをここから逃がせたら、亜紀ちゃんを解放してやる。いい話だろ？」

「ふざけんな！ それじゃ吉田さんが開放されたかどうか俺たちには確認できない。こんなのは取引でもなんでも無い！」

悟は本気で怒鳴りつけた。

鈴野の悪魔化を知ったときもしく、三本腕に殺されかけた庄平の時もしく、自分の命の危険が迫った時でさえ全く冷静さを失わない悟だったが、友人や知り合いが危機に瀕した時のみその冷静さは失われるようだ。

「この提案を飲めないなら話は終わりだ。遠慮せずに俺は亜紀ちゃんを今この場で殺すぞ」

「――あうっ……!？」

首に当てがわれたナイフの圧力が強くなり、亜紀は思わず声を漏らした。

――畜生……こいつら！

悟は沸き起こる憎しみを必死に堪えた。そうでなければすぐにでも鈴木に殴りかかってしまいそうだったからだ。

「……分かった。ただし条件を変えてくれ。罔になるのは俺一人がいい。桜川さんと白井さんはここに残してくれ」

「ふふ、亜紀ちゃんを守るために残していくっていうのか？ カッコイイね」

川上は蔑んだような表情を浮かべた。

「まあ、お前がたつた一人で馬鹿犬に食われるところを見るのも面白いな。いいぜ、それで手を打ってやる」

鈴木がこれからサーカスが始まるのを待っている子供のように、楽しみそうに言う。

「もう一つ、条件がある。俺は罔の準備をするから実際に逃げるのは明日の朝まで待つて欲しい」

「明日の朝だと？ ……まあいいぜ、どんな悪あがきをするのか興味あるしな。それまで待つてやる。まあ、精々頑張りな」

「曲直君！」

一人で和室から出て行く悟を亜紀が呼び止めた。

「吉田さん。きっと助けるから待つてくれ」

「一人であの巨狼と戦う気？ むちゃだよ！」

「何とかなるよ。俺が普通じゃないのは知ってるだろ？」

悟は優しく微笑んだ。

だが、それが逆に亜紀を興奮させた。彼女には一番見たくない表情だったからだ。亜紀の母、小宮、その微笑を見せた人はみんな死んでく。これ以上自分の所為で他人が死んでいくことに亜紀は耐え

られなかった。

「普通じゃないって言っても精々悪魔一匹と渡り合える程度でしょ！ 馬鹿な真似は止めて、お願い——！」

亜紀の辛そうな顔を見て大きく心を揺らされたものの、悟は決心を変えなかった。

「……行つて来る」

そう静かにまた微笑むと、亜紀の前から姿を消した。

銀野町の左の最端にある一般的な倉庫の地下、イミューニティーの作戦本部。

友、安形、庄平、優子の四人は今、そこに居た。

何故彼らがここににいるかという理由は一つしかない。助けられたからだ。

あの時、十匹近い悪魔の猛襲を受けた四人は、急に現れた紺色の軍服を着た男達によって保護され、生き延びることが出来た。

悪魔どもは彼らが放った無数の火炎瓶に恐れをなし、あつと言う間に退散してしまったのだ。

「何なんだお前ら……！ 俺たちをどうする気だ！？」

助けられたと喜んだのも束の間、すぐに拘束された安形はこれからの自分たちの身を案じ、眼前の怪しい集団に怒鳴りつけた。

しかし男たちはまるで調理用の豚を見るような目つきで安形を眺めると、ずっと黙っている。

「安形さん、こいつらに何を言っても無駄ですよ」

真っ先に喚き出すかと思われた庄平は、意外にも冷静に安形を落ち着かせた。

「ほう、君はもっと単細胞な人間だと思っていたよ」

いきなりこの地下室の奥の方から声が聞こえた。

庄平がそつちを向くと、ずらーと並んだモニターの前に一人の男が座っているのが目に入った。

「誰だ？」

安形が低い声で尋ねる。

「私は広野大地、国家非確認生物対策機関 “イミユニティ” の者だ。今回この樹海ブラッドメインの先遣隊の指揮を務めている」

「イミユニティ……！」

志郎から話を聞いていた友と庄平は、相手の正体が何か分かり、少し落ち着いた。

「政府の人間なのか？ だったら俺たちをすぐにこの樹海から逃がしてくれ！」

相手が国家機関だと知った安形はすぐに自分たちを救出してくれると思い込み、そう言った。

「それは出来ないな。一般市民を助ける気があったのならこの町を一週間も放って置く訳無いだろ」

「な、ちよつとそれどういうこと！？」

予想だになかった広野の言葉に驚く優子。

「言葉のままの意味だ。我々に君たちを助けるつもりは無い」

「矛盾してるぞ、だったら何故俺たちを助けたんだ？」

友がすぐに疑問をぶつけた。

「ふっふっふ、別に矛盾はしていないさ、友くん。言っただろ、一般市民を助ける気はないとな」

「はあ？ わけわかんねーよ！」

怒りの表情を見せる庄平。

「やれやれ、少しは見直せる面もあったと思っただが、やはり単細胞

な奴だ」

「何だと！」

「このままでは助けられないが、君らがイミユニティーのメンバーに入るといふのなら、話は別だよ。ま、もつとも全員とは行かないが」

広野は庄平を蔑んだめで一瞥すると、話を続けた。

「最近イミユニティー内では人手不足でね。他の政府の部署から引き抜いてはいるんだが、どうしても数が追いつかない。次から次に死んでいってしまうからな。やはりいくら訓練を積んだ人間といえども、心がそれに追いつかなければ何の意味も無いようだ」

優子、庄平と安形は広野を睨みつけていたが、友は無表情で話を聞いている。

「そこで我々は今回のこの樹海ブラックドメインを利用することにした。銀野町を一週間も放置したり、浮世荘のキャンプを止めなかったの計画のうちだ。全てはこの地獄の中で悪魔の恐怖に負けずに生き残れる優秀な人間を選抜するためだった」

「そんなどうでもいいことのために佐々木を……鈴野を、俺たちを巻き込んだっていうのかよ。ふざけんな！」

両腕を塞がれたまま庄平は広野に突進しようとしたが、近くに立っていたイミユニティーの男に殴られたため、それは叶わなかった。「正直に言えば他にも理由があるんだが……それは君らには関係ないことだからな」

「……優秀な人間と言ったが、ただの一般市民から選抜するよりも、軍隊からした方が何倍もいい成果を得られるはずだ。何故そうしなかった？」

友は冷静な口調で聞いた。

「我々が言う『優秀』とは戦闘の技術のことでも、生き残るための知識のことでもない。それは後からいくらでも身につけさせることができる。必要なのは『生存力』。ただそれだけだ。何の経験ない一般市民を使ってこそそれは見ることができる。例えばどんな手を

使おうとも最後まで生き残る力、それこそが我々が求めているものだっただよ」

「生存力……」

「そうだ。例え臆病でも悪魔から上手く逃れ隠られる力があれば、それはすばらしい才能と言える。真っ向から悪魔を倒せなくても、巧みな作戦と罠で殺せればそれでいい。いかに、どれほど長く生きれるか、重要なのはそこだ。友くん、君のような人間のことだよ」友は何も答えずじつと考え込んだ。

「小宮君もいい人材だったが、残念なことに殺されてしまったしな——そうだ、安形くん。君も候補に入っているぞ。命を顧みず殺人鬼の懷に単身忍び込み、初めて見た悪魔に怯むことなく挑み倒した勇猛さ、咄嗟の判断力、どれも素晴らしい才能だ」

広野は「光栄だろ？」と言わんばかりの態度で安形を見た。

「くそつたれめ！ 誰がお前らの仲間になんかなるか！」

しかし安形は嫌悪感をあらわに広野に唾を吐く。

「……よく考えた方がいいぞ。我々の仲間になるしかここから脱出は出来ないんだ。それに、この話を断るつもりなら君の家族や友人たちがどうなっても知らないぞ。我々は政府の組織だということを忘れるな」

「脅す気なのか！」

「そんなつもりは無い。これは取引だよ。お互いにとってもっとも利益のあるな。どうしても言うのなら、さきほどは全員は助けられないといったが、君しだいでは優子君も助けてやらんことは無い」

「あ、安形さん——……」

優子はさすがのような視線を安形に送った。

それを見た安形は反対することが出来なくなる。

「広野——……さん。じゃあ、俺がイミューニティーに入れば庄平を助けてくれるのか？」

安形に広野が言った話を聞き、友は庄平を助けるために確認を取った。

「ああ、もちろんだとも、助けて欲しいならな」

「――分かった。入らせてもらう」

「いい判断だ」

「ゆ、友……」

迷うことなくイミューニティー入りに了解した友を見て、庄平はすまなそうにうつむいた。

本心ではすぐに広野を殴り飛ばしたかったのだが、確かに彼らの協力を得ないとここから出ることは不可能だ。何より言うことを聞かなければ家族がどんな目に合うかも分からない。

今は何も出来ずに言うとおりなるしかなかった。

「出来ればもう二人助けて欲しい人間が居る」

「ふふふ、分かっているよ。悟くんと亜紀くんだな」

「樹海中に監視カメラでも付けていたのか？ 知っているなら話は早い。どうなんだ」

「君が望むなら快く助けてやろう。そもそも悟くんも候補に入ってるしな」

「……そうか」

「話は終わりだ。下田、彼らを待機室に案内しろ」

「分かりました」

先ほど庄平を殴った下田という男は友らを見ると、顎で付いて来るように促す。四人が後を追うと、地下室の奥の右端に小さな扉が見えた。

下田は扉の前でじつと立っている。「入れ」ということらしい。

「はいはい、分かったよ」

庄平は下田を一瞥すると、さっさとそこに入っていった。

中には短い廊下があり、さらに三つほどの小部屋らしき扉があった。

「一番奥の部屋だ」

下田が後ろでぶすつと言う。

その部屋に行く途中に、安形は二つ目の部屋から何かのうめき声

を聞いた気がしたが、ワザと聞かなかったことにした。

ガチャッと、庄平がさっさと扉を開けて中に入る。

「あ！」

「おっ……！！」

中には高橋志郎と五郎から猟銃を持ち逃げした人間、福田が居た。

悪魔が前をうろついている以上、玄関から出ることは出来ない。

悟は玄関とは反対側の二階の窓から外に出ることにした。

この窓はスライド式の金属カバーが外側を覆っており、それで悪魔の侵入を防げていたようだ。

少しだけカバーを開け周囲に悪魔が居ないことを確かめると、悟はすぐに一階の地面に降り立った。

「俺がやるしかないんだ……俺が……」

自分を鼓舞するように、独り言を言う悟。

鈴木らの前では罔になると言ったが、悟にそんな気は無かった。

例えば自分が罔として作戦を成功させても、巨狼の速度ならすぐに鈴木らに追いつくだろう。巨狼が悪魔を町から遠ざけたり、追い込んだりしていたことから考えると、当然の推論だ。

だがに残された道は一つしか無かった。

巨狼の死。

ただそれだけが唯一全員が助かる方法と言える。

悟が鈴木に明日の朝まで待つように頼んだのも、それが理由だ。

巨狼を倒すための罠を町中に仕かけ、そしてうろついている邪魔な悪魔を消すために。

「巨狼の相手は夜だな。まずは悪魔の駆除と罾の設置、庄平らの捜索……——つたつく、やることが山ほどあるよ」

悟は友が近くにいれば、絶対にこんな無謀な行動は取らせないだろうと思った。悪魔の駆除だけでも至難の業なのに、巨狼を一人で倒す気なのだ。間違いなく自殺行為でしかない。

「でも、やるしかないんだよな」

溜息混じりに呟くと、悟はさっそく亜紀らのいる家から数件先にある一つの家に入った。そこは定食屋で、包丁などの武器になりそうなものがたくさん手に入れられるからだ。

しかし、そう上手くことが運ぶ訳は無い。悟が中に入ると、一体の悪魔が奥の客室に居るのが見えた。

「……化物め！」

食い物をあさっているのか悪魔は背を向けており、まだ悟には気づいていないようだ。

悟は音をたてないようにゆくりと調理場へと移動すると、容器に入っている油を取った。そしてそのふたを開け、悪魔の背後に忍び寄る。

歩きながら右手に火を点けたマッチ、左手に容器を構え、気配に気づいた悪魔がこちらを振り向いた瞬間、油を思いつきぶつかった。

「ギイイイイイツ！？」

不意打ちの攻撃と油が目に入ったおかげで、悪魔は混乱しメチャクチャに暴れ出す。

「気づかれてさえないなきゃ、お前らなんか怖くない」

それを氷のような目で見ながら、悟はマッチを投げつけた。

一瞬で悪魔の体を駆けずり回る炎。悪魔はより一層動きを激しくさせ、体を客室のそこら中に打ち付けた。すぐに悟は背中に取り付けていた包丁槍を手に持ち、それを燃え盛る悪魔に突き刺す。

まるで磔にされた昆虫のごとく定食屋の壁に固定される火まみれの悪魔。背後の壁にある焼肉定食四百五十円という紙が、何故かそ

の状態をうまく表現していた。

「まずは一匹——」

悟は数本の包丁と小道具ををリュックにしまうと、悪魔の最後を確認せずにそこを立ち去った。

「やあ、正平くん、友くん」

志郎は少し暗い表情をしていたものの、笑顔で二人に挨拶した。

「博士！ 博士も捕まったんっすか？」

言った後で、庄平は志郎の言葉を思い出した。

「あ、もしかして自分から捕まったんすか？」

「ん……半分は自分でもう半分は強制的といったところかな」

「そうっすか」

「それより、悟君はどうしたんだい、まさか——」

「いや、離れ離れになってしまっただけです。博士の思っているようなことはありませんよ」

志郎の言葉に友が応じた。

「そうか、無事ならそれでいい。こちらは五郎さんが死んでしまったよ。残念だ」

「五郎さんが……」

庄平は次々に知り合った人が死んでいくことに悲しくなった。

「あの、高橋志郎さんですよ、いつもテレビで拝見しています。

……これから、俺たちはどうなるんですか？」

安形に声をかけられて初めて志郎は彼と優子の存在に気がついた。
「町の人かい？ まあ、今更どうでもいいか。今ここにいるイミユ

ニティーのメンバーはただの先遣隊だ。あくまで樹海の状態確認と新人募集のためのね。恐らくこれからしばらくして本隊が来るだろう。この樹海を世間から完全隔離、もしくは保管するために」

「本隊ってどういうこと？」

優子が聞いた。

「悪魔の研究のために大勢でここを封鎖するってことだよ。広野らの仕事はもう終わったみたいだから、僕らも彼らといっしょに本隊が来る前に、イミニティーの本部に連行されるんじゃないかな」

「連行……嫌な響きね」

優子は毒ついた。

「どうやって本部まで行くんです？ 町にはへりも車も見ませんでした」

「ここには無いさ。悪魔に壊される危険があるからね。この町を北西に二キロほど進んだ所に、電波塔があるんだ。その屋上にへりが止まっているんだよ」

安形の疑問に、志郎はすでに一度聞いていたのか、簡潔に答えた。
「電波等——…：…：…：そうか、そこがイミニティーに制圧されていたから、浮世荘で電波が通じなかったのか。なるほど、最初から全ては奴らの計算通りということだな」

友は妙に開心したように言った。

「今の僕らに出来ることは何もないし、脱出させてくれるっていうんだ。とにかくそれが過ぎるまでは下手に動かないほうがいいよ」

「そうね。助かるのならもう何でもいいわ」

優子は安心のためか、深い息を吐いた。

「グギヤアアアアア！」

何の前触れも無く、突然隣の部屋から耳障りな声が鳴り響いた。
ドン、ドン、ドンツと激しく扉を叩く音が聞こえる。

「こ、この声は——…：…：友！」

「——ああ！」

庄平と友はすぐに隣の部屋の主の正体を理解した。

「三本腕！」

<第十一章> ” 巨狼と悟 ”

<第十一章> ” 巨狼^{フェンリル}と悟 ”

「はあ、はあ、三体目……」

その言葉と同時に、悟は灰色の肉塊から二本の包丁を引き抜いた。午後一時、悟が桜川の家を出てから三時間後。家々が並ぶ通路の真ん中に悪魔の死体が一つ寝転んだ。これで町にいる悪魔LV、1はほとんど倒したことになる。

「はは……俺って意外とやるな」

悟は我ながらよくたつた一人でここまで戦えたと感心してしまった。志郎の戦法では悪魔一体を倒すのに、最低三人の人間が必要と言われている。これは普通の人間が悪魔の身体機能についていけないという事実を補うために編み出されたものだったが、『感覚』を有する悟にはたった一人でもある程度は戦うことができるらしい。

無論、いくら悟でも生身の人間である以上、正面きって戦えば疲労はするし苦戦もする。悟が三体もの悪魔を仕留めることが出来たのは、全て罾や不意打ちを使ったからだった。

しかも元々は三人でこなしていた役割をたった一人で行わなければならなかったため、多くの体力を費やすし、罾のタイミングも掴みにくい。確かにここまで無事に生き残ることは出来たのだが、悟自身、それなりの苦労と傷は受けていた。

両手に持った包丁からたれ流れる血と、自分自身の全身の小さな傷から流れる血で紅い衣装を形成しながら、悟は一人、町の中心と西端を結ぶ通りを歩いている。

「確か、桜川さんの家に逃げ込む前に見た悪魔は五匹だった。ってことは残りはLV、2が二体か……きついな」

自分の全身を改めて見直す。

所々にある引っかき傷や爪あと、紫色の痣、既に多くのダメージを抱えているのに、これからLV、2をまともに相手にしては巨狼と戦うどこでは無くなるだろう。それでは元も子も無くなる。

「……仕方ないか。巨狼用にとっておきたかったけど、ここで使わないとLV、2には勝てそうにないからな」

悟は体の向きを反転させると、二、三軒戻った位置にある一軒家に入った。すると、それを見計らったかのように二体の悪魔LV、2がそれぞれ近所の家の影から出てくる。悟が倒した悪魔の断末魔を聞いて集まってきたのかもしれない。

「ギユウウウウウウウ——……」

LV、2らは物欲しげに小さく鳴くと、悟の後を追って一軒家の入り口の前まで進んだ。しかし何故かそれ以上踏み込もうとはしない。本能的に何かを感じ取っているのだろうか。

——どうした？ 入って来い。

その様子を家の中から観察する悟。しかし、それでも悪魔LV、2らは入ってこない。

——仕方ないな……。

このままでは折角の策が無駄になると思った悟は、思い切つて悪魔らの前に姿を見せた。玄関とちょうど直線上にある扉を勢い良く開け放つと、電子レンジを全力でLV、2らに投げつける。石の代わりの屋内版ハンマーだ。

それは上手くLV、2の頭上目掛けて飛んでいった。悪魔LV、2が前足で電子レンジを叩き落とすと同時に、悟は再び扉の中に隠れる。それを見たLV、2は今度は躊躇せずに家の中に飛び込んできた。すぐに悟が閉じ籠っていると思われる扉を執拗に攻撃する。

ガンガンガン——

扉が完全破壊されるのに多くの時間はかからないだろう。LV、2が拳を強く打ちつけることに木製の扉に割れ目が出来ていく。バタン！

扉がブチ破られた瞬間、どういふ訳か玄関の扉が閉まった。

「ギユアア!？」

LV、2は背後の扉が閉まったことに驚いたことは驚いたが、それ以上に破った先の部屋に居るはずの悟の姿が見えないことに混乱した。

家の中に閉じ込められた悪魔LV、2を冷笑しながら、玄関の外で悟は小さく叫んだ。

「……地獄に帰れ」

言葉に合わせるかのように悟の手からマッチが落ちる。

それは細く線のように引かれていた油の道を辿り、玄関の外から今悪魔LV、2らが居る部屋、悟が窓から脱出した部屋の『あるもの』目掛けて高速で走りだした。

銀野町のような住民数の少ない町は、水道やガスが引かれていないことが多い。そのため一家に数台大型のガスボンベのようなものを買って使用することが常だ。悟は三体の悪魔を倒しながら、同時にこの町のあちらこちらに巨狼を倒すための罠を仕掛けていた。このガスボンベもその内の一つだ。

油の路線を走ってきた火はガスボンベの蓋に挟んである油まみれの布に停車した。

刹那、大爆発が起こり、一軒家は一瞬にして吹き飛ぶ。青空だった上空は瞬く間に濁った煙に覆われた。

パラパラと瓦礫や灰、埃が舞い落ちる中、悪魔のようにその飛散物で体を灰色に彩った悟はゆっくりと立ち上がった。

「やったか——……？」

想像以上の爆発によるショックで激しく波打つ心臓の音を感じながら、悪魔LV、2の気配を探る。一体は仕留められたらしく、もう一体も微かに生命力は残っているものの、どうやらかなりの傷を与えることが出来たようだ。瓦礫の中から這い出てきたLV、2は両足が吹き飛んでいた。

「せつかくの俊足もそれじゃお終いだな」

用心しながら両手に包丁を構える悟。

「ギユウウルアア！」

悪魔LV、2は焼け爛れた体を逆間接の前足で引きずりながら、威嚇のつもりなのか憎悪の籠った目で悟を見上げた。いくら進化した悪魔LV、2とはいえ足が無ければたいしたことは無いだろうと、悟はその威嚇を無視し包丁を振り下ろした。

しかし、その考えは間違っていた。

LV、2は前足の力で大地を蹴ると、逆立ちのような格好で飛び上がり、その下半身を猛烈な勢いでぶつけてきた。油断で感覚に全く気を使っていなかった悟は、まんまとLV、2の攻撃を食らってしまった。

「ぐああ!？」

膝から先の無いLV、2の太ももが肩を強打し鋭い痛みが体中を駆け巡る。だが骨が折れたかどうかも確認する間もなく、続けざまにLV、2の次の攻撃が迫ってきた。

二人で地面に倒れたままLV、2は太股で悟の胸を固定すると、そのまま一気に獲物の足に噛み付こうとする。

「うわっ!？」

汚らしい歯が肉を裂く直前に何とか足を引っ込めると、悟はその動きのまま膝蹴りをLV、2の顎に食らわせた。

「ギユツ!？」

相手が怯んだ隙を利用し、悟は両手の包丁をそのまま相手の腰に挟み込むかのように突き刺す。

「ギユアアアア!？」

——くたばれっ! くたばれっ! くたばれえっ!!

泣き叫ぶ悪魔とは正反対に、無言で力を込め続ける悟。

包丁を振り切るためにLV、2は前足を使って力任せに体を反転させると、強引に悟と向かい合おうとした。その所為で悟は相手に刺したまま包丁を離してしまう。

——くそっ、武器が!

途端に高笑いはいしないもののどこか嬉しそうなLV・2の顔が寄ってくる。悟の首にしゃぶりつく魂胆のようだ。

——じよ、冗談じゃないぞ!?

悟は手ぶらとなった左腕でLV・2の首を絞めた。

しかし分かつてはいたものの、悟の細い腕力では悪魔の力の前に当然のごとく効果が無い。数秒もしない間にLV・2の歯が悟の首筋に触れた。

だがその瞬間、高く、空高く、おびただ夥しい量の血液が空中に飛び散る。紅い雨を連想させるその水滴は、地面に重なっている二つの物体にゆつくりと降り注いだ。

「——危なかった……!」

自分の腕で血の噴出す首を傾けた悪魔LV・2を見つめながら、悟は溜息を吐いた。

LV・2の腕力が自分を遥かに凌駕していることは分かっていた。首を絞めても何のダメージを与えられないことも。

悟が手を伸ばしたのは只の時間稼ぎのためだった。左手を添えることで例え僅かだろうと右手が自由になる時間を作りだし、その間に腹の前に括り付けていた包丁を抜いたのだ。

十秒秒感染をしては堪らないと、悪魔の死体を無造作にどかした後、悟は大きく深呼吸をした。

「ふう、これでやっと巨狼を倒すための罠作りに入れる」

擦り傷や引つかき傷、赤紫の痣、僅かだが首元に食い込んだ悪魔の歯型。度重なる悪魔との戦いで悟の体は既に大分痛んでいた。本来ならば間違いなく数時間は休んだ方がいいと言える体調だ。

だがそんな状態にも関わらず、悟は亜紀に対する心配のためか、殆ど休むこともせずに罠を仕掛けようと歩き出した。

力の無い、疲れきった足を動かして。

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン！

扉が強打される轟音が周囲一帯を取り巻いた。

壁を挟んで隣の、友たちがいる部屋の中にも音は届いている。その大太鼓を叩くような扉の振動音に負けないように、庄平は精一杯の大声を張り上げた。

「友！ 何で三本腕がここにまたいるんだよ、あいつ生きてたのか！？」

「分からない。もしかしたら一体だけじゃないんじゃないか？ 可能性でしかないが、悪魔のように感染増殖するのかもしれない」

「――……っ、イミユニティーのやつらよくもこんな怪物の隣に押し込んでくれたよ！」

丁度一日前の惨事を思い出し、鳥肌を立てる庄平。

「ちよつと、何なの？ この音！？ 何が隣に居るの！？」

「今度は何なんだ！？」

やっと安心できたと思ったのも束の間、いきなりの異常事態にドキモを抜かす優子と安形。

「……おかしいな、三本腕は麻酔で眠らされていたはずだ。こんなに早く起きるわけは無いんだけどな？」

唯一現状を理解している志郎は一人だけ冷静に座っていた。

「博士、何で三本腕が隣に居るんすか！？ いや、そもそもどうやってあのデカイ図体ずたいが狭い部屋に入れたんです！？」

庄平は思い浮かべた質問を次から次に志郎に問い出す。

「おいおい庄平くん、落ち着いてくれ。こんな時こそ冷静にならなきゃ駄目だよ」

「いいから、どうなってるんすか！？」

殺されかけた恐怖心と、この狭い空間で隣に三本腕がいるという恐れから、庄平は興奮していた。その様子を見た志郎は仕方なく説明を始める。

「広野が本部への手土産として三本腕を捕獲してたんだよ。部屋に納まったのは只単にまだ完全体じゃないから。君たちが遭遇したのは成長しきった成体だから大きかったんだろっね」

「完全体——……三本腕にも悪魔のような進化段階があるんですね？」

博士の言葉に、それなりに冷静さを保っている友が応じた。

「ブラックドメインから生まれた殆どの生物がそうだよ。幼虫、成虫みたいな感じでね」

「悠長にお話するのもいいが、どうするんだ？ そのうちあいつは扉を突き破ってくるぞ」

得たいの知れない怪物に対する恐怖心で、安形は少し声を荒げた。「これだけ騒いでいるんだ。もうすぐイミュニティーの誰かが駆けつけて、また麻酔を撃ってくれるさ。ほら、言った傍から来たよ」

志郎の言葉と時を同じくして、三つの部屋と地下広間を繋げる廊下を下田と二人の人間がスプレーのようなものを持って走ってきた。「こいつ何でもう起きているんだ！？ 大人しくしろ！」

全員で麻酔が大量に入っていると思われるスプレーを、扉の隙間から三本腕に吹き付ける。

「ギヤイアアアア！」

一霧で象も向こうの世界へ羽ばたいていくほど高濃度の麻酔を吸い、三本腕はすぐに大人しくなった。先ほどまでとは打って変って静かになる廊下。

「寝たか……？」

イミュニティーのメンバーの一人、茶髪にエラばった顔の男が確認の為扉の隙間からその中を覗き込んだ。

ジュルルルッ！

「ぐおおおおっ！？」

その瞬間、いきなり隙間から根つこのような触手が蛇のようにうねりながら現れると、男の首を締め出した。ギリギリ、ギリギリと次第にその力は強くなっていく。

「神崎！」

メンバーの他の人間が慌てて触手を離そうと試みるが、まるで効果は無い。神崎という名の男の顔は見る見るうちにトマトのようになっていった。

「惣一、どけ！」

下田は力任せに前に立っていた男を退かすと、大型ナイフの一振りですつと二つに触手を切り裂いた。

途端に神崎の首を絞めていた触手から力が抜ける。

「ゲホッ、ゲホッ——……！？」

「クソ、麻酔が効かなくなっているのか？」

咳き込む神崎を尻目に、下田は尚も暴れ続ける三本腕を驚愕の眼差しで見つめた。

「お、俺、広野さんに知らせてきます！」

「ああ、さつさと行け。俺はできるだけだけ時間を稼ぐ」

この場から逃げるかのように立ち去る惣一を一瞥すると、下田は今にも鍵が吹き飛びそうな歪んだ扉を押さえつけた。

「お、おい！ 何かヤバそうだぞ！」

少しだけ開けた扉の隙間から様子を見ていた庄平は、下田らが押されているのを理解し、振り返ってそう言った。

「だったら逃げるなら今しかないね。あの怪物が檻から出てくる前に地下広間の方に移ろう！」

「でも、勝手に逃げたらイミューニティーとの契約破棄にならないですか？」

志郎の言葉に不安感を持ったのか、優子が顔をよせて聞いてきた。「別に逃げ出そうっていうつもりじゃないんだ、大丈夫だよ。ほら、早くしないとあいつが出てくるよ？」

鈍い音とともに三本腕の部屋の扉の一部に穴が開き、触手が這い

出す。うねうねと蠢くその動きに悪寒を感じる優子。

「……どうやらそうみたいですな」

「話は決まった。行くよ！」

志郎は扉を勢い良く開け放つと、下田の背後を素通りして地下広間へと駆け抜けた。それにくっつく形で優子も続く。傍から見ればそれはまるで志郎を壁にしているかのように見えた。

「なあ、安形さん……なんかあの女性格悪くないか？」

「ん？ そうか？」

庄平はこれまでの優子の振る舞いから感じていたことを率直に言った。

「何してる？ 庄平、行くぞ」

「……おう！」

友と同時に駆け出す庄平。安形はその背中を見ると、部屋に残っている最後の人間を見た。

「お前は逃げないのか？」

視線のは一人部屋の隅っこに座っている福田に向いている。三本腕の扉が破れるまで僅かな時間しかないのにも関わらず、福田は微動だにしなかった。

「おい……？ お前大丈夫か」

無言で一点を見つめている福田の様子を不思議がる安形。

安形のこの言葉に、福田はうつろな表情で振り向いた。

「俺の所為だ……俺の所為で大森はあんな姿に……」

「大森？ 三本腕のことを言っているんだな」

「俺があの時逃げねで戦っていれば——大森は……」

「よく分からないが、とにかく今は逃げよう。ここに居たら死ぬぞ」
安形は半ば引きずる形で福田を廊下に連れ出す。

「駄目だ！ もう持たない！」

それは下田が三本腕の扉から離れ、地下広間に逃げ出したのとはほぼ時を同じくしていた。

「ギャウアアアア！」

響き渡る恐ろしく冷たい音調。

刃物を突きつけられているような、銃口を向けられているような
そんな声。

安形と福田の目と鼻の先に、三本腕が飛び出した。

午後7時。

銀野町東部、町の入り口。

悟は松明を片手に真つ暗になった森を見つめていた。

——出来るだけの用意はした。絶対に上手くいくはずだ……！
自分を落ち着かせようと、心の中で暗示のように同じ言葉を繰り返す。

何度も、何度も、不安を打ち消すために。

「よし、……やるぞ」

とうとう意を決したのか、悟はゆっくりと町の外へと足を踏み込んだ。

どれくらい町から離れれば巨狼が姿を見せるのかは分からないが、
それほど遠くは無いはずだ。暗い樹海の夜道を歩きながら悟は感覚
に意識を集中させた。

ドクン、ドクン——……

不自然なくらい無音な暗黒世界の中、己の心音のみが聞こえる。

「……はあっ、はあっ、はあっ……はあっ……——」

まだ何もしてないのに、息は既に荒くなり始めた。

——何て緊張感だよ……心臓に悪すぎる。これじゃ最後まで持ち
そうにないな。

足を進めることに額からは冷たい汗が流れ、既に激戦の後のように見える。

ガサッ！

急に背後で物音がした。悟は素早く振り向く。

「——っ！？」

特殊な感覚を持つ悟が背後に迫る悪魔に気づかないはずは無い。当然、後ろに居たのは悪魔でもなんでも無い只のネズミだった。

「はぁ……何だよ。紛らわしいな」

安心感から大きいため息を吐く悟。

ダ……ダダ……ダダダ……

その時、突然振動と共に地響きのような音が聞こえてきた。

「……来たか」

悪魔よりも、悪魔Lv.2よりも、三本腕すら上まる圧倒的な危機感を全身にヒシヒシと感じつつ、悟はじつと目を見開き巨狼に備えた。

ダダダダ……ダダダダ……ダダダダダダ……

本能が逃げる、逃げると何度も耳打ちする。

足が震える。

体が寒気に襲われる。

ありとあらゆる感覚器官が命の危険を知らせてきた。

——まだ駄目だ——まだ……！

巨狼の恐怖だけでなく、自分自身の感覚とも戦いながら、悟は必死に歯を食いしばる。

ダダダダダダダ……ダダダダダダ……

徐々に大きくなってくる地獄のドラム。

ダダダダダダダ……——ダンッ……

突然、足音が止まった。

瞬く間に静寂に包まれる暗黒の森。

どこを見渡しても闇、闇、闇——……一切の光も無い。まるで本当に地獄に来てしまったかのようだ。

だが、視界も、音すらも何もないこの地獄でたった一つだけ機能する感覚があった。

神から与えられたものか、偶然の産物か、今の悟にはその存在理由を知る由も無い。只一つ言えることは、これが命を繋ぎとめてくれるということだ。

頭の奥に高い音が響く。第六の感覚が、数十メートル先に光る黄色い二つの瞳を見つけた。

「あ、あれが巨狼か！」

> i 1 1 7 2 — 2 2 4 <

「ガルアアアアアアア！」

悟を視認した巨狼は元となった狼の機動力を活かし、瞬く間に襲いかかってきた。

悟は巨狼が動き出すのに合わせて全力疾走を開始する。

「速い！」

想定していた速度を軽く上まる巨狼の四足移動に驚く。

元々の予定では、逃げながら巨狼を町までおびき寄せるつもりだったが、このままでは到底実現できないだろう。町までまだ二百メートルはあるかというのに、巨狼は既に悟のすぐ後ろまで迫っている。

ブォンッ！

巨狼の鋭いナイフのような爪が背後の空気をかすめた。

「っあぶねえ！？」

自分の首が吹っ飛んだかと錯覚させられるほどのそのスウィングの凄まじさに、悟は胆を潰す。

——これじゃ、町まで持たない……！

身の危険を感じた悟はリュックから町で作った火炎瓶を取り出した。チリンッ、とガラスのぶつかる音がする。

「食らえ！」

ライターで火をつけた後、悟はそれを背後の巨狼に向かって思いっきり放り投げた。ガラスが割れると同時に火の手が上がる。暗闇に輝くその炎は巨狼の前胸部を痛めつけた。

「グアルアアアー!?」

——どうだ!? ブラックドメイン生まれなら火が苦手なはず! だが悟の思いとは裏腹に、火のおかげで少しは距離が開いたものの、巨狼は動きを止めようとしなかった。

「グルルルルルル!!」

むしろより一層速度を加速させてくる。

「な、こいつ、火に強いのかよ!」

——博士はブラックドメイン生まれの生物は火に弱いと言っていたのに、何でにこいつは平然と追いかけてくるんだ? まさか、こいつ……この樹海で生まれた生き物じゃないのか!?

生存者を町へ閉じ込めたり、悪魔を追い込んだり、どう考えてもこの巨狼には最初から不自然な点が多かった。悟が巨狼の行動に対して疑問を感じ出るのは当然の反応だろう。

「くっ!」

巨狼の一薙ぎが頭上を通り過ぎ、右側の木をへし折った。町まで残り百メートルといったところなのだが、どうやらこれ以上逃げ切るのは無理のようだ。

ダッ!

巨狼の追撃を横に飛び転がってかわすと、悟は木の影に隠れた。

「はあっ、はあ……はあ……」

ドシン……ドシン……

重量感のある足音が暗い森に響く。

顔を出せばすぐに見つかってしまう為、悟はその音だけで巨狼の

位置を認識した。

ドシン、ドシン、ドシン——……

——俺を探してるな。どうする？ 町まで引き付けるのはこのままじゃ無理だ。何か策を練らないと。

「グルルル——」

考える時間が欲しい悟には都合の悪いことに、臭いを辿っているのか巨狼は確実に悟との距離を詰めていた。

——や、ヤバい！ 本気で何の案も浮かばない……——どうすればいいんだよ！？

無我夢中でリュックを漁る。

「何か無いか？ 何か——！？」
ドーン！！

いきなり悟が隠れていた木がなぎ倒された。巨狼が棘だらけの尾を叩きつけたのだ。

「うあああつ！？」

リュックに手をいれしやがんでいた悟は奇跡的にその攻撃を食らわずにすんだ。もし立っていたのなら背骨の骨が折れるくらいでは済まなかっただろう。

「くっ、少しくらい待ってくれよ！」

悟は慌ててリュックを背負うと、一目散に町目掛けて駆け出した。

——こうなった以上、リュックにある残りの火炎瓶三本と、ライターと虫除けスプレーで作った火炎放射器で何とかやり過ごすしかない。

汗だくになって走りながら、背後に向って火炎瓶を続けて投げつける。

「グラアアア！」

その度に怒りの雄たけびを上げつつ、距離を離しては戻し、離しては戻すを繰り返す巨狼。

町まで残り五十メートルといった距離まで来たところで、とうとう悟は火炎瓶を使い果たしてしまった。

「もう無いのか!? くそ、今度はこれだ!」

自己作製の火炎放射器を構え、巨狼の接近に備える悟。

——絶対に町まで逃げ切つてやる!

残り三十メートル——。

ガチンツ!

巨狼の牙が咬み合う音が耳元で鳴り、悟は振り返らずに火炎放射器を放射した。

ボオオオオオ——

残り二十メートル——。

「ガルルルルル!」

巨狼が身の毛もよだつ叫び声と共に大きくジャンプした。飛び掛つて爪を振り下ろすつもりらしい。

「うえあああうああ!」

何と言っているのか聞き取れに無いような雄たけびを上げて、それを横にかわす悟。直前まで悟が立っていた位置に大きな爪跡ができ、土が抉れた。

ぞつと感じる気持ちを無視し、すぐに悟は息切れする体を強制的に奮い立たせて逃走を再開する。

残り十メートル——。

「間に合えええええ!」

逆転がかかったベースホームに突撃する野球選手顔負けの飛び込みで、悟は町の入り口にラストスパートをかけた。

「ガアアアアアアアッ!」

巨狼も勢い良く再び爪を繰り出す。先ほどとは違ってその爪は完全にタイミングを得ていた。間違いなく悟を直撃するコースだ。

漆黒の剣のような爪は悟の皮を、肉を裂き、頭蓋骨を砕いた——

……はずだったのだが、何故かそれは実現しなかった。

悟の頭まであと数十センチメートルといった所で、急に巨狼の姿が消えたのだ。

滑り込むようにして町の中に戻った悟は、体を寝かせたまま巨狼

の姿にほくそえんだ。

「はあ、はあ……ははっ、掛かったな！」

巨狼は地面にめり込むようにその全身を地下に沈めていた。地上から六メートルほど下に真っ黒な塊となって倒れている。

時は戻り、午後三時。悟は樹海の目の前にある一つの家の前に立っていた。

その家は建築途中だったらしく、地下室を作る予定でもあったのか地下数メートルの穴を掘ったところで作業が止まっていた。

「これ、使えそうだな」

悟はそれを見てすぐに罨への利用を閃いた。

まず、穴の底に木の枝や箒と包丁で作った槍、桑などを固定し、その隙間にガスボンベを数本油まみれの布を挟んだ状態で置く。さらにその上に近くの家の倉庫から持ってきたベニヤを並べたものを置いた。

こうすれば、悟が上を通っても下に落ちることは無く、巨狼のような体重の大きい生き物だけが罨に掛かるのだ。夜になれば暗闇の助けもあり中々この罨には気がつかないだろう。

「ガルルアアアア、ガウアアアア！」

「はあっ、はあっ……俺の勝ちだ。アホ犬」

大声で暴れる巨狼を見据えて、悟はマッチを穴に投げつけた。

巨狼はマッチが投げ込まれる前に何とか逃げようとするも、無数

にそこにセッティングされている槍などが足に食い込み、幾らもがいて穴から抜け出せなかった。

マッチは油だらけの布の上に落ちると、一瞬にして炎を増殖させる。

「——っ！」

悟はそれを見るとすかさず穴から遠ざくように地面に伏せた。

数秒の時間差で雷鳴のような爆発音が轟く。それが治まるとすぐに無数の土砂が中を舞い、茶色の雨を降り注ぎながら土煙を形成した。

真っ黒な夜を照らす赤い火と、モクモクと白煙が立ち上る中、悟は静かに立ち上がった。

充満する煙で巨狼の残骸は見る事が出来ないが、穴からは何か動く気配も、『感覚』の反応も無い。

悟は巨狼の死を確信した。

「いくら火に強いっていても、流石にこれには耐えられなかったみたいだな」

大きく深呼吸をして、連続で動き続けていたため疲労の限界にあった体力を落ち着かせる。

——これで吉田さんは助かる。

悟は巨狼を倒そうとした目的を思い出した。

鈴木と川本が約束を守るかどうかは正直怪しい。だが、悟には考えがあつてワザとこの巨狼囃作戦を引き受けていた。

あのまま巨狼が存在する状態で亜紀が人質に捕らえられていれば、

確かに亜紀の命は危なかっただろう。外に出ても死ぬ可能性が大きかった鈴木と川本は、恐らく躊躇なく亜紀を殺したはずだ。

だが、巨狼が存在しなくなること、今二人に生きるという選択肢が生まれた。そして生きるためには亜紀の解放を望んでいる白井と桜川の敵意を無くす必要がある。無理やりに亜紀を連れて行くことを白井と桜川が許すわけが無いし、亜紀を殺せばなおさら逃げにくくなるだけだ。

だから二人が何の抵抗も無くこの町を出る為には亜紀を解放するしかなかった。

「——ふう……」

——一応大丈夫だとは思いつけど、早く吉田さんの無事を確認しないと……。

悟は自分が亜紀に特別な感情を抱いていることに薄々気づき始めていた。冷静に策を省^{かえり}見て、無事の可能性が高いにも関わらず、すぐに亜紀の元へ向かいたくてしょうがない自分がいる。

「俺らしくないな。こういうの……」

軽く笑いながらため息を吐くと、悟は桜川の屋敷へと足を向けた。突然、頭の中に稲妻のような何かが走った。

「——嘘だろ!？」

悟が血の気の引いた顔で振り返ると、白煙の中から玄色の巨大な狼が、生命を象徴するかのようにゆっくりと立ち上がった。

「ガルアアアアア!」

ガスボンベの爆発前と変わらない恐ろしい雄たけびが上がる。所々焼きただれて中の肉が見えているものの、身体機能的には何の損害も無いらしい。巨狼は平然と穴から這い出た。

「な、何であれで死なないんだよ!」

戦意喪失になろうとする意識を何とか繋ぎとめるも、無意識の内に悟は一步退いていた。

お互いの姿を目視し、しばし見つめ合う一匹と一人。
キッ!

巨狼の黄色い目が突然光るように鋭くなった。足の血管を浮き出させ僅かに踏ん張ると、巨狼は悟目掛けてその身を投げ出す。ほぼ同時に、悟は巨狼に背を向け全力逃走を開始した。

真ん丸の瞳に金色の短髪、不自然に目立った鼻のピアス。そこまでは以前と何も変わらない。普段通りの大森だ。だが、少し距離を置いて見れば明らかにその姿が変化しているということが分かる。

両肩から二メートル近く伸びた棘に覆われた二本の腕に、全身を体内から突き破ったかのごとく無数に生えている根つこのような触手。そして、生みの親と同じく象徴的な背中から聳え立つ第三の腕。もはやどこから見ても人間のものとは呼べない姿だ。

大森陽一、いや、今は三本腕という名の怪物は現在狭い廊下に閉じ込められていた。

「まだ前に居るのか？」

安形はソファーや椅子、本棚などで固定したバリケードの合間を縫って、三本腕の姿を扉の下の際間から見た。

バンッ！

するとすかさず三本腕の第三の腕が扉を強烈に叩いた。

「——居るみたいだな」

もう何度も今と同じ行動を繰り返したためか、目の前で大きな音が鳴ったことに意も解さず安形は落ち着いてコメントする。

「いつまでここでこうしていればいいんだか。お前、福田だったか？ 何か話そうぜ。さっきから俺が独り言を言っているみたいで嫌

なんだよな」

福田は死んだ魚のような瞳を見開きながら、無言で下を見つめる。

「……ああそう」

盛大なため息を漏らすと、安形は扉の方に向かって大声を出した。

「庄平くん！ 友くん！ 何かいい案は浮かんだかー？」

向こうも地下広間の扉の前に陣取っているのか、返事はすぐに返ってきた。

「あるにはあるんですけど、ものすごく危険っすよー！」

「一応言って見てくれー！」

「広野さんと下田さから聞いたんっすけど、三本腕は前に使った麻醉に対して抗体を持つちゃったらしんっす。だからコッチにある別の種類の麻醉を、直接三本腕の体内に注射器で注入すれば、また新しい抗体を作り出すまで時間を稼げるんだそうです」

「直接注射器で？ さっきみたいにスプレー噴射は駄目なのか？」

「それがこの麻醉は空気中で気化しちゃうらしんっすよ」

「……そういうものもあるのか。で、誰が注射するんだ？ 危険てことはまさか……俺か！？」

先ほどの庄平のセリフを思い出して、安形は目を見開いた。

「安形さん、三本腕は今あなたの方の目の前にいるんだ。こちら側の俺たちが注射器を持って近づくより、そこからあなたが直接打ち込んだ方が成功の可能性が高い。——ホント言うと、ライターを使えば確実に倒せるんだが、広野さんが許してくれないから今はこの策しかないんだ」

友が簡潔に説明した。

「……それなら仕方ないな。俺たちの命よりも怪物の命の方が大切か。まあ、今更言う事でも無いけど」

安形は広野らに皮肉を込めていうと、三本腕にバレないように扉の下の際間から視線を地下広間の方へと向けた。

「こっちは準備できたぞ。注射器を寄こしてくれ！」

「じゃー、いきますよー！」

庄平の声と共に、裸の注射器が向こうの扉の隙間からこちらの扉の隙間へと、地面を滑って送られてきた。運良く三本腕には気づかれなかったようだ。

安形はパシッとそれを手の中に収めると、素早く扉から離れた。

「おい福田くん、逃げる準備をしとけ。麻酔がすぐに効くとも限らない。万が一三本腕がここに入ってきたらまずいだろ？」

福田は全く微動だにせず黙り込んでいる。

「……そうやって一人で悲観にひたっているのもいいけど、それは今じゃなく家で一人の時にやれよ。辛いのは分かるが、他人に迷惑をかけたりするな」

「……うるせえよ。迷惑だと思うなら俺なんかほつといてテメー一人で逃げろよ」

「こんな状態で言うのは場違いかもしれないが、俺はこれでも警官なんだ。民間人を放って置く事なんて出来るか。いいから言うとおりにしろ、このアホ垂れ！」

安形は片手で福田の胸元を鷲掴みにすると、無理やり立たせた。

「——っち、この筋肉馬鹿が！」

「何とでも言え、生きてこの場を出られたら好きなだけ聞いてやる」子供のように睨んでくる福田の視線を流すと、安形は扉のノブに手を置いた。

「庄平くん、友くん！ 念のためそっちの扉もすぐに開けられるようにしておいてくれ！」

「分かっている。安心して取り掛かってくれ」

既にバリケードを崩し終わっていた友が応じた。

「よし、やるぞ！」

ガチャリ——

安形は出来るだけ静かに扉を開けた。三本腕は友が向こうで立てたらしい物音に気をとられ、こちらに気づいていない。

——いいぞ、そのままそっちを向いたままでいてくれ！

安形は小部屋から出ると、そろそろと三本腕の背後へ回る。

「食らえ！」

注射器は三本腕の第三の腕の付け根目掛けて、一気に刺し伸ばされた。

「っ！？ ギャアウアアアア！？」

背面の刺激に異常を察知した三本腕は、ぐるりとその体を回転させる。

安形は全身の筋肉をフルに使い、元の子部屋へと走ったが、部屋に入る直前という所で両肩を三本腕の体から伸びた腕に掴まれた。

「うわあ、は、離せ！」

そのまま三本腕は身動きできない安形を持ち上げると、背面の腕を硬く握り閉める。殴り殺す気のようなのだ。

掴まれた肩からはミシミシと骨の軋む音が聞こえ、それだけでも意識を失いそうなのに、巨大な第三の手で殴られたら堪ったものではない。安形は無我夢中で抵抗したが、三本腕の力の前では無意味に等しかった。

「止める大森！」

今まさに第三の腕が振り下ろされようとしたとき、開いたままの扉から悲痛な表情をした福田が出て来た。

「止めるよ。大森——」

「……がっ！？ 何してる……逃げろ……！」

怪物となってしまうた大森に福田の声が届くはずは無い。安形は福田の身を案じ、痛みに歪んだ顔で逃げるように促した。

三本腕はいきなり出現した新しい獲物に気を取られ、拳を上に向けてたまたま止まっている。

「俺たち、確かにろくな人間じゃないけどよ。薬やケンカはしても……人殺しまでするようなイカれた馬鹿じゃないだろ？」

三本腕は観察するようにじつと大森を見ている。

「俺が悪かった。怖くてしょうが無かったんだ。俺があの時銃で戦ってさえいれば——お前は……！」

「そいつはもう大森じゃないんだぞ！ 早く逃げろ福田——！」

地下広間の方で庄平が叫んだ。

「俺はお前を、——松本を、宮元を本当のダチだと思って……——」
ドン！

福田の胸を三本腕の拳が強打した。

「福田ー！」

安形と庄平が叫ぶ。

「……大、森……」

福田は口から大量に吐血すると、小部屋の中に吹っ飛んでいった。
「くそ、この怪物め！ もうイミユニティーの利益なんて知るか！
友、ライタをーをよこせ！！」

自分の目の前で人が死ぬことに耐えられなくなった庄平は広野の命令を無視し、三本腕を殺そうとした。

「駄目だ庄平。三本腕を殺せば命令違反になる」

「な、何言ってるんだよ！」

友の冷酷な言葉に耳を疑う庄平。

「俺たちはもうイミユニティーの人間なんだ。命令を破れば殺されるんだぞ」

「そんなこと知るか、早くライターを渡せよ！」

面白そうに背後から見ている広野らを見無視し、庄平は怒りの表情で友に掴みかかったが、友は一向に動こうとはしない。

「助けたい気持ちは分かるが、ここで死んだら、ただの無駄死だ。

俺たちが殺された後、安形さんが平気でイミユニティーとやっていけると思うか？ 分かるだろ、ここで三本腕を殺したら全滅して終わりなんだ」

「分かるかよ！」

「ああっ、安形さんが！」

いきなり優子が叫んだ。

庄平と友が振り返ると、安形の頭上に今にも巨大な拳が振り下ろされようとしていた。それを見た庄平は友のリュックをもぎ取ると、扉を大きく開け放ち三本腕目掛けて走り出す。

「——っ庄平！」

庄平は見ると見る中に三本腕との距離を詰めていく。

——絶対に俺の前でこれ以上、誰かを死なせてたまるか！

リュックからライターを乱暴に掴み取ると、右手に持ち火を発生させる。三本腕はその気配に安形から注意を逸らしこちらを振り向いた。

「ギャウウアアアア！」

「うおおおおお！」

庄平は光の帯を作りながらライターを前方に押し出す。同時に三本腕も頭上に掲げた第三の腕を、庄平目掛けて振り下ろした。庄平の腕よりも三本腕の攻撃に方が速かったのだが、その巨大な拳骨が庄平の頭を粉碎する直前、いきなり三本腕の動きが止まった。

安形を掴んでいた両腕が離される。

ドサッ！

糸の切れた人形のように安形は地面に落ちた。

「……はあ、はあっ、麻酔が効いてきたのか……！？」

「安形さん、大丈夫ですか！」

火の付いたライターを用心深く三本腕に向けたまま庄平が安形に駆け寄る。

「俺は大丈夫だよ。心配かけたな」

「……無事でよかったっす！」

庄平は満面の笑顔で心底嬉しそうにそう言った。

三本腕は仁王立ちしたまま、機能停止したロボットのように動きを止めている。それを見た安形は肩を抑えながら、ゆっくりと小部屋の床に伏している福田に歩み寄っていった。

辛うじて命を繋ぎとめている福田の前に腰を落とすと、安形はお礼をいった。

「ありがとう、福田くん。お前のおかげで俺は助かった。お前が時間を稼いでくれなかったら、間違いなく死んでいたよ」

それを見た福田は無表情で答える。

「俺は…… テメーのために大森に話しかけたんじゃないやねえ……！ 俺は——ただ、あいつを助けたんだ……」

「それでも俺が助かったことは変わらない事実だ。——ありがとう」
「……ち」

福田はぜえぜえと、激しく呼吸をしながら、不機嫌そうにそっぽを向いた。

足音が聞こえてきた。友や広野らがこちらに歩いてきているのだろつ。それを理解した福田は指で安形に耳を貸すように合図すると、小声で話した。

「言つとくが、これはお前らを助けたいから…… 言うんじゃないぜ。俺がただあいつらに一泡ふかせてやりたいだけだ」

「何だ？」

「地下広間のモニター前に黒くて細長いケースがある。そこに俺が持っていた猟銃が…… 入っている。それを手に入れられれば…… 少しは希望が見えてくるだろうよ」

「銃？ どういうことなんだ福田？」

安形は何故福田が銃を持っていたのか聞こうとしたが、その前に福田は息を引き取ってしまった。もうその口は全く動こうとはしない。

「死んだのか？」

僅かな時間差で背後から広野の冷たい無機質な声が聞こえた。

「…… ああ」

安形は同じくらい感情の無い冷たい声でそれに応じた。

「そうか。あ、その男は別に必要な人材でも何でもなかったからな。処理する手間が省けてよかったよ」

「この野郎——……！」

庄平が拳を握り締める。

「庄平——」

友がすまなそうに庄平の肩に手を置いた。

「…… 分かつてる。何もしねーよ……！」

その様子を満足そうに見ると、広野は高らかに声を出した。

「さて、また三本腕が目を覚まして困る。この一時的な隠れ家ももうおさらばと行こう。下田、すぐに出発の準備に取り掛かれ！

電波塔へ向かう」

「分かりました」

友は一瞬下田から殺意のようなものが広野に向けられた気がしたが、あまりにも一瞬だったので気のせいだと思ふことにした。すぐに別のことが頭に浮かぶ。

「——悟は……今どうしてるんだろうな」

銀野町内、町の中心広場にある白井の家。悟は今そこに身を潜めていた。

窓から巨狼がのしのしと通りを歩いているのが見える。先ほどの爆発で鼓膜が潰れたのか、巨狼はいくら物音を立ててもこちらに気づかなくなつたが、その代わりこれまでのような知能的な行動を取らず、悪魔のようにただ悟を追う怪物と化した。

「あれほど町に入ろうとはしなかったのに……どういつつもりなんだ？ まるで爆発前と雰囲気が違う……」

悟は巨狼の態度の急変に違和感と驚きを覚えていた。

「怒りで我を忘れたって訳でも無さそうだな」

思案にふけりながら見続けていると、グルンと突然巨狼の眼球がコッチを向いた。黄色い目と真珠のような黒い瞳が交差する。

「ヤバイ、見つかった！」

悟は一目散に駆け出す。

小さな家の玄関から悟が飛び出した直後、巨狼の巨体によってその家は背面から粉碎された。

「グルルルルルル！」

「——くそっ！」

狂気を含んだ目で執拗に追いかけてくる巨狼から、死にもの狂いで逃げる悟。巨狼が通れそうにない小さな路地や家の隙間を走り必死に距離を開けようとするも、ことごとく巨狼はそれを破壊し後を付いて来た。

「……っ！」

悟は十字路のカーブで曲がったように見せかけると、その横にある一軒家に飛び込み隠れた。数秒後、狙った通りに巨狼は通りの先へと走っていく。

「……はあっ、はあ……はあ……——」

——落ち着け、こういうときのために色々と罠を仕掛けていたんだろ。それを使うんだ。

悪魔との連戦、巨狼との戦い、精神的、身体的疲労はもはやピークに達していたが、まだ生き残る可能性を信じて、悟は諦めずに策を練った。

「ここから一番近い罠は——あの雑貨屋か。よし！」

座っていた体を起こそうと立ち上がりかけたが、途端に転んでしまった。足に力が入らないのだ。

「ははっ？ ……なんか思っている以上に体は限界らしいな……」

あまり一つの場所に留まっただけでは巨狼が臭いを辿ってやってきってしまう。悟は玄関の壁に手をつけて何とか立ち上がった。

「もう何個もの罠を使えるだけの体力は残っていないか。——まともには戦えるのは次で最後だな」

溜息混じりに静かに扉を開ける。巨狼はもはや聴覚を失っているので静かにする必要は無いのだが、恐怖から自然とそうしてしまっただけ。出来るだけ体力を温存する為に悟はかなりのスローペースで雑

貨屋まで歩く。

雑貨屋の全体が見える位置まで来ると、遠くの方で「ズドン」という大きな音が響いた。

「……あの犬また転んだな」

巨狼は悟を探して町を走り回っていたが、広い道を走行中にいきなり足が何かに引っかかり体制を崩して転んでしまった。悟が昼にロープを家と家の間に張っていたのだ。

「グアアアアル!？」

転んだ先には無数の槍や尖った物体が地面にセットされていたため、巨狼が倒れるとそれが体中に刺さった。鮮血が傷口から^{ほとばし}る。

最初のガスボンベ爆発から始まり、町中に張り巡らされた今のようなトラップ――。

悟の目から見ればまるでダメージの無いように見えた巨狼も、度重なる罠によって実はかなりの損傷を負っていた。

巨狼は大げさにもがいた後、槍を体中に刺したまま立ち上がる。

鋭く細められた黄色い目は体中の痛みと、いつまでたっても殺すことのできない獲物に対し、強い憎しみを表していた。

その思いをぶつけるために、すぐに臭いを頼りに獲物を探す。

「ガルオオオオオオ!」

悟の居場所が分かったのだろう。巨狼は狼のように伸びのある雄たけびを上げると、目を血走らせ激走しだした。

「さあ——……これで最後だ。アホ犬め、掛かって来い」

耳に侵入してきた雄叫びの方向を睨みつけながら、悟は両手に包丁を構えた。町の中心広場に立っていると、西の道先から巨狼が猛烈な速度で迫ってくるのが目に入る。

「ガルアアアアアア！」

丁度映画などでよく目にする、車と車が度胸試しに相手めがけて疾走する姿と似た状態だ。

直撃すれば全身がバラバラになるような巨狼の突進を横にかわすと、悟はライターを取り出した。

「これでお前はここから出られない」

素早くそれを背後の雑貨屋へと投げ込む。

ドンッ！

大きな爆音になる。床に油を引いていたのか、ガスを溜めていたのか、雑貨屋は見る見るうちに燃えていった。しかもそれだけでは終わらず、悟は他の家にも同様の仕掛けをしていたらしく、雑貨屋の炎は巨狼を囲むように広場中の家に広がり円を刻む。

次々に爆発し、燃え上がっていく家、家、家、家——。

真っ暗だった空が一気にオレンジ色に照らされる。

「グギャンッ!？」

まるで火炎の檻に閉じこめられたような現状に巨狼は初めて怯えたような素振りを見せた。

「もう何の畏も無い。正真正銘、一対一だ。いくぞ、アホ犬」

決意を込めた目で巨狼を見つめる悟。

巨狼は恨めしげに鳴くと、悟目掛けて飛びだした。

「ゴガアア!？」

だが、すぐに走るのを止めてしまふ。

巨狼の図体では全力で走るにはこの広場は狭すぎた。少し足に力を込めるだけで一気に火の檻の端まで移動してしまう。

巨狼が火に強いといってもそれはあくまで悪魔と比べての話だ。有機生命体である以上、ある程度は火に対して恐怖心を持っている。全力で動けば目の前に火炎の壁が飛び込んで来るため、当然巨狼は自由に動けなくなった。

「おおっ！」

その隙を見計らって、悟は何度も巨狼の足に包丁を切りつける。脂肪で斬れなくなったり、折れたりしたらリュックから新しい物を取り出し、残り少ない体力が続く限り巨狼を攻め続けた。

元々罾のおかげで血だらけだった巨狼の足は、悟の斬撃でますます傷ついていく。

自分の足をちょこまか動き回る悟を憎たらしげに見ると、巨狼は両手の爪や足踏みで殺そうとしたが、全身の傷、自由に動けないことに加え、悟の第六感のおかげで殆ど命中することは無かった。

——何か行けそうぞぞ！

自分が巨狼と渡り合っている現状に、悟は勝利の可能性を感じる。完全に捨て身、相打ち覚悟で挑んだこの戦いにも僅かだが光が見えてきた。

「ガルアアア！」

だが突然、自分の生命の危機を感じたのか、巨狼は暴走とも言えるようなものすごい攻撃を始めた。

その攻撃は既に悟を狙ったものではなく、何に対する攻撃か判別がつかないようなほどメチャクチャに振り回されている。左右の爪はそこら中に引っかき傷を作り、棘に覆われた大きな尾は道路や建物に小さなクレーターを生み出した。

この猛攻を悟は避け続けるしかなかった。

「くそ、キレたな！ このままじゃまずい！」

あまりこの状態が続くのはいくら特殊な感覚を持っている悟でも

厳しい。間違いなくそのうち限界が来るだろう。

悟は何かして今のうちに決着をつけなければと焦った。必死に考えをめぐらす内に三本腕との戦いを思い出す。

庄平が死に掛けたこと、友が上に乗ったこと――。

「上？ 頭に包丁を刺せれば勝てるだろうけど……上手くいくか？」
巨狼の爪が真横の地面を砕く。

「――やるしかないか。元々博打みたいな戦いだったんだ。最後に一か八か賭けてやる！」

悟は巨狼の尻尾が自分に向かって振り下ろされたのを見計らってそれに飛び乗った。

――十秒感染の危険がある以上、チャンスは数秒しかない。絶対に失敗はできない！

巨狼の背をジャングルジムのように駆け上る悟。だがもちろん巨狼もそれを黙って見てはいない。体を縦横無人に振り出したのだ。

「ぐううー！」

悟は振り落とされないように無我夢中で巨狼の背にある棘を掴みながら、ゆっくりと駆這い上っていく。

「うあああつ！」

そしてとうとう巨狼の首元まで辿りついた。

首はもつとも揺れが激しい部位だ。悟の体も大きく揺れ、何度も手が外れそうになる。巨狼が首を横に勢い良く傾けると同時に、右手が揺れに負けて巨狼の首から離れた。こうなると後はもうただ黙って振り下ろされるのを待つしかない。

しかし、体が巨狼から離れる直前、悟の左手に輝くものがあつた。
「くたばれええー！」

悟は自分の全てを込めた渾身の一振りを、巨狼の脳天に振り下ろしたのだ。

「ガリュアアアアッ！？」

これまで巨狼が発した鳴き声中でもっともボリュームの大きい音が木霊する中、巨狼の最後の足掻きで悟は近くの家の残骸に吹き

飛ばされた。

「ぐあああああつ!？」

ドサッン!

燃え盛る瓦礫の合間、全身を強打した悟は頭から血を流すと意識を失った。

<第十二章> 黒服

<第十二章> ” 黒服 ”

「……マジかよ。マジでこいつ一人でこの馬鹿犬を殺したのか……！？」

「信じられねえな……」

暗闇に燃え盛る家々。その明かりに囲まれた巨狼の死体と、瓦礫の上に倒れている悟の様子を見て、鈴木と川本は我が目を疑った。

「曲直くん、曲直くんっ！ 大丈夫！？ お願ひ起きて……！」

「しっかりしなさい！ 目を覚ますんです……！」

亜紀と白井は傷だらけで横たわる悟に向かって必死に呼びかけている。

「左腕が折れている。その痛みで気を失ったんだな」

その様子を見て医学の知識があるのか、桜川が冷静に分析した。

「じゃあ、曲直君は死んでないのね？」

「ああ、気絶してるだけだよ。水でもかければ起きるんじゃないか？」

桜川は女のような笑い方で亜紀を安心させようとした。

「そうか、良かった。こんなすごい人材が死ぬのは勿体無いですからね」

意味深な言葉を白井が言う。

「それってどういう意味？」

亜紀が不思議がつて白井に尋ねたが、答えが返ってくる前に悟が目を覚ました。

「うっつ……吉田さん……？」

「曲直くん！ 良かった……目を覚ましたんだね！」

涙目で言う亜紀。

「良かった……吉田さんも無事で」

「私のことはいいよ。それよりゴメンね？　悟くんをこんな目に合わせちゃって……」

「吉田さんの所為じゃないだろ？　気にしないでいいよ」

悟はゆつくりと体を起こした。その様子を見ながら亜紀が考えげに言葉を発する。

「ねえ、曲直君。吉田さんって言うの呼びにくいでしょ、みんな呼んでいるし、亜紀でいいよ。私も悟くんって呼ぶから」

「え？　吉田さ……亜紀が、いいならそう呼ぶけど……」

悟は亜紀の少し照れたような笑顔に見られながらそう言った。

「ところで悟くん、一体どうやって——」
ガシッ！

亜紀の腕を川本が突然引き寄せナイフを首に当てた。

「おいっ、何すんだ！」

全身の傷と折れた左腕の痛みに顔を歪めながら、悟が叫ぶ。

「あの犬っ子を殺してくれてありがとう。おかげでここから逃げられる」

「約束を守れよ！　亜紀を放せ！！」

川上の言葉に怒りを露にする悟。

「へへへ、いやゝ今の亜紀ちゃんの写真があまりにも可愛くてよ、俺も川本も殺人衝動を抑えられなくなっちゃったんだよ」

鈴木が不気味な笑顔で答えた。

「ふざけんなっ！　亜紀に何かをしてみろ、俺がお前らを殺してやる！」

「その体でか？　笑わせんね」

馬鹿にしたような態度で悟を見る鈴木。

「悟くんは動けなくても、私たちがいますから」

白井がズイツと前に出た。

「さっきまでは三対二だったから下手な動きはできなかったけど、

今は二体二なんだぜ。ナイフを持っている俺たちにテメーらが適うわきゃねえだろよ」

川本が余裕のある表情で言う。

悟は愕然とした。完全に想定外の事態になってしまったからだ。このままでは間違いなく亜紀は殺されてしまふ。悟のこの恐怖心は悪魔を前にする時よりも強かった。

「お願いだ。何でもするから亜紀を放してくれ」

「ゝひゅー、いいねえ、色男の苦痛の顔っていうのもなかなか殺意をそそるぜ」

「……頼むよ」

鈴木の軽口を無視し、悟は訴えるようにお願いした。

「やだね。こっちは何人も殺す予定だったのに急に悪魔や何やらが出て来た所為で、まだ誰も殺せてねーんだ。いい加減限界なんだよ」
川上は亜紀の首筋に当てていたナイフに力を込めた。

「や、止めるー!」

ブシャアアアアア!

亜紀の首本に大量の血が放出された。間違いなく頸動脈を切られたのだ。

「――な、……何でだよ――……」

悟は目の前で起きたことが信じられないといった表情でその様子を見る。

不本意な犠牲者となった人間は、赤い命を吐きつくすと、無様に地面に転がった。

「何で……――何で……あんたが……?」

大量の血を撒き散らしながら地面に倒れている川本の死体には構わず、悟は川本に向かってナイフを投げた桜川を、奇異の目で見つめた。

「さ、桜川さん?」

川本の血で首本を染めたまま、亜紀が目を見開いて呟く。

「ああゝしまった、亜紀ちゃん死んだら悟がまともに話を聞ける状態じゃなくなると思ってたさ、つい手を出しちゃったよ」

「な、何なんだ――？」

悟が混乱した様子で聞く。

「ん、ちよつと待ってくれ。先に仕事を片付けるから」

桜川は回れ右すると白井に体の向きを合わせた。

「……なっ！」

「用件は分かっているだろ？ 白井さん。いや、ディエス・イレのスパイっといったほうがいいか？」

「お、お前はイミュニティーの人間か！」

これまでの丁寧な敬語とは打って変って乱暴な言葉使いで話す白井。
「今はな。僕は『黒服』だよ。当然知っているだろ？」

「くそ、そういうことか！」

黒服という言葉聞いた瞬間、白井はいきなりその場から逃げ出そうとしたが、背後から飛んできた小型ナイフによって背中から心臓を一突きにされた。

「がっ！？ ――あ……！」

そのままもつれるように倒れこむと、白井は二度と動かなかった。

「白井さん！？」

亜紀が震えながら手を胸の前に合わせる。

「さて、これでイミュニティーから依頼されていた任務は終了だ」

「お前は一体？」

平然と人を殺した桜川に驚いた声で悟が聞いた。

「僕は黒服。つまり非確認生物関連組織専門、派遣戦闘員だ」

「く、黒服？」

「分かりやすく言えば、レンタル職員さ。主に今回みたいにイミュニティーや大手テログループ、ディエス・イレなんかの依頼を受けて仕事をこなすな」

「この町の間人じゃなかったのか？」

「ああ、イミユニティーからの依頼でここに居ただけだ。この富山樹海ブラックドメインの生物サンプルや情報を盗みに来たディエス・イレのスパイを見つけるために、態々（わざわざ）身分を偽ってたんだよ。僕の本当の名前は桜川じゃない。これからはキツネって呼んでくれ。通り名だから」

「キツネ？」

「イミユニティーの人間がそのまま潜入してもディエス・イレにはすぐにばれるからな。確実にバレずにディエス・イレの人間を樹海の生存者達の中から発見し、殺せる存在として僕が雇われたんだ」キツネは退屈そうな顔でそう言った。

「私達も殺す気……？」

亜紀が心配そうな顔で聞く。

「別にどうもしない——って言いたかったが、そうもいけなくなつた。悟、お前の活躍を見たからな」

「……何？」

「お前が巨狼を倒すなんて予想外だった。いくら超感覚者といえどもそこまで出来るとは思っていなかったから。まるで『こちら側の人間』のように素晴らしい動きだったよ」

キツネは心底感心したような顔で悟を見る。それに対し、悟は身構えながらキツネを睨んだ。

「だったら俺たちも殺すのか？」

「いや、それはあまりにも勿体無いからな。提案があるんだ。ちょっとコツチに来てくれ。亜紀ちゃんには聞いて欲しくない」

キツネはニコニコとした笑顔でそう言った。

それを見て、畏かた一瞬悩む悟。

先ほどの動きを見れば、あの男が自分を軽く瞬殺できる實力を持っていることは明らかだ。殺す気があっても、別に自分を近くに寄せる必要はない。白井のようにナイフを投げればそれで済むのだから。

悟はしばらくキツネと睨み合った後、素直にその言葉に従うこと

にした。

「――」
すぐにキツネが何かを悟に耳打ちする。しばらく時間が経った後に、悟がかなり困ったような顔をしているのが亜紀に見えた。

「……そうするしかないのか？」

悟のその問いにキツネはクスクスと笑いなら頷く。

「……分かったよ」

悟は暗い顔で答えた。

亜紀には二人が何を話しているのかさっぱり分からなかったが、悟にとってあまり喜ばしい提案では無いということだけは分かった。いつの間にか鈴木の様子が消えていたが、誰一人それには構わず会話を続ける。

「ところで、超感覚者っていうのは俺の他にもいるのか？ 今のあなたの話だとそう聞こえたぞ？」

「あまり時間がないから詳しくは教えられないが、超感覚者は数多くいる。自然の力で生じた物では無く、人為的な存在だからな」

「人為的？」

「お前は超感覚者をESPだとも思っているのか？ それは違う。超感覚とは『空気』を読む力のことだ。例えば雰囲気で性格が悪そうな人間といい人間とが分かる場合があるだろ。それは別に勘なんかじゃなく、無意識下で表情の動きや体の動きなどの細かい微小変異から判断しているだけだ。超感覚は言わばその延長で、人が気づき難い微小変異や周囲の動きを普通の人間よりも敏感に感知できる能力のことなんだよ」

「空気を読む……」

「音が振動として物質を伝わって行くように、周囲の微小変化も何らかの影響を伝導する。お前が『感覚』で背後や遠くの死の危険を感知できるのも、伝わってきた微小変化を感覚で認識しているから

だ。簡単な言い方をすれば、めちゃくちゃ感受性の高い人間ってことだな」

「じゃあ、人為的ってことはいったいどういう意味なんだ？ 誰かが俺に何かをしたのか？」

「それは……教えられないな」

キツネが初めて曇った表情を見せたので、悟は訝しがった。

「……話は終わりだ。もうお前らの友達とイミューニティーは電波等に向かっている。僕たちも急がないと駄目だ。ということかはさっきの話で分かるだろ？」

「ああ、分かってるよ」

「じゃ、向かおうか、電波塔に」

キツネは遠くに見える高い建物を見据えた。その灰色の塔は緑の海の中で一つだけ死を表すかのように悠然とただずんでいた。

<第十三章> 地獄の裂け目

<第十三章> 地獄の裂け目

早朝二時。普通ならば多くの人間が寝ているべき時間帯だというのに、彼らはその脳を休めることはなかった。

夏とはいえ、この時間帯ではまだ空も一面黒一色だ。まわりつくように周囲に満ちている暗闇の中、彼らは歩みを止めた。

目の前には四階建ての建物が建っている。下から見た限りでは屋上は二つのエリアに分かれているらしく、後部が受信塔、前部がヘリポートのように見えた。

「行くぞ、この上にヘリが止まっている」

下田が友、庄平、安形、優子、志郎を促した。それに鎖で縛った三本腕を引きずりながら神崎と惣一も続く。彼らは淡々と言葉を発することなく入り口、階段と歩を進めた。

電波塔で待機していたイミュニティーの人間が倒したのだろうか。所々に悪魔や悪魔LV、2の死体が転がっており、死体の中には熊悪魔LV、2と考えられるものまであった。

——こんな凶暴そうな奴まで……さすが訓練された人間の集団ということか。

友は熊悪魔の死体を見ながらイミュニティーの手腕に感心した。

「君も訓練を受ければ、すぐにこれくらい出来るようになるさ。友くん」

友の考えていたことが分かったのか、広野は彼の肩に手を置きながらそう言った。

「……こんな細長い人間でも大丈夫なんですか？」

「友！」

広野と親しげに話す友に庄平が怒鳴りつけた。友がイミュニティに入ること喜んでるように見えたからだ。

「お前——悟と亜紀ちゃんの無事も分かんないときに、未来の上司に媚を売ってんのかよ？」

「誰が媚を売っているんだ。ただ話してただけだろ。何興奮している？」

友は自分ではそんなつもりは無かったのだが、事件の黒幕ともいえるべき相手、それも何人もの同級生の命を奪った相手と、何の隔たりもなく話す様子は確かにそう見えた。少なくとも庄平の目には。

「…………ふん」

庄平は友を一睨みすると、ずんずんと階段を上がっていった。

「何カリカリしているんだ？」

友は庄平の背中を不機嫌そうな目で見ながらそう思った。

数十分前の福田と三本腕の争いから、庄平と友には僅かだが信頼という名の繋がりに亀裂が出来ていた。そしてその亀裂はこの先彼らの運命に大きな影響を与えることになる。二度と修復不可能な影響を——

「着いたぞ」

屋上への扉の前で、下田はようやくこの任務も終わりになるという喜びから、少し明るい声で背後の庄平に呼びかけた。

しかし庄平は眉間にしわを刻みながらふいつと視線を逸らす。

「…………嫌われたもんだな。まあ、仕様がないけどよ。」

苦笑いしつつ下田は扉のノブを回し、外の世界と屋内の世界を繋げた。足を一步踏み出すと同時に大型のヘリコプターが目映る。暗闇とはいえ、その美しいフォルムははっきりと見えた。それはまるで光を放っているようにすら見え、自然と心が軽くなる。

「——おかしいぞ？パイロットや他の人間はどこに行った」

仲間の姿が見えないことに不信感を持ったのか、イミュニティメンバー、神崎がそう言った。

「下田——」

広野が顎で命令を下す。

上司の意を理解した下田らは懷からコンバットナイフを出すと、素早くへりの周囲を囲んだ。神崎が左から、惣一が右からそれぞれへりの中を慎重に覗く。

「……ん？」

躊躇した後、二人とも戸惑いながらへりの中へと入っていった。

その様子を見た志郎が小声で言葉を発した。

「問題発生みたいだね」

「え、どういうこと志郎さん？」

志郎の意味深なセリフにビクンと震える優子。その疑問の答えは、惣一の叫び声で知らされた。

「広野さん！ パイロットがどこにもいません。他の人間もです」

「何だと！？ どうなっている、あの馬鹿どもどこに行った？」

「ぐぎやあああああ！」

混乱の最中に突然遠くの方から悲鳴が聞こえた。

「この声は——高木か！？」

声が聞こえた方向を見ながら広野が呟く。

「西裏湿地……あそこは……！」

「何だ下田！？」

「……『BULLUCK・DOMAIN』ブラック・ドメインです。あの方向はこのバイ

オハザードの発生源、地獄の裂け目がある所です」

「そういえばそうか、高木らは何故あんな所に？」

「何だ、地獄の裂け目って？」

ブラックドメインのことを知らない安形が広野に聞いた。

「悪魔の元の生物が湧き出た場所だ。元々地の底に住んでいた奴らは、その裂け目を通してこの樹海に出て来た」

「地面の底から？ ——まさに悪魔だな」

一人納得する安形。

「広野さん。パイロットが居なければ、三本腕が目覚める前にここ

から脱出来ません。すぐに彼らを追わなくては」

神崎がかなり焦った表情で広野を急かした。

「そんなことは言われなくてもでも分かっている。三本腕をさっさとそこら辺にくくりつけておけ」

「は、はい」

神崎と惣一は急いで三本腕の鎖をヘリポートの柵に結びつける。

「よし、すぐに搜索を始める。最悪、パイロットの有村さえ助かればいい。任務達成が最優先だからな」

「了解しました」

ほぼ同時に二人は返事をした。

——任務？ あんたの手柄、三本腕を届けるためだろ。

下田は心の中で広野をあざ笑ったが、顔には一切その心情を表すことなく素直に命令に従った。

「なあ、広野さん。僕達もそこに行かないと行けないのかい？ 邪魔になりそうだしここで待っていたいんだけど」

志郎が何食わぬ顔で聞く。

「駄目だ。家族を人質に取っているとはいえ、人間自分の命が一番大切だからな。逃げる可能性もある。それにここに残っていくのなら部下を一人置いていくぞ？ 無駄な足掻きはよすんだな」

お前の考えはお見通しだぞ、といった表情で広野はそう言った。

これ以上誰も反対しそうにないのを確認すると、高らかに大声を上げる。

「よし、行くぞ」

キツネは電波妨害の中でも使用できる特別製の携帯電話を切った。

「イミユニティーの人間か？」

見え難い夜の森の足場に気をつけながら、すかさず悟が尋ねる。

「ああ、ヘリのパイロットが行方不明らしい。僕達も電波塔の前に直接『地獄の裂け目』まで行って彼を探してくれだ」と

「パイロットが居ないってどういうことなの？」

キツネの答えに亜紀がうんざりしたような顔で質問した。

「そんな顔で僕を見るな。多分悪魔の集団にでも襲われたんだろう。正直、悪魔退治のプロである彼らがそう簡単に逃げたとは思えないけどな」

「パイロットが死ぬのはまずい。俺たちもすぐに行こう」

脱出にはパイロットの存在が必要不可欠だ。悟は直ぐに歩みを速めようとしたが、キツネがその背中に妙なセリフを吐いた。

「クスクス、そうだな。お前には特に大変だからな」

「え？ どういうこと、悟君？」

亜紀は先ほどのキツネと悟の間にあった、自分には聞こえなかった謎の会話を思い出してそう言った。

「ほ、ほら俺には庄平と友っていう大切な友人がいるだろ。あいつらが死んじやったら堪らないじゃん」

「……何か嘘臭いね」

明らかに咄嗟に考えたとしか聞こえない悟の言い訳を、亜紀は怪しんだ目つきで見る。

「そ、そんなこと無いよ。——こうしている間にもあいつらに危険が迫っているんだ。速く行こう」

亜紀の視線から無理やり目を背けると、悟はドンドン前に進んでいった。

——……悟君。私に何を隠しているの？ さっきの話は何だったの？

悲しそうな目で心配している亜紀のことに、前を歩く悟が気づくことは無かった。

「あそこに小さな東京タワーみたいな物が見えるだろ？ あれが電

波塔だ。最終的にはあそこからこの樹海を脱出することになる。で、僕たちが今向かっているのは、そこから見て二、三キロ左にある所だ。道を間違えるなよ」

「言われなくても分かってる」

——『感覚』が敏感に得体の知れない生き物の存在を教えてくれているからな……。

過保護な母親のような物言いのキツネにイラツつとしながら、悟は歩き続けた。

その様子を見ていた亜紀は、何故悟がこの事件の犯人の一味らしいキツネに齒向かわないのか不思議に思っていた。ついさつきキツネから庄平らがイミュニティーに捕まったことは聞いていたものの、それが理由とは思えない。巨狼を倒した後のあの会話が関わっているのだろうか、と再度疑いの気持ちを抱いたが、やはりその内容までは推測出来なかった。

——……はあ、ずっと考えててもしょうがないか、今はまず逃げるのが大事なんだし、後で考えよう。

頭の片隅にまだ不安が残っているものの、逃げ延びた後で聞けばいいと亜紀は自分を納得させた。

しかし、その答えを悟から聞くこ機会は永遠に無いということを亜紀はまだ知らなかった。

「何かジメジメしてきたな」

庄平が額の汗を手で拭きながら周囲に目を這わせる。

「どうやら、この先は湿地らしいね。キノコが沢山目に付くように

なってきているし」

「湿地……いかに何か居そうっすね」

志郎の分析に目を細める庄平。

「おい、もうそろそろ地獄の裂け目だ。無駄話を止めて悪魔に用心しろ」

下田が雑談をする面々に向かって呼びかけた。

「なあ、あんたらの仲間を大声で呼んでみたらどうだ。声でどこにいるか分かるんじゃないか？」

安形が服の裾をパタパタさせながら下田に聞く。

「話を聞いていなかったのか？ 大声を出せばすぐに悪魔が集まってくるんだよ。地獄の裂け目はこの事件の発端であり最初の現場、これがどういう意味分かるか？」

「どういう意味なんだ？」

「悪魔『LV, 3』がいるってことだよ。地獄の裂け目は古い感染体が多いからな」

「れ、LV・3ですって!？」

優子はここに来てから何度目か分からないくらい繰り返した、安形の袖を掴むという行為を再び無意識のうちにに行った。

「なるほど、確かに厄介だな。だから熟練のはずのあんたらがこうも緊張しているのか」

広野らの微妙な変化に気づいていたらしい友が冷静に言う。

「その口調がいつまで持つか楽しみだぜ、秀才くん」

自分よりも落ち着いている友に嫉妬心を感じたのか、皮肉っぽく惣一が睨んだ。

「おい、これ見ろよ!」

突然周囲に響いた庄平の声に全員が振り向くと、そこには点々と血の跡が続いていた。

「これって、もしかしてあんたの部下——……」

「特定は早い。死体が無いからな。先まで行くぞ」

庄平の問いを最後まで聞かないで、広野は血の跡を追いつめた。

「まだ随分と色が赤いな。垂れてからそれ程時間が経っていないよ。うだ。やっぱりさっきの悲鳴を上げた高木の物か？」

「恐らくそうでしょうね。もういつ襲われても可笑しく無い。気を付けないと……」

血を見ながら下田と神崎が神妙な顔つきでお互いの気を引き締める。

『シユルルルルルル』

何かが這うような音が神崎の頭上で鳴った。

しかし血痕に気を取られている面々は誰一人その音に気がつかない。

音の主は枝に重なるように姿を隠しながら、着々と神崎の首へと近づいていた。まるで蛇のような動きだ。

「神崎！」

それが神崎の首元に忍び寄る直前、気配に気づいた下田が間一髪でナイフを頭上に振った。

「ヒュオオオオオオオオオオ！」

高音の笛を吹いているかのような悲鳴を上げながら、それは木の上へと引つ込む。

「な、何だあいつは!？」

下田が木を見上げると、そこには悪魔でも三本腕でも無い、見たことが無い生き物が居た。

「――女……?」

神崎がその第一印象をそのまま口に出す。

目と鱗、牙の無い蛇のような片手を、アームフードのように肩から生やしたその女性は、村の住民だったのか、農作業の服装をしたまま枝にぶら下がっていた。背中からは針のような無数の太い棘を上に向かって生やし、蛇型の右手に加え、左手も蛇の尻尾のような形になっている。さらに太ももから下は、象の足のように分厚い皮と爪に覆われていた。

「あの顔と灰色の体色を考えれば悪魔の一種だろうが……下田さん、

あれは何なんだ？」

友は包丁槍を前に据えながら目を細めて聞いた。

「俺も見たことがないな。——恐らく、イグマ細胞の突然変異だろうよ」

「突然変異？」

「まれにあるんだよ。地下とは全く違う環境の地上に出て来た所為で細胞変化を起こし、本来の悪魔とは別の形を形成するようになるイグマ細胞が」

「イグマ細胞の亜種か。今更だが、ホント変な生き物だ」

「ヒョオオオオオオオオ！」

「ちよつと、何であちこちから聞こえるのよ！」

優子はぐるぐる目を森中に走らせながら怯えた声で叫ぶ。

「……またこれかよ」

安形は自分の周囲を見渡してそう言った。

木の影から目の前の怪物と同じような女性の化け物が、次から次へと出て来たのだ。

「これはまずいね……」

「お、おい囲まれたぞ」

志郎が苦虫を噛み潰したような表情で怪物を見る横で、庄平も顔を引きつらせながら石斧を取り出した。

怪女は合唱のように他の怪女と声を共鳴させながら、獲物を殺すための雄たけびを上げた。

「ヒョオオオオオオオオオ！」

「何だあの声……？」

相変わらず真っ暗な森の中。自分たちが向かっている先から突然奇声が聞こえてきたので、悟はいぶかしんだ。

「クスクス、新種の化け物が三本腕の他にも居たみたいだな」
キツネが面白そうに言う。

「この声……かなりいっぱい居るみたい。悟くん、急ごう」

「ああ、そうだな」

悟は巨狼や悪魔から受けた傷の所為で正直歩くのも辛かったのだが、庄平と友を助ける為に必死に痛みを押さえ込み、亜紀に続いたその様子に目ざとくキツネが気づく。

「亜紀ちゃん。あまり悟に無理させない方がいい。応急手当をしたとはいえ、左腕も折れてただでさえボロボロなんだからな」

「あつ——ごめん……悟くん」

悟の怪我のことを思い出して亜紀がすまなそうに謝る。

「気にしなくていいよ、まだまだ全然元気だから」

悟は強がってみたものの、亜紀にはそれがバレバレだったようだ。心配そうに悟の腕を肩に担ぐと、二人三脚よろしく歩き出した。

「仲がいいな」

ニコニコと二人を見るキツネ。

——五月蠅い……そんなに嬉しそうな顔をされなくても分かっているよ。約束は守る。

悟はキツネに怒りの籠った視線を投げると、黙って亜紀と一緒に歩き続ける。

「何か湿ってきたね」

「……そういえばそうだな」

亜紀と悟は急に周囲に薄い霧が出てきたのを感じていた。気のせいか空気も水気が多くなっている。

「亜紀。俺、こんな状態だしさ。亜紀を守りきれ自信が無いんだ。もしもの時はすぐに一人で電波塔まで逃げてくれ」

「何言ってるの、悟くんも一緒に逃げよう。絶対に置いてったりしないから」

「俺はいいんだ。どうせ——……」

悟はその先を言おうとして言いよどんだ。

「……どうせ何？」

当然亜紀はその続きを促す。

悟は答えることが出来ず、ただ黙って亜紀の瞳を見つめた。しばらくの間その状態が続いたが、気まづくなつた悟は何事も無かつたかのように話題を変えようとした。

「そういえば亜紀って……」

「悟くん。聞かない気だつたけど——やっぱり教えて。キツネに何を言われたの？」

話題を変えようとした悟を亜紀が強引に元の内容に戻した。

「別に大したことじゃないよ。亜紀は気にしなくて言いって」

「大したことじゃないなら教えられるでしょ、教えてよ」

その言葉に再び悟は黙り込んでしまう。

——言える訳ないだろ、あんなこと……。

答えが返って来ないので亜紀は悲しそうに言葉を発した。

「……分かった。悟くんがどうしても言えないっていうのなら、何も聞かないよ。ただ、一つだけ教えて」

「何？」

「悟くんは絶対に……私と一緒にこの樹海から出られるよね？」

「ああ、当たり前だろ」

「そっか。それなら、いいよ。何を言われたかは後で幾らでも聞けるしね」

亜紀は少し顔に悲しみを湛えさせながら微笑んだ。

悟も微笑み返す。しかしやはりどこか悟の顔にも悲しみが漂っていた。

「おい、お前ら。あそこにしゃがんでいる奴ってお前らの知り合いか？」

キツネが松明で照らしながらいきなり前方の一点を指した。

「え、優子？」

目の前にうずくまっている優子に対し、亜紀は驚きの声を上げた。てつきり優子は鈴木らにもう殺されていたと思っていたからだ。

冷たい態度を取られたとはいえ、やはり友人の一人には違いない。

亜紀は嬉しくなつて優子のもとへ駆けた。

「優子、よかった！ 無事だったんだね」

嬉しさから涙目になる亜紀。

「亜紀……？」

優子は虚ろな目で亜紀を見ると驚いた顔をした。

「優子、怪我は無い？ どうしてこんなところに居るの？」

亜紀は笑顔で質問する。

「亜紀……亜紀……」

「何？」

「——タすけて」

「え！？」

松明の光の中に優子の全身が入ると、亜紀は我が目を疑った。

優子の右手には切断された蛇の尻尾のようなものが巻きついており、その手は灰色に染まっていくなかで真つ最中だったのだ。

「ゆ、優子！？」

「亜紀、ヤダよ……私あんな化け物にナンてなりたくナイ、タスケテ……！」

徐々に灰色の領域を体に増やしながら、優子は一步一步亜紀に近づいていく。

「亜紀っ、逃げろ！」

優子の姿を見た悟は、全身の痛みに歯を噛み締めながら亜紀へと走る。

「優子……そんな……嘘だよね……？」

「亜紀……アキ……ア……キ……」

「優子……！」

段々と呂律が回らなくなってきた優子の体は、もう八割近く怪女化していた。小さく細い指は同化し一本になり、しなやかで整った

両足はその太さを増長していく。

「逃げるー！」

悟は思うように動かない自分の足に舌打ちしながら必死に叫ぶ。

「ア、キ……ヒュッ……オオ……」

「……優……子……」

亜紀は優子の変わり果てた姿を目の当たりにし、恐怖と悲しみから涙を流した。

自分の所為でこの樹海に来てしまった優子。本当ならば今頃はアルバイトの疲れでぐっすり柔らかいベッドに寝ているはずだっただろう。

償いから、友情から、命を助けると誓った友達。

その相手が今自分の目の前で醜く体を変形していく。

「ごめん……優子……ごめん……！」

「ヒュオオオオオオ！」

甲高い鳴き声と共に、優子は——いや、怪女は蛇状の腕を亜紀に叩き付けた。

「きゃあ!？」

亜紀はそれを辛うじて両腕で防いだものの、地面にお尻を打ちつけしゃがまされてしまった。防いだ腕はまるで鞭で叩かれたかのようになく腫れ、激痛が走る。

そのままシルシルとその蛇腕は亜紀の首に絡まろうとしてきたが、間一髪で悟が間に合った。

「っこの——！」

悟は僅かな力を振り絞って包丁を蛇腕に切りつける。

「ヒュオオウウ!？」

怪女はその斬撃に怯むと僅かだけ退いたものの、大した間も開けずに第二撃を繰り出してきた。

悟はしっかりとその攻撃を認知していたのだが、ガタがきている体では到底避けることは出来ない。怪女の左蛇腕を胸に直撃させられた。

「つぐ!？」

包丁を胸の前にかざしていなければ風穴が出来ていたかも知れないほどの衝撃で、悟は草村の中に吹っ飛ばされる。

「悟くん!」

亜紀はすぐに悟の所に行こうとしたのだが、怪女の両腕がそれを許さなかった。縦横無尽にくねくねと動きながら亜紀の体を捕縛しようとしてくる。

「あう……!」

それを見た亜紀は、銀野町を出る時に悟から渡されていた包丁をハンドバックから取り出した。

「はあ、はあ……!」

亜紀は悪魔や巨狼に遭遇はしていたが、実際に戦ったことは無い。当然、戦法や畏のことなど知る由も無く、このままではどうなるかは目に見えていた。震える両手で包丁を怪女に向けてはいるものの、それからどうすればいいのか分からず固まってしまっている。

「キツネ、亜紀を助けてくれ! 早くっ」

草村の中から何とかして立ち上がるうともがきつつ、悟は傍観を続けていたキツネに助けを求めた。

「嫌だ」

「な、何!？」

自分の耳を疑う悟。

「こんな雑魚相手に僕の助けを求めるなんて論外だな。例えば体が傷だらけだからといってもそれは自己責任だろ? 自分の敵は自分で排除しろ。じゃないとこれから先、生き残ることなんて出来ないぞ」

冷たい目で悟を見据える。

「亜紀は俺の怪我と関係ないだろ! 頼む——助けてくれ、亜紀さえ助けてくれれば俺を置いて逃げてもいいから……!」

「仲間を守れないのはお前の力不足だ。亜紀ちゃんには僕にとってはどうでもいい人間だからな。助けたいなら自分で何とかするんだ」

「このっ……!」

悟はキツネを殴り飛ばしたかったが、体が自由に動かないためそれは適わなかった。

——くそ！　こうしている間にも、いつあの怪女が亜紀を襲うかわからない。キツネの馬鹿のことは後だ。俺が何とかしないと——

……

悟は木に体を預けながら立ち上がると、力の籠らない手で包丁を構えた。

怪女は最初は亜紀の包丁を警戒していたが、亜紀からは何の脅威も感じなかったのか再び攻撃を再開しだした。

「ヒヨオオオオオオオ！」

普通の悪魔とは違い体の動きは遅いのだが、左右の長い蛇腕がそれをカバーしている。遠ざけば鞭のように鋭く振り下ろされ、近づけば絡み付いてくる。恐らく極太の両足が体を支えることで、この動きを可能にしているのだろう。

亜紀は全身の神経を最大に集中させ、紙一重でこの攻撃を避けていた。

「離れることも近づくことも出来ない。どうすればいいの——！？」

さっきのキツネの話は亜紀にも聞こえていた。だからこそ亜紀は自分の身は自分で守ろうと意を決し、怪女と相対しているのだが、所詮は何の訓練も積んでいない一般人だ。すぐに逃げ続けることが出来なくなり怪女の腕に捕まってしまった。

『ジュルルルルル』とその白く細い腕に、触手のような怪女の手が絡まる。

「いや！　ちよつと——離してっ！」

いくらもがいても、全くといっても良いくらい効果は無い。亜紀は十秒感染で優子の仲間入りになるか、怪女の餌になるのを待つしかなかった。

「亜紀！」

悟はこの一撃に全てをかけるつもりで怪女目掛けて突っ込んだ。

——亜紀を掴んでいる今なら攻撃できないはずだ！

考えは正しかった。

だが、いや、だからと言った方がいいのか。怪女は悟の特攻に気づくと亜紀を放し、両手を悟に向かって突き出した。

「な!？」

悟は一瞬後ろに逃げようとしたものの、瞬考のあとに踏みとどまった。感覚をフルに利用し、歯車の狂った体を強引に動かし、蛇腕を避ける。そしてその腕を渾身の力で切り落とした。

「ヒュウウアアアア!？」

思っても居なかった悟の動きに怪女は驚き、赤黒い血が湧き出る自分の傷口を見て悲鳴を上げた。

「もう一本——」

悟は残った僅かな力を使って、怪女の左蛇腕を切り落とそうとする。が、相手もそんなには甘くなかった。般若のような形相で悟のナイフを叩き落すと、その長い腕を悟の首に締め付けた。

「あぐ……ああ……あああ!」

呼吸が出来ず、さらに首の筋肉がねじれる痛みで無言の絶叫を上げる悟。

「さ……うつ、悟君——!」

亜紀は悟を助けようとしたが、怪女の足に腹を踏まれ身動きが取れないでいる。

——くそ、体調さえ万全だったら……!」

血液が溜まりジーンと痛みが響く頭で悟は悔しかった。

「……まったく、仕様がないな。今回は特別サービスだぞ」

キツネは溜息をつく、怪女に向かって猛烈な飛び蹴りを放った。右腕は切り下ろされ左手も悟を締め付けている今、怪女にこの攻撃を防ぐ手段は無い。キツネの黒い靴は思いつきり怪女の顔面を踏み抜いた。

「ヒュオオオオオ！？」

体を大きく仰け反らせはしたが、それでも怪女は悟を離そうとはしない。悟の首を締める腕の力は緩むことは無かった。

それを見たキツネは素早くナイフを蛇腕目掛けて投げた。

『ザクンツ、ザクンツ』と二本の細長いナイフが蛇腕を貫く。それを横目にほくそ笑むと、キツネはさらに大型の黒い柄のナイフを飛ばした。

二本のナイフによって切れ目を入れ、その間に大型のナイフを刺すことで蛇腕はあっけなく切断された。抗張力の原理だ。

最後のナイフを投げたとは同時に、怪女を目掛けて駆け出していたキツネは、地に落ちたばかりの黒柄ナイフを掴み取ると、そのまま怪女の心臓に突き刺す。

「ヒュ、ウウ……ウ……！？」

怪女は自分の胸を突き抜ける鋭い刃に怯えた瞳を向けた。

「クスクス——じゃあな」

それを冷酷に笑い飛ばすと、キツネは一気に黒柄ナイフを引き抜いた。

火山の噴火のごとく大量の血液を撒き散らしながら、怪女はそれが正しい状態であるかのように地面に伏す。キツネは終始笑顔でそれを見ていた。

「はあ、はあ……亜紀、大丈夫……？」

「何とかね。悟君は？」

「結構ヤバイ。亜紀の支えが無いと立てないなこれは……」

「そんなこと言って、私にくっついて欲しいだけでしょ？」

「はは、バレたか」

二人はお互いの無事を確認できた喜びで冗談を言った。

「立てるか？」

キツネが悟に手を伸ばす。

悟はその手を無視し、自力でよろよろと立ち上がった。

「クスクス、なんか機嫌が悪いな」

「当たり前だろ！ 何でもっと早く助けてくれなかった。一步間違っ
ていれば二人とも死んでいたんだぞ！」

「お前の考えは間違っているよ。言っとくが、僕が『気まぐれ』で
お前らと行動を共にしているおかげでその命は救えたんだぞ？ 恨
みどころか感謝して欲しいくらいだ」

「なっ……！？」

悟は反抗しようとしたが、キツネの言っていることは確かに正しい
ことであると気づき、何も言えなくなった。

「悔しかつたら力を付けるんだな。誰に頼ることなく、自力で生き
延びることが出来る力を」

悟が文句を言わないので、満足そうに微笑みながらキツネはそう
言った。

会話をしている二人を横目に、亜紀は怪女——優子の亡骸へとゆ
っくり歩み寄る。全体を見れば人間とは呼べない姿だが、顔だけは
優子の面影を残していた。

亜紀はその顔を無言で見つめた。

アルバイトの店で何度も一緒に笑った顔、マナーの悪い客に愚痴
を言った顔、彼氏に振られて泣いた顔……ありとあらゆる優子の顔
が走馬灯のように亜紀の瞼の裏側を流れた。

自分の所為でこの地獄に巻き込み死なせてしまった罪悪感、深い
後悔の念が心を支配する。

「……——さよなら……」

艶やかな黒髪のみドルヘアを風になびかせながら、亜紀の頬を
再び一筋の涙が伝った。

「悟、さっきの戦いで最後の包丁、曲がっただろ？　これを使い」
キツネは大きな石の上に座りながら、横で倒れている優子に止めをさしたあの黒柄ナイフを放ってきた。

「っ、刃物を投げるなよ！」

悟は刃で斬り傷がつかないように慌てながらそれを受け取る。

「ん、このナイフ？」

「見たこと無いだろ。それは黒服メンバーのみが持っている特別製のナイフだ。特殊高分子を混合した金属製で、象が踏んでも曲がらず、同じく刃も別種の高分子でコーティングされているから、脂肪を弾き、切れ味が鈍ることも無い。かなりの優れものだぞ」

悟はそのナイフをまじまじと見てみた。

拳銃のグリップを少しだけ伸ばしてナイフ向けにしたような黒色の柄に、縦幅三十センチ近くはありそうな刃を、中心に穴の開いた半円形の鋼色鍔が左右から挟んでいる。この刃は実際に相手を切断する正面部の一センチのみ銀色で、残りの部分の色はダークグレーだった。恐らくコーティングされているというのがその銀色部なのだろう。

「ハリウッド映画に出てきそうなナイフだな」

悟がしばらくそのナイフにみとれていると、柄にある丸い窪みに文字が書いてあるのが目に入った。

「L……O……T……US、^{ロトス}LOTUS？」

「ハスの実のことだ。ギリシャ神話ではその実を食べることで、この世のありとあらゆる苦痛から開放されると言われていたらしい。そのナイフの名前だよ」

キツネがタイミング良く説明する。

「ナイフに名前があるのか？」

「ああ、製作者の趣味だよ。陽介・タチフィールド——黒服の武器

開発者のな。それは彼の作品の中でもかなりの業物だ」

「何でそんな代物を俺にくれるんだ？」

「実はな、僕はもう一本持っているんだよ。ほら」

キツネは懐から同じようなナイフを取り出した。その柄にはK
YRIEと書かれている。^{キリエ}

「お前に渡したそのナイフは、この任務の直前に別の仕事で殺した黒服メンバーの物なんだ。僕はデイエス・イレに、向こうはイミュニティーに雇われていてな。殺すしかなかった。別に僕が持っているでもいいけど、なんか呪われそうだからやるよ」

「黒服同士でも戦うことなんてあるんだな」

「当たり前だろ、僕たちはある意味傭兵なんだ。金の為ならどんな仕事でもこなす。当然黒服同士で戦うこともある」

「悲しくないのか？ そんな生活」

「全然悲しくないね。僕は目的を達成するまでどんなことにでも耐えられる。どんなことでも出来る。たとえば自分の恋人を殺せと言われても躊躇なくしとめられる」

「目的？」

悟はキツネのこの言葉に強い決意のようなものを感じた。この言葉だけには感情が籠っていたのがありありと分かった。

「……無駄話が過ぎたな。ほら、お友達が無様に死んでいるかもしれないぞ。そろそろ行こう」

「ああ」

——ただの危ない奴かと思っていただけ、こいつにも何か目指すものが有るんだな。まあ、それがいい目的かただの欲望かは知らないけど。

悟はキツネがただ快樂の為だけで行動しているのでは無いと分かり、彼に対する印象を少しだけ改めた。

銀野町から悟、亜紀、キツネの三人が出発して四十分。悟が巨狼を倒すのに要した時間が午後七時から十一時を少し過ぎた約四時間だとすれば、現在の時刻は十二時十分〜二十分といったところだろう。いや、正確には悟は数十分間気絶していたため時刻はもっと遅いかもしれない。

現在樹海内は夜の暗闇だけでなく、しばらく前から周囲に満ちている霧の所為で、数メートル先の景色しか見ることができない状態だった。悟は足元に気をつけるあまり前方の木に気づかず、先ほどからしょっちゅう頭を打ち付けている。

それを見かけたキツネがため息混じりに注意をした。

「お前は回避行動以外でんで駄目だな。もうすぐ目標地点だぞ。それ以上たんこぶを増やすなよ」

「五月蠅い、体が上手く動かないんだよ」

別に怪我の所為で木にぶつかっているわけでは無いのだが、馬鹿にされるのが悔しくて悟はこういった。

「はあ、悟はこんなんだしな。足を引つ張られても困る。またさっきの怪女が出てくる前に話しておくか」

「何の話？」

キツネの言葉に亜紀が敵意を隠すことなく聞いた。

「お前らは博士——高橋志郎から『戦法』について聞いたんだよな。ほら、隠れるとか、罠を使うとかのことだ」

「ああ、そうだよ」

キツネは亜紀が浮世壮メンバーでは無く、途中参加者であるということを忘れているらしく、確認するような口調で聞いてきた。悟もそのことを忘れていたようで自然に返事を返す。

「高橋志郎は知らなかったようだ、戦法には注意すべき点がある」「チームワークってことなら聞いたけど？」

「そんな基本的なことじゃない。僕が言いたいのポジションのとだ」

「ポジション？」

「戦法を行うには役割があるんだよ。そうだな、スポーツに当てはめると前衛、中衛、後衛ってところ」

歩きながらキツネは説明を続ける。

「前衛は悪魔を引き付ける囷。斥候が主な仕事で、中衛は罠の発動や状況分析などを行う司令塔的存在。そして後衛は悪魔が遠距離に居る時は前衛の援護、投槍や投石なんかでな。そして悪魔が罠にかかった後は止めを刺すという役目がある。お前たちは知らない割には結構形になってたぞ。悟が前衛、友が中衛、庄平が後衛的立ち位置だな」

「そんな役割分担があつたのか」

「これは黒服、イミユニティ、デイエス・イレの、全組織で正式に活用されていることなんだ。悪魔と戦う以上、この役割に気を使わないと損をするぞ」

「こんなボロボロになつてゐるのに今更そんなことに気を使うなんて無理だよ。話すのが少し遅かったな」

悟は自分の覚束ない足取りを見ながらそう言った。

「何のために今僕がこの話をしたと思つてゐる。このままだと足を引つ張りそうなお前を再利用するためだろ？ お前には今から中衛を勤めてもらう。例えば体に怪我を負つていようが、中衛なら直接悪魔と戦う機会は少ない」

「俺が中衛？ だったら他のポジションはどうするんだ、まさか――」

「ああ、僕は後衛、そして亜紀ちゃんには前衛をやってもらふ」

「ふざけるなよ！ 何で亜紀が前衛なんだ！？ 普通一番危険な前衛につくべきなのはお前だろ！」

「前衛が一番足が速い、もしくは回避能力に長けている人間が、中衛が一番頭のいい人間が、後衛が一番白兵戦に強い人間が勤めるの」

が本来の状態だ。そして現状お前はボロボロで前衛も後衛もこなせそうに無く、亜紀ちゃんが白兵戦に強いとも到底思えない。これがベストの組み合わせなんだよ」

「……っだからって……」

悟は頭では理解していたものの、納得することは出来なかった。生まれて初めて出来た大切な存在——亜紀が、一番死と隣り合わせの仕事をこなさなくてはならないのだから。

悟は感覚を頼りに悪魔の攻撃を避けることができるが、亜紀にそんな裏技的能力は無い。悪魔に追いつかれれば、あっという間にその汚らしい歯と爪の餌食となってしまうだろう。

「悟くん、いいよ。私やって見る」

なおもキツネに食って掛かろうとする悟を亜紀が止めた。

「亜紀、でも——」

「私こう見えても高校時代陸上部だったから、走るのには自信があるんだ。心配しないで」

心配そうに見つめる悟に対し、亜紀は優しい笑みを返した。その笑みを見た悟は何も言えなくなってしまう。

「……分かったよ。でも気をつけろ、悪魔は速いぞ」

「うん。分かってる」

亜紀は決意ある目で頷いた。

「さて、じゃあ行くぞ」

「……——待て！」

キツネが止めていた歩みを再開しようとした時、再び悟に止められた。

「何だ？ 悪魔、それとも怪女の気配でもしたか？」

「ああ、このまま真っ直ぐ行った先に四体の怪女がいる。別の道を通った方がいい」

ブラックドメイン生物を多数相手にする危険性を体で知っている悟は、怪女を避けていくことを選んだ。

「何で別の道に行く？ 駄目だ、このまま真っ直ぐ行くぞ」

「お前、正気か!？」

「生憎、僕はその言葉を母の胎内に置き忘れたらしくてな。まあ、そう懸念するな。たかが悪魔や怪女程度では、僕に傷一つつけられないさ」

「たいした自信だな」

「自信じゃない。数え切れない経験から言っているんだ。僕は奴らの動きを知り尽くしている。お前のように超感覚は無くても、その経験が奴らの動きを教えてくれる。嘘かどうかはすぐに分かるさ」

亜紀と悟は不安げにしていたが、キツネは自信タツプリの笑顔でドンドン前に進んでいく。しかたがなく二人もその後が続いた。

それからキツネに従い歩くこと数分、木々が突然開けたと思ったら、目の前に大きな沼があるのが目に入った。深緑色のその沼の全長はおよそ五十メートルだろうか。かなりの大きさだ。沼の周囲の木々はどれも葉が多く、自然の屋根のように空を隠している。それはこの付近だけ闇に包まれているように感じられるほどだった。

「沼? ……不気味だな」

「嫌な感じ」

悟と亜紀はそれぞれ感想を言った。

「ようこそ、地獄の始まりの地へ。気をつけろよ、沼の水を体内にいれれば感染するぞ。第一感染は動物がこの水を飲むことで広がったんだからな」

楽しそうに説明するキツネ。

「ここが、この悪夢の原点……」

悟は眉間にシワを寄せながら沼の中心方向を見つめた。

「悟くん、怪女は？」

自分の仕事のことを気になるのか、亜紀は沼にそれ程興味を示さず聞いてきた。

「ん？ ああもう少し向こう——え？」

突然黙り込む悟。

「悟君？」

「や、やばいぞ。……な、何だこいつ……！？」

「悟君、どうしたの？」

「こ、この先にとんでもなくヤバイ奴がいる！ これは……三本腕どころじゃない、逃げないと間違いなく死ぬぞ」

一体どれほど危険な生物がいると言うのだろうか、悟は珍しくうろたえていた。

「クスクス、面白そうだな」

「……笑い事じゃない」

軽口を叩くキツネを睨む悟。

「ぐあああああ！？」

突如、当然遠くの方で若い男の悲鳴が鳴り響いた。悟はその声の主を咄嗟に頭に浮かべる。

「友！？」

それは一日前に別れた友の声だった。

<第十四章> ” 怪女王 ”

<第十四章> 怪女王^{グライアイ}

この世とあの世とを繋ぐ入り口のような異様な雰囲気を持つ沼の横に、揉み合う集団が居た。友を初めとする民間人の生存者と、政府の組織イミューニティーの人間が自分たちを囲んでいる怪女と戦っているのだ。

「くそ、離せ！」

友は地面につけていた片手に体重を乗せ、左足で自分を掴んでいる怪女の側頭部を蹴り上げた。

「ヒョオオオオオオ！」

痛みに眉間のシワを増やす怪女だったが、それでも友の右足を掴んだ蛇腕の力は抜けない。どうやら一度掴んだ物は、よほどのことが無い限り離さないという性質を持っているらしい。友は包丁で蛇腕を斬ろうとしてみたが、怪女は足を掴んでいる腕とは反対の蛇腕で友の腕に絡みついた。

「——くそっ！」

素早く、攻撃能力に特化している悪魔タイプとは違い、怪女の動きは遅い。しかしその代わりに、接近戦に異常に強いという特性を持っていた。こちらが幾らナイフで切りつけようとしても、拳や足で攻撃しようとも、すぐに長い蛇腕が絡み付いてくる。

唯一の救いは女性にしか十秒感染をしないらしいということだけだった。

——遠距離攻撃なら効果がありそうだが……離れないとどうしようもないようだな。

友はありつただけの力を出してもがいたが、怪女の紫色の口は確実に迫って来る。

仲間の一人がこれほどの窮地に立たされているなら、誰かが助けるのが普通だ。だが、現在彼らが相手にしている怪女はこの一体だけでは無い。安形、広野、志郎、下田、惣一、神崎、庄平もそれぞれあと四体の怪女の相手で精一杯の状況だった。誰一人友のピンチに気づいてはいない。深夜の、それも空を隠すほどの木々の下にいる友の姿は、非常に見え難いのだろう。かなりまずい状態だ。

このまま怪女の痛いキスを受ける訳にもいかないので、情けないと思いつつも友は故意に大きく叫び声を上げた。

「うあああああ！？」

まるで断末魔のような悲鳴が上がる。一瞬その場に居た人間全員の見線が友に集中した。

「友！」

やっと友のピンチに気がついた庄平が急いで駆けて来る。

「庄平、近づくな！ こいつは遠距離攻撃に弱そうだ。遠くから攻撃しろ」

この言葉を聞いた庄平は、二日前からずっと使用していた石斧を躊躇わずに怪女に投げつけた。

「食らえ、この野郎！」

元野球部エース渾身の投げ斧が、怪女の脳天目掛けて飛ぶ。怪女は片方の腕でそれを防ごうとしたが、細い蛇腕では防ぎきることが出来ず、石斧は綺麗に蛇腕ごと怪女の頭に命中した。

「ヒョイウウアアア！？」

醜悪な額にめり込む石斧。

同時に拘束の解けた友はすぐに飛び出し、前につんのめった格好で怪女の首を切り裂いた。

「アアアア……………」

甲高く一鳴きすると、怪女は膝から下が無くなったかのように崩れ落ちる。

「はあ……危なかった。すまない庄平」

自分の命を救ってくれたことに礼を言った友に対し、庄平は無言でその場を離れた。まださっきのことを怒っているらしい。

これには流石に友も腹がたつたが、今は仲間で争っている場合ではない。舌打ちをすると、不機嫌そうな顔で安形や他の人間の援護のために駆け出した。

一方、悪戦苦闘する友や庄平、安形とは違い、イミューニティーの四人や志郎は、巧みな動きで逆に怪女たちを翻弄していた。最初こそ奇妙な攻撃に戸惑ったものの、相手の能力や動きが分かっているから彼らにとって怪女など悪魔と何も変わらない。前衛、中衛、後衛それぞれの役目を活かし、あつという間に周囲の怪女を倒していた。

「ほう……思つたよりやるな博士。伊達にあの事件で生き延びた訳ではないようだな」

「当然だよ。あの事件の後僕もそれなりに苦労してきたからね、こんな『自然発生』の生物に遅れなんかとらないさ」

志郎は冷たく返した。その態度に広野は眉を寄せる。

「博士、我々が何故今になってお前を捕まえたか分かるか？ 十二年も野放しにしていたのに……」

「何だいいきなり？」

思わず耳を傾ける志郎。

「お前は世界的に高名な科学者となり、常にマスコミが近くにいた。それが計算によるものなのかは分からないが、おかげで我々はお前に安易に手出しが出来なかった。だが今は違う。この隔絶された環境にはお前を見守る目もない。例えこの場で貴方に何かあっても、真実は誰も分からないだろう。お前は俺の気一つでどうにでも出来るんだ。今のような態度は改めたほうがいいぞ？」

広野は声に凄みを利かせて囁いた。

「——僕に脅しなんてしても効果は無いよ。ここで僕を殺したいなら……いいさ、好きにすればいい。その代わり君も死ぬ覚悟はして

置くべきだね。民間人だからって甘く見ないでくれよ」

普段あまり強い言葉を言わない志郎が、それもありったけの憎しみをこめて睨んできたので、広野は僅かだがたじろいだ。

——そうか……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
件』で亡くしていると書いてあったな。それでイミユニティーを恨んでいるのか？

広野はとてつもなく我が強い人間だ。彼にとって志郎と三本腕をイミユニティーの施設に持ち帰ることは最重要項目だった。

もつじき中年に差し掛かる年齢にも関わらず、管理職には就けず今もこうして現場で働いているのは、何も好き好んでそうしている訳ではない。同僚や部下の間では才能が無い、何故生き残っているのか不思議だと噂されている。広野は決して認めようとはしないが、それは疑うまでも無く事実だった。

この高橋志郎と三本腕を持ち帰ることは、彼にとって今後の人生に関わる非常に重要な問題だった。この仕事を達成できるか出来ないかで、永遠の現場中年かデスク組かに未来が分かれるのだから。

志郎が予想していたよりも高い実力の持ち主だと理解した広野は、脅しをかけることで自分の思うように志郎を従わせようとした。だが、予想外なことに志郎は反抗的な態度を取り、しかもあからさまな敵意まで見せてきたため、考えを改めざる終えなかった。

「ふん、そう憤るな。俺にも立場というものがある。代表が直接お前に聞きたいことがあるそうだ。ここでお前を逃がしてしまつては、俺の出世に関わるからな。つい強い態度を取ってしまった」

「六角行成ろっかくこうせい自らが僕に用がある……？」

六角行成とはイミユニティーの非確認生物イグマ部門総合代表のことで、早い話イミユニティーのイグマ関係における現ボスの名だ。それ程の地位に居る人間が何故自分に用があるのか、志郎にはさっぱり見当がつかなかった。

「それってどういう——」

「ヒョオオオオオオオ——……」

志郎は細かい事実を問い詰めようとしたが、下田らが倒した怪女の最後の一声の所為で邪魔をされた。

「よし後一匹か。下田さん、ちゃっっちゃっと倒しましょう」

神崎は今倒したばかりの亡骸を泥まみれの靴で踏むと、最後の怪女の方に歩を進めた。

惣一が蛇腕を引き付け神崎が懷中電灯で怪女を照らし、そして隙が出来た所で木の槍を投射するため、遠方で下田が相手の様子を伺う。

「ほう、さすが本場は違うな」

「そうっすね」

庄平と安形はそのパターン化されたような三人の動きを、感心した目つきで見つめた。

だが二人とは違い、友だけは何故か首をかしげている。

——さっきから何か違和感がある。聞こえた怪女の鳴き声と姿を見せた怪女の数が合わないような……

ゆっくりと、かつ着実に怪女の前に進んでいく惣一の背を見ながら友は嫌な予感が頭から離れなかった。

チャポン——

「ん、今水の音がしなかったか？」

安形は空耳かと、軽い気持ちで庄平に確認を取った。

「いや、俺も聞こえたっすよ。多分アツチの方からだと思っすけど」

庄平が音の発生源を探して横を向くと、そこはあの大きな沼がある位置だった。不気味な波紋が沼の奥から広がっている。

「虫でも落ちたんだろうな。緊張していたから微かな音でも聞こえてしまったんだ、きつと」

「そうっすかね……」

庄平は沼の奥に目を凝らしてみたが、闇と霧の所為で何も見えない。

——やっぱりただの虫か。

庄平は安堵の溜息をついた。

だがその途端、今度は何かが水面から飛び出した音が聞こえた。流石にこれは間違いようが無かった。只の虫でこれほど大きな音が出るわけは無い。

「あ、安形さん？ 何か居ますよね、確実に」

「庄平君、下がるう。ここじゃ沼に近すぎる」

「——はい」

沼の方に隠れていたのか、反対側から来たのかは分からないが、怪女がまだ居るみたいだ。二人は慎重に後ろに下がった。

丁度下田らが最後の怪女を倒し終えたのを確認した後、友は庄平と安形が沼に向かって後ずさっているのを目にした。

——やっぱりまだ居たのか！

すぐに二人の近くに走り寄る友。だがそこで目にしたものは怪女などでは無かった。

霧を被った沼の中からゆっくりと何かが近づいてくる。まだシルエットしか見えないが、それだけで判断すれば怪女のようにも見えるのだが、大きさがおかしかった。怪女の二倍——いや、三倍はありそうな体躯なのだ。身長でいえば三メートルは超えている。

何か危険が迫っていることによりやく下田らも気づき、友や庄平のいる位置に走ってきた。

「何だあれは？ まだ何かがいたのか」

下田は疲れた顔で一声漏らした。

その瞬間、いきなり黒い物体が沼の方から飛び出し下田を直撃した。

「うおおおお！？」

あまりに突然のことに避けることが出来なかった下田は、その物体と抱き合うように泥まみれの地面に倒れこんだ。物体が悪魔だった場合ここまで接近しているのは非常にまずい。下田が慌ててその物体を体から引き剥がすと、その顔が目に入った。

「た、高木っ！？」

それは自分たちの仲間、パイロットの有村と共に姿を消していた高木だった。ただ死んでいることを除けば。

高木の死体は首の骨折、全身打撲に加え、何か強い力で圧迫されたように所々赤く内出血していた。

驚く面々を意に介さず沼にいた「何か」は尚も前進してくる。かなり近くに来たためか、ようやく友たちにもその姿が見えるようになった。

美しい女性の上半身に、象のように分厚く太い四本足を持った下半身。それに怪女の倍はありそうな長く大きな蛇腕。そして極めつけは背中に広がった、孔雀の羽のような無数の棘だった。特に腰からは一際大きな棘が兜の飾りのように左右に伸びている。

> i 1 1 7 3 — 2 2 4 <

「うおい何だこいつ——怪女の親玉か……！？」

庄平は顔を引きつらせてそう言った。

「ビュウウオオオオオオー！」

高く、それでいて太い音で、その何かは自分の存在を誇示した。

周囲が高音に振動し木々がざわめく。まるで森そのものがこの化け物を恐れているかに見える。

「女王様がお怒りみたいだね」

志郎は真横の木の根元に倒れている怪女の死体からナイフを引き抜くと、それを怪女王に向かって構えた。

——まずい！

広野は直感的にそう思った。

実力、頭脳、運の全てに見放された広野の唯一の武器。それは臆病さだった。

悟のように超感覚とはいかないまでも、広野は敏感に相手の危険度を察知することが出来る。

臆病だから。覚悟がないから。誰よりも早く自分が生き残ることを考え、相手と自分たちの戦闘結果を無意識にシミュレートし分析する。

——あの怪女のボスは恐らく有村と高木が逃げる原因となった相手だろう。恐らくかなりの凶暴さを持っているはずだ。

広野はこのまま怪女王と戦っても勝てないと踏んだ。強い意志を感じさせる面構えで怪女王を睨み付ける志郎に気づかれないように、懐からあるものを取り出した。

「ガチャリ」と何かが志郎の片手にはまる。

「は？」

志郎が手首の冷たい感触に目を向けると、そこにはテレビドラマでよく目にするあの大きな金属性のリング、手錠が装着されていた。さらにその片方のリングは広野の腕にはめられている。

「な、何をしているんだ！？」

当然驚く志郎。

「あの怪女のボスはかなりヤバそうだ。お前は俺の大事な切符だからな！ここで死なせるわけにはいかない。ついて来い」

「何だつて！？」

広野は驚く志郎を無理やり引つ張り、電波塔の方へ歩き出した。

だが志郎は友らを見捨てて自分だけ逃げるつもりは無い。広野の強い引きに対して逆に力を詰め踏みとどまった。それを見た広野はナイフを志郎に向ける。

「一撃で熊を殺せるWASP KNIFEだぞ？^{ワスプナイフ} 揉み合えばどちらに分があるかは考えなくても分かるだろ。俺はお前が死ななきやいいんだ。ふん。言うことを聞かないのなら、腕の一本か二本を斬つても連れて行ってやる」

WASP KNIFEとは、アメリカのとある企業が製造した特殊なナイフで、刃先から高圧力の冷凍ガスを噴出するという代物だ。

これをまともに食らえば、体が凍りつきながら内部から爆散させられることとなる。

「パイロットが居ないのにどうやって逃げる気なんだ！？ 僕たちだけで電波塔に戻っても逃げられないぞ！」

「ヘリで逃げようとしたのは三本腕を持ち帰るためだ。だがこうなつてしまった以上……残念だがあれは諦める。もともと小遣い程度の気持ちで捕まえたものだしな。代表のじきじきの命令であるお前を本部に連れて行くことの方が、よっぽど重要なんだよ。電波塔にいったら、樹海隔離用の部隊が来るまで地下の食料庫に隠れていればいい。心配するな」

広野にナイフを手首の位置に突きつけられたため、志郎は歯向かうことは出来なかった。

姿をこっそりと消した広野と志郎を気にする暇も無く、残ったメンバーはそれぞれ怪女王に向かって武器を構えていた。

「こいつに火は効きそうにないな。沼から出て来た所為で全身水だらけだ。下田さん、どうする？」

友は緊張した面構えで下田に聞いた。

「火が効かないとなるとかなりマズいぜ。普通の大型イグマ生物は大抵火をきっかけに倒すからな。このままだとナイフだけで戦うしかない」

「な、ナイフだけで？ それはちよつと遠慮したいな」

広野の言葉に安形は息を呑んだ。果たして近接戦であの化け物に勝てるのだろうか、そもそも近づくことができるのか、多くの不安

が頭をよぎる。

それは訓練を受けているイミューニティーの人間でも同じだった。惣一は細かく呼吸をしながら、不安そうに下田に話しかけた。

「下田さん、ここは逃げましょう！ 高木が殺されている以上、有村も恐らく無事ではないはずです」

「確かにそうだな。命を捨ててまであの無能上司のお小遣い集めに協力する筋合いはない。――全員逃げるぞ、本隊が来るまで電波塔に立て籠る」

「待て、あれを見る！」

いざ逃げようと身構えた瞬間、庄平が沼の方を指して叫んだ。そこだけ霧が晴れた所為か、先ほどまで見ることの出来なかった怪女王の数メートル後ろに大きな岩があるのが分かった。しかもその上にはパイロットの有村がぐったりした様子で倒れている。

「有村！ 生きていたか。何故あんなところに……」

「多分、怪女王に保存食のつもりであそこに置かれたんだろう。助けるにはあいつを倒すしかないな」

下田のように驚くどころか、異様に落ち着いた口ぶりで友は言った。

「下田さん、ここは逃げるべきだ。船無しではあそこまで行けない。泳ぐうえにもこの沼の水を体内に入れば感染してしまう。残念だが、有村さんはもうどうしようもない」

「おい、何言ってるんだよ！ 見捨てるのか！？」

庄平は友の襟を掴んだ。

「ビョウウオオオオオ！」

怪女王はようやく沼から上がると、大声で叫び両の蛇腕を自分の周囲一体に振り回した。その中の一撃が友と庄平の右斜め前の地面を割る。

「うわっ！？」

「うおっ！」

大きな揺れに耐え切ることが出来ず、友と庄平は近くの木の根元

に倒れこんだ。

「お前ら、揉めるのは自由だが他所で遣ってくれ。気が散る。逃げたいなら勝手にしろ。俺は部下を見捨てたりはしない」

下田は憤慨した目つきで二人を睨むと、怪女王に向かって走りだした。

それを見た神崎が声を上げる。

「下田さん！」

「はあ、はあ……——」

亜紀は全速力で走っていた。背後からはうねうねと蛇のような腕をくねらせながら怪女が追ってくる。

「ヒュオオオオオオ！」

怪女は中々亜紀を捕まえることが出来ないので痺れを切らしたのか、大きく鳴き声を上げた。

「きやあっ!？」

その声に後ろを振り向いた亜紀は、足元にあった地面から飛び出した石に気づけず、つまずいてしまった。

怪女はこれはチャンスとばかりに亜紀に急接近し、その異様な腕を伸ばしてくる。

『パッ』

突然赤い光が怪女の顔を照らした。

いきなり目の前が明るくなったことで怪女は視界を奪われた。

「今だ！」

松明で怪女を照らしながら悟が声を張る。すると怪女から見て後ろの方向から数本のナイフが飛んできた。怪女は亜紀を捕まえよう

と前に腕を伸ばしているため、当然これを防ぐことは出来ず、また急に照らされた松明の光で攻撃に気づくことも出来ないまま、その銀色の刃を体内へと吸い込ませてしまった。

「ヒュウアアアアアア!？」

ナイフは遠くから、それも後ろからに関わらず実には的確に心臓を貫いている。怪女は誰も傷つけることが出来ないまま、二度目の死を迎えた。

「はぁ……——危なかったぁ」

近づいてくる悟の顔を見て緊張が解けたのか、亜紀は胸を撫で下ろした。

「いきなり転んだ時は本気で焦ったけど、上手くいってよかった。大丈夫?」

悟は折れていない方の右手を差し出す。

「自分より大怪我をしている人の手を借りて立つわけにはいかないよ」

亜紀は微笑みながらその手を押して引かせると、ゆっくり立ち上がった。

二人の立っている付近には数体の怪女の死体が転がっている。全部今のようには悟、亜紀、キツネの戦法で倒したものだ。それを見渡しながらかは顔を上上げた。

「これでこの辺りの怪女は全て倒せたみたいだな。早く庄平達の所へ行こう。心配だ」

「そうだね、無事だといいけど」

「おい、お前ら」

キツネが横を向いたままこちらに歩いてきた。

「ここから先は二人で行ってくれ。僕はちょっと用ができた」

「何だ用って?」

「今向こうの方に博士とイミューニティーの人間が駆けて行くのが見えた。少し気になることがあってさ、僕はあの二人を追う」

「何?」

自分は殆ど自由に動けない体である以上、今ここでキツネという強力な矛を失うのはまずい。悟は何かして食い止めなければと考えた。

「待てよキツネ、ただ逃げているだけだろ？ どうせ行き先は電波塔だ。今はそんなことよりパイロットや友たちを探そう」

出来るだけ敵意の無い声でそう言う。

「ここからあいつらの所までは、もうすぐその距離だ。僕が居なくても向こうの生存者と戦法を組めばいいだろ？ 何度も言うが、僕がお前達やイミュニティーの人間を助ける義理は無いんだ。僕は僕のしたいようにする」

キツネは小さくあざ笑うとこちらに背を向け歩き出した。

「……くそ……！」

——あいつが一緒じゃないなら俺たちが行く意味なんて殆どないじゃないか。ただ足手まといを増やすだけだ。あんなことを言うておいて、一体何を考えているんだあいつは……？

悟は短く舌打ちする。

「……悟君、行こう」

いつまでもここに居るわけには行かない。亜紀の呼びかけに頷くと、悟は重い足取りで再び歩を進めた。

<第十五章>雨の中の決闘

<第十五章> ” 雨の中の決闘 ”

暗い沼の淵^{ふち}、松明と懐中電灯の光のみが辺りを照らし、彼らの目を助けている。

今その光の中を一人の男が飛んでいた。怪女王の蛇腕に吹き飛ばされたのだ。男は湿った土の上に落ちると、トラックに轢^ひかれたかのように激しく転がった。

「くそ、あの太さで何て筋力だ……！」

男の口からは血と唾液が入り交ざった粘着質の液体が垂れている。
「下田さん、無茶しないでください！ 一人で突っ込むなんて自殺行為ですよ」

男、下田の部下の一人、神崎が彼に駆け寄った。

「どうやらあの怪女王は遠距離も近距離も得意らしいな。何かいい案はないか神崎？」

自分が大きなダメージを受けたばかりだというのにも関わらず、下田は少しも痛む素振りもなく言葉を発する。

「あれほど大きいと普通の戦法では効果がありません。ちびちび攻撃すればいつかは倒せると思いますが、それまで俺たちが生きていられるとは思えないし、何か一撃で大きなダメージを与えられるものがあればいいんですが……」

「一撃か……へ、ショットガンでもあればいいんだがな」

口についた血を片手で拭いながら下田は苦笑した。

その言葉に神崎はつとしたように顔を上げる。

「銃——そうだ、銃ならありますよ！ 銀野町で高橋博士といっしょに捕まえたあのチンピラが、あいつが持っていたやつがありまし

た。確か、惣一が背中に背負ってます」

「何だと、何でもっと早くいわない！？ 惣一、銃を使えっ、そいつであのデカ女を撃つんだ！」

この樹海の中なら銃声が一般市民に聞こえることも無い。イミユニティーのルールには反するが、今は仕方がないと自分に言い聞かせ、下田は惣一の方に声を張り上げた。

それを聞いた惣一は慌てて背中の中細いトランクを土の上に下ろすと、ロックを外した。このトランクは銀野町の街中であつたもので、元々は町長の長つたらしい良く分からないトロフィーをしまつておくものだつた。トランクの中からは五郎から福田へ、そして福田から惣一へと渡つた猟銃「レミントン1100」と呼ばれるショットガン的一种が出て来た。

イミユニティーの特性上、銃に不慣れな惣一は安全装置やマガジンの確認などの基本的な動作を一切せず、それを怪女王に向ける。いくら銃の知識は無いとはいえ、少し考えていじれば分かりそうなものののだが、目の前に怪女王が居ることと、極度の緊張から惣一はパニックを起こしていた。

「あれっ、うっ、撃てませんっ！？ 壊れているみたいですよ！」

かなりうるたえた様子で惣一は叫んだ。

見かねた安形が惣一から銃をもぎ取る。

—— 本当ならばイミユニティーの人間から逃れる為に使うはずだったんだが、この際しかたがない。弾を使いきりさえしなければまだチャンスはある……。

安形は素早く一通りの確認を終えると、銃口を怪女王へ向けた。

「食らえ！」

高い銃声が暗闇の中に轟き、無数の散弾が怪女王の体に命中する。肉が裂け赤いしぶきが飛ぶ。だが、それは安形が予想していた量の数分の一しかなかった。

怪女王に命中したのは頑丈な太い四本足の部分のみで、それも遠くからだつたため殆どダメージを与えられていない。

ショットガンというものは相手との距離が離れば離れるほど威力が低くなる。近いところでは密集していた散弾がバラバラになってしまうからだ。

「駄目か、もつとあいつに近づかないと……」

安形は銃を肩の高さに構えたまま怪女王に近づいたが、目の前の大地を猛烈な力で蛇腕に砕かれた。恐らく安形を狙った攻撃だったのだが、足を撃たれていたため痛みで体重移動が一時的におかしくなったのだろう。間一髪その攻撃は安形に命中することはなかった。

「あ、あぶねえ——」

安形はうねうねと左右に動く蛇腕を不気味に思いつつそこから離れると、同時に視界の中に何かを捕らえた。それは蛇腕の下から大量に流れ出ている血液だった。

「なっ……！！？」

怪女王の攻撃は安形には当たらなかったものの、その横に居た惣一には見事に命中してしまったらしい。先ほどの下田はただ吹き飛ばされたからまだ良かったものの、今度の場合は地面と蛇腕に挟まれてしまったため攻撃の衝撃をどこにも発散することが出来ず、惣一は体を押しつぶされて内臓がぐちゃぐちゃになってしまった。

「惣一っ——」

神崎が目を見開き、大声でもはや動かぬ肉塊となった元同僚に呼びかける。

「……嘘だろ……」

安形はつい今まで真横にいた男が、突然肉の塊になったことに驚きを隠せなかった。だが、感傷する間もなく怪女王の蛇腕はグワンツと持ち上がり、再び安形目掛けて叩きつけられた。

安形はそれを目と鼻の先で辛うじて避ける。

——駄目だ、近づけない。リスクが高すぎる！

怪女王を確実に葬り去るには、接近してレミントンを発砲するしかない。だがあの二本の巨大な鞭の中怪女王に近づくことは自殺行為に近かった。ゲームでいえば攻略法が分からず、コントローラー

を投げ出したくなる状態だ。

「……俺があ蛇腕を引き付けます！ 安形さんはその隙に猟銃で止めを刺してください！」

この状況を何とかして打破しようと庄平は走りだした。

怪女王の蛇腕は二本ではない。当然惣一を殺した他にももう一本の腕があるのだが、庄平は片方にのみ意識を集中していたため、頭上に振り下ろされた蛇腕に気づけなかった。

「ぐえっ！？」

間一髪のところであ友が服の裾を引いたため、庄平は鼻の頭をかすただけで攻撃から逃れた。

「お前はもつと頭を使っただな、ただ一人で突っ込んだら下田さんの二の舞だろ！」

「——っうるさい、離せよ！ お前は人が死んでもなんとも思わないんだろ、俺なんか放っておけ！」

「何言ってるんだ？」

「ビュウオオオウウ！」

怪女王は二人の険悪な雰囲気など構いもせず続けて攻撃してくる。庄平と友はお互いを突き飛ばすようにそれを避けると、蛇腕の射程から逃れる為森の方へ急いで走った。

怪女王の腕は友の背中の後ろ数センチメートルまで迫ったが、後もう一步というところでとどくことは無かった。

「ギリギリセーフか」

長草の中で友は溜息を吐く。どうやら怪女王の射程は六メートルくらいが限界らしい。

一方、二人が怪女王を引き付けている間に接近を試みた安形だったが、相手の腕の戻る速度は予想よりもはるかに早く、近づくより早前に怪女王の胴体に戻ってきてしまっていた。これではとても射撃に集中できない。

怪女王は右の蛇腕を曲げて肩と同じ位置に構えると、それを勢い良く撃ち出した。中途半端に近づいていた安形は避けることも逃げ

きることも出来ず、完璧なタイミングでその攻撃を受ける。

「ぐああああ!？」

人間の数倍はある剛力を叩きつけられ、そのまま先ほどの下田のように弧を描いて吹っ飛んでしまった。

安形はゴロゴロと地面を転がると木の幹でようやく止まった。衝撃と痛みと猛烈な回転のせいで酷い吐き気がする。横になった体制のまま口からは吐血交じりの反吐が飛び出した。肋骨の一部が何本かに骨折かヒビが入っているかもしれない。

その様子を見た下田が呟く。

「まるで大砲の発射台だな。あんなのどうやって近づけばいい?」

「下田さん、一端引いて作戦を立てましょう。このままだと惣一のように全員無駄死にするだけです」

拳を握り閉めながら、力んだ目つきで神崎が言った。

「仕方がない……な……」

この現状ではとても怪女王を倒せるとは思えない。かなりの悔しさが伴ったが、下田は逃げる決意を固めた。

だが、怪女王はまだ僅かに知能が残っているのか、下田らの考えを読むと重点的に彼らを襲うようになった。

ギリギリで避けるのにも限度がある。怪女王が放った中の一発が下田に二度目の直撃をしようとしていた。これが当たれば今度こそ下田は死ぬことになるだろう。眼前いっばいに僅かに紫色を帯びた灰色の蛇腕が迫る。

——くそ、俺もここまでか!

下田は歯を食いしばり目を閉じた。

「下田さん!」

「!？」

下田の体が急に横に押し出された。そして彼の居た位置にはいつの間にか神崎が立っている。

刹那の間に二人の目が合う。

神崎は自分でも驚いたといった顔をした瞬間、頭蓋を地面と蛇腕

に挟まれ頭を潰された。

「か、神崎いいー!?」

下田の声が暗闇のなか大きく木霊した。

遠くの方、先ほどまで自分たちも居たあの闇の中の沼の方角から、幾度と無く悲鳴や叫び声が聞こえる。どうやら既にこの短い間に何人かがこの世を去つたらしい。その声を聞く度に志郎の心は痛んだ。だが、今の志郎にはどうすることも出来なかった。少し指先を捻^{ひね}るだけで自分の首を吹き飛ばすことの出来るほどのナイフを、広野が手首に押し当てているのだ。手首を切り下ろされてしまえば間違はなく出血多量で死んでしまうだろう。自分を六角行成に会わせようとしている広野がそんな真似を本気でするとは考えられないが、手錠でつながっているこの状態で揉み合えば手元が狂ってしまう可能性もある。志郎は己の迂闊さを呪った。

「しかし代表は一体お前に何の用事があるのか。態々（わざわざ）直に会うとは……俺を通して質問すればいいものを」

部下が今危険な目に合っている真っ最中だというのに、広野は声など聞こえんといった様子で一人話し続ける。

聞くに堪えない一人よがりな言葉に我慢の限界が来たのか、志郎は排泄物の塊を見るような目つきで皮肉を言った。

「無能な君が情報をディエス・イレや他のテログループに漏らす可能性があるからだろ。僕が行成でも直接会うように取りはばかるよ」それを聞いた広野は博士と繋がれている手錠を思いつきり引っ張

った。

「痛っ!？」

「俺を怒らせるなとさっきも言っただろ! ふん、本当にこの手首を切り落としてやるぞ」

極度の興奮状態にあるのか、広野の目には狂気の色が伺える。

——この男なら感情に任せて本気でやりそうだね。

志郎はそれ以上何も言わず黙り込んだ。

「そうだ、それでいい。俺に逆らいさえしなければ無事にイミューンティーの本部まで連れて行ってやる。まあ、着いてからここで死んでいればよかったと思うかもしれないが、今は気にするな。ふふふ」

志郎は元々イミューンティーに復讐する気で着ていたのだ。本部に行くのは逆に願ったりかなったりなのだが、ブラックドメインと直結しているあの沼に庄平らを残してきたことだけはずっと気がかりだった。

「広野さん、僕は別にもう逆らう気はないよ。その代わりあそこに残してきた彼らを助けるように本部の部隊の到着をもっと早められないかい? 一体いつに着く予定なんだよ」

「予定だと? ふふふ、予定か。いいだろう教えてやる。本隊が来るのは明日の朝七、つまり今から約五、六時間後だな。残念だがあの連中はもう助からないだろう。まあいい、どうせ雑兵だ。すぐにまた補充出来る」

「何だって!？」

志郎は我が耳を疑った。これではとてもあそこに残してきた友らは助からない。

——それに……

「それまで待つって言うのか? そんなに待てば怪女王だけじゃなくて三本腕の麻酔まで解けるじゃないか!」

「まあ、多大な犠牲は払うかもしれないが、本部の人間ならあの二体を倒すことは出来るだろう。決着が着いた後に意気揚々と外にでればいい」

——な、なんて卑怯で器の小さい男なんだ……

志郎は目の前を歩く広野に心底嫌気が差した。

「……あんたが出世できない理由が分かったよ」

「ん、何か言ったか？」

「何でもないさ、気にしないでくれ」

「……ふん」

広野は志郎を一睨みすると、早歩きで歩を進めた。

——……すまない。庄平くん、友くん、悟くん。

志郎は自分の無力さに拳を強く握った。

『お兄ちゃん——助けて——！』

「んっ……！？」

過去の映像がフラッシュバックする。志郎の頭に、自分の目の前で悪魔に食い殺され、この世を去った愛する妹の最後の姿が浮かんだ。

——僕は……またあの時のように見殺しにする気なのか？ また助けられないのか？ また同じ過ちを踏もうとしているのか……？

「どうした？」

急に立ち止まった志郎を不審に思ったのか、広野はナイフを志郎の手首に突きつけたまま怪訝そうに聞いてきた。

自分の人生を賭けた復讐を犠牲にしても、あそこに残された人間を助けに行くべきか。それとも全てはイミューニティーを倒す為と割り切るのか。今、志郎の目の前は大きな二つの道に分かれていた。「仕方がないんだ……アヤメ……このチャンスを逃せばもう復讐の機会は無——」

無理に言葉を発して自分を納得させようとしても、両の足は少しも進まない。アヤメの霊がそうさせているのか、それともそれが志郎の本心なのか。

『極端な利に走れば人間を止めることになる』

ある男の言葉が頭に響く。

「……僕は……僕は……」

「な、何なんだいきなり？ 一体どうした！？」

急に一人でぶつぶつと独り言を言い出した志郎を不気味そうな表情で広野が見る。

「気が狂ったのか！？」

——そうだ……そうだったね。ここで自分の利益を優先させれば、僕はこいつらと何も変わらない……分かったよ、アヤメ。

——彼の、キツネのようになってしまったては駄目だ。僕は「人間」なんだから……！

志郎は覚悟を決めた。さほど怪女王と対峙したときよりも何倍も強い視線を広野に向ける。

「正気にもどったか？」

広野は右目を細めて不審者に質問するように聞いてきた。

「……ああ、君のおかげだよ。僕は何をするべきか分かった。何のために戦っているのか、何のためにここまで来たのか。悪いけどさっきの沼まで戻らせてもらうよ。手首を切り落とすっていうのなら好きにすればいい。僕は片腕でも彼らのところに戻る」

「——どうやら完全に正気を失ってしまったようだな。俺は本気でお前の腕を切り落とすぞ？ 傷口をすぐ炎で焼けば出血多量で死ぬことは無い。それでもまだ俺に歯向かうのなら次は左腕を、その次は耳を……死なない程度に極限まで痛みつけてやる」

その広野の言葉と同時に、志郎はあるものに気がついた。視界の隅に灰色の塊が写る。いつの間にかここまで接近したのか——自分と向き合っている広野の背後に悪魔LV・2が立っていたのだ。

「なっ！？」

完全に不意をついた第三者の登場に志郎も広野もときもを抜かす。
「ギョアアアアア！」

悪魔LV・2は勢い良く飛ぶと、その奇妙な体で二人に押し掛かった。

いくら凄腕の志郎やイミューニティーの人間とはいえ、悪魔LV・2を相手にするのはそれなりの覚悟がいる。しかも今は手錠の所為で思うように動くことが出来ないのだ。二人はお互いがお互いの足を引っ張り、中々悪魔LV・2を引き離すことが出来なかった。

「くそ、こんなところで……！ 後少しで俺は夢をかなえられたのだぞ！？ 離せ、離せこの化け物がああ！」

普段部下に戦わせてばかりの広野は、恐怖から自分が受けてきた訓練の内容を忘れ、素人のように無様に暴れ回った。その所為で志郎も悪魔の下から抜け出すことが出来ず、必死にもがくしくなくなる。

「このままだと二人とも十秒感染でこいつの仲間になるぞ。広野さん、手錠の鍵をくれ！ お願いだ」

「駄目だっ、その手に乗るか！ これに乗じて逃げる気だろ——お前は俺の物だ……俺の物なんだ！」

もはやこの男には何を言っても無駄のようだ。欲望に目がくらみ冷静さを無くしている。

「……っそうだ！ ワスプナイフ W A S P K N I F E を使え、それなら悪魔を殺せる！」

「こいつは単発マガジン式なんだ、一度使えば次の弾を装填するまで使えなくなる。そうなればお前を引き止める術が無くなってしまっ！」

「あんたは馬鹿かつ、この状態でどうやって逃げれるっていうんだ！ 早くしてくれもう十秒立ってしまう！」

「——っくそおお！」

流石の広野も漸くまずいと思ったのか、大声を上げながらやつとナイフを悪魔の首に当てた。

柄が振動し、刃の先から白いガスが勢い良く飛び出す。同時に一瞬にして悪魔LV・2の首は氷つき胴体と頭を寸断した。

「やった！」

志郎は急いで悪魔の体を蹴り飛ばすと、自分の体を確かめた。上手く服の上からしか接触していなかったおかげでどうやら感染は免れたようだ。志郎は安堵のため息を漏らした。

「ば、馬鹿な——こんなことが！？」

だが、真横から何が起きたか考える必要もないような不吉な言葉が聞こえた。

広野は素手で悪魔の掴みかかる腕を押し返していたため、感染してしまったのだ。

「勘弁してくれ……」

志郎は絶望した。

水の流れる音が聞こえる。

雨だ。

雨が降ってきた。

ポツリ、ポツリと最初は数的ずつ……だがすぐにその数は増えていき土砂降りになった。

暗闇、雨、松明の鎮火……これまでで一番厄介な化け物……

地面に転がった懐中電灯の僅かな光しかない、それも雨のおかげで非常に悪い視界の中、友は怪女王を見つめた。

元々は銀野町の若い娘だったのか顔立ち是非常に美しいのだが、イグマ細胞の所為で紫色を帯びた灰色に染まり、不気味さを演出する切っ掛けにしかなくていい。

六メートル近い左右の蛇の形を模した腕は、まるでそれ自体が生きているかのようにこの沼と森の間の小さな空間を蠢いている。

友の視線を感じた怪女王は彼に目を向けると、美しくそれでいて悲しくはかない声で大きく鳴いた。

「ビュウウオオオオオ！」

それが苦しみによる声なのか、怒りによるものなのか、痛みによるものなのか……言葉を無くした今となつては誰にも理解することは出来ない。ただ、こちらを複雑な感情にさせるような意味深な声だった。

背中を木の面に預けながら下田が諦めたように言う。

「――終わりだ……プロの二人が死に、残ったのはまともに動けない怪我人と素人の餓鬼が二人ずつ。おまけにこつちの大將は真つ先に逃げやがった。どう考えても本体の到着まで生き残ることなんて不可能だ。もう、どうしようもねえな」

雨で顔が濡れる。それを近くで聞いていた庄平は何も言えず、ただ怪女王を力の無い目で見ることにしか出来なかった。

――へ、どうやらもうすぐ俺も佐々木さんの所へ行きそうだな。悟らが無事かどうかは気がかりだけど……案外先に向こうで待っていたりして……。

有村を助けることも、怪女王を倒すことも出来ず、全ての希望を根こそぎもぎ取られてしまった今、庄平にある生きる意思は限りなく限界に近づいていた。いや、庄平だけではない。それは友も安形も下田も同様だった。

数日間しか経っていない筈なのにこの樹海に来たことがはるか昔のように感じられる。

加納、佐々木、小宮、鈴野、五郎、大森、福田、神崎、惣一……浮世荘の学生や教員、そして銀野町の住民――

短い間に、普通の一般人が一生で見るよりも多くの死を見てきた。

目の前で死んだ人間。

救えなかった憧れの人。

心から気の合う親友。

死、死、死、死………今となつては彼らを想像する度にそのイメージが付きまとい、頭から離れることは無い。

ついこの前まで普通の学生だった庄平にはもはや耐え切ることなど無理だった。

悪魔が現れた瞬間、殺した瞬間、誰かが殺された瞬間……いつ何処でどんな時でも次は自分がこうなるのではないかという恐怖が付きまとう。

正直、庄平は疲れていた。

もうこれ以上死の恐怖に怯えることに。

自分の知り合いが死ぬことに。

悪魔との戦いに。

「俺……良くここまで生き残れたよな……」

これまで出来るだけ堪えるようにしていた涙がゆっくりと頬を滑り落ちる。

「ビュウオオオオオオウウ！」

怪女王の雄たけびが間近で聞こえても、庄平の付近には懐中電灯は転がっていない。何処から攻撃が来るのか全く知る術は無かった。他の人間も誰かが襲われているのかどうかさっぱり分からない。

もう逃げる気などつくに無くしていた庄平は目を閉じると静かに呟いた。

「——あばよ、悟」

「庄平っ、右に飛べえー！」

悟の声が聞こえたような気がした。

庄平は死を覚悟していたにも拘らず、気がついたときには反射的に右に飛んでいた。すると何かが足の先をかすり、轟音を響かせて自分がしゃがんでいた大地を粉碎する。怪女王の腕だ。今横に飛んでいなければ間違いなく即死していただろう。

だが、そんなことなどどうでもいいといった様子で、庄平は向かいの雑木林を見つめた。

——空耳だろうか……いや、確かに聞こえた。あれは絶対に悟の声だ……！

必死に目を凝らすが森の方には何者の姿も見えない。庄平はやはり気のせいだったのかだとかっかりした。

「……死にそこなちまった」

——お別れの言葉まで言っておいて避けるなんてな、笑えるよ。自分の滑稽さに苦笑いする。

庄平が再び闇の中に心を引き込まれかけたとき、いきなり向かいの方に赤い光が輝いた。

「庄平っ！」

「なっ、悟か！？」

そこには幻でもなんでもない、確かに本物の悟が立っていた。

「馬鹿な——馬鹿な、馬鹿な、馬鹿なあー！」

広野は急激に染まっていく自らの両腕を、食い入るように見つめながら叫んだ。

「こんなところで……ここまで来て……やっと現場から離れられると思っただのに、そんな……まさか、こんな終わり方は酷すぎるぞ……！」

手錠でつながれた状態で、その相方が悪魔化するという危機極まる状態となってしまった以上、志郎がやることは一つしかない。

「何ということだ……——んっ、なっ、何をする気だ!？」

広野は自分が落としたWASP KNIFEワスプナイフを握り閉めた志郎を、恐怖の目で見る。

「残念だけど広野さん、あなたはもう助からない。悪魔化する前に僕が人間としての最後を送らせてやる」

志郎は力いっぱいナイフを振り下ろした。

「うがああああ!？」

広野はそれをギリギリ灰色の腕で食い止める。

「つく!？」

広野の腕に触れていては感染してしまうため、志郎はそれ以上力を込めずにサッとナイフを引いた。その隙に広野は志郎を押し倒し地面に当てがう。

「くそ、くそ、くそおっ！俺だけこんな死に方をしてたまるかあー！お前もいつしよに来い博士！」

頬を灰色く染ながら、広野は両手で志郎の首を絞めようとした。

「……ぐっ……この……最後の最後まで腐りきった人間だね……！」
お互いの顔と顔の間にナイフを押し合いながら、志郎は広野のあ

まりの腐りきった精神に心底嫌気が差した。

「お……オ……俺は、オレハ……クサッテナンカ——……」
「——っ！」

「ギユツ……ギユウウオオオオオオ！」

首を締めたまま広野は完全に悪魔化してしまった。途端にナイフを押す力がガツクツと上昇する。

「離せえええええー！」

志郎は全身の筋肉を使ってそれを押し返そうと踏ん張ったが、悪魔の力に勝てる訳が無い。とうとうナイフは志郎の横に腕ごと退かされた。

「ギユウアアアア！」

広野は真っ赤にそまった目玉をギョロリと動かすと、志郎に顔を近づけた。

酷い悪臭が志郎の鼻を刺激する。

鋭い黄色い歯が見える。

こんな物を首に突き立てられては堪ったものじゃない。

だがそれ以上に、押し倒されてから六秒近く立っていることの方が問題だった。後三秒でどうにかして広野を放さなくては、本当に自分も広野と一緒に行動することになってしまう。

「——っ押して駄目なら引いてだああ！」

志郎は力を一瞬だけ抜き、広野の手がガクンと下がった瞬間に再び腕に力を入れた。強引に押され、大きく反り返る広野。

その下顎を志郎の渾身の蹴りが突き上げた。

「ギユウアアア！」

離れたた離れたものの、手錠の所為で再びくっつくようにもつれ合い転がる二人。一度離れたから感染はしていないが、こうも接近してはすぐにまた十秒感染の危険は復活するだろう。

黒く霞んだ雨が降る樹海の中、一人と一体は憎しみを込めて目を合わせる。

「はあ、はあ……どうやらそう簡単に一緒には行けないみたいだね、

広野さん」

五十三歳という年齢にも関わらず、若者顔負けの動きをする志郎。
「ギョウウウウウ……！」

広野は悪魔となっても人間時と変わらない嫌味のある目つきで志郎をにらみ続けた。

<第十六章>押し寄せる闇

<第十六章> ” 押し寄せる闇 ”

「悟……！」

庄平は涙目で目の前に立つ男を見る。

悟も感慨深げに庄平を見た。言葉は発する必要は無い。お互いの目を見るだけで意思は通じる。二人はそれぞれの無事を確認し、喜んだ。

「誰だあいつは？ 庄平君らの例の友人か」

安形は悟に会ったことが無いため、そう推測した。

「ビュウオオオオオオオアアア！」

怪女王は新手の登場に威嚇の声を上げる。

「またデカい化け物か」

——三本腕、巨狼、それにあの巨大な怪女、一体どれくらいの怪物がこの樹海に居るって言うんだ？

悟は緩やかなカーブを描いたサラサラの癖毛を雨で額に貼り付けながら、沼の前に立っている怪女王に目を向けた。泥だらけの地面には二人の死体が転がっており、生き延びている人間たちもかなりのダメージを抱えている様子だ。

「悟くん、どうする？」

すぐ後ろで松明を持った亜紀が、この悲惨な様子を見て質問してくる。

「出来ることをするしかない。亜紀はあの二つの死体から懐中電灯を取り出して、なるべく沢山化け物を照らしてくれ。幾ら油を付けていてもこの豪雨じゃ、流石に松明も限界だろ」

「うん、分かった。悟くんは？」

「俺は、この体だからまともに戦うことなんて出来ないけど、感覚だけは役に立つはず。あいつらの眼として中衛の役目を果たしてみよう」

亜紀は心配そうな表情だったものの、黙って頷くと仕事に取り掛かった。

「悟、安形さんが猟銃を持っている。あれさえ上手く命中すればきつと勝てるはずだ。俺たちは怪女王の動きが読めない。お前がそこから指示してくれ」

友は顔を伝い落ちる雨を左手の袖で拭いながらそう言った。

「出来るだけやって見る」

近づき過ぎないように距離を測りながら、悟は眼を見開き怪女王の姿に集中する。

ついさっきまで暗闇のどん底に居たようだった周囲の雰囲気が、悟と亜紀の登場によってまるで光に照らされたように一変して明るくなった。

いや、本当に先ほどよりも辺りは明るくなっている。

「月——……か……」

下田はドームのように覆っていた葉の隙間から指す、黄金色の光を見てそう言った。

怪女王が暴れた所為か、雲が其処だけ薄い所為か、空を隠していた葉の一部がズレ雨が降っているにも関わらず、夜の満月がこの死の沼を明るく照らしている。その光がより一層彼らの生きる心を強くした。

庄平は最後の石斧を、友は鉄パイプと包丁で作った槍を、安形はレミントンを、そして下田までも大型のナイフを構え立ち上がった。生き残るために。

帰るために。

怪女王を倒す為に。

今、消えかけていた彼らの心に再び生きる意志という名の灯火が

灯った。

沼の正面にある木に背を預けると、悟は生存者の様子を確認しながら普段ほとんど出すことの無いような大声で気合を入れる。

「よし、やるぞ！」

その声に合わせるように、他の人間も動き出した。

「庄平と友は左に、そこのごつつい人は右に動いてくれ、怪女王の腕を左右に遠ざけるんだ！」

ごつつい人と呼ばれた下田が少しだけ訝しがったものの、言われた通りにそれぞれがそれぞれの方向に走り出す。

「お、おい。俺はどうすればいいんだ？」

他の人間とは違い、安形は超感覚の存在を知らない。レミントンを抱えたまま一人戸惑った表情で悟に聞いてきた。

「怪女王の腕が左右に伸びれば真ん中ががら空きになる。その時に猟銃をもって突っ込んでください」

「けど、あの腕の速度は尋常じゃないぞ？」

「一人で二本の腕を相手にするから勝てなかったんです。けど、相手が一本なら彼らが上手くやってくれますよ」

「怪女王を三体の悪魔に、蛇腕を一匹の悪魔に見立てたってことかなるほど、確かに一本だけなら避けるのはずっと楽になるな」

安形は感心すると、悟を信じる気になったのか、レミントンの状態を確認し「その時」に備えた。

「ビュウオオオオオオオウ！」

沼の前から一步も動くことなく、怪女王は左右に分かれた獲物目掛け素早く両手を走らせる。

「来たぞ！」

友は横を走っている庄平に向かって声を張り上げた。

「いちいち言われなくても分かっている！」

庄平は不機嫌そうな顔でそれに言葉を返す。

風を斬る音が聞こえ地面の影が濃くなる。蛇腕が間近に迫っているのだ。友は後ろに急接近している蛇腕を確認すると、スライディ

ングするように地面に伏せた。

その頭上をものすごい勢いで蛇腕が通過する。

友に命中しなかったことが分かると、蛇腕はそのまま庄平目掛けて勢い良く曲がり横に突き出された。

「庄平、左だ！」

「っただあーらっしや！」

悟の声を頼りに左に飛ぶ庄平。彼が居た位置には薙ぎ払うような動きで怪女王の攻撃が行われていた。

その隙に友は槍を蛇腕に思いつきり突き刺す。ゴムのような筋肉のためか伸びきっていたためか、槍は深々とその中に埋まっていた。

「ビャウウウオオオオオオ！？」

長い悲鳴が上がる。

怪女王は悟や安形の方に向いていた体の向きを、友と庄平の方に変えた。

「どうやら左手は完全に注意を反らせたみたいだな」

悟が冷静な顔つきで呟く。

「下田さんはプロだ。右の方もきつと上手くやってくれるさ」

安形は右の様子を確認しながらそう言った。

「悟くん。懐中電灯は全部木の上に置いて、沼の方を照らすようにしたけど……どう？」

いつの間にか二人の横に戻ってきていた亜紀が言う。

「ああ完璧だ、ありがとう亜紀」

——よし、亜紀のおかげで大分周囲が見やすくなった。これならさつきよりも何倍も怪女王の攻撃を避け易くなる。

亜紀のセッティングした懐中電灯の明かりによって照らされた怪女王と、その二本の腕を見ながら、悟は凜々となっている人間を手助けするため、頻繁に左右に視線を動かした。その視線の先にいる下田は安形と殆ど大差の無い怪我を負っているにも関わらず、見事に蛇腕から逃れ続けている。

「……畜生！ 本部に戻ったら絶対デスク組みに変わってやる、もうこんな目に合うのはこりごりだ」

バシャバシャと雨に濡れる地面を蹴りながら、下田は巧みな動きで上から叩きつけるように落ちてきた蛇腕を避けた。

「その攻撃は何度も見たからな、もう簡単に食らってやれねえぜ！」
神崎の最後の瞳を思い出し毒づくように声を上げる下田。

「次の攻撃が来たらこいつを力いっぱいぶち込んでやる」

大型のナイフを握り締め、下田は蛇腕の攻撃に備えると、怪女王に意識を集中させた。

「ビイイビヨオオオオオ……」

何かを感じ取ったのか、右の蛇腕は中々攻撃してこない。本体は友と庄平の方に向いているのに、蛇腕はこちらが見えているかのごとく、動きを止めて様子を伺っている。

「何のつもりだ？ ふざけやがって」

このままでは安形に近すぎると苛立ちを覚えた下田だったが、作戦を成功させるには蛇腕の注意を引き付ける必要がある。あのまま本体の近くでとぐるを巻かれていたら安形は攻撃することが出来ないだろう。

こうしている間にも友らは息を切らしてもう片方の蛇腕から逃げ続けているのだ。下田は覚悟を決め、蛇腕に向かって足を向けた。

「——巨大サナダムシめ」

下田の接近にピクリと反応する蛇腕。何らかの感覚器官が付いているのか、下田が視界に入っていない筈なのに敏感にこちらの動きに合わせ動きを変える。

蛇腕は下田を十分に引き付けると、空気を裂くような勢いで猛烈な刺突を繰り出してきた。

だが、下田も甘くなかった。その攻撃を予想していたのだ。あっさりとそれをかわすと、渾身の力で蛇腕にナイフを刺し込む。

「ビュウウウオオオ！」

怪女王は連続して起きる痛みに苦痛の声を漏らした。反射からか

蛇腕は下田をその上に乗つけたまま高く持ち上がる。

「な、何い！？」

下田は振り下ろされないように必死にしがみ付く。

車から外を見るような残像だらけの光景の中、下田は蛇腕が沼の方に移動していることに気がついた。

「俺をあそこに落とす気が！？」

沼に落とされては感染してしまう。そうなれば堪ったものではない。

下田は沼が近づいた瞬間、間一髪でその直前の地面に転がり落ちた。

「今だ！」

悟が叫んだ。

安形が濡れた土を踏みしめ、全力疾走を始める。

まさに完璧なタイミングだった。完全に蛇腕の注意はこちらに向いていない。今なら確実に怪女王を仕留めることが出来るだろう。

怪女王の太い象のような下半身のまん前に来ると、安形はすぐに猟銃をその獲物の上半身に向けた。

強い雨の中、たった一つの月の光を頼りにお互いの姿を目視し戦い続ける志郎と広野。

志郎は広野の攻撃だけでなく十秒感染を避けるために、錠の所為で異常に距離の無い手と手の接触にも気を使わなければならなかった。俄然筋力の差もあり志郎は不利になる。何とか広野の攻撃を避けてはいるのだが、そのどれもが運がよかったとしかいえないよう

な回避だった。

「くそ、ナイフさえあれば！」

志郎のナイフは沼からここに来るまでの間に広野に取り上げられている。つまり今の志郎は丸腰だった。

素手で悪魔に勝てることはムキムキの格闘家でもない限りありえない。志郎が広野を倒すには五メートルほど先に転がっている草の上のWASPKNIFEを（ワスプナイフ）取るか、広野の懷から自分のナイフを奪い取るしかなかった。

しかしWASPKNIFEを取りに行く事は、広野に背中を見せるということだ。また広野の懷に手を入れるということも、その間彼の攻撃を防げなくなることにつながる。

「参ったね……」

広野の姿から目を離さないようにしつつ、志郎は首もとのシャツのボタンを外した。

「ギユウウルウル——」

広野が人間時から想像できないような高い唸り声を上げる。恐らくあと数秒後にこちらを襲う気なのだろう。戦闘前の意気込みの唸りといったところのようだ。

志郎はどちらのナイフを取るかその数秒の間に決めなくてはならない。遠くのWASPKNIFEか、近くのナイフか。どちらをとっても生存の可能性は低い。

「ギユウウアアア！」

だが残酷なことにも時間は無くなってしまった。雄たけびを上げ、広野は飛びかかってくる。

「くそっ！」

志郎はWASPKNIFEワスプナイフを取ることを諦めた。

ガチッ、ガチッ、目玉をもぎ取られるんじゃないかと錯覚させられるような咬み合う歯の音が聞こえる。押し倒された志郎を餌にありつく豚のように広野は猛襲した。

「ぐ、ぐおおおお！」

それに対し、志郎は死ぬ思いで攻撃を防ぎつつ、広野の軍用戦闘服を漁る。しかしもちろんこんな片手間に悪魔の攻撃を防げるわけではない。広野の歯が防ごうとした志郎の腕に刺さった。

「がああああ!？」

強力な電流に感電したように痛み、ショックが全身を駆け巡る。

肉が裂かれる痛みは例え傷が小さくても半端なものではない。普通の人間ならば地面の上を転げ回るような激痛だ。

志郎は歯を噛み締め口を震えさせると、噛まれた腕で広野の歯を防いだまま、もう一步の腕で相手の軍服をまさぐった。

広野の噛む力はますます強くなっていく。この状態が続けば腕を噛み千切られてしまいかもしれない。

その時、何かが志郎の右手に触れた。冷たい感触——ナイフだ。

「——僕の勝ちだ、広野さん」

志郎はそれを掴み取ると、自分の左腕に食いついている広野の即頭部に叩きつけるように激しく刺した。

「ギューア!？」

広野は何が頭に当たったのかと横を向こうとしたが、その前にその瞳からは力が抜けた。自分が死んだということも理解することなくこの世を去っていったのだ。

急いで広野の死体の下から抜け出すと、志郎は自分の体を確認した。胸、左足、右足、右腕……どこにも灰色の皮膚は見られない。

「よかった! 助かったみた……——え？」

志郎は自分の左腕を見た。先ほどまで広野に噛まれていた方の腕だ。

「そんな!？」

今その手の中指の皮膚が灰色に染まり出していた。イグマは他人の体に入るまでは十秒もかかるが、一度体の中に入ってしまったものの数秒で全身を悪魔に組み替える。志郎は顔面を真っ青にして自分の腕を見た。

——復讐も、友くんらを助けることもかなわずに、ただここで無

残に死んでしまうのか！？

あまりのシヨックに頭がくらくらする。

「何でだよ……！」

志郎はたった一人、雨の降る樹海の中立ち尽くした。

銃口から煙が上がる。

その直線上には穴だらけの頭から黒っぽい血液をだらだらと流す、一匹の人外の生き物が居た。

「――最悪だ」

生き物の様子を見た安形は、放心したように後ろに下がっていく。その手に猟銃は握られていない。それはここから右に五メートルほど進んだ位置に落ちていた。

安形が怪女王に攻撃したタイミングはベストと言えるものだった。悟も、庄平も、下田も、友でさえ勝てると喜んだほどだ。

確かに、これが普通の状態なら、間違いなく先ほどの一撃で怪女王は死んでいただろう。幾らとてつもない化け物と言えども、シヨットガンを間近で頭部に打ち込まれては絶対に耐え切れることは出来ない。

唯一誤算だったのは雨の存在だ。

雨によってもたらされた水は沼の水分を増水させ、その中に溜まっていたイグマを小さな小さな川を作ることですの上を通り周囲に張り巡らせた。水はすぐに口を開けて横になっていた惣一の死体に入り、安定した細胞を求めてその数を増殖していく。

心臓がナイフで突き破られたり、頭に風穴を開けられない限り悪

魔は中々死なない。数個の内臓を潰されていたといっても悪魔にはまだ致命傷ではないのだ。

悪魔化した惣一は一番近くに居た安形に襲い掛かり、その銃口の前に飛び出した。それは安形が怪女王めがけ猟銃のトリガーを引いたのとほぼ同時で、見事に弾丸は惣一の頭を突き抜けた。しかしその惣一の体当たりの衝撃で銃は遠くに飛んでいき、怪女王への最大の攻撃チャンスさえも逃す結果になってしまった。

怪女王は銃声によって友と庄平、下田に集中していた注意を正面に戻した。恐らくすぐに蛇腕の凄まじい攻撃が安形に向かって放たれることになる。そんな状態の中、猟銃を拾うことはもはや至難の業としか言えなかった。

「こんなことあるのか!？」

安形はショックから抜けきれないまま、悟らのいる安全範囲まで走りだした。

悟も計画とは全く違う自体に混乱したが、怪女王の腕から安形を助ける為に本能的に冷静さを取り戻した。

「安形さん、伏せろ!」

先ほどのように感覚を活かして安形をサポートする。そのおかげで安形は無事に二人の元まで来ることが出来た。

三人がいる場所は蛇腕の射程六メートルを超えた場所にある。ここならば怪女王のどんな攻撃もとどくことは無い。

そう、つい先ほどまでは――

鈍い風の音が響いた。

悟は亜紀をかばうようにして間一髪それを避ける。

背後の木が何の前触れも無く伸びてきた蛇腕によってへし折られた。

「な、何でだ!？」

「きゃあ!？」

抱き合うように土の上を転がる二人。

「大丈夫か!？」

安形は二人に攻撃が直撃したのではないかと心配し、身を伏せながら様子を伺ってきた。

「だ、大丈夫…… けどなんであいつの腕がここまで届いたんだ――？」

折れた左腕が体の下敷きになった所為で激痛が甦る。漏れようとすする嗚咽を噛み締め、悟は怪女王に目を向けた。

安形と亜紀も同時に視線を移動させる。

「あいつ、動き出しやがった」

全く同じ位置から動くことのなかった怪女王が、悟、亜紀、安形のいる場所目掛けてゆつくりと歩いている。その所為で射程距離が近づいたのだ。

「とにかく樹海の中に逃げよう、ここに居たらやられるよ！」

亜紀は再び自分を襲おうと、本体の真横で力を溜めている蛇腕をこわごわと見つめた。

「よし、歩けるか？」

安形が悟を支え立たせる。

「またサポートを頼む、俺たちだけだと逃げ切れないからな」

「――いや、逃げない」

「は？」

安形は悟の言葉に耳を疑った。

「あいつは今俺たちに全神経を集中している。今後ろから銃を拾えば、また倒せる可能性があるかもしれない」

「確かにそうだけど、どうやって俺たちで二本の蛇腕を引き付けるんだ。俺は肋骨骨折、お前はポロポロ、亜紀ちゃんにそんなことを頼むわけにもいかなし。実現するのは無理に近いぞ？」

「安形さんは引き付けなくていいです。確実にあの化け物を倒すには銃に詳しい人の方がいい。引き付けるのは僕一人でやります」

「けど、その体でどうやってやるんだ？」

「これが今できる最高の策です。たとえ激痛に苦しんでもやり遂げて見せますよ」

悟は安形の肩から腕をどかし、そう言った。

様子を見ていた亜紀が何かを言いかけたが、その前に悟が制するように言葉を発した。

「亜紀は庄平らとごっつい人にこのことを伝えてくれ。あいつらの助けがないと、これを成功させるのは無理だ」

「……分かった」

亜紀も分かっているのだろう。今はこの方法意外に何の策も無いことを。辛そうな表情をしていたが、それ以上何かを言うことは無かった。

「ビュウオオオオオオオ！」

怪女王がのしのしと距離を詰めてくる。

「じゃ、死ぬなよ！」

安形は悟を一瞬だけ見ると、後ろに走っていった。蛇腕から逃れる為に森の中を通って怪女王の背後にある銃を取る気だ。それを追うように亜紀も走り出す。

「さて、どうしようかな……」

ああは言ったものの、実際のところ悟が攻撃を避けることはかなり厳しい。だがここに残っていた三人の中ではこれが一番の役割分担だった。

亜紀の足の速さならすぐに友と庄平に追いつく。これが悟だったのならばよたよた歩いている間に作戦は終わってしまうだろう。

悟は傷だらけの体を何とか動かし、怪女王から離れるために森の中へ逃げた。

「あいつの攻撃を引き付けさえすればいいんだ。死にたいわけじゃないけど……攻撃を引き付けられるのなら例え俺が死んでも作戦は成功だからな」

怪女王の歩く速度はそれ程速いわけではないのだが、悟の歩く速度が遅すぎるのか、今の悟は完全に蛇腕の攻撃範囲内に居た。

「——やばい！」

何かを察知し、悟は近くの木の影に隠れしやがみ込んだ。その木

を二本の蛇腕が急襲する。左右から挟みこむような蛇腕の攻撃を食らった木は、二つの鋭角を作り折れ曲がった。これではその背後に居た悟も無事ではすまない。

怪女王は四本の足を交互に動かし木の前まで来ると、その後ろを覗き込んだ。

「ビュウア？」

しかしどういいうわけか悟の姿は影も形もない。一体どこに行ったというのだろうか。

怪女王は周囲に視線を走らせたが、全く悟の姿は見えない。仕方がなく蛇腕の感知感覚器官を利用することにした。

まるで本当の大蛇であるかのように、泥だらけの土の上を蠕動運動しながら蠢く蛇腕。しばらくすると、蛇腕の一本が折れた木から見て後方六十度の位置に何かを感じ取った。

悟だ。

悟は先ほど怪女王の攻撃を感じた瞬間に伏せ、ほふく前進で距離を稼ごうとした。

泥や雨の所為で、上手く怪女王の視界から逃れることはできたのだが、どうやらピット機関を持つ蛇腕だけはごまかせなかったらしい。簡単に見つかってしまった。

「ちっ、もう限界か。速かったな」

悟は腕を高く持ち上げる怪女王を見ながら悔しがった。

その時、いきなり何かが怪女王の頭部に直撃した。形から見るとどうやら大きな石のようだ。

「こつちだ！」

怪女王の背後には庄平が立っていた。ロープと石で作ったハンマーを振り回し怪女王を攻撃したらしい。

「おい、後ろから攻撃するな、安形さんが不意打ちできなくなるだろ！」

一緒に来ていたらしい友が怒鳴る。

「掛かって来い、サナダムシ女！」

友の言葉を見殺し、庄平は挑発を続ける。

怪女王は体の向きをこちらに変えると、庄平を睨み付けた。

「安形さんは!？」

悟が怪女王を挟んで友に聞く。

「今下田さんや亜紀ちゃんと後ろの方に隠れてる」

「下田さんも？」

「ああ、俺の策だ。安形さんだけだと失敗する可能性もあるからな。二段仕掛けだよ」

「どういう――？」

「おい、来たぞっ！」

庄平が叫んだ。

途端に、何故か友は怪女王に向かって物凄い速さで走り出す。

悟は不思議がったが、友は馬鹿じゃない、きっと何か策があるのだろうと見守ることにした。

怪女王は当然片方の腕で友の行動を邪魔しようとする。しかし先ほどのような沼と森の間の広間とは違い、ここは完全な森の中だ。

まして友は悟と違い大怪我を追っている訳ではない。逃げる速さは悟の何倍もある。

その所為と無数に生えている木の数々が蛇腕の動きを抑制した。友を狙っているはずなのに木に絡まり全体的外れな所に命中する。

怪女王は上手く動かせない腕に歯がいさを感じたのか、大きく鳴いた。

「ビュウウウアアアアアア！」

それを見た友は走りながら満足げに笑う。

「自然のトラップだ。煩わしいか？」

友はそのまま走る向きを怪女王の右に変えた。

「よし、今度は俺だっ！」

続くように庄平が同じ動きで怪女王の左に移動する。

庄平を追っていた右手の蛇腕は、木の間をくねくねと移動しながらも何とかその後を追った。

「蛇腕を木に絡めているのか？」

様子を見ていた悟は友の作戦に気がつく。

怪女王が攻撃するには一度蛇腕を本体の近くまで戻し勢いを溜める必要がある。これはその戻る速度を大幅に遅らせることが目的なのだろう。

友と庄平はそれぞれ限界まで怪女王の蛇腕を引き付けたい。

蛇腕は本体の居る場所まで腕を引っ込めた。

「いくぞ！」

下田が安形の肩を叩き合図を送る。

二人は草陰から飛び出すと、怪女王目掛けて全力疾走を始めた。

木との摩擦の音と空気を裂く音を鳴らせながら、蛇腕は凄い勢いで戻っていく。

「うおおおおお！」

下田と安形は決死の覚悟で走った。

「やっれえええゆええ！」

庄平が大声で叫ぶ。

悟と友、亜紀が見守る。

とうとう二人は無事に怪女王の足元までたどり着いた。少しだけ遅れて二本の蛇腕が左右の森から出現する。まさに紙一重の戦いだ。「蛇腕がもう来やがった！」

下田は思っていたよりも遙かに速い蛇腕の戻りに舌打ちすると、腰を落としながら両手を交差し膝の上に乗せた。安形はそれに躊躇なく飛んで片足をかける。

「行けええええええええ！」

叫びながら下田は両手を上に持ち上げた。同時に安形も足に力を込める。すると二人の力が重なり、安形は怪女王の顔の真正面に飛び上がった。

怪女王は目を見開きこちらを凝視する。

その目を見ながら、安形は水を滴らせる獵銃に指を掛けた。足元では下田を無視し、二本の蛇腕がすさまじい勢いで自分目掛け上が

ってくる。

「お別れだお嬢さん」

安形はトリガーを引いた。

銃声が響くとほぼ同時のタイミングで蛇腕が安形に直撃する。安形は口から血を吐きながら地面に落ちた。

「安形さんっ！」

庄平は顔を青くして駆け寄ると、何度も声を掛け揺らしてみた。しかし安形はピクリとも動くことは無かった。

「そんな——安形さん……！」

庄平の目に冷たいものが流れる。

その様子から悟は安形の死を悟った。

「庄平」

悲しそうな顔で友人の名を呟く。

一方、友は力なく座り込んだ怪女王に近づくと、その顔を見た。無数の穴が命中した所為で原型を留めないほど顔が吹き飛んでいる。どうやら今度こそ倒すことができたようだ。

「どうだ、死んでるか？」

下田が土の上に屍餅をついた格好で聞いてきた。

「これで生きていたら不思議だな、間違いなく死んでいる」

「そうか——倒せたか」

安堵のため息を呟く下田。

「それより、沼の岩の上に居た仲間はいいのか？」

「ああ、そうだな。三本腕を持ち帰るつもりはないが、こんなところには一秒でもいたくねえ。さつさとへりでかえろうか」

「折れた木を何本か使えばあそこまで渡れるだろう。すぐに取り掛かるう下田さん」

友は感情が麻痺してしまったのか、不気味なくらい冷静な様子でそう言った。

下田はそんな友を何かを考えているように見る。

「どうした？ 早くやろう下田さん。時間がもつたいない」

「……ああ」

下田はまだ友に視線を向け続けていたが、その言葉を最後に立ち上がった。

有村は拍子抜けするほど簡単に救出することができた。

沼の付近には怪女王に折られた木が何本か倒れていたため、すぐに簡易的な橋を作ることができたのだ。

目を覚ました有村は下田の顔を見たとたん恐縮したように謝りだした。

「す、すいません下田さん。俺の所為でこんなことに……」

「気にするなと言いたところだが、神埼と惣一がこの世を去り、俺も死に掛けたんだ。後できつちり償ってもらうからな」

下田は怒りを押し隠したような声で有村を怖がらせた。

「は、はい」

「ところで、あなたたちがここまで来たのは一体なんでなんだ？

怪女王があゝの電波塔まで行くとは考えられないんだが」

友がずっと疑問に思っていたことを聞く。

「それが、実は悪魔LV.3に襲撃されたんです。この沼なら悪魔は怪女王を怖がって近づかないので、悪魔を巻くまでの間居ればいいと思って……」

「呆れた奴等だな、それでもプロか？　持ち場を離れるだけでなく足まで引つ張るとは——」

「すみません」

下田の怒りの籠った口調に有村は小さくなる。

下田が有村を問い詰めているのを横目に、悟、亜紀、庄平の三人は森の前の木に腰掛け安形の死を悲しんでいた。

「安形さん……」

深い悲しみからか、庄平はずっと涙を流し続けている。

亜紀も泣く事はないが、顔を膝の中に埋めてずっと伏せていた。

ただ、悟だけは安形の死の前と変わらず冷静そうな顔つきでじつとそんな二人の様子を見ている。

悲しく無い訳ではない。短い間でも命を掛け合った相手だ。悟だって辛い。ただ、あまりにもここで死を見すぎたことと、常に冷静になってしまう悟の正確が泣くことを許さなかった。

ここに来る前なら悟もきつと泣いていたはずだ。

だが、この地獄化した樹海という環境の所為か、殺され殺しを繰り返してきた所為か、悟の中でここに来る前と何かが変わってしまった。

その変化は友と同じ物なのか、それとも違うものなのか、今のこの二人が知る術は無かった。

「——ちよつと待て、今何て言った？」

友は突然有村に聞き返した。

「え、すみませんって……」

「違う、それじゃないもつと前の方だ」

「この沼なら悪魔は怪女王を怖がって近づかない——……ってここですか？」

「——下田さん、怪女王は死んだ。悪魔なら気配やら何やらでそれを感じる事が出来るはずだ」

「何が言いたい？」

下田は友のただ事でないような雰囲気を見ると、声を落として聞いた。

友は怯えた表情で言葉を放った。

「悪魔LV.3が来る」

「ギユウウアアアアアアアア！」

友が言い終わると同時に、沼の反対側から悪魔のものとと思われる鳴き声が聞こえてきた。かなりの数だ。

「な、何だあの声は！？」

庄平が驚いて飛び上がった。

「悟君！？」

亜紀が悟の腕にしがみつく。

悟の額からはこれまでで一番多い量の汗が噴出している。

亜紀が腕を掴んでいることにも気づかない様子で呟いた。

「逃げる……！」

「え？」

「逃げるおおおおおつ！」

「ギユウウアアアア！」

雨の所為で確実な姿は見えないが、月の光を反射する血走った赤い目だけは目視できる。今、これまでに見たことの無いほどの無数の赤い目が、沼の向こうに蠢いていた。

悟たちは死ぬ気で走った。雨に濡れることも、枝で傷つくことにも構わず。

絶望、恐怖、悔しさ、怒り、後悔、逃げる人間の頭には様々な感情があふれ出す。

全ては迫り来る悪魔LV・3の大群が原因だった。

戦うことを考えもさせないほどのその恐怖の塊は、瞬間に逃げ惑う彼らとの距離を詰めてくる。

悟らは走りに走り何とか電波塔に駆け込むと、急いで鍵を閉めバリケードを作り、階段が上がっていった。

「何なのあの数は！？ 信じられない！」

亜紀が目の水分を拭いながら震えた声で叫ぶ。

「樹海中の悪魔がここに集まったんだな。早くへりに乗ろう、あの門じゃそう持たないぞ！」

下田がかなり焦っているといった様子で答えた。

「着いたぞ」

悟が最初に屋上に出る。

次に庄平が扉をくぐり抜けようとした。しかし前にまだ居た悟にぶつかり止ってしまう。

「おい、速く行けよ！ 今どれだけやバイと思ってんだ」

動こうとしない悟を庄平は怒鳴りつけた。

「……どれくらいやばいかって？ 自分の目で見てみるよ」

悟は前を向いたまま腰から黒柄ナイフを抜き取り庄平に答える。

「……くそつたれ！」

庄平は目の前の信じられない光景に、ここに来て最大の絶望をした。

「ギヤアアアアウウウアアア……！」

豪雨の中、三本腕の怪物がへりの前に立ちふさがっていた。

> i 1 1 1 7 1
— 2 2 4
<

<第十六章>押し寄せる闇（後書き）

ボスの強さはあくまで

巨狼>怪女王>三本腕です。

ただし、これはボス同士で戦った場合であり、人間が相手だった場合は戦い方や相性も関係してくるので次のようになります。

怪女王>巨狼>三本腕

人間と化け物の強さに対する立ち位置は異なるということです。

<第十七章> 玄色の船へ（前編）

<第十七章> ” 玄色の船へ （前編） ”

「な、何故鎖が取れている！？ 麻酔の事はともかく、鎖は間違はなく柵に括り付けていたはずだ！」

下田が自分たちの帰りを待っていたように立ちふさがる三本腕を見て、苦悶の声を上げた。

「——これは……？」

悟は三本腕が括り付けられていた筈の右手の柵を見ると、何かに気づいた。

巻きつけた鎖と鎖をロックしていたはずの止め具が、鋭い刃物で切断されたように切れている。明らかに人為的に何者かに切られたことが見て取れる。少なくとも包丁や一般的なナイフではこの丈夫な止め具を切断することなど不可能だ。特殊なナイフ、WASP Kナイフ NIFEや悟が今構えている黒柄ナイフなどを省けば——

「誰がこんな事を？」

亜紀がその切断箇所を見て言った。

「おい、そんな事は後にしろ。今はとにかく逃げるんだ。有村さんと亜紀ちゃんは今時間を稼いでいる間にへりまで行って、飛び立つ準備をしてくれ」

「そうですね、犯人は後で見つければいい。——亜紀さん、行きましょう手伝ってください」

友の言葉に有村は同意し、走る構えをとった。それを見た下田が声をかける。

「有村、援護する。なるべく早く頼むぞ」

「はい、お願いします」

「時間を稼ぐたつて……雨の中じゃ、あいつの唯一の弱点の火だつて効果が無いんだぞ。一体どうすりゃいいんだよ！」

二度と見たくない、見ることはないと思っていた三本腕の元気な姿を見て、庄平は大きく唾を飲む。

「確かに、火が効かないあいつはある意味無敵だが、別に倒す必要は無い。有村さんたちから注意を反らせればいいんだ。死なない程度に逃げ惑えば何とかなるだろう」

「その逃げるってことが一番むずかしんだけどな」

友の言葉に悟は苦笑いした。

「グギユアアアアアア！」

急に自分の目の前に現れた無数の獲物の姿を見ると、興奮したのか、三本腕は雨を吹き飛ばすような大声で鳴いた。その姿はもはや大森の外見を全く残してはおらず、完全に悟らが数日前に仕留めた三本腕と同じ形になっている。

「悟、さっきみたいに俺と庄平をサポートしてくれ。あいつの攻撃は即死攻撃だからな。動きの遅い今のお前じゃ囧は勤まらない」

「分かった。じゃあ囧は友がやるのか？」

「庄平だ」

悟の問いに即答する友。

「え！？ お、おい」

「やるぞ！ 下田さん、行ってください」

友は冷静そのものといった表情で行動に入った。

庄平も見栄を張るかのように、大嫌いなはずの三本腕に向かって走っていく。

何か――あの二人変だぞ？

二人の間に亀裂が生じていることを知らない悟は違和感を感じつつも、今更止めることなど出来ないため仕方がなくサポートを始めた。

ひびや欠けた所為でぼこぼこになっている石斧を振り回しながら、悟の声を頼りに三本腕の第三の腕から逃げ回る庄平。その後ろでは

友が切れなくなった包丁やら、石やら、何やらを三本腕目掛けて投
げている。

友が庄平を前衛に配置したのは別に庄平が憎いからでも嫌いだからでもない。それが最善だと判断したからだ。下田、有村、亜紀の三人を無事にヘリの前まで移動させるには、上手く三本腕の注意を彼らから反らす必要がある。三本腕を引き付けつつ、下田らの動きを助けるという複雑なマネを庄平が出来るとは思えない。友は敢えて自分が後衛になることで三本腕の動きを見ながら下田に合図を送り、庄平には前衛に集中してもらおうと言う作戦を取った。

確かにこれは良い作戦なのだが、友は庄平の事を全く考えてはいなかった。

身の安全についてじゃない。それについては悟を信頼して大丈夫だと信じている。

庄平の精神についてだ。

庄平は前衛に指名されたことで友に対する不信任感、苛立ち、意地、開き直りといった作戦に支障をきたす負の感情を持つようになった。それは本来ならば三本腕を恐れ慎重に行動させるはずの庄平を、異常なほど攻撃的、行動的、積極的な前衛に変えてしまったのだ。

悟が先ほど二人に対し違和感を感じたのも、友が即答で庄平を前衛に指名したからではなく、友が庄平に対し自分の考えを教えなかったからだ。

その背景には少し前から出来ている亀裂が影響していた。

もし、二人の間に今のような隔たり、感情のすれ違いが無かったのなら、庄平がこうも無謀な行動を取ることも、友が庄平に話し欠けづらくなるようなことも無かっただろう。チームワークが重要となるブラックドメイン生物戦において、このわだかまりは非常に大きな抵抗になっていた。

只でさえ雨が降り火が効かず畏も作れないこの不利な場所なのだ。ギクシャクしている関係でまともな意思伝達が出来るわけが無い。自然と戦いはこちらが不利になる。

下田はそんな三人の戦いに不安を感じつつも、有村と亜紀をかばうように少しずつ、少しずつ歩みを進め、なんとか三本腕に気づかれることなくヘリまで来ることができた。

「よし、俺と有村はこいつを飛ばす準備に取り掛かる。あんたは準備が終わったら後ろからあいつらを呼んでくれ！」

「分かりました」

亜紀の返事を確認すると、下田はヘリのドアを開け運転席に有村と共に入った。同様に亜紀も後ろの席に座るためドアを開ける。

ここから見た限りでは悟たちの戦いはかなり旗色が悪そうだった。亜紀は出来るだけ早く急がなければと自分に活を入れた。

「よう、亜紀ちゃん。合いたかったぜ！」

「！？」

亜紀はあまりのことに声を失ってしまった。ヘリの中に二度と会いたくないと思っていた男が居たからだ。

鈴木は歪んだ笑みを浮かべながら、亜紀を引き込むように強引にヘリの中に入れ、バタフライナイフを突きつけた。

「な、何で鈴木君がここに居るの！？」

「はっ！俺はな、お前たちとあの投げナイフ野郎をずっとつけてたんだよ。おかげでこんなところにヘリを見つけることができた。マジで感謝してるぜ！」

「どうした！？」

後ろから亜紀の怯えた声が聞こえてきたことに気づいた下田は、確認するようにこちらを振り向いた。

「おい、オッサン！今すぐヘリを出しやがれ、あの馬鹿な三人が怪物を引き付けている間にな」

「何だお前は、何故ここに居る！？」

さっきこのヘリに来た時は居なかった鈴木の登場に驚く下田。

「早く出せって言うてんだろが！出さねーとこいつの喉を掻っ

切るぜ！」

「何を勝手な！」

いきなり現れた見も知らない若者に偉そうに命令され、下田は眉間に皺しわを寄せた。

「仕方がない。下田さん、飛びましょう」

目の前で、まだ若い未来のある女性が死ぬ姿を見たい人間は中々居ない。有村は一度鈴木を落ち着かせる為に、ヘリを浮上させることを考えた。

「駄目だ。あいつらが来るまでは飛ばすな！」

有村に怒鳴りつける下田。

優先順位を考えたのなら、鈴木を挑発せずに飛び立つべきだ。悟らが三本腕の気を引いている今なら無事にヘリを飛び立たせることが出来る。下田にはこのブラックドメインの情報報告という任務があるのだから、悟らよりも自分の脱出を優先するのは当然だ。

広野や一部の上司の気まぐれで行われた生存者スカウト任務は危険を冒してまで成し遂げる必要は無い。

しかし、それにも関わらず下田は悟らを待つことを決断した。

一緒に居た日数は二日もないが、伊達に協力して悪魔や他の怪物と戦っていた訳ではない。情も移るし、何より下田は悟たちの生存力、機転、度胸を高く評価していた。

訓練を受けているプロの人間が死んでいく中で、全くの素人のくせにここまで生き残っているのだ。スカウト云々を省き、下田は個人的に彼らを部下に欲しかった。ここで殺すのはもったいないと思った。そんな彼らを見捨てるなど下田に出来るはずが無い。

「はああ！？ テメー何言ってんだよオッサン！」

怒りに唇を震わす鈴木。

「ヘリつてのは一人でも操縦できるんだろ？ テメーから先にぶっ殺してやるのか！？」

鈴木は亜紀に向けていたナイフを運転席の椅子に固定されている下田に向けた。

「――下田さん、貴方が死んではことだ。飛ばしますよ」

有村は下田の返事を待つことなくヘリを浮上させた。けたたましいプロペラの音が鳴る。

「うおっと!？」

鈴木はその急浮上にぐらつき、手を窓に強くぶつけナイフを落としてしまった。

「――このっ!」

その瞬間、亜紀は鈴木に掴みかかった。いや、掴みかかるというよりは鈴木の手元に落ちていたナイフを奪い取るうとしたのだ。

「な、このアマ!」

鈴木は怒り心頭の様子で亜紀を押し返しに掛かかる。

急浮上の所為と中で暴れる二人の所為で、右に左に揺れるヘリコプター。その異常は悟たちからも手に取りように分かった。

「何かあったのか!？」

庄平のサポートをしている所為で中々ヘリのように集中できない悟。

「悟、今は三本腕に集中しろ!」

悟の助けが無くなり危なっかしくなった庄平の身を案じ、友が怒鳴った。

「くそ、こいつ一体どうすりゃいいんだよ!」

庄平はナイフが刺さっても、石斧が命中しても、全くダメージの無い三本腕の様子を見てがっかりした。

だが、うんざりしているのは庄平だけでは無いらしい。

三本腕はいくら第三の腕を振り下ろしても獲物に掠りもしないため、段々攻撃を荒くしていった。

感覚が鋭い悟でも他人の危機を感じることは出来ない。庄平に出している指示は三本腕の動きを読んで予測しているだけだ。そこに多少は感覚が生かされてはいるものの、口で指示を出している以上悟本人が反応するよりはずっと遅くなってしまう。三本腕の荒い攻撃に段々と庄平は避けることが辛くなっていた。

「庄平、一端下がれ！」

「大丈夫だ、まだやれる！」

身を案じて放った悟の言葉を庄平は退けた。

——庄平、いつもはもつと慎重なのにどうしたんだ！？

悟は庄平の無鉄砲な行動に度々背筋を寒くする。

「うおおおつといっ！？」

庄平の腕を掠り三本腕の腕が屋上の地面を割った。これまで何度か三本腕の避けてきた庄平だったが、いきなり避けることが難しくなり攻撃が掠るようになった。三本腕が攻撃パターンを変えてきたのだ。

再び間を置かず三本腕の第三の腕が振り下ろされる。庄平は先ほどのパターンだと思っていたため完全に虚をつかれてしまった。頭の上に三本腕の大きな拳の影が映る。

「庄平！」

間一髪のところまで友が庄平を押し飛ばした。

ドシンッ！ という鈍い音が響く。

「ぐあああああ！？」

「友！」

庄平が叫び声を上げる友を急いで見ると、三本腕の攻撃が直撃してしまつたらしく、左の足が見事に折れてしまっていた。

「グギヤアアアアア！」

獲物の動きを封じれた喜びに勝利の雄たけびを上げる三本腕の怪物。

「まずいっ！」

悟は指示を出すところではないと二人の居るところまで走り出した。

——早く、早く！

思うように動かない体が煩わしい。

腕を掲げる三本腕の姿がスローモーションのように見える。

頭が冷たくなる。

体がしびれる。

悟は叫んだ。

「友ー！」

悟の目の前で、三本腕は腕を振り下ろした。

「大人しくしてりやあー無事に家に帰れたのによー！」

「あうああああ……！」

相変わらず激しく揺れるヘリの中で、鈴木は亜紀の首を絞めていた。

「止めろ、このクソガキッ！ 何してる！」

下田が後ろを見ながら声を張り上げる。

しかし興奮している鈴木には全く聞こえていないようだ。一心不乱に恍惚の表情を浮かべ、亜紀の首に力を込め続けた。

亜紀は鈴木の腕をはずそうと命いっぱい暴れたが、どうしても肉体的な筋力差は否めない。徐々に意識が遠くなっていく。

——悟君……！

亜紀は苦しみの中、いつの間にか好きになっていた人間の姿を浮かべた。

「うああああああ！」

友は激痛のあまり赤子のように大声を出して叫んだ。

三本腕の第三の攻撃が振り下ろされた直後、友は体をゴロゴロと転がすようにして何とかそれを避けたのだが、完全に避けることは出来ず、今度はもう片方の足に巨大な拳を受けてしまった。

これで友は両足を砕かれたことになる。

「ゆ、友っ！」

酷い後悔いの念が襲い掛かる。

絶望が頭を支配する。

自分が馬鹿な意地を張りさえしなければ。

自分がかもつと周りを見ていれば。

もつと慎重に行動していれば。

庄平は自分の愚かさに強い憎しみを抱いた。

「——このっ！」

やっと二人のところまでたどり着いた悟は、友を守る為に三本腕の左足へ黒柄ナイフを突き刺した。包丁と比べて実にスムーズにあつさり肉の中に入っていくダークグレーとシルバーの色を持つ刃。黒柄ナイフはかなり深いところまで三本腕の右腕の筋肉を抉った。

「グギヤアアアアア！」

これまでまともな武器で攻撃されていなかった三本腕は突然走った痛みにどきもを抜かし、左腕を高く上げて叫んだ。

その勢いで悟は屋上の外に投げ飛ばされてしまった。天と地が反転し、遥か下に悪魔の大群と茶色の地面が見える。

「うわあああああ！」

悟は間一髪というところで柵に右腕を絡めると、何とか下に落ちずにすんだ。だがその衝撃でヘリポートの外に向かって柵が大きく歪んだ。この状態では友と庄平の援護になど行くことは不可能だ。

かつこよく柵を飛び越えたいのだが、実際のところは落ちないようにはがみつくことしか出来ない。

「ギユアアアア、ギユアアアア！」

下から獲物が降ってくるのを心待ちに待つ悪魔どもの身の毛もよだつ声が聞こえる。

「くそっ！」

悟は息も絶え絶えに必死に柵にしがみついた。

亜紀の耳に悟の絶叫が聞こえた。開いたままのヘリのドアの先に今にも下に落ちてしまいそうな悟の姿が見える。

——悟君……！

「ん？ ほう、あの色男君も死にそうだな。良かったじゃん、一緒にあの世に行けるぜ亜紀ちゃん！」

鈴木はこれで止めだと言うように、渾身の力で首を締め付けた。

「あがあああああ……！」

声にならない声を上げる亜紀。

下田と有村は一度ヘリを飛び立たせてしまったため、後ろの亜紀を助ける術が無かった。着地させようにも、こうヘリの中で暴れられては中々上手くはいかない。出来ることといえばただ鈴木を怒鳴りつけることだけだ。

殴りつけるように連続で放たれる下田の暴言を、扇風機の風を受けているような心地よさそうな幸せいっぱいの笑顔で返すと、鈴木は苦しみに歪む亜紀の顔を嬉しそうに見つめた。

「っ吉田！ せっかく悪魔どもから逃げ延びてきたのに、こんな奴に言いように殺されるのか！ 何とかそのクズを倒せ！」

無茶なことを言う下田。

だが、その言葉は亜紀に届いていた。

鈴木は確かに力が強いが悪魔ほどではないし、十秒感染の危険も無い。自分と同じ人間なのだ。少なくとも肉体的には。

亜紀は小学校の頃、従兄弟としたケンカを思い出した。

その時亜紀は今のように従兄弟の上に馬乗りになり、その頭をバカスコ叩いていた。圧倒的に有利な状況だ。

だが、従兄弟がいきなり頭を後ろに下げたと思ったらそれは一変した。亜紀の頭は後ろに倒され、今度は従兄弟が馬乗りになる。結局その後ケンカは引き分けに終わったものの、それ以外叩き合いのケンカをしていない亜紀にとって、そのケンカはかなり印象に残っていた。

「ヒヤッハーアア、死ねえええ！」

歡喜の笑いをする鈴木。

「……このっ！」

亜紀は頭を後ろに引き勢いをつけると、そのまま二本の足を上に上げ、鈴木の手を後ろから挟んだ。その状態のまま勢い良く亜紀のいる位置とは反対側の窓に鈴木の手を叩き付ける。

「ひやはははは……ぶっほっおおお！」

そのあまりの速度に、鈴木の手は幸せいっぱい笑顔を作ったまま窓ガラスを突き抜けた。

足を倒す勢いに乗り体を起き上がらせる亜紀。喉はジンジンと痛み、呼吸も苦しいがこのチャンス逃すわけにはいかない。突然の痛みに鈴木が驚いている間に下に落ちているナイフを掴み取った。

「ぐううおおおおあ——！？」

鋭い目つきでナイフを構えこちらを見ている亜紀に恐怖を感じた鈴木は、頭の痛みに悲鳴をあげながら急いでヘリのドアを開け逃げようとする。

だが、そこはくしくも自分の所為で浮上した空中だった。しかも今はちょうどヘリポートから僅かにずれた位置を飛んでいる。

「な、ちよっと待てよ！」

鈴木は真逆さまに樹海の大地へと落ちていった。

「ドシン」という曇った音を響かせ土の上にバウンドし、二、三回転すると動きを止める。体は全身骨折で動けないものの、強い憎しみの所為か怒りの所為か、鈴木を意識ははつきりと保たれていた。「があぐああああ——痛てええええ……!？」

その周りに電波塔を囲んでいた悪魔LV・3の群れが集まってくる。

「な、何だこいつら!? うわああああつ、来るなああ! 来るなあああつ!」

幾ら逃げようとしても、力を支えてくれる骨は折れているため力が入らない。鈴木は無残にもこれまで自分が殺してきた被害者のように、動くことを封じられた状態で無数の悪魔に歯をつきたてられた。

「止めるおおつ、止めるおおー……——ぐぎゃああああああ!」

おぞましい絶叫を最後に、ヘリポートの下からはグチャグチャと何かを噛む音以外聞こえなくなった。

「はあ、はあ……!」

庄平は友の体を引きずるようにし、屋上の入り口がある後方へ下がっていく。

しかし、そんなことであの怪物から逃れられるはずが無い。三本腕は獲物が下がっていく度にそれ以上の速度で接近した。

その所為で二人と三本腕の距離は遠のくどころか前よりも近づいてしまう。

「庄平、俺はどう考えても逃げられない。丁度いい罠にもなることだし……今のうちに逃げる。悟とヘリに乗れ！」

痛みに耐えているのか、恐怖と戦っているのか、全身を雨と汗でびしょびしょに濡らしながら友は力の無い声でそう言った。

「俺の所為で——俺が馬鹿みたいな意地を張ったからこんなことになったんだ、絶対に……絶対に見捨てるもんか！」

しかし庄平は友から全く離れようとはしない。

「おい、冷静になれ！ お前がここにいても何も変わらないぞ、死人が増えるだけだ。俺のことを思うなら逃げてくれ！」

「嫌だ、俺はお前が何と言っても絶対に逃げねーぞ！ 絶対に助けてやる！」

「お前の優しさは十分分かった……頼むから……頼むから逃げてください！」

これまで一環として冷静な表情を貫いてきた友の顔が涙で歪む。

友は別に冷酷人間でも精神異常者でもない。彼がここまで冷静な態度を取ってきたのは、自分の命と友人達の命を守る為だった。

数時間前に電波塔に来た時広野に対して売っていた媚も、全てはその後の自分と庄平、悟らを守る為の行為だった。

銀野町や浮世壮の状態を見れば分かるように、こんな大量虐殺を平気で黙認するような組織だ。人体実験や人員の使い捨てだって当たり前のようにやりかねない。広野に気に入られることで友は庄平たちを守るうとした。

底辺とは言え、広野は一応人の上に立つ立場にいる。彼に気に入られていれば、いざ仲間が削除の対象に指名されても、助けることが出来るかもしれないから。

常に全員が生き残れることを第一に考えて行動した。

自分の恐怖、悲しみ、感情を無理やり消し去ってまで。

庄平にどれほど嫌われようとも、全ては無事にこの地獄から出る為に友は己を殺してやってきた。その姿は下田の目にすら狂気を含んだように移ったほどだ。

「グギユウウウウ……」

三本腕はもう目の前まで迫っている。

庄平は誰か助けてくれないかと、あちらこちらに視線を移動させて見たが、悟は悟でピンチだし、へりはまだ空中に浮かんでおり、誰もここに来れそうに無い。つまり、今の状態を一言で言えば三本腕と戦えるのは自分ただ一人ということだった。

自力で何とかして三本腕を倒すしかないと悟った庄平は、しばらくうつむくと静かに友の顔を見た。何かを決意するような、覚悟するような目で。

「……友、覚えてるか？ 三本腕ってさ、一度火をつけたら一瞬で全身に火が広まったよな」

「俺が忘れるわけないだろ。それがどうした、雨の降っている今は火なんか効かないぞ？」

しゃべるのもやつとのような様子で友が言葉を返す。

「俺——……あいつの触手に捕まってから分かるんだ。——ったく、何で今になってやつと気づいたんだろうな……」

目の端を細めて悲しそうな、刹那的な表情を作る庄平。

「庄平？」

友はそんな見たことの無い庄平の表情を、不思議そうな様子で見つめた。

「グギヤアアアア！」

三本腕の足が庄平の真横の地面を踏みしめる。

「俺が悪かった……——じゃあな、友」

庄平は僅かに微笑むと、ライターを懷から取り出し三本腕に向き直る。

「おい、何やってる、逃げる庄平！ 逃げるんだ！」
嫌な予感がする。

大切な何かを無くしてしまう様な。
二度と手に入れられなくなるような。
身を切り裂くような嫌な予感がする。

「うおおおおおおお！」

庄平は歯を噛み締め三本腕に突っ込んだ。

間一髪で振り下ろされる第三の腕をかわし、その醜い絞のような口しかない顔の正面に滑り込む。

「お前の体を駆け巡ってる油の在り処はのは表皮じゃない、体内だろ？」

一瞬で全身に火が回ったはずなのに捕まった時触手には少しも油が無かった。そのことから庄平は三本腕の体内に血液のように油が循環していると考えたのだ。

「こいつを食ってみろ！」

庄平は自分の腕を三本腕の絞のような歯が並ぶ口の中に突っ込むと、もはや三本腕の体内にあるため雨で消えることの無いライターに火を灯した。

それは口内の油に移り、内蔵へ、三本の腕へと映画を早送りをしたような速度で広まっていく。

「グギヤアアアアアッ!？」

三本腕は体中で暴れ回る悪魔のような赤い刃に苦痛の鳴き声を上げ、口の中に入っていた庄平の腕を強く噛み締めた。

「うがあああ!？」

三本腕はそのまま庄平を空中に放り投げると、全身を火に包みながら背中にある巨大な口を大きく開く。

悟は必死に右手で柵にしがみ付き、それを見た。
宙を舞う庄平と目が合う。

「庄平 ええー!」

庄平はすまなそうな顔のまま、燃え盛る三本腕の口の中に落ちていった。

「……むおっ！」

「——はあ、はあ……よいつしよつと！」

亜紀と下田は柵に引つかかっている悟を二人がかりでヘリポートに引き上げた。

しかしやつと地面に降り立つことが出来たのに悟の顔は青白く生気の無いゾンビのようになっていた。無言のまま力なく正座するように崩れ落ちる。

「庄平……」

その目は空ろである一点を見ていた。

悟の北西屋上の入り口付近に倒れている三本腕の死体を。

体内に油が充満している所為か、三本腕は盛大な炎柱を空に向かって伸ばしながら全く劣えることなく燃え続けている。あの状態ではもう庄平の亡骸も原型を留めてはいないだろう。

決して人前で泣くことの無かった悟は、その火の柱を見ながら一筋の涙を頬に走らせた。

いつしよに帰ると誓った筈なのに。

生き残ると誓った筈だったのに。

後一步と言うところで彼は死んでしまった。

友を守るために。

亜紀や下田らを守るために。

悟を守る為に。

自分の命を犠牲にしてまで、三本腕を倒してくれた。

いや、もしかしたら死ぬ気なんか無かったのかもしれない。

彼は恐らく只必死にみんなを助けようとしただけなのだろう。

その所為で、自分の命が失われてしまうことわからずに。

彼はこの樹海内で合った人間の中で一番優しい男だった。

初対面の人の死に悲しみ、親友の死に悲しみ、初恋の人の死に悲しみ、多くの涙を流した。

それは弱さと言えば、悟は違うと思う。

自分たちの身を案じて冷静さにつ徹していた友や悟とは違い、庄平は他人のために涙を流す暖かさを、心の余裕を持っていた。

他人を思いやる気持ちを持っていた。

今になって思えば、彼はここに居る人間の中で一番心が強かったのかもしれない。

悟はもう二度と話すことの出来なくなった親友のことを思い、泣き続けた。

「曲直……行くぞ。急がないと悪魔LV.3どもがやって来る」

人の死に慣れている下田は悟の気持ちを理解しつつも、現状を考えそう言った。

「……………そうですね……………分かってます」

悟が亜紀に支えられるようにしてへりにつくと、痛々しい姿の友が顔を隠すように腕を目の上に置き、横になっていた。

悟はその腕の袖が濡れていることに気づいたが、何も言わず亜紀を先にへりに乗せる。

「何で悟くんが先に乗らないの？」

大怪我を負っている悟が自分を先にへりに乗せたことを不思議がって亜紀が聞いてきた。

悟の頭にキツネの言葉が過ぎる。

『いや、それはあまりにも勿体無いからな、提案があるんだ。ちょ

つとコツチに来てくれ。亜紀ちゃんには聞いて欲しくない』

「……レディーファーストってことにしといて」

赤く腫らした目で悟は微笑んだ。

「こんな時に何かっこつけてんの」

亜紀は悟の真意を知らず少しだけ笑った。

悟が複雑そうな顔を作ったその時、突然轟音が響いた。

電波塔が地震に合った様に大きく揺れる。

「な、何！？」

「悪魔どもが下のバリケードを破ったんだ。曲直つ、早く乗れ！」

下田が慌てて悟をへりに乗らせようとする。だが、その前に屋上の入り口がいきなり吹っ飛んだ。

「何だ！？」

悟と友の言葉が重なり、埃を巻き上げる入り口に全員の視線が向く。

S字のように曲がった背骨。四足動物の四肢のように完全な自然体の逆間接の形を作った腕と足。そして大きなサングラスを掛けているような、ギョロツとした眼球の浮き出た血走った赤い目。その頭部の額は頭蓋骨が皮膚を突き破り、まるで角のように盛り上がっている。また耳は先が鋭く尖り、後頭部も骨盤のような形に肥大化し、背中には鬣のような真つ黒の毛が生えていた。

LV・1やLV・2よりもより一層黒に近い色になった悪魔LV・

3、そいつが目の前に立っていた。

「まるで神話に出てくる悪魔そのものだな」

友が見事にその形を表現する。

「くそ、これじゃへりを飛ばせない！ やつら俺たちが飛び立ったと同時に突っ込んでくるぞ、生半可な高さならあいつらの筋力ですぐに届いちまう」

下田は悔しさに拳を握り締め、へりから降りて戦おうとした。それを悟が制する。

「下田さん、俺が……あいつらを食い止めます。その間にへりを飛ばしてください」

「何だと？」

「俺がここで均衡を保っていれば、あいつらも襲ってはこないと思います」

「やけになってるのか？」

下田は庄平の死のことを踏まえてそう言った。

「俺はそんな人間じゃないですよ、今はこうするしかないんです」

悟は妙に落ち着いた声で返す。

「……死ぬなよ」

「……なるべく頑張ります」

その言葉を聞くと下田は有村に命じた。

「飛ばせ！」

「な、ちよつと悟くん!？」

いきなり下田が悟を残してへりを浮上させたので、亜紀は驚いて悟の腕を引っ張ろうと手を伸ばした。しかし、悟はその手をじっと見ているだけで掴もうとはしない。

「悟くんっー！」

それでも亜紀は必死に手を伸ばす。

「亜紀ちゃん、へりがある程度飛んでからロープを投げればいい、今は誰かが残って悪魔を牽制してないと全員死ぬんだぞ！」

友が感情を押し殺したような声で亜紀に言った。

既にへりは六メートル近く浮かんでいる。今更手を伸ばしてももうどうにもならない。

「下田さん、まだ、まだ駄目なの!？」

亜紀が震える声で下田に問い詰める。

「駄目だ! 後四メートル……最低でも十メートルは上がらないと悪魔に飛び乗ってこられる!」

下田は辛そうに言った。

悟は向かいの入り口に立っている悪魔の後ろから別の悪魔LV・

3が現れたのを見ると、目を見開いた。

「……鈴野……」

その悪魔の両目は潰れており、腰には十字架の形をした銀色のキホルダーが着いていたからだ。

悟はそのキーホルダーを貰った時の事を思い出す。

あれは悟がまだ七歳の頃のことだ。

初めその十字架はキーホルダーではなかった。元々は悟の母が知人から貰ったネックレスに付いていた物だ。

母は誰から貰ったかまったく教えてくれようとしなかったが、悟があまりにしつこく聞くので裁^{さい}さんとだけ仕方がなく教えてくれた。

裁さんが誰だか知らないが、父でないことは確かだ。父の名前は健二なのだから。

その頃から夫婦の仲に問題を抱えていた母と父は、そのネックレスに付いても揉めだした。

父がどこの誰かわからない男から貰ったネックレスなんか捨ててやると言い出したので、母は父がいなときにそれを悟にあげることで守ろうとしたのだ。

其処までして守ろうとするとはよほど大切な物だったのだろう。

いつもどこかの良く分からない施設で働いているため、中々家に帰らない母から久しぶりに貰ったものだ。悟はその十字架をキーホルダー用の輪に括り付け、大学に入るまでずっと大切に持っていた。しかし、両親が離婚してからその十字架は父と母の険悪なイメージの象徴のように思われ、悟は何度もそれを捨てようと思った。

鈴野がそれを欲しがったのは丁度そんなときだ。

オーダーメイドらしかったその十字架は、小物集めの趣味が合った鈴野のマニア心をくすぐったらしい。丁度厄介払いをしたかった悟は迷わずその十字架を鈴野に上げた。これでもう目にすることは無いと思って。

しかし、予想に反して鈴野はそのキーホルダーをよほど気に入ったのか、毎日腰につけて学校に来るようになった。

見たくないのに、思い出したくないのに、その銀色の十字架は何度も悟の目に入る。

だが、慣れとは恐ろしいものだ。

毎日鈴野の腰に装着されているそのキーホルダーを見ているうちに、それは両親の険悪なイメージを呼び起こすものではなく、鈴野や庄平達との楽しかった思い出を思い出すアイテムに変わっていた。

もう、その十字架を見て嫌な気分になることは無いと思っていた。

「何だよ……また俺を悲しくさせたいみたいだなこの十字架は……」

悟は悪魔LV・3と化した鈴野の、ボロボロの腰に付いている十字架を見て呟いた。

見ているだけで、庄平と鈴野の元気だったあの頃の姿が浮かぶ。まだこんな運命が待っているとは思ってもしなかったあの頃の姿が。そしてそれに続くようにして今の二人の状態も。

一人は悪魔に食い殺されそれと同じ存在になり、もう一人は自分たちのために三本腕と相打ちになった。

「——相変わらず……嫌な十字架だよ」

悟は苦しそうな、悲しそうな、疲れたような顔でそう言った。

「ギユウアアアアアア！」

鈴野、いや、悪魔LV・3が雄たけびを上げ屋上の入り口の前から飛び出す。ボロボロの悟を見て警戒心を無くしたのか、これまで様子を伺うようにしていた態度とは打って変って荒々しく突撃してきた。

「さようなら……亜紀——」

悟は黒柄ナイフを構えると、こちらへ猛スピードで迫ってくる悪魔LV・3に向かって走り出した。

ようやく安全距離に到達したヘリからロープを投げようとした亜紀の目に、その姿が映る。

「悟くん!？」

お互いを殺す為に距離を詰める鈴野と悟。

鈴野は尖りに尖った己の爪を、悟は黒柄ナイフをそれぞれ肩の高さに掲げる。

そして、2人は己の刃を親友に向かって突き出した。

「

」

亜紀の声も、自分の声さえも、周囲からこの世の全ての音が消失したかのように悟の耳には何も聞こえない。

鈴野の爪は悟の肩の骨を貫き、血を撒き散らし、その肉を抉った。だが、同時に悟の刃も鈴野の心臓を打ち抜く。

アップでお互いの目を見る二人。

悟はその一瞬鈴野の「すまない」という声を聞いた気がした。

「いやあああああ、悟君！」

亜紀が甲高い叫び声を上げる。

それはやむ終えないことだった。今ヘリポートは悪魔LV・3の軍団に覆われているのだから。

地面に落ちたお菓子に群がる蟻のように悪魔LV・3に覆われ、悟は身動きが全く取れなくなっていた。悪魔が我先にと押し合いへし合うので、今の所は鈴野から受けた傷以外の攻撃は受けていない

ものの、それも時間の問題だろう。

間もなくして自分の命は失われる。

薄れ行く意識の中、悟はキツネの言葉を思い出していた。

「いや、それはあまりにも勿体無いからな、提案があるんだ。ちょっとコツチに来てくれ。亜紀ちゃんには聞いて欲しくない」

キツネはニコニコとした笑顔でそういった

今更殺されることも無いだろうと、悟は素直に従い、キツネの元へ行った。

「悟、お前は結構才能があるからな。このままイミユニティーのメンバーに加わることにすると、都合が悪いんだ。だけどさ今殺すのも勿体無いし、お前には出来るだけ悪魔や怪物を倒してもらってから亜紀ちゃんたちが無事に脱出できそうな頃合を見て……死んでくれ」

「——そうするしかないのか……？」

悟が困った顔でキツネに聞いているのが亜紀に見えた。

その問いにキツネはクスクスと笑いならうなずく。

「……分かったよ」

悟が暗い顔で答えた。

意識を遠のかせる悟の上に、悪魔LV・3の無数の歯が下ろされる。

そして……悟の視界は闇に包まれた。

<第十八章> 玄色の船へ（後編）

<第十八章> ” 玄色の船へ （後編） ”

もう、見えるのは緑色の海だけだ。電波塔の姿など針の大きさにすら見えない。

やっと抜け出すことができたのに。
帰ることができるのに。

ヘリの中は暗い雰囲気で溢れていた。

亜紀は自分の手を取らなかった悟の姿を何度も反芻する。

あの時、もつと自分が手をのばしていれば、もつと早くロープを下ろしていれば――

いくら考えても今更何かが変わることはないのに、亜紀はその思いだけを繰り返して頭の中に描く。

きつともうあの瞬間を忘れることは出来ないだろう。

恐らく一生記憶の一部として刻まれるはずだ。

永遠に消えないトラウマとして。

深い悲しみに包まれ、亜紀は顔を伏せた。

一方、その向かいに寝そべるように身を伏せていた友は、亜紀の嗚咽を聞きながらずっとヘリの天井を見つめていた。

庄平と悟の死。

あれほど沢山いた浮世荘の中で友はたった一人だけの生存者となつてしまった。

本当に後少しだけだった。

あと少し早ければ、あと少し体力があれば、あと少しお互いの気持ちを考えていれば。

あの二人が死ぬことはなかった。

あそこで自分に一体何が出来たのかと言えば――友には何も答えることは出来ない。

ただ、自分だけが生き残ってしまったこと、自分の考えの浅さで庄平を殺してしまったこと、体を突き破りたくなるほどの後悔が友の中で暴れるように無尽蔵に溢れていた。

下田も有村もそんな2人の雰囲気が伝染したのか、全く言葉を発することは無く、ただ黙々とヘリの操縦桿を握り続ける。

死を受け入れることに慣れているイミューニティーの二人でもまだ新米だった頃はある。下田らは自分が始めて仲間の死に目に合ったときのことを思い出し、気を使ってくれていた。

「下田さん」

その無言の空気をいきなり友が破った。

「何だ？」

下田は普段と変わらない落ち着いた声で聞く。

「悪魔はこのまま放っておけばどんどん広まっていつてしまう。どうやって防ぐ気なんだ？」

てつきり二人のことについて聞かれると思っていた下田は、友のあまりに冷静な質問に驚いた。

「あ、ああ。心配は無い。一週間前、まだイグマ細胞が広まって間もない頃広野さんの命令で抗イグマ細胞を感染範囲を囲むようにばら撒いたんだ。イグマはあの細胞に接触すると食われて感染能力を失うから、これ以上悪魔が広まることはない」

「その細胞を囲む様にはなく全面に巻いて欲しかったな……まあ、そちらとしては貴重な細胞を全て殺してしまう訳にはいかないか……」

「すまない。俺も気は乗らないが上の命令には逆らえないんだ。本当に申し訳ないと思う」

下田は本心から謝った。

「下田さんは悪くない。俺もこれからイミューニティーに入るんだ。俺が同じ立場にいても自分の命を守る為にそうする」

友は感情を感じさせないような話し方で言葉を返す。

「冷静さに取り付かれている」友の様子を見た下田はそう思った。大事な友人の死、異常な状況、恐らく友はもう二度と同じことを繰り返さない為に、自ら無意識のうちに「冷静になろう」、「冷静になろう」と自分を追い込み、その言葉に取り付かれてしまったようだ。

自分をもっと冷静になってさえいればあの二人が死ぬことは無かったという思い、ある種のトラウマが友をそんな状態にしてしまっただけらしい。

これからずっとこの若者はこの言葉に支配されて生きていくことになるのだらうかと、下田は哀れみの目つきで友を見た。

「——少し寝た方がいい、まだまだ到着までは時間がかかるぞ」

「……そうだな——……じゃあ、ちよつと寝ます」

友は死んだような目で瞼を閉じた。心の中でイミューニティーを潰す決意を秘めながら。

へりはようやく僅かに登りだした朝日の中に、暗闇の中から、地獄から逃れるように飛び込んでいった。

次に地獄が尋ねて来るその時まで、友は僅かな休息についたのだった。

朝日に照らされた屋上のドアがゆっくりと開いた。

カジュアルなジャケットと、警察特殊部隊の服を足して二で割ったような黒い服を着た男がドアの向こうから姿を見せる。

男はまぶしそくに朝日を片手でさえぎると、軽い足取りでヘリポートの中心まで歩いて行く。

その中心には無数の悪魔LV・3がピラミッドのような形を作り

密集していた。

悪魔LV・3のこれほどの大群は幾らこの黒い服の男でも逃げ出したくなるような状況だ。だが、男はクスクスと笑いながら、何故か石化したようにピクリとも動かないその悪魔たちを蹴飛ばしどかすと、その下に埋もれていた若者を見る。

「クスクス、上手くやったな。あれなら確実にイミユニティーはお前を死亡扱いするだろう。鬼気迫る演技だったぞ」

黒服の男、キツネは心底楽しんでいるといった笑顔でそう言った。

「……演技じゃない。俺は本気で死ぬと思ったから……」

悟は怒りの籠った目でキツネを睨み付けた。

「仕方が無いだろ？ 黒服に入るには社会的に一度死ぬ必要がある。お前がヘリに乗りそうになったのを望遠鏡で見た時はどうするのか焦ったが、まさかあんな方法を取るとはな」

「お前にあれを聞いてなかったら危なかったよ。実際、亜紀の手も掴みそうになったし——」

悟はキツネとの会話を思い浮かべる。

「いや、それはあまりにも勿体無いからな、提案があるんだ。ちょっとコッチに来てくれ。亜紀ちゃんには聞いて欲しくない」

キツネはニコニコとした笑顔でそういった。

「……何だ——？」

今更殺されることも無いだろうと、悟は素直に従いキツネの元へ行った。

「悟、お前は結構才能があるからな。このままイミユニティーのメンバーに加わることで都合が悪いんだ。だけどさ今殺すのも勿体無いし、お前には出来るだけ悪魔や怪物を倒してもらってから

亜紀ちゃん達が無事に脱出できそうな頃合を見て——死んでくれ」

「な、何言つてんだ——！？」

「社会的な意味だよ。お前の実力は黒服に欲しいと思ってな。黒服のメンバーになるには社会的に生きていると色々と不便なんだ。僕の言うことを聞かないのならお前の両親も友人も知人も、大切な順に消していくぞ。ま、どっち道イミューニティーの連中にも同じことを言われるから、つまるところ黒服とイミューニティーどっちがお前の好みかって違いだけだな」

「……そうするしかないのか？」

悟が困った顔でキツネに聞いているのが亜紀に見えた。その問いにキツネはクスクスと笑いながら頷く。

「……分かったよ」

悟が暗い顔で答えた。

「あ、あと一つ。これからは悪魔LV・3に会う機会が増えると思うが、出くわしたら戦わないでとにかく隠れる。あれは三本腕の幼体並みの強さがあるからな。まともに戦っても今のお前じゃ相打ち覚悟でもない限り勝てない。まあ心配するな。あいつらLV・3になってから一時間前後しか生きれないから」

「一時間？ どういうことなんだ？」

「悪魔LV・3は言わば元々の人間の全安定細胞を侵食しつくした姿なんだ。悪魔は媒体となった人間の細胞を侵食していくたびに体の悪魔の割合が増えるからLV・2、LV・3と強くなっていく。だが、全ての安定細胞を侵食しきれば、これ以上どこからも安定した細胞を得ることが出来なくなる。つまり、体に無理が生じて自然崩壊するんだよ。そのあとは十秒感染の危険も無い」

「LV・3の寿命は約一時間ってことか」

「そうだ」

このことがあったから悟はヘリには乗らず、鈴野を自分の手で楽にしてあげるという意思もあり、悪魔の集団に突っ込んで言った。

キツネから聞いた悪魔LV・3の発生時刻を元に、計算してあいつらが間もなく全部死ぬと分かっていたから。

「何にしてもともかくだ。ようこそ、僕たち黒服、『ナグルファル』へ」

「ナグルファル……？」

聞きなれない言葉に聞き返す悟。

「黒服の正式な名前さ。知らないか？ 北欧神話に登場する伝説の船の名だよ。世界終末の際に死者の軍勢を乗せて人間の世界に襲撃をかけるんだ。この船は死者の爪で作られたと言われていてさ。そのせいで僕たち黒服メンバーを死者の爪と呼ぶ人間もいる。社会的に死んでいる連中ばかりだし、まさにぴったりの呼び名だろ？」

キツネはクスクス笑いながら言った。

「死者の爪ね……格好つけてるけど、つまり社会的なゾンビってことだろ？」

「クスクス、そう捉えたければ好きにしろ。どっち道僕にはどうでもいいことだ」

悟の皮肉にキツネは感心なさそうに答えた。

「さ、行くぞ。僕が用意した車が待ってる。まだLV・3に進化してない悪魔も多数この樹海に残ってるんだ。さっさと行こう」

「——待て、その前に一つだけ聞きたい事がある」

悟は黒柄ナイフを抜くとキツネに向けた。

「何だ？ 物騒だな」

「何で三本腕の拘束を解いた？ お前があれを開放しなかったら——……庄平が死ぬことは無かった」

震える手で黒柄ナイフを握り締め、悟は殺意の籠った目でキツネを刺す様に見続ける。

「イミユニティーに生きた三本腕のサンプルを渡さないためさ。あそこであれを解き放てば殺すしかなくなるだろ？ 拘束したままだと本体が来た時に簡単にデーターを取られるからな」

「——だったら……解き放つんじやなく、お前がその時に三本腕を倒していればよかったんだ！ 何で……何で態々（わざわざ）俺たちに戦わせた……！」

「クスクス、その方が面白いだろ？」

「この野郎——！」

悟はナイフをキツネに向かって切りつけた。だが、キツネは素早く反応すると懷から自分の黒柄ナイフを取り出しその斬撃を軽くないす。

刃の打ち合う鋭く高い音が何度も何度も薄い朝日に照らされた屋上に響く。

悟は一心不乱に腕を振り続けた。

庄平の敵を討つ為に。

自分の気持ちを納得させる為に。

キツネにナイフを振ることで庄平に対する罪滅ぼしだと言うように。

「あつ！？」

カキンという音が鳴ったと同時に悟のナイフは後ろの方に弾かれてしまった。

「もうやめろ。何の近接戦闘訓練も積んでいないお前が僕に勝てるはずが無いだろ。それに忘れたのか？ お前が僕に従わないと亜紀ちゃんや家族が死ぬことになるんだぞ」

「——……っ！」

悔しくて悔しくて堪らない。

悟は右肩を鈴野に貫かれていたにも関わらず、痛みを忘れたように何度も地面に拳を打ちつけた。

その様子を冷めた目で見ながらキツネは言葉を続ける。

「そういえば、お前が倒した巨狼——あれってブラックドックっていう黒服の生物兵器の一つなんだ。まあ、普通はあんな大きさじゃなく一般的な犬と変わらない大きさなんだけどな」

「な!？」

「タイプ、フエンリル。僕がこの任務を完全に成功させる為に持ち込んだ大型のブラックドックだ。どこにディエス・イレのスパイがいるか分からないから、生存者をこの樹海から出さないようにする為に使っていたんだよ。イミュニティーにはバレなかったけど、あのスパイには分かっていたらしいな。ずっと巨狼じゃなくてブラックドックで呼んでたし」

「あの巨狼が一体何人の人間を殺したと思っている! お前の、お前のくだらない任務成功の為に——!」

悟はまだ濡れている屋上の地面の上に置いた拳を握り締める。

「他人の命なんてどうでもいいさ。どうせみんないつかは死ぬんだし。それに、僕は人だけど”人間”じゃないんだよ。……精神的な意味でな。人間がどうなろうと知ったこっちゃ無い」

「……なに?」

「大井田庄平の敵を討ちたいのなら僕を恨め、これからずっと……僕を殺せる位の実力を付けるまでな」

「何を考えてんだ……!？」

悟はキツネの真意を読み取れず混乱した。

「クスクス、僕はお前に期待してるんだよ。色々な意味で」

キツネは意味深に言葉を吐くと、これ以上の会話は無用だと言わんばかりに屋上の扉へ向かい階段を下りていった。

——いつか……必ず……庄平の敵を取ってやる。

一人屋上に残った悟は憎しみの籠った目でその扉を見つめ続けた。

悟が暗い顔で電波塔の入り口を抜けると、外ではキツネの他にも
う一人、知った顔が待っていた。

「よう！」

安形は無理やり声を振り絞ったように声をかける。

「あ、安形さん！ 生きてたんですか！？」

悟は完全に死んだと思っていた安形が目の前に現れたことが信じ
られなかった。

「まあ、ぎりぎりだけだな。勝手に殺すなよ」

「どうということなんですか？」

「下田さんもよっぽど疲れてたんだな、あの庄平君の言葉を真に受
けるなんて。俺はただ気を失っていただけだよ。正平君が早とちり
して勝手に俺を死んだことにしたんだ」

「庄平は——……オツチヨコチヨイですからね」

庄平が生きてここにいれば、きっと目を見開いて間抜けそうな顔
を作り真剣に謝ることだろう。もう二度と見ることは無いであろう
あの優しそうな顔で。

その様子が簡単に想像でき悟は悲しくなった。

話を変えるように安形は言葉が続ける。

「それで、これからなんだけどさ。どうやら俺も黒服に入ること
になりそうだ。お前のオマケらしいけど」

「安形さんも？」

「ああ、一人よりは気が楽だろ？ 一緒にゾンビになろうぜ」

「ははっ……そうですね」

先ほどのキツネとの会話を聞いていたのか、安形は冗談を言うよ
うに悟に言った。その言葉に救われるように悟の気持ちも少し明る
くなる。

悟が元気を取り戻したのを見ると、安形はキツネに聞こえないよ
うに声を落として話した。

「……いつか、必ず機会は来る。その時に俺達二人でこのイカれた
黒服やイミユニティーを潰すしてやろう。それまで堪えるんだ」

安形はこの組織と戦う気らしい。

悟はまだ諦めずに生きる希望を持ちつつける安形の言葉に共感と強い決意の気持ちを抱いた。

「分かってます。社会的にゾンビになると、俺達はまだ生きています。生きていればチャンスはある。行動することが出来る。……安形さん、ありがとう。おかげで……少しだけ楽になった気がします。一緒に……頑張りましょう」

「ああ、よろしくな。同僚さん」

安形は微笑んだ。

「いつまで話してる？ 行くぞ」

いつの間にか離れたところを歩いているキツネが二人を呼ぶ。

悟はその姿を見てより決意を固めた。

必ず、キツネを倒し庄平の敵を取る。

イミユニティーを倒し。

黒服を滅ぼす。

——そのためには——何が何でも生きなくては……

これから先、どんな未来が待っているかは分からない。

また多くの人の死を見る事になるかもしれない。

悲しい思いをするかもしれない。

でも少しでも誰かを救えるように。

庄平のような人間を作らない為に。

悟は悪魔の色を持つ服を纏うことを決めた。

全ては地獄を終わらせる為に。

玄色の船、ナグルファルへと悟は乗り込んだのだった。

<第十八章> 玄色の船へ（後編）（後書き）

この章で実質的な尋獄（BULLUCK DOMAIN）は完結です。これまで見ていただいた皆様ありがとうございました。

思えばこの小説を書き始めてから約三ヶ月。

かなりのハイスピードで執筆してきましたが、なんとかイメージに近い終わり方を迎えられたと思います。

次のエピソードの後書きに次回作の予告を入れておくのでそちらも見てください。

<第十九章>エピローグ（前書き）

後書きの予告は次作を見ていただくためにかなりかつこつけて書いています。

不快に思っただ方が降りましたら申し訳ございません。

<第十九章>エピソード

<第十九章>エピソード

目の前に黒い大型の車、ハンマーが止まっている。

キツネは二人をそれに乗せると、一人中には入らずそのまま何処かへ向かって歩き出した。

「おい、どこに行くんだ!？」

悟が不思議がって聞く。

「次の仕事だよ、エリートは忙しいんだ」

「……— 　　まだ誰かを犠牲にするのか」

キツネの作ったような笑顔を睨みながら悟は嫌味を込めて言う。その様子を楽しそうに見ると、言葉を返すことなくキツネは歩き出した。

「……勝手にしろ」

悟は馬鹿にしたようなキツネの態度に苛立ちを覚え、車内から窓を叩いた。それを合図にするかのようにハンマーはエンジンを入れ走り出す。

キツネは遠のいていく悟と安形を乗せたハンマーを物思い気に見送ると、一人歩みを続けた。

しばらく歩いていると焚き火が見えてくる。悪魔避けのつもりだろうか。

「——片手を切り下ろしたって言うのに随分元氣なんですね、博士」
ニコニコ笑いを作りながらキツネは焚き火を作った主へ近づく。
「WASP KNIFEの切れ味は凄まじいからね。綺麗に切れたおかげで痛みはそんなになかったよ」

志郎はキツネの登場に驚くことなく答えた。

「それで、左手を切断してもがいていた僕をわざわざ助けてここに残した目的は一体何なんだい？」

「――数日前に頼んだことは出来ていますか？ 怪女王や三本腕のサンプルをください」

「あれか――……悪いけど怪女王の方は広野さんが邪魔をしてきたから手に入らなかったよ。三本腕だけでいいかな？」

「まあ、しかたないですね。あの男のアホぶりは僕も計算違いでしたし。それで良しとしましょう」

キツネはため息をつきながらそう言った。

「君の方も約束を守ってくれるんだろっね？」

志郎は無くなった左手首の付け根をさすりながらキツネに質問する。

「約束？ ああ、イミュニティーへの復讐のことですね。大丈夫ですよ、もうすぐ来ますから」

「来る？ 一体何が……？」

志郎はキツネの言葉を理解出来なかった。

首をあちらこちらに回してみると、その途端車の音が聞こえてくる。大型のトラックのようなその車は二人のいる位置の先にある小さな道に停車した。

「あれは……――何なんだい？」

志郎はその車の中から出て来た屈強な男達の姿を緊張した目で見つめた。

「デイエス・イレ（怒りの日）の者ですよ。イミュニティーの依頼を受けたと同時に彼らの依頼も受けていたんです。貴方を引き渡すという仕事をね」

「な、何だって！？」

「何をそんなに驚いているんですか。彼らはみんなイミュニティーを恨んでいる連中だ。貴方も同じでしょ。僕は確かに言いましたよ、イミュニティーへの復讐を手伝ってあげると――これでしっかり約束は果たせましたね」

キツネはクスクスと笑った。

「ぼ、僕にテログループのメンバーになれって言うのか!？」

志郎はキツネの計画を知り、嵌められたと悟った。何とか逃げようとしたが、既に背後に回りこんでいた男達に後ろから拘束され身動き出来なくなってしまうた。

そのまま捕獲された猫のように彼らの車へと連れて行かれる。

男達の一人が志郎を運ぶことを他の人間に任せると、キツネの元へと歩いてきた。

「報酬はいつもの講座に振り込んでおく。それでいいな？」

「ああ、それでいい」

キツネは淡々と答える。

「まさかイミユニティーが雇った黒服もお前だったとはな。おかげで大切なスパイを失ってしまった」

「仕事を平等に行うから黒服はやって行けるんだろ？ 僕の所為じゃない、小さなことを根に持つな。これもビジネスだ」

男の言葉を軽くキツネはあしらう。

「ふん。まったく、本当にいつもキツネみ包まれたように人を騙すのが上手い男だ。じゃあな、また何かあったときは頼む」

「ああ、お疲れさま」

キツネは笑顔で車に戻る男を見送った。

「これで――博士は……――」

小さく呟いたが、誰にもその言葉の内容は聞こえない。

遠い目で車に詰め込まれる志郎を見つめながらキツネはただずつと佇んでいた。

<第十九章>エピローグ（後書き）

―予告―

尋獄2（SURGE GARDEN）

超感覚者の秘密を知りたくないか？

人の身でありながらそれを超えた感覚・・・。

今、その全てが明かされる。

舞台は国内最大級のサファリパーク。

コード”シシュフォス”の暴走によってばら撒かれたイグマ細胞により大混乱が起きる中、父を探しにこの場に来ていた関野朝奈は見たこともない怪物達と遭遇する。

イミュニティー、黒服、ディエス・イレ、それぞれの思惑が交差する中、朝奈は超感覚者の秘密、そしてディエス・イレの計画を知るのだった。

前作の登場人物も多数登場。

今回は前作であまり出番の無かったディエス・イレを中心に話が展開する。

ディエス・イレの計画とは、イミュニティーの目的とは、そして銀色の十字架を首に掛けた2丁ナイフを操る謎の黒服メンバーの正体は・・・？

今、新たな地獄が尋ねてくる。

*主人公は新キャラですが、ちゃんと前作の主要登場人物も出てきます。

敢えて一時的に主人公を変えることで前作から登場している人間が

かっこよく見えるかなと思いついてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5307f/>

尋獄 (BLUCK DOMAIN)

2010年10月8日13時05分発行